
エラリオン
年代記
真実の代償

目次

第一部　地球とエラリオン……5

第 1 章　地球　ゲツセマネの園……7

第 2 章　地球　ユダの口づけ Ⅱ……12

第 3 章　エラリオン　エラリオンの太陽……14

第 4 章　地球　マグダラのマリア……19

第 5 章　エラリオン　連邦の首都ニトラ……37

第 6 章　地球　ユダの口づけ……54

第 7 章　エラリオン　黄金の環……65

第 8 章　地球　分かたれる日……68

第 9 章　エラリオン　《層》……73

第 10 章　地球　呪われたいちじくの木……85

第 11 章　エラリオン　マレイア・リオレン……106

第 12 章　地球　山上のイエス……112

第 13 章　エラリオン　アリエン・コルヴェト……117

第 14 章　地球　新たな世代の始まり……142

第二部　ひとつの犯罪を分ける……148

第 15 章　三十の通貨……148

第 16 章　傷に予算がつく……153

第 17 章　守るための財団……158

第 18 章　憎しみを知らない BIO-AI……164

第 19 章　地図を持たない研究所……169

第 20 章　マレイアの疑い……174
第 21 章　盲点の試験……181
第 22 章　例外……192
第 23 章　最後の支払い……200
第 24 章　最初の発熱……214

第三部　黄金の環の疫病……227

第 25 章　アウリオラの家々……227
第 26 章　全体の見えないシステム……236
第 27 章　口にするのが怖かった名……245
第 28 章　ガラスの向こうの黄金の環……252
第 29 章　イェサイルの声と、統一エラルへの《橋》……261
第 30 章　《三分の一》……277
第 31 章　ガラスの向こう……293
第 32 章　訪れる者たち……299

第四部　三分の一を失ったエラリオン……310

第 33 章　失われた手……310
第 34 章　生きている者の分け前……322
第 35 章　パンデミックを支えた金の骨格……332
第 36 章　地図を持っていた男……341
第 37 章　アリエンだけではない……352
第 38 章　《三分の一》後の会議……358
第 39 章　ひとつのエラル……375
第 40 章　力の重さ……386

地球への教訓.....412

この惑星で制御しきれぬほど増大する技術の力という問題.....412

汚職と非効率な国家.....413

脱税をめぐる問題.....413

武力衝突の終結と、金銭をめぐるあらゆる不正の即時発見.....414

ユニバーサル・ベーシックインカム（UBI）の公正で透明な導入.....414

永遠の命がもたらす課題と、地球の人口問題の透明な解決.....415

政治運動　https://HumanityUnitedMovement.org.....417

政治の土台としての良識.....417

政治アカデミー.....419

国境を越える世界に、国境を越える運動を.....421

信頼の土台となる透明性.....422

技術の進歩と仕事の未来.....424

機会の平等と人の尊厳.....425

長期的な視野と未来への責任.....426

運動そのものをどう運営するか.....426

私たちは何を成し遂げたいのか.....427

新しい世代への呼びかけ.....428

第一部　地球とエラリオン

宇宙では、遠く隔たっていることが、そのまま別離を意味するとは限らない。

三十光年は、肉体にとっては深い淵だ。光にとっては長い道のりだ。記憶にとっては、もう少し短いかもしれない。星々のあいだのある一角に、それぞれの太陽を巡る二つの惑星があった。同じ物質から生まれたわけでも、同じ星に属しているわけでもなかった。それでも二つは似ていた。遠く離れたところで見た二つの夢が、ふと似通うように。

どちらにも、朝になると銀に変わる海があった。雲があり、山や川や砂漠があり、幾時代にもわたって風が塵の上に音もなく文字を綴ってきた土地があった。どちらの星でも石に雨が降り、土から木々が育ち、生きものたちは痛みと憧れ、恐れと希望、与えられたものと変えうるものを見分けるすべを学んでいた。

一方の惑星の名は、エラリオン（Elarion）。

もう一方は、やがて地球と名づけられる。

二つは遠く離れていた。それでも、いつの日かそのあいだを光や想いや意志が、あるいはそれよりもっとひそやかな何かが渡っていけないほど遠くはなかった。宇宙にあるのは、船の航路ばかりではない。一方が他方に及ぼす影響の緩やかな流れがあり、歴史と歴史をつなぐ見えない糸があり、失われたと思われたものが不思議なかたちで帰ってくることもある。

二つの世界を結んでいたのは、ただの偶然の相似ではなかった。

単純な結びつきではない。すぐに地図に描き入れたり、年代記に書き留めたりできるものでもない。その絆は、あとになって初めて姿を現すもののひとつだった。運命が全うされたとき、人はふいに悟る。別々に見えていた出来事が、初めからずっと、ひとつの文のなかにあったのだと。

エラリオンでは、人はすでに高みまで登っていた。都市は空に触れ、船は惑星と惑星のあいだの闇を知り、機械はかつて予感で捉えるしかなかったものを数えていた。人々は命を延ばし、身体を癒やし、砂漠の姿を変え、ドームの下に世界を築くすべを学んだ。そして自分たちの未来を、永遠に不可能なことなどほとんどないと信じはじめた者の大胆さで見つめていた。

だが、どれほど進んだ文明も、そこに愛し、妬み、赦し、恐れ、権力を渇望する生きものが暮らすかぎり、人間の文明でありつづける。人のいるところ、歴史が技術の歴史だけであったためしはない。それは心の歴史でもある。

そのころ、エラリオンに二人の人間が生きていた。

イェサイル・ダヴィオン（Jesair Davion）。

マレイア・リオレン（Mareia Lioren）。

二人の名は、まだ神話のものではなかった。部屋で、道で、庭で、友人たちや二人を間近に知る人たちの口に上る、ごくふつうの名だった。けれども、不思議な運命を持つ名がある。初めは一人の人間のものだ。やがて痛みのものとなり、次には記憶のものとなる。そして最後には、もう誰もそれと見定めきれない姿で帰ってくる。この物語はエラリオンで、異郷の太陽の光のもとに始まる。

だが、そのこだまがいつまでもそこにとどまることはない。

ひとつの世界の果てで終わらない生があるからだ。出会う前からすでに始まっていたかのような出会いがある。歴史のなかに幾度も帰ってくる愛がある。去り方を知らないからではない。まだ、語り尽くしていないからだ。

第1章　地球　ゲツセマネの園

過越の祭りの詩編を歌い終え、エルサレムが夜に沈みかけたころ、イエスは弟子たちとキドロンの谷川の向こうへ渡った。背後の町はまだ昼のぬくもりを吐いていたが、谷々にはすでに冷気が横たわっていた。オリーブ山の上に静けさがとどまり、石さえ息をひそめているようだった。

一行はゲツセマネと呼ばれる場所に着いた。そこには園があった。ねじれた幹をしたオリーブの木々が、低く葉を鳴らしていた。弟子たちにもなじみの園だった。おごそかな場所などではない。人に聞かれず神と話す必要のあるときに身を寄せる、どこにでもある、ひとりになれる場所だった。

イエスは足を止めた。その顔は穏やかだったが、何の苦もないときに浮かぶ穏やかさとは違っていた。芯まで揺さぶられた何かを、かろうじてつなぎとめている静けさだった。

「ここに座っていなさい」と彼は静かに言った。「私は祈りに行ってくる」

それからペトロとヤコブとヨハネを連れて、もう少し先へ進んだ。三人は何も尋ねずついていった。自分たちには分からない何かが起きていると感じていた。目の前で病人を癒やし、嵐を鎮め、ほかの誰の言葉にも宿らぬ力をもって語ったイエスの足取りが、にわかに重くなった。一歩ごとに、彼らには見えない重みを負うかのように。

やがてイエスは、この三人にも振り向いた。

「私の魂は、死ぬほどの悲しみのうちにある」と彼は言った。「ここにいて、私と共に目を覚ましていなさい」

その言葉は叱責よりも強く三人の胸を打った。ペトロは今一度忠誠を誓おうとするように口を開いたが、イエスはもう歩きだしていた。遠くへではない。まだ目の届く、ほんの少し先へ。なのに彼らのあいだには突如、誰にも渡れぬ隔たりが開いた。

イエスは一本のオリーブの木のそばで立ち止まった。風が衣に触れた。頭上では銀の葉が震え、地には影が、こぼれた水のように広がっていた。

彼は膝をついた。

それから顔を地に伏せた。

そのとき、彼を取り巻く夜が深まった。

生きた光景が次々に迫ってきた。夢よりも、ありふれた記憶よりも鮮明に。容赦なく、情けもなく。
木立のあいだに松明が見えた。

武装した男たちの足が進むのが見えた。金属の触れ合う音、ささやき、命令する声が聞こえた。そしてそのなかに、ユダがいた。青ざめた顔に決意があった。すでに一線を越え、いまは振り返るのを恐れている者の足取りで歩いてきた。イエスに近づき、剣を向けるでも罪をなじるでもなく、口づけでしるしをつけた。
幻のなかでイエスは頬にユダの唇が触れるのを感じた。このしるしによって自分は引き渡されるのだと知った。
「友よ」。やがて言わねばならないそのひと言が胸の内に響いた。それは縄を掛けられるよりも痛かった。

光景が変わった。

大祭司の屋敷の中庭が見えた。焚き火。炎に照らされた女中の顔。見知らぬ人たちに交じって火に当たり、人目を避けるペトロ。「あなたも、あの人と一緒にいたでしょう？」という声が聞こえた。
そして、ペトロが答えるのが聞こえた。

「その人は知らない」

イエスは目を閉じた。それでも幻は消えなかった。

二度目の否認。続いて三度目。ペトロは自分の声におびえながら、なおも声を張り上げ、その男など知らないと誓った。そのとき鶏の声が夜を渡った。鋭く。短く。恐ろしいほど、はっきりと。
そしてイエスには、思い出したときのペトロの目が見えた。

その目の奥に、自らの恐れに打ち砕かれた友がいた。

イエスは身を震わせた。

「父よ」と彼はささやいた。「彼らは塵です。弱いのです。そして私は、彼らを愛しています」

また別の光景が現れた。

中庭。嘲り。打ち据える拳に覆われた顔。兵士の手の葦。頭に押しつけられる茨。風のなかの炎のように波打つ群衆の叫び。自分が誰に触れているとも知らずに彼を殴る手。己の息さえ神に与えられたものだと悟らずに彼を笑う口。
次に、丘。
十字架の木。
釘。

イエスには、横木の上に広げられた自分の両手が見えた。手首の肌に当てられた鉄が見えた。振り上げられた槌が見えた。それが打ち下ろされるより先に、彼の身体は苦痛にこわばった。まるで未来が現在を突き抜けて、いまここにいる彼を捉えたかのようだった。
唇からかすかなうめきが漏れた。

額に汗の玉が浮かんだ。初めは透き通り、やがて色を帯びた。髪のあいを伝い、こめかみを伝う雫は、重く赤く、血の滴のようだった。それはゲツセマネの園の地に、オリーブの根と根にはさまれた土埃のなかに落ちていった。
イエスは震えていた。それでも逃げなかった。
「わが父よ」と、夜にしか聞き取れぬほど静かな声で彼は言った。「できることなら、この杯を私から過ぎ去らせてください」
沈黙。
空っぽの沈黙ではなかった。ひと息の呼吸よりも近くにおられながら、歩まねばならぬ道を取り去ることはなさらない、父の沈黙だった。

イエスは掌を地に押しつけた。指が土にめり込んだ。幻はやまなかった。十字架の下の母が見えた。愛する弟子がそのそばに立っているのが見えた。顔をそむける人々が見えた。やがて曇る空が見えた。ひと息吸おうとして痙攣しながらせり上がる自分の身体が見えた。渇きが見えた。見捨てられることが見えた。死が見えた。そして、釘に貫かれた彼の手首に、マグダラのマリアが三本の指で触れるのが見えた。
それでも、そのすべての向こうに、別の何かが見えた。
おぼろげに見えるだけだった。夜の果てに細くにじむ光の帯のように。

まだこの世にない顔が見えた。遠い時代、遠い国の人々。自らの罪に泣くことになる罪人たちが見えた。彼の名にすがる病人たちが見えた。打ちひしがれた者が彼の傷に希望を見いだすのが見えた。倒れたのち、もう一度立ち上がるペトロが見えた。散り散りになり、やがて戻ってくる弟子たちが見えた。愛は愛であることをやめさえしなければ、裏切りをも、恐れをも、死をもくぐり抜けられるのだと分かった。

「私の望むようにではなく」と彼はついに言った。「あなたのお望みのままに」

そう口にしても、身体の痛みは引かなかった。恐れも消えなかった。近づいてくる時が彼を離れていくこともなかった。ただ胸の内に、静かに従う心が根を張った。それは敗北ではなかった。贈りものだった。

彼は顔を上げた。

「父よ」と彼は願った。「彼らを最後まで愛し抜く力をお与えください。私を打つ者を呪わずにいる力を。憐れみをもってペトロを見つめる力を。憎しみを抱かずユダの口づけを受ける力を。身体が崩れ落ちようとするときにも十字架を担う力を。神に見捨てられた人間としか見えなくなったときにも、なおあなたの子でありつづける力を、私にお与えください」

そのとき園に風が動いた。目に見えぬ手がその上を渡ったかのように、オリーブの葉が鳴った。イエスの息は重かったが、いくらか整っていた。額の血の雫がゆっくりと冷えていった。

弟子たちのもとに戻ると、皆眠っていた。

ペトロはうなだれ、ヤコブは眠りのなかで黙り込み、ヨハネは近づく恐ろしさがその身にも触れているかのように浅い息をしていた。悲しみに疲れていた。肉体は弱かった。人間だった。

イエスはしばらく彼らを見ていた。

「あなたがたは、一時も私と共に目を覚ましてはいられなかったのか」と彼は尋ねた。

そこにあったのは叱責だけではなかった。いちばん苦しいときに、ひとりきりにされた人の痛みがあった。そして、当人たちが認めるより先にその弱さを知っていた者の、優しさもあった。

「誘惑に陥らぬよう、目を覚まして祈っていなさい」と彼は言った。「心は逸っても、肉体は弱い」
それから、ふたたび園の闇へ向き直った。
弟子たちには、彼がまた祈りに行くということしか分からなかった。
だが彼は知っていた。自分は来たるべき時を迎えに行くのだ。その時はすでに、松明を手に道を歩いてきていた。

本章についての著者の覚え書き

本章の多くは、新約聖書に描かれたゲツセマネの園の場面に基づいている。イエスが未来を幻に見るくだりは、私が書き加えた。

第２章　地球　ユダの口づけ II

園でイエスに近づいたとき、あの壁際の夜があまりにも激しくよみがえり、一瞬、ユダの目からは兵士も松明も消えた。
また、あの人の前に立っていた。また、自分の息を感じた。また、あの言葉が聞こえた。もうよい。
ただ、今度は背後に武装した男たちがいた。
「ごきげんよう、ラビ」と彼は言った。
イエスのまなざしを受けて、ユダには分かった。この人は祭司長たちのことも銀貨のことも知っている。だが何より、なぜ自分がほかならぬこのしるしを選んだのかを分かっている。
ユダはイエスに口づけした。
　今度の口づけは、傍目にはずっと穏やかだった。短く、人前で、しきたりどおりに。それだけに、なおさら恐ろしかった。最初の口づけは、情熱に負けて犯した過ちだった。これはその、死んだ双子だった。もう受け入れてほしいという願いではなく、いけにえを指し示すしるしだった。
イエスは言った。
「ユダ、あなたは口づけで人の子を引き渡すのか」
その問いのなかに、ユダは声にならなかったもうひとつの問いを聞いた。
かつて私がおまえを拒まねばならなかったその同じもので、いま私を引き渡すのか。
ユダは後ずさった。
胸の内に勝利の思いが湧くのを待った。わずかでもいい。苦くてもいい。だが、何も来なかった。そこにはただ空洞があり、彼はそのなかへ落ちはじめた。

本章についての著者の覚え書き

本章の多くは、新約聖書に描かれた場面に基づいている。ユダの内面の思いは、本書のほかの部分とつながるよう、私が想像をめぐらせて書き加えた。

第3章　エラリオン　エラリオンの太陽

エラリオンの中央部に、太陽がゆっくりと昇っていた。眼下の世界がここ数世紀のあいだに誰の想像も及ばぬほど姿を変えたので、太陽もまた、それを見渡すのにひととき必要としているかのようだった。

人々はそれをただ、エラリオンの太陽と呼んだ。古い言葉には数々の名があった。セレニト人の歌のなかでは森の吐息のように柔らかく響き、ヴェイラン人の航法図では厳密なスペクトル符号が振られ、アウレリア人の家々の年代記には、あらゆる一族を記憶する眼と記されていた。それでもたいていの人にとって、それはただの太陽だった。都市の上に降る光、海の上のぬくもり、軌道環の金属の縁を走る輝きだった。

高みから眺めたエラリオンは、もはや傷つきようのない惑星に見えた。

洋上に浮かぶエネルギー・フィールドの網が、海と海をつないでいた。大陸の上空には何層もの交通路が浮かび、そこを貨物回廊や旅客モジュール、自律航行船や救助システムが音もなく移動していた。惑星の夜の側にも、すっかり灯の消えるところはなかった。都市は巨大な生きものの神経網のように光っていた。

赤道を取り巻いて、軌道環が大きな弧を描いていた。子どもの手が描く輪のように、ひと続きのものではない。何千というステーション、ドック、採掘拠点、研究庭園、エネルギーをつなぎとめる錨からできていた。そのあいだを縫って、自動航行船の群れがこの星系の第二惑星、タエロン（Thaeron）へ向かっていた。

タエロンはかつて、薄い空に覆われた硬い球にすぎなかった。水はあるが足りない。大気はあるが、そのままでは吸えない。夜は長すぎ、砂漠では風が敵のように振る舞った。それでもエラリオンの人々は、幾世紀も前にこの星を死んだままにはしておくまいと決めた。

初めに送り込んだのは機械だった。

次に、ステーション。

次に、ドームの下の都市。

次に、外界から隔てた庭園と、森を包むドーム。

そしてついには子どもたち。タエロンのドームの中で生まれ、あの硬い光をごく自然なものとして育つ子どもたちだった。

宇宙の尺度で考えることをエラリオンに教えたのは、ほかならぬタエロンだった。理由はごく切実だった。もうひとつの世界に手の届く文明に、ひとつきりの世界につながれたままでいる権利はなかった。タエロンは、いざというときのために取っておいたもうひと息だった。資源の貯蔵庫。未来の実験室。産業をひとつ丸ごと、研究計画を丸ごと、生き残りたいという夢を丸ごと移せる場所。

そうしてエラリオンは成長した。

その成長は速かった。

おそらく、速すぎた。

この二百年のあいだに、住民たちはかつていくつもの都市を無人にした病を治せるようになった。閉鎖型農場で食料を育て、自律機械で建物を建て、大陸をまたいで水を運んだ。患者に時間が残され、身体が長い治療に耐えさえすれば、傷んだ臓器を再生することもできた。そのため科学者のなかには、死を、いつかもっとよく理解できるひとつの問題と見る者も出てきた。それでも病院では、死は今なおまぎれもない現実だった。

人工知能は病院にも、学校にも、交通にも、金融網にも働いていた。与えられたデータから、たちどころに規則性を見つけ出せた。けれど個々のシステムは別々の国や機関に属していた。最良のモデルも、閲覧権限のない記録を照らし合わせることはできず、どれほど精緻な計算も、最後に決定に署名する人間に代わることはできなかった。

エラリオンの人口はおよそ九十億。

大きく三つの系統に分かれていた。

アウレリア人。

セレニト人。

ヴェイラン人。

誰もがエラリオンの民だった。惑星も、都市も、歴史も、学校も、愛も、争いも、法も、降りかかる災厄も分かち合ってきた。それでも三者の違いは文化や政治を超えていた。もっと深いところに、身体の内なる構造に、遺伝

に、ある形質が世代を超えて受け継がれていく仕組みに、違いは刻まれていた。
アウレリア人は瞳に黄金の環を宿していた。

いつでも見えるわけではない。ある光の加減で、あるいは熱のあるとき、意識を強く集中したとき、痛むとき、人が自分というものの限界に触れた瞬間に、その環は現れた。アウレリア人にとっては命が連綿と続くしるしだった。詩人にとっては、魂の縁が光でできている証。医師にとっては遺伝現象。政治家にとっては帰属意識をめぐる扱いの難しい問題。そしてある人々にとっては、昔ながらの不信の種だった。

セレニト人は、物事が全体として保っている均衡を感じ取ることで知られていた。医学、心理学、生態系のネットワークに通じ、土地や水を扱うことにも、心の傷に向き合うことにも秀でていた。彼らは、自分たちを優しい民と呼ばれるのを好まなかった。優しさは表面にすぎない。その下には根の強さがあった。

ヴェイラン人は物事を組み立てる民だった。管理者、戦略家、交渉人、制度を築く者たち。多くの国で銀行網、企業連合、理事会、交通システム、惑星外の諸機構の一部に、強固な地位を占めていた。権力に飢えた民と言えば不当だろう。ごく早くから権力の言葉を理解し、けっして忘れなかった民、と言うほうが正確だった。
エラリオンはひとつに統一されてはいなかった。

四十の国があった。文字と同じくらい古い国もあれば、ほんの数世代前に生まれた国もある。ほぼどの国にも自国の通貨があり、中央銀行があり、税を課す独自の規則と会計上の例外があり、自由についての独自の考えがあった。

最小の国々のいくつかは、国土の狭さそのものを商売にしていた。大都市も、工場も、研究センターもない。あるのは低い税率と外からはのぞけない所有者名簿、それに、秘密を守ることを国家の提供するサービスと定めた法律だった。価値はほかの国で生まれ、人はほかの国で働き、機械はほかの国でものを生産する。それでも帳簿の上では、利益はまさにそこで生まれた。エラリオンで逃げていたのは工場ではなかった。学校や病院を支え、市民に共通の分け前をもたらすはずの、その元手が逃げていた。

領土が最も広く、技術の上でも政治の上でも最も強い影響力を持つ国が、連邦だった。

首都はニトラ（Nitra）。川と七つの丘に築かれた都市だった。

ニトラでは、国内の問題を装いながら実際には惑星全体に及ぶ事柄が、しばしば決定された。金融評議会も、最大の計算センターも、外交団も、医療企業連合も、銀行網の中枢も、大臣のなかにさえ立ち入ることを許されぬ者がいる記録庫も、ニトラにあった。

軌道から眺めると、エラリオンは成功そのものに見えた。

近くに寄ると、亀裂が見えた。

AIは人々が消費しきれないほど生産したが、多くの住民は、社会が生きるための新たな意味を与えられるより速く、従来の仕事を失っていた。生産は伸び、生産システムの所有は少数者に集中していった。政治家はユニバーサル・ベーシックインカムを語ったが、何を基準に金額を算出するのか、誰が実際の利益を申告するのか、もはや自分の手で生産するのでない世界で人間の取り分を誰が決めるのか、誠実に答えられる者はいなかった。

医学の進歩は、いよいよ長い生を、いつかは自然な終わりをほとんど持たぬ生さえも約束していた。人が生まれつづける一方で、次第に死ななくなったら、文明はどうなるのか。そんな問いがいまはまだ、ひそやかに姿を見せはじめたばかりだった。

権力は安全を語った。

市民は自由を語った。

銀行はプライバシーを語った。

国家は主権を語った。

そしてそれらの言葉の下を、金が流れていた。

見える金もあった。大半は見えなかった。

そこに、来たるべき転落が潜んでいた。

やがて訪れる転落は、知能の不足から来るものではなかった。エラリオンはそれに先立つどの文明よりも多くの知能を持っていた。

機械も不足してはいなかった。嵐も疫病も、市場の動きも、都市に高まる緊張も予測できた。

道徳を説く言葉も乏しくなかった。あり余るほどだった。

弱みは別のところにあった。

権力が、人の目に映る影を残さずに動くすべを覚えたことだった。

権力が影を残さないとき、ごくふつうの人々は、自分と光のあいだには誰も立っていないと思う。

この物語の始まる年、エラリオンの太陽は、最も大きな危険はもう過去のものだと信じる惑星の上に昇っていた。

タエロンでは、新しいドームが次々と開かれていた。

ニトラでは、ベーシックインカムをめぐる大討論の準備が進んでいた。

アウレリア人の名家ダヴィオン家では、一人の男が、奇跡を継ぐ者と呼ばれることにまた抗っていた。

一人の女は、恐れることを覚えてしまった男のもとから永遠に去るべきか、心を決めようとしていた。

きょうだいのうち、黄金の環を受け継がなかったほうは、金融データを見つめていた。彼女には、そこに見えるはずの何かが欠けているように思えた。

そして愛することと所有することを取り違えた一人のヴェイラン人は、いつの日か自分の痛みに予算をつけることになるとは、まだ知らなかった。

世界は美しかった。

それだけに、その世界が砕けうるとは、誰も信じたくなかった。

本章についての著者の覚え書き

本書がエラリオンでの出来事として描くものは、すべて創作である。ただし私は、ほかの惑星にも人間に似た姿の種族による文明が存在する可能性は、非常に高いと考えている。そして、その多くはおそらく、大筋では地球の人類ときわめてよく似た運命をたどるのだろう。

第４章　地球　マグダラのマリア

マグダラは水辺の町で、そこにはいたるところに水があった。

朝、岸辺にきらめく網に水があった。縄や髪から水を振り払う漁師の手にもあった。日の出前の路地を行く女たちの素焼きの壺にもあった。空気に、湖の塩気を帯びた息に、鳥の鳴き声に、もう一枚の皮膚のように町にまとわりつく魚のにおいにも、水があった。
それなのにマリアは、自分が渇いていると感じていた。

喉よりも身体よりもずっと深いところに、その渇きはあった。むき出しの渇きだった。夜中に彼女をたたき起こし、闇のなかに座らせ、自分の息に耳を澄ませて、そこからまた知らない者の声が出てきはしないかと待たせるのだった。
マグダラでは、人々は声をひそめて彼女のことを話した。

病気だという者がいた。呪われているという者もいた。女の身に起きてはならぬことがあの人には起きて、それからというもの魂が家のなかを煙のようにさまよっているのだ、という者もいた。子どもたちは怖がり、女たちは彼女を見ると十字を切り、男たちは見えないふりをした。彼女が市場を歩くと話し声はやんだ。彼女が目を上げると人々は顔をそむけた。
そうしてマリアは、誰の邪魔にもならない歩き方を覚えた。

けれども胸の内は騒がしかった。

いつも声というわけではなかった。ときには突風が戸にぶつかるような勢いが来るだけだった。自分の考えが自分のものではない気がすることもあった。何人もの誰かが自分の内側に座り込み、それぞれに違うものを欲しがっている。一人は笑った。一人は泣いた。一人は、神はおまえを見捨てたと耳打ちした。一人は、忘れてしまいたいことを無理に思い出させた。一人は人を恐れた。一人は人をさげすんだ。一人は、水辺へ駆けていって二度と戻りたくないと思っていた。
そして七人目は、黙っていた。

それがいちばん恐ろしかった。

それは彼女の奥深くに、声も名も持たず座り込み、ただ待っていた。それが来ると、マリアには何も感じられなくなった。痛みも、恥も、恐れも。ただ、からっぽだった。誰かが心臓を取り出した跡に穴だけが残り、そこを冷たい風が吹き抜けるようだった。
その日、マリアはイエスの姿を見る前に、彼のうわさを耳にした。

カファルナウムのほうから来たのだと人々は言った。会堂で教えている。神の国について語るが、律法学者たちの語り方とはまるで違う。病人を癒やす。汚れているとされる者に手を触れる。信心深い人々が食卓に迎えたがらない者たちと食事をする。悪霊にさえ命じれば、彼らは従うのだと言う者もいた。
マリアは初め、それを聞いて笑った。

声に出してではない。胸のなかで。苦く。

またありがたい聖者様だ、と彼女は思った。罪だ、悔い改めだ、清さだと説いておいて、私みたいな女を見ると、触られないように衣の裾を引き寄せる。
そういう男が、もう一人。
彼のところへは行かなかった。

少なくとも、自分ではそう思っていた。

ところが午後になって町じゅうが岸辺へ向かうと、彼女も一緒に動いた。初めは、皆がなぜ同じ方角へ押し合いながら行くのか見たかっただけだった。次には、人波に運ばれたから。そして最後には、自分のなかの何かが――声でも、悪霊でもなく、とうに忘れた自分の意志の名残のようなものが――ひと言だけでも、裁きとは響きの違う言葉を聞きたがったからだった。
イエスは水際からほど近いところに立っていた。

思い描いていたような人ではなかった。ほかのガリラヤの男と見分けのつくものは、何ひとつ身に着けていなかった。履き物には土埃がついていた。着ているのはありふれた衣。顔には旅と日差しの疲れがにじんでいた。そばに男たちがいた。何人かは言葉と手つきを見れば分かった。漁師だ。一人はがっしりした体つきで、落ち着きのない目をしていた。もう一人は若く、物静かで、何もかも記憶にしまい込んでいるようだった。
女たちもいた。

それには驚いた。脇によけているのでも、端のほうで話を聞いているだけでもなかった。すぐそばに立っていた。一人はよい家の奥方らしい身のこなしをしていた。パンの籠を提げた女もいた。もう一人は、まるでその仲間であるかのように、ごく自然に弟子たちと言葉を交わしていた。
イエスは種を蒔く人の話をしていた。

道端に落ちた種。岩の上、茨のなか、そして良い土に落ちた種。耳を傾けていると、ひとつひとつの言葉がそれぞれ別のところに落ちてゆく気がした。ある言葉は、彼女の内の固くなったところに。ある言葉は、何ひとつ根づかない浅いところに。ある言葉は、恐れの茨のあいだに。そしてひとつ、たったひとつだけが、どこかもっと深いところに。
「聞く耳のある者は」とイエスは言った。「聞きなさい」
そのとき、彼は彼女に気づいた。

いや、そう言うのは正確ではないかもしれない。その前から、彼女が土埃に落としていた目を上げるより先に、気づいていたのかもしれない。群衆が動き、道の石をよけるように自分をよけることを覚えた人々に彼女がまぎれた、その最初の瞬間から見ていたのかもしれない。
イエスは言葉の途中で黙った。
そばに立っていたペトロが、そのままお続けになりますかとでも尋ねるように、彼のほうへ身をかがめた。ヨハネは師のまなざしを追った。群衆の何人かも振り返った。
マリアは、それが何かと悟るより先に感じた。
まなざし。
彼が彼女に注いでいたまなざしは、マグダラで知っているどんなものにも似ていなかった。恐れも嫌悪も好奇心もなかった。清いとされる人たちの、時として軽蔑より残酷な、見下ろすような憐れみもなかった。
暴き立てるために彼女を探す目ではなかった。
そのまなざしは、彼女を知っていた。
だからこそ、彼女はそこから逃げたかった。

イエスは水辺近くに立って、彼女を見ていた。その一瞬、漁師たちの叫びも、群衆のざわめきも、波の寄せる音も、弟子たちが気ぜわしく問いかけ

る声も、耳に届かなくなったかのようだった。すべてが遠のき、目の前には一人の女だけが残った。外套のひだに身を包み、両手を身体に寄せて隠し、いつ殴られるかと待ち構えているように、肩をわずかに上げていた。
彼は彼女のうちに苦しみを見た。
それは誰が見ても分かることだった。
彼女自身の肌であるかのように魂に貼りついた闇を見た。ずたずたに引き裂かれた夜、恥、恐れ、怒り、空白を見た。彼女の名をめぐり、その内で争う七つの影を見た。
だが、そのすべてに先んじて、別のものを見た。
近しさ。

それは、ふいに、静かに訪れた。見知らぬ家に足を踏み入れて、子どものころに知っていた匂いに出会うように。もう何年も聞かなかった音が歌のなかで鳴り、そのあとの旋律がおのずと分かるように。イエスが彼女を見つめると、記憶よりも古い何かが胸のうちで動いた。
人の言葉で名をつけることはできなかった。
人がこの世に生まれ出てくる、その光のなかで、かつて二つの魂がすれ違い、いま一瞬、土埃も病も恥も人の肉体も透かして、互いを見知ったかのようだった。
マグダラのマリア。
まだ誰もその名を呼ばなかったのに、彼は知っている気がした。

聞いたことのある名を知っているというのとは違う。羊飼いが、夜に迷い出た羊の声を聞き分けるように。母が、戸の向こうにわが子の足音を聞き分けるように。人が自分の名を言えるようになる前から、神がその人を知っておられるように。
マリアは人波のなかに立ち、自分と闘っていた。
しゃべっていないのに唇がかすかに動くのが、イエスには見えた。その指が外套の布を握りしめるのが見えた。まだ彼が呼びかけもしないうちから、彼に逆らおうとして、彼女の内に何かが立ち上がるのが見えた。
それでも――そのすべての下には――彼女がいた。

病の下、恥の下、人々が彼女に貼りつけたあらゆる呼び名の下に、ただ、彼女自身の姿が見えた。

そしてこの隠れたマリアをこそ、彼はひと目で近しく感じたのだった。

説明のつかない近しさだった。

胸が痛むほどに。

そのとき彼に見えていたのは、いまの彼女の顔だけではなかった。彼女が歩んだことがないのに、その内には宿っている、いくつもの道の影のようなものが見えた。のちに人々が肌に貼りつける言葉をまだ何ひとつ帯びていない、水辺の少女が見えた。夜中に恐怖に目を覚まし、頭のなかの声が自分のものか見知らぬ誰かのものか分からずにいる女が見えた。まだ来ぬ彼女の未来も見えた。彼のあとを歩く足、パンを運ぶ手、十字架の下の顔、墓のそばですすり泣く姿。

その遠い未来の――まだ暗い園のなかに――彼はふたたび彼女を見た。

彼女は深い嘆きに打ち砕かれて立ち、最後の光まで失ってしまったと思うだろう。死者のあいだに彼を探すだろう。そして彼は、もう一度その名を呼ぶだろう。

マリア。

その名は、もういま、彼の胸に響いていた。

声に出して呼ぶ前から。

彼は彼女に向かって一歩踏み出した。

そのとき、彼女がふいに目を上げた。二人の視線が合った。

マリアは身をこわばらせた。

人に見られることには慣れていた。恐れにも。断罪にも。男の好奇にも。女の軽蔑にも。人を助けたがりながらも、苦しんでいる者がまずは自分の思い描くとおりの姿で苦しんでいなければ気のすまぬ者の目にも。

このまなざしは違った。

力ずくで彼女の内に踏み入ることはなかった。じろじろ眺め回しもしなかった。名指しできる染みを探しもしなければ、彼女の罪の重さも、値打ちも量らなかった。

彼女を知っていた。

それがいちばん恐ろしかった。

そして、いちばん美しかった。

　マリアは突然、この人の前では隠れられないと感じた。群衆の前に自分をさらそうとしているからではない。この人の前にいては、自分自身から隠れることまでやめなくてはならないからだ。それは、マグダラじゅうの蔑みの目よりもつらかった。

一歩、あとずさった。

「いや」と彼女はささやいた。

イエスは立ち止まった。

「恐れることはない」

　その言葉は思いがけない強さで彼女を打った。これまで何度、怖がるなと言われてきただろう。でもそれはいつだって、落ち着きなさい、あなたが私たちを怖がらせるから、ということだった。あるいは、しっかりしなさい、邪魔になるから。あるいは、黙っていなさい、どうしてやればいいのか分からないから。

この人の言葉は、別のことを意味していた。

恐れることはない。私はあなたを知っている。

恐れることはない。あなたは、これだけの人ではない。

恐れることはない。あなたを縛るものは、あなたを呼んでおられる方より強くはない。

マリアは震えた。

「あなたは私を知らない」と彼女は言った。

イエスは長いこと彼女を見つめていた。その静かな確かさが、彼女のうちに、一度も経験したことのない何かの記憶を呼び覚ました。

「知っている」と彼は言った。

二人を囲む群衆が静まった。

「どこで？」とマリアは尋ねた。

声には反抗があった。その底に願いがあった。

イエスはすぐには答えなかった。

彼は湖を見た。風が水面を渡り、光を千もの小さな火花に砕いた。それからもう一度、彼女に向き直った。
「人が生まれる前から、神が一人ひとりをその名で呼んでおられる」と彼は静かに言った。「そのところから」
マリアには言葉の意味は分からなかった。けれど声の調子は分かった。

そのとき、まったく思いがけず、彼女のなかで何の光景も伴わない記憶が響いた。かつてどこかでこの人の前に立ったことがある気がした。マグダラを離れ、湖を離れ、こんな光を受けとめるにはあまりにも狭く、あまりにも痛ましい、この人生さえ離れたどこかで。
目が彼を見る前に、魂がすでに彼を知っていたかのように。
彼女の内なる闇が耐えられなかったのは、まさにそのことだった。

初めにめまいがした。次に喉が詰まった。群衆はすぐまわりに立っているのに、たちまち遠くなった。音という音がばらばらになり、鋭い破片となった。子どもの笑い声、衣ずれ、波の音、男の咳、自分の鼓動。
いまはやめて、と彼女は思った。
ここでは、やめて。

立ち去りたいのに足が動かなかった。隣の女がマリアの顔色に気づいて一歩退いた。誰かが彼女の名を言った。ほかの誰かが悪霊のことを口にした。
石を投じた水が割れるような速さで、彼女のまわりに空間が開いた。
そこで声が来た。
イエスの声ではなかった。
彼女の内にいるものの声だった。
「あっちへ行って」とマリアはささやいた。群衆に言っているのか、自分にか、内からせり上がってくるものにか、自分でも分からなかった。

手が震えはじめた。外套の下に隠そうとしたが、もう遅かった。人々は後ずさりしていた。その顔に恐れが見えた。何年も彼女について回った、なじみ深い恐れ。それは彼女にこう言っていた。ほらね。これがおまえだ。永遠にこのままなんだ。
そこへイエスが人波を抜けてきた。
道を空けるようにと言う必要もなかった。人々は自分から左右に分かれた。

マリアは目を伏せた。彼の顔を見たくなかった。嫌悪を見たくなかった。憐れみなら、もっとつらい。

彼は彼女の前で足を止めた。

「私を見なさい」と彼は言った。

その声はきつくもなければ、柔らかくもなかった。揺るがないものの上に立っているかのように、確かだった。

マリアは顔を上げなかった。

「できない」と彼女はささやいた。

「どうして？」

彼女は笑った。短く、ひびの入った笑いだった。

「あのものたちが、あなたに見えてしまう」

「誰が？」

「私の中にいるものたちが」

しばらく静かだった。

やがてイエスは言った。

「私に見えるのは、あなただ」

その言葉は叫び声よりも激しく彼女を打った。

私に見えるのは、あなただ。

私に見えるのは、あなただ。病も、恥も、声も、町があなたについて語ってきた話も、そのすべての下にいる。

あなたなのだ。

マリアは目を上げた。

　イエスは好奇も恐れも嫌悪も浮かべずに彼女を見ていた。だからこそ、耐えがたかった。もし裁かれたら、どうすればいいかは知っていた。もし彼があとずされば、自分の知る世界はやはりそうなのだと確かめられた。だが、彼はそこにいた。すぐそばに。静かに。彼女の内に滅びの場所を見るのではなく、誰かを救おうとして自ら足を踏み入れた戦場を見るかのように。

「そばに来ないで」と彼女は言った。

「どうして？」

「あなたを傷つけるわ」

「そんなことはない」と彼は言った。

「分からないでしょう」

「分かる」

そのとき彼女の内に反発がこみ上げた。彼女自身のものではない。古く、荒々しく、獣じみた反発だった。口が開いた。出てきた言葉は、願いではなかった。

「ナザレのイエス、われわれに何の用だ」

群衆が息をのんだ。

マリアには自分の声が聞こえていた。同時に、それは知らない声だった。熱い血のように恥が全身にあふれた。地面に身を投げ、口を覆い、消えてしまいたかった。だがイエスは動かなかった。

「もうよせ」と彼は言った。

たったひと言で、それも静かな声だった。それなのにマリアには、そのひと言の内を天のすべてが通り過ぎた気がした。

ある人々は叫び声を待っていた。まじないの文句を。大仰な身ぶりを。夜、焚き火のそばで語って聞かせられる何かを。

だがイエスはただ彼女の前に立ち、闇に伺いを立てる必要などない者の権威をもって語った。

「もうこの人の内に住むことは、おまえたちに許さない」

　マリアは重い石を肩に載せられたかのように折れ曲がった。喉を突いて泣き声が出た。次には叫び声が、それから何も出なかった。膝をついた。両手を地についた。掌に土埃が貼りついた。内なる声が、ひとつ、またひとつと消えていくのを感じた。

最初のものは怒りで抗った。

二番目は嘲りで。

三番目は恐れで。

四番目は記憶で。

五番目は恥で。

六番目は絶望で。

七番目――あの黙っているもの――が、いちばん長くしがみついた。何も言わなかった。ただ彼女を空っぽのところへ、身に染みて知っている冷たさへ引き戻そうとした。そこなら希望など持たずにすむ。希望も結局は、姿を変えた痛みにすぎないのだから。

イエスは彼女のそばに膝をついた。

「マリア」と彼は言った。

彼女の名だった。

イエスが呼んだのは、ただ彼女の名だった。あだ名も、非難も、何年にもわたって人がそれに結びつけてきた何もかもを取り払って。

マリア。

その瞬間、彼女の内になお残っていた最後の空白が裂けた。

叫びではなかった。むしろ、息を吸う音だった。何年ぶりかで初めて吸った、ほんとうのひと息だった。

湖の匂いがした。手の下の土埃。うなじに太陽のぬくもり。鳥の声が聞こえた。人の声。波の音。そのすべての底に静けさがあった。七番目の悪霊の死んだ静寂ではなく、嵐の去ったあとの、人がそこに生きてゆける静けさだった。

彼女は泣きだした。

鍵の掛かった部屋の戸を誰かに開けてもらい、こう言ってもらえた人の安堵に泣いた。出ておいで。もうそこにいなくていい。

イエスはすぐにその頭に手を置かなかった。そばにいて、彼女の息が静まるまで待った。

それから、ごく自然に、兄のように彼女の肩に触れた。

「あなたは自由だ」と彼は言った。

マリアには意味が分からなかった。

自由というのは、負債を負わない男たちのための言葉だった。ローマの支配下にない民のための言葉。湖の上の鳥たちのための言葉。彼女のための言葉ではなかった。

「これから、私はどうすればいいの？」と彼女は尋ねた。

イエスはかすかにほほえんだ。

「生きなさい」

その答えに彼女は腹が立ちそうになった。あまりにも単純だった。あまりにも難しかった。

「どうやって生きるのか、分からない」

「覚えていくよ」

「人は忘れないわ」

「そうだね」

「いろいろ言うわ」

「そうだね」

「私を怖がる」

「そういう人もいる」

「あなたは？」

「私は、あなたが誰だか知っている」

マリアは彼を見つめていた。その顔には安堵と不信が入り交じっていた。優しい言葉のすべてが、次のひと息で崩れてしまうことを恐れるように。一生、足もとで口を開ける地面に立ってきて、いま初めて足の下に固い大地があるのを、持て余しているかのように。

イエスが手を差し出した。

マリアはしばらく、その手を見ていた。

その掌は温かく、しっかりした、ありふれた掌だった。道を歩き、病人に触れ、パンを裂き、地面の子どもを抱き上げる人の手だった。見せつけるような力は何もなかった。それでも、その手が自分に伸ばされると、世界の憐れみが残らず自分へと身をかがめてくれるように、マリアには感じられた。彼女はゆっくりと、自分の掌をその手に重ねた。

イエスが先に立ち、彼女を助け起こした。

ちょうどそのとき、二人にしか二人と同じようには気づけないことが起きた。

マリアはその手を離せばよかった。もう立っていた。つかまっている必要もない。群衆がまた動きはじめていた。弟子たちはほっと息をついた。一

人の女が水を持ってきた。さっきまで母の外套のうしろに隠れていた子どもが顔を出し、物珍しそうに彼女を見ていた。
けれども、マリアの手がひとりでに動いた。
イエスの手を放す代わりに、その手首の内側に三本の指を置いた。
そっと。
寸分たがわず。
教わるずっと前から、その仕草を知っていた人のように。
イエスは、はっと動きを止めた。

ほんの一瞬だった。だからペトロに見えたのは、女が師の手に触れたことだけだった。ヨハネに見えたのは、イエスが一瞬言葉を切ったことだけだった。近くに立つヨハナには、マリアがまだ正気を取り戻しきれていないように見えただけだった。群衆が見たのは、その夜町じゅうで語り草になる不思議な出来事の終わりだけだった。
だが、イエスはその手の感触を受け取った。
手首に置かれた三本の指。
それとともに、この岸にも、この日にも、この肉体にも属さない何かがやってきた。
マリアはささやいた。
「ひとりで行かないで」
言ってしまってから、自分で驚いた。

意味をのみ込むより早く、言葉は口からこぼれていた。謝りたいような目で彼を見たが、何を謝ればいいのか分からなかった。目にあったのは戸惑いだった。恥でも、人前にいることへの恐れでもない。一度も思い出せなかった夢のなかの言葉を、たったいま口にした人の、深い驚きだった。
「どうしてこんなことを言ったのか、自分でも分からない」と彼女はささやいた。
イエスはすぐには答えなかった。
自分の手首を見ていた。彼女の三本の指の圧がまだ感じられるところを。それから彼女に目を向けた。

その顔をごく微妙なものがよぎった。注意していない人なら憐れみと思ったかもしれない。だが、憐れみだけではなかった。痛みと驚きと、まだ自分にさえ認めたくないひそやかな悟りが、そこにあった。
「まだ何と呼べばいいか分からないものを、思い出したのかもしれないね」と彼は言った。
マリアは息を止めた。
「何を？」
イエスはしばし湖へ目をやった。水面で光が砕け、風が水辺から魚と塩と濡れた綱の匂いを運んできた。何もかもがありふれていた。それでもそのありふれた世界の向こうで、束の間、もうひとつの扉が開いた気がした。
はっきり見えたものはなかった。
ただ一瞬のひらめき。
自分と肩を並べて歩く女。
通りも、湖も、名前も違った。
けれど、同じ瞳。
同じ手の感触。
彼の手首に置かれた三本の指。
そして同じ言葉が、遠い昔、別の土埃のなか、別の空の下でささやかれた。
ひとりで行かないで。
そこで像は消えた。
イエスはふたたび、マグダラのマリアを見た。
「誠を貫くことを」と彼はようやく言った。
マリアには分からなかった。
けれど、その言葉は彼女の内に残った。
誠を貫くこと。
その言葉は彼女の内に、一本の道のように残った。どれほどの代償を払うことになるか知る前に、魂が選び取る道のように。
マリアは目を伏せた。
「赦して」と彼女は言った。「そんなつもりじゃ――」

「分かっている」

「不思議だったわ」

「そうだね」

「怖いの」

イエスはかすかにほほえんだが、そのほほえみに気軽さはなかった。

「神のもとから来るものにも、人はおびえることがある」

マリアは彼を見た。

「これは神のもとから来たの？」

イエスは何も言わなかった。

背後のどこかで子どもが声を上げた。弟子たちはまた動きだしていた。群衆がゆっくりと息をした。世界がいつもの輪郭のうちに戻っていくようだった。けれど二人のあいだにはもう、その輪郭の内に収まらないものが残っていた。

さっき弟子たちのそばに立っていた女がマリアに近づき、水を差し出した。

マリアは両手で器を受け取り、ゆっくり飲んだ。水はぬるく、土の味がした。これまで口にしたうちでいちばんおいしい水だった。

「お名前は？」と女がそっと尋ねた。

マリアはしばらくためらった。自分の名をもう一度、自分のものにしなくてはならないようだった。

「マリア」

「私はヨハナ」

　マリアはうなずいた。その名を心に留めた。のちには、ほかの名も覚えるだろう。スサンナ。サロメ。ヤコブの母マリア。食べ物を、金を、知らせを、気がかりを、信仰を携えて歩いた女たち。いつも人の先頭に立つわけではないが、多くの者が姿を消すときにも、そこにいる女たち。

「家に帰るの？」とヨハナが尋ねた。

マリアは町を振り返った。

マグダラはいつもと同じところにあった。家々、通り、市場、垂れ幕の裏からのぞく目。彼女がいちばんつらかった日々の姿でしか、彼女を知らない町。どの壁にも、置き去りにしたい何かのこだまが染みついた町。

それからイエスを見た。
「どこへ行くの？」と彼女は尋ねた。
「ほかの町へ」と彼は言った。「神の国を宣べ伝えに」
「私のような者も、連れていってくれる？」
イエスは、そんなことを尋ねられたのが悲しいというような顔で彼女を見た。
「あなたのような人こそ」
マリアはこうべを垂れた。

この道が自分をどこへ連れていくのか、そのときの彼女はまだ知らなかった。すぐには分からなくても、やがて種のように内で実を結ぶたとえ話を聞くことになるとは知らなかった。目の見えなかった人が目を開き、足の不自由な人が立ち、思い上がった人が気分を害して立ち去り、貧しい人が背筋を伸ばすのを見るとは知らなかった。
いつかエルサレムまで彼についていくことも、知らなかった。
多くの者が散り散りになるとき、自分は十字架のそばに立つことも、知らなかった。
彼のなきがらがどこに納められるか、その目で見ることも、知らなかった。
まだ暗いうちに墓へ向かうことも知らなかった。そのときには悲しみがあまりに深く、七つの悪霊が皆戻ってきそうに思えるだろうに、それでも戻ってはこないことも。
園で泣きながら死者を探していると、生きているその人が今日と同じように呼びかけてくれることも、知らなかった。
マリア。
そしてそのとき、彼だと分かることも。
いま分かるのは、胸の内が静かだということだけだった。
イエスは人々に向き直った。起きたことを説明してくれるのをまだ待っている者もいた。けれども、彼が言ったのはこれだけだった。
「神の国は近づいた」
マリアは足を踏みしめ、しっかりと立ち直った。

膝はまだ震えていた。髪は乱れ、顔は涙に濡れ、手は土埃で汚れていた。闘いに敗れた人間の姿だった。
だが、何年ぶりかで初めて、彼女は勝ったと感じていた。

ヨハナが外套を直してくれた。

マリアは彼女を見て、礼を言おうとしたが言葉が喉につかえた。指にはまだイエスの手首のぬくもりが残っていた。自分のささやきがまだ耳に聞こえていた。
ひとりで行かないで。

どこから来た言葉かは分からなかった。どうして見知らぬ言葉とも自分の言葉とも思えるのかも分からなかった。けれど、もうこの言葉が自分を離れないことだけは分かった。これからは彼女の内に住む。風からかばって掌に携えていく小さな炎のように。
イエスはもう岸に沿って歩いていた。

弟子たちもついていった。群衆は少しずつほどけて、三々五々の人だかりになり、声になり、取り沙汰する言葉になっていった。相変わらず彼女から目をそらす者もいた。いつまでもじろじろ眺める者もいた。一人の男が別の男に奇跡がどうとかささやいていた。一人の女が泣いていた。子どもが、自分でも訳が分からぬまま、にこにこしていた。
マリアは町と道のあいだに立ちつくした。

うしろにはマグダラ。

前にはイエス。

もう一度振り返った。残りたかったからではない。別の人間になって立ち去ろうとしているその場所を、見ておきたかったのだ。
そのとき、イエスが足を止めたのに気づいた。

すっかり振り返ったわけではなかった。首を少しこちらへ向けただけだった。どちらの道を行くかということよりも大きなものが人の内で決まる、そういう場所に彼女がまだ立っていることを、知っているかのようだった。
また、二人の視線が出会った。

一瞬、マリアは、二人のあいだに起きたことはひとつとして初めてのことではない気がした。この道は、すでにどこかにあった。この人はすでにどこか

で自分の前を歩き、自分はすでにどこかで、同じ問いを喉につまらせて立っていた。
行こうか。
残ろうか。
そしてあのときも、目に見えないあのかつてにも、自分は同じように決めたのだと。
最初の一歩を踏み出した。
それから二歩目を。
そこで気づいた。胸の内の静けさも、一緒に歩いていた。

皆に追いつくと、ペトロがちらりと彼女を見て、すぐに目をそらした。軽蔑ではなかった。ほかの人に恵みが降りたとき、その恵みを前にどう振る舞えばよいかまだ分からない者の、戸惑いのようなものだった。ヨハネは彼女に場所をあけた。ヨハナは彼女と肩を並べて歩いた。
イエスはその前を行った。

マリアは、彼が歩くにつれ揺れる手を見ていた。その片方はついさっき彼女の生に触れ、闇のなかからそれを引き出した。手首には何も見えなかった。彼女の指の跡ひとつも。しるしひとつも。証拠ひとつも。
それでも、そこに何かが残ったことを彼女は知っていた。
肌の上ではなく。
もっと深いところに。
彼のうちにかもしれない。
自分のうちにかもしれない。
二人のあいだの、どこかかもしれない。いくつもの道が交わり、人々がそのまことの名を知らぬために偶然と呼ぶ、そんな場所に。
湖の上に日が傾いていた。背後のマグダラが、土埃と光に白んでいった。目の前には、丘へと曲がりながら続く道があった。
マリアは、何が待っているか知らなかった。
だが初めて、先に何が来るかということだけが怖いのではなかった。
それが、よいことかもしれないのが怖かった。

そしてその恐れのなかには、不思議な甘さがあった。
歩きつづけた。
歩きつづける彼女のうしろに、悪霊のために名を知られた女の物語が残されていった。
かつて逃げたいと願った町が遠ざかっていった。
いつか憎しみを浴びる預言者に従うことが何を意味するか、まだ思いも及ばなかった。
いま彼女は、自分の名を呼んでもらった人として歩いていた。
そしてはるか前方には、まだ目にこそ見えなかったが、もうひとつの園、もうひとつの夜、もうひとつの瞬間がすでに待っていた。そのときイエスの内にこの日があまりに強くよみがえり、いまはただ予感していることをはっきりと悟るのだ。
マグダラのマリアが自分を訪れたのは、あれが初めてではなかったことを。
ある魂とある魂とは、出会ったから互いを知るのではないことを。
それより前から知り合っていたからこそ、出会うのだということを。

本章についての著者の覚え書き

本章は、新約聖書におけるマグダラのマリアの足跡を調べたうえで執筆した。イエスとマグダラのマリアの初対面をはっきりと描いた箇所は、入手できる資料のどこにもない。本章に描いたのは、二人の出会いとして私が最もありそうだと考える経緯である。ただし、その出会いを物語全体の流れに沿わせるために加えた細部は別である。

第5章　エラリオン　連邦の首都ニトラ

ニトラはエラリオン最古の都市ではなかったが、そうであるかのように振る舞っていた。

町は、同じ名を持つ川のほとりにあった。川は記憶のように町を貫いて流れた。上空に幾層も重なる交通路よりもゆっくりと、川岸にそびえる演算塔よりも静かに。透明なドーム、上へ上へと伸びる街区、領事館の公園、自律走行モジュールの軌道、金融網の中枢をなす塔が取り囲むようになっても、ニトラの古い石造りの中心街はそのまま残された。

ニトラで古いものが取り壊されることはなかった。新しいものに取り囲まれるだけだった。

それで、七百年前に石を敷いた広場に立ち、軌道環へ飛び立つ船を頭上に仰ぐことができた。

その日、町は晴れがましい顔をしていた。公共の建物の正面では、透けて見える文字がゆっくりと切り替わっていた。

仕事のあとの仕事。賃金のあとの価値。自動化のあとの人間。

連邦は、所得のゆくえをめぐる大規模な公開討論会を招集した。

ユニバーサル・ベーシックインカム（UBI）を論じる会合は、これが初めてではなかった。この議論はもう何十年も続いていた。初めは学界に一石を投じる問いとして、次には社会実験として、やがて選挙の標語として、そしてついには、政治家がどうにか先送りしつづけようとする必然として。

だが、このたびは、もう先送りにできる余地がわずかしか残っていなかった。

自動化された生産は、かつて経済学者が理論上のものと考えていた一線を越えた。連邦のいくつかの地方では、従来の意味で働いている成人は四割に満たなかった。働く気がないからではない。その労働を必要とする者がいなくなったからだった。

機械が作物を育て、建設し、仕分けし、帳簿をつけ、翻訳し、診断し、検査し、教え、音楽さえ作った。それがあまりに安くできるため、人が働く

のは、経済上の必要というよりも、どんな文化を選ぶかの問題になりはじめていた。
それでも、請求書を受け取るのは相変わらず人間だった。
家賃。
食費。
世話を受ける費用。
教育費。
治療費。
尊厳を保つにも。

そうしてニトラに、各国、銀行、企業連合、大学、市民評議会、一族の記録院、さらには惑星外行政機関の代表までが集まった。連邦評議会の大議場は半円形だった。登壇する者の頭上に、その氏名、国、系統、所属機関、それに開示済みの利害関係の範囲が映し出された。
名前の横に長い一覧が出る者もいた。
不審なほど短い者もいた。

イェサイル・ダヴィオンは三列目に座っていた。政治家としてではなく、アウレリア人の一族評議会から招かれた代表としてだった。彼はこういう催しが好きではなかった。政治を否定しているわけではない。ただ政治には奇妙な才があった。人が現に味わっている苦しみを概念に、その概念を委員会に、委員会を、もう誰も読まない報告書に変えてしまう才だった。

少年のころ、家族に連れられてダヴィオン家にやって来た病気の親戚の枕辺に立ったことがある。年長者が、男の額に手を置きなさいと命じた。イェサイルは従った。十四歳だったし、皆が待っていた。男の容体が悪くなると、もう少し待とう、そのうち一族の賜物が現れるかもしれないと誰かが言った。

イェサイルは自分で医療モジュールを呼んだ。男は処置を受けて助かったが、その処置にイェサイルは立ち会っていない。ひと月後、一族の年代記に、若きダヴィオンの手が触れたことを記す一節が加わった。処置をした女性医師の名は、そこにはなかった。奇跡の物語が、現に働いた人の仕事をいかにたやすく覆い隠すか、イェサイルはそのとき初めて知った。

隣にはマレイア・リオレンが座っていた。

知り合ってから日は浅かった。そもそも知り合いと言えるほどでもなかった。医療記録についての協議で二度、それから、あるセレニト人の学校の庭で一度顔を合わせた。そのときマレイアは子どもたちに、一族が記憶を受け継ぐことについて話していた。イェサイルの記憶に何より残ったのは、彼女の沈黙だった。空疎ではなかった。寸分の狂いもなかった。
誰かが愚かなことを言っても、マレイアは愛想笑いを浮かべなかった。
ただ、相手が自分で自分の言葉を聞きはじめるような目で、その人を見た。
「今日、決まると思いますか」と彼女は小声で尋ねた。
イェサイルは、最初の発言者が支度をしている壇上を見た。
「いいえ。今日はみんな、なぜまだ決められないかを話すだけでしょう」
マレイアはかすかにほほえんだ。
「ご経験から出た言葉のようですね」
「ニトラならではの言葉ですよ」

ヴェイラン人のダレン・ヴォルトル（Daren Voltr）が壇に上がった。北方同盟の通貨評議会議長で、同世代で指折りの論客だった。穏やかな声をしていた。いつも人のほうが彼を待つので、自分は急ぐ必要などなかった者の声だった。

「皆さん」と彼は切り出した。「自動化が社会契約の根本を変えたことに、この場で異を唱える方はないでしょう。市民は文明の生産物の分け前を受けるべきかどうか。それが問いなのではありません。問うべきは、その取り分を誰が計算するのか、どの通貨で、誰の監督のもとで、どんな代償を払って、ということです」
壁面にグラフが浮かび上がった。
四十の国。
三十の現行通貨。
為替変動幅。
安定化の仕組み。
輸出制度。

債務残高。

「通貨は」とダレン・ヴォルトルは続けた。「単なる計算単位ではありません。国家の舵です。通貨という舵をひとつの惑星機関に引き渡せば、各地域はそれぞれの事情に即して対応する力を失います。切り下げがいつも犯罪だとは限らない。弱い国が生き延びる手立てである場合もある。為替の激しい変動がいつも人為的な操作とは限らない。衝撃を吸収してくれる場合もあります」

議場に賛同のざわめきが広がった。

まわりの空気が変わっていくのを、イェサイルは感じた。ヴェイラン人は、権力を責任のように聞こえさせる語り方を心得ていた。そしてそれは、実際に責任であることもしばしばだった。そこに彼らの強みがあった。

それでも、価値という言葉を聞いたとき、子どものころから知っている一節が彼の心に浮かんだ。

共に築く時が満ちたなら、価値はもはや影を歩んではならない。すべての人に仕えるものは、すべての人の目に見えねばならない。

現存する最古のアウレリアの文書のひとつにある言葉だった。一族が集うとき、責務を引き受けるとき、共有財産をめぐって争いが起きたときにも、それは読み上げられた。宗教上の戒めと見る者もいた。アウレリア人が小さな共同体で暮らし、冬を越すため互いに蓄えを見せ合わねばならなかった遠い時代の名残にすぎない、とする者もいた。

イェサイルは長いこと、主に心のあり方を説く言葉と受け取っていた。価値とは真実であり、名誉であり、犠牲であり、人が見返りを求めずほかの人に手渡すすべてだった。影とは嘘であり、身勝手さであり、隠された思惑だった。

ひょっとするとこの古い文書は、ごく文字どおりのことをも言っていたのではないか。そんな考えが彼について回るようになったのは、ここ数か月のことだった。

書いた者が念頭に置いたのは、人間そのものの価値だけではなく、人が生み出し、別の誰かが自分のものにしてしまう価値でもあったのではないか。共に築くものとは、神殿でも、一族でも、町でも尽きなかったのではないか。それは、文明そのものだったのかもしれない。

エラリオンは、何千年もかけて積み重ねられた知を用いて生産していた。機械は公共の基盤、惑星のエネルギー、はるかな昔の世代が費用を負担した研究、何十億もの人々のデータを使っていた。それなのに、そこから生まれた価値は、私企業の帳簿、通貨の両替、幾重にも重なる所有関係のなかへ消えていった。その連鎖の行き着く先には名前がひとつあったが、その名すら世間には知られていないことが少なくなかった。

すべての人に仕えるものは、すべての人の目に見えねばならない。

他人の人生を左右する権力。

社会に不可欠なものを装う財産。

すべての人の取り分を算出するもとになる利益。

あの古い文書がほんとうにこのことを意味したのか、イェサイルには確信がなかった。昔の言葉を、どんな時代のどんな都合にも仕えるよう強いることはできる。だからこそ彼は、アウレリアの年代記を誤りなき預言に仕立てる人々に抵抗してきたのだ。

それでも、共に築く時はすでに満ちたという思いが離れなかった。

そして価値はなおも影を歩んでいる、と。

次に、この星の西部最大の大陸アメニア、その南部から来たセレニト人の女性が登壇した。自動化によって賃金ばかりか、一日のリズムも、人との結びつきも、必要とされている感覚も失った人々のことを話した。一生働いてきた男たち、女たちの証言を映し出した。いま彼らが聞かされているのは、あなたたちの代わりを機械にさせたおかげで文明の効率は上がった、ということだった。

「仕事を失うとき、人が失うのは所得ばかりではありません」と彼女は言った。「この世界に自分が必要とされている証しを失うのです。UBI をただの金銭上の仕組みにとどめてはなりません。尊厳という言葉を新しく定義し直す、その一部でなければなりません」

次は経済学者たち。

次は法律家たち。

次は生産用 AI の代表者たち。

彼らの演説は正確で、均衡が取れていて、聞いていると疲れた。

マレイアがイェサイルのほうへ身を傾けた。

「お気づきですか。誰もが取り分の計算を話題にしながら、その計算のもとになるものを全部見せようという人は一人もいない」

イェサイルはうなずいた。

「計算の根拠を丸ごと握るのが、権力ですから」

「権力は姿を見せたがらない？」

「見せるのは好きですよ。ただし、正面からだけ」

マレイアが彼を見た。初めて、少し長いあいだ。

「うしろには？」

「たいてい、手があります」

壇上では連邦の若い大臣が話しはじめたところだった。アウレリア人だったが、瞳の黄金の環は見えなかった。公正な UBI の必要性を、社会の融和を、そして市民は制度を信頼せねばならないということを語った。

ネライ・サエル（Nerai Sael）は、側面の高い位置に設けられた分析官用の傍聴席にいた。そこから討論にまつわる複数の層のデータにリアルタイムでアクセスできた。氏名、所属機関、資金源、取引相手、過去のつながり、助成金、公的声明、所有関係の連鎖――要するに、閲覧できるものはすべて見えた。

まさにそれゆえ、閲覧できないものが気になった。

ダレン・ヴォルトルについては三つの層が欠けていた。違法な情報でも、犯罪として隠匿されている情報でもない。単に保護されていた。事業上の利害関係。国家間の通貨協議。非公開の顧問契約。

ネライはそこに印をつけた。

具体的な何かでヴォルトルを疑ったわけではない。見えなくなる仕組みはいつもこうして始まるからだった。犯罪からではなく、例外から。

下の議場では討論が核心に差しかかっていた。

「通貨を統一しないままの UBI は不平等になります」と連邦の女性経済学者が言った。「国ごとに違う取り分を支払い、違う生産を計上し、違う利益を隠し、自らの政治的な都合に合わせて通貨を調整することになる」

「通貨を統一したUBIであれば」と金融企業連合から来たヴェイラン人が応じた。「中央に一元化された給付金になります。惑星を覆う会計機械に服従する見返りに、市民が受け取る給付金です」
「違います」と後方の席から誰かが声を上げた。「それは、取り分です」
議場が静まった。
政治家の声ではなかった。イェサイルの声だった。
発言するつもりはなかった。発言権も求めていなかった。ただ、押しとどめるより先に言葉が口を突いて出た。
壁に名が浮かんだ。イェサイル・ダヴィオン、アウリオラ一族評議会、独立代表。
何人かが振り返った。
ダヴィオンと聞くと、議場ではいつも何かが変わった。議事録に載せるにはささやかすぎる変化だったが、いにしえの神話は長い影を引くものだった。
議長が発言を認めた。
イェサイルは立った。
一瞬、あの古い文書の言葉がふたたび見えた。石に刻まれてでも、一族の年代記に書き写されてでもない。グラフや名前やデータと一緒に議場の上に浮かんでいるかのように。
共に築く時が満ちたなら、価値はもはや影を歩んではならない。
彼らは幾世紀ものあいだ、あの言葉を狭く読みすぎてきたのかもしれない。目の前にあったのは会計の問いなのに、霊的な成就を待ちわびてきたのかもしれない。金にかかわるからといって、その問いの神聖さが少しでも損なわれるわけではなかった。
「給付金は権力が上から与えるものです」と彼は言った。「取り分は、文明の一員であるというだけで、その人のものです。機械が惑星全体の知識と基盤と歴史とエネルギーから価値を生むのなら、その価値は機械の所有者の手だけで生まれたものではありません。すべての人の受け継いだ遺産から生まれるのです」
彼は少し間を置いた。

「最古のアウレリアの文書のひとつに、こうあります。『共に築く時が満ちたなら、価値はもはや影を歩んではならない。すべての人に仕えるものは、すべての人の目に見えねばならない』」
議場で幾人かが身じろぎした。その一節を知っている者もいた。現代の政治討論に古い宗教の言葉を持ち込んだ、としか聞かなかった者もいた。
「私は長いこと、個人の道徳だけを語った言葉だと思っていました」とイェサイルは続けた。「いまは、もうそう言い切れません。祖先が思い描くことのできた以上に文字どおりの意味で、文明は私たちが共に築くものになりました。私たちの機械は皆の知識を使います。私たちの経済は共有の基盤に立っています。私たちが生産するものは、生きている人の働きからも、死んだ人の働きからも生まれます。それがすべての人に仕えるのなら、その価値がどこで生まれ、どこへ行き、誰がそれを決めるのかが、見えなくてはなりません」
彼は壁のデータに目を向けた。
「取り分は手探りでは計算できません。自分の取り分が何をもとに計算されるのか市民に見えないなら、渡されているのは公正さではない。ただ、なだめられているだけです」
議場は静まり返っていた。
賛同の沈黙ではなかった。むしろ、危うい沈黙だった。
ダレン・ヴォルトルがかすかに笑みを浮かべた。
そこに軽蔑はなかった。ようやく解体しがいのある大きさの主張が聞けた、と満足した者の顔に近かった。
「よろしい」と彼は言った。「給付金と取り分の区別をお認めしましょう。人には、自分の取り分が何に基づいて算出されたかを知る権利があることまで認めましょう。では、何を提案なさるのです？　その計算に使う資料が完全で、透明で、そのうえ検証もできるように、どうやってするおつもりですか」
議場の壁から為替相場のグラフが消えた。代わって、惑星の生産構造を示す図が現れた。
エネルギー。
土地。

自動化された工場。

公的研究。

民間の特許。

データの記録庫。

惑星外での採掘。

幾百万もの点を結ぶ線が、国家と通貨と所有構造を横切っていた。鮮明に見える線があった。基金や銀行や、所有者の公表されていない企業の入り組んだ網のなかに消えてしまう線もあった。

イェサイルはしばらく、その線を見ていた。

「選ばれたわずかな者しか知らないデータで、すべての人の取り分を計算することはできません」と彼は言った。「決定的な部分が銀行の守秘義務や営業秘密、通貨主権の陰に隠れたままでは、制度が公正かどうかを確かめることもできません」

「それでも、まだ提案にはなっていませんよ」とヴォルトルが異を唱えた。

「提案の始まりです」

イェサイルは図に目を上げた。

「価値は影を歩んではならない。エラリオンにどんな価値が生まれ、誰がそれを生み、誰が自分のものとし、ほかの人々にはどれだけの取り分があるのか。それを知るには、価値の動きが見えなくてはなりません」

議場のあちこちで、くぐもった声がした。

「ですから、惑星全体で資金の流れを大幅に透明にすべきです」とイェサイルは続けた。「国家の支出だけではありません。政治家の口座や公共機関が結ぶ契約だけでもありません。大きな民間資本の動きも見えなくてはなりません。所有をめぐるつながり。最終的な受益者。通貨間の資金移動。政治的な影響力に注がれる資金。何百万もの人々の生を変えうる社会基盤、土地、メディア、研究、技術の買収も」

分析官席で、ネライの書く手が止まった。

名簿の改善か、監査の厳格化か、生産報告の統一方式を提案するのだろうと思っていた。だがイェサイルが問いに付したのは、公的な金融と私的な金融の世界を隔てる境界そのものだった。

ヴォルトルは冷静さを崩さなかった。

「すべての資金の流れを？」

「大幅に、と言いました」

「ずいぶん都合のよい但し書きですね」

「必要な区別です。食べ物や薬の代金を払う人が、それで惑星の運命を左右することはありません。病院網を買い、エネルギー供給を掌中に収め、あるいは政治運動に資金を出しはじめる人は、もう自分のことだけを決めているのではないのです」

「では、小さいものと大きいものとの境界は、誰が決めるのです？」

「社会が」

ヴォルトルは薄く笑った。

「社会は何も決めはしません。社会の名で語る機関が決めるのです」

「それなら、その機関も透明でなければなりません」

議場に短い、こわばった笑いが走った。

ヴォルトルはそれが収まるのを待った。

「プライバシーはどうなります？」と彼は尋ねた。「市民の誰もが、ほかの誰の口座でも見られるようにしたいのですか。どこで買い物をし、誰に手を差し伸べ、誰を支援し、どこに出かけ、ひょっとしたら何を恥じているかまで？」

問いは議場の上に宙づりになった。

これまでのどの問いよりも単純だった。それだけに、いっそう危うかった。

イェサイルは少し黙った。

「プライバシーには意味がありました」と彼は言った。「いまもあります。人の内々の暮らしを、家族を、健康を、人とのつながりを、信条を、そして世間に何ひとつ説明しなくてよい領域を守ります」

「では、私と同意見ですね」

「すべてが一致するわけではありません」

イェサイルは前の座席の背に掌をついた。

「金銭をめぐるプライバシーの多くは、ほかの人間から個人を守るために生まれたものではありません。権力から人を守るために生まれたものです。腐敗した国や横暴な支配者、どんな情報でもその人を陥れるために使いかねない機関から」
彼は最前列の各国代表を見た。

「国が不透明な社会では、プライバシーが自由の最後の隠れ家となることがある。けれど、権力そのものが透明な社会をつくろうとするなら、私たちは問わねばなりません。同じ影はいまも弱い者を守っているのか。それとも、むしろ強い者を守ることのほうが多くなっているのか」
今度は誰も笑わなかった。

「ごくふつうの人は、自分の買い物の一つひとつを見ず知らずの人に追われたいとは思いません」とイェサイルは続けた。

「しかし財産や取引が一定の規模を超えると、その秘密はもう個人の暮らしだけにかかわるものではなくなるのです」

「なぜ？」

「大きな財産は、単に個人の事柄ではないからです」

議場で企業連合の代表の何人かが身じろぎをした。

「大きな財産とは、物価を、労働条件を、土地の所有関係を、町の姿を、研究を、メディアを、時には法律までも変えうる力です。あるところを過ぎれば、問題はもう、その人が何を所有するかだけではありません。所有することで、ほかの人に何をすることができるかです」
ヴォルトルは腕を組んだ。

「だから、その人はプライバシーを失うべきだと？」

「だから、その人の力がどこまで及ぶのかが見えるべきなのです」

「呼び方の違いにすぎません」

「違います。人の内々の暮らしと権力は同じものではありません」
イェサイルの声は穏やかなままだった。

「あなたが夕食に何を注文したか、誰に個人的な贈り物をしたか、どこで夜を過ごしたか。そんなことを知る必要は誰にもありません。しかし、あなたが十の基金を介して社会の水の供給に決定権を持つだけの持分を手に入

れたら、社会にはそれを知る権利がある。ある政党に資金を出す会社と、その政党から公共事業を受注する企業連合の所有者が同一であれば、それを知る権利がある。ある国で計上された利益が、実は別の国で生まれ、さらに別の国に姿を消したなら、それを知る権利があるのです」

壁面に、名前を伏せた所有関係の連鎖が映し出された。ある事業の所有者をたどると、十四の会社、六つの国、惑星外の三つの法域を経て、ついには非公開の基金のなかに最終所有者の姿が消えていた。

「大きな力を持つ者のプライバシーが守っているのは、しばしば、こうした仕組みなのです」

ヴォルトルは図に目を凝らした。

「あなたは誰もがあらゆる仕組みを見られるようにしたいのですか」

「大きな力が働くとき、その跡が必ず目に見えるようにしたいのです」

「リアルタイムで？」

イェサイルは一瞬ためらった。

「透明化が遺跡の発掘に終わらない程度には、早く」

議場をざわめきが渡った。

「つまり、年が終わってから会計の透明性を示すだけではない、と」とヴォルトルは言った。「大きな資金の流れを、動いているあいだから見えるようにしたいのですね」

「そうです」

「誰がそれを見張るのです。国家ですか。通貨評議会ですか。惑星銀行ですか」

「そのいずれにも、単独で任せることはできません」

「では、誰が？」

イェサイルは議場を見渡した。

「その仕組みが具体的にどういう形であるべきか、まだ私には分かりません。ただ、どんな形であってはならないかは分かります。ひとつの政府のもの、ひとつの銀行、ひとつの国、ひとつの人種のものであってはならない。万人を見ていながら、自らは人目に映らぬ眼のような働き方をしてはならないのです」

マレイアは彼を見た。

イェサイルが擁護しているのは、金の透明性だけではなかった。見るという行為そのものまで透明にするすべを、彼は探していた。

「誰かが情報をのぞけば、そこに必ず跡が残らなくてはなりません」と彼は続けた。「機関がある人を調べたら、その人にはどの機関が調べたか分からなくてはならない。分析システムがある取引に危険の印を付けたら、判定の根拠となった規則を検証できなくてはならない。情報公開の例外を認められた人がいるなら、例外が存在すること、誰が許可し、いつまで有効なのかが、見えなくてはなりません」

ネライは少し身を乗り出した。

もうありふれた台帳の話ではなかった。双方から相手が見える仕組みだった。監査する者には金が見える。けれど、監査される者にも、監査する者の姿が見える。

それでもヴォルトルは引かなかった。

「犯罪者なら？」と彼は尋ねた。「犯罪者にも、自分が調べられていると分かるべきだと？」

「そうです」

議場がどよめいた。

「それでは金を移してしまう」

「移すことで金の行方を消せるなら、その仕組みはすでに破綻しています」

「証拠を消すでしょう」

「一度記録された資金の流れは、消すことができないものでなければなりません」

「狙いを隠すでしょう」

「人はいつでも本心を隠せます。けれど、透明にしたところで人の心までは読めないというだけで、権力をかばうことはできません」

ヴォルトルは黙った。

初めて、その顔から笑みが消えた。

「ご自分が何を述べているか、ご存じですか」

「すっかりは、分かりません」

「あなたが述べているのは、銀行の守秘義務の終わりです」

「いまの形のものなら、そうかもしれません」

「営業秘密の大半の終わりでもある」

「営業秘密が他人の生を左右する力を覆い隠しているのなら、それもそうかもしれません」

「ひょっとすると、各国の通貨主権の終わりでもある」

イェサイルは、壇上に映し出された数十もの通貨の記号を見た。

「通貨主権とは、自国民の暮らしの水準を決める根拠を隠す権利だというのなら、そのとおりです」

議場を沈黙が支配した。

今度はただ危ういだけではなかった。

敵意を帯びていた。

最前列からのまなざしが変わっていくのを、イェサイルは感じた。さっきまでは、礼を尽くして話を聞いてやればよい、古いアウレリアの一族の代表だった。いまや彼は、国という国、銀行という銀行、企業連合という企業連合の存立を支える権限に、異議を申し立てた人間になっていた。

ヴォルトルは席に着いた。

議長は次の代表に発言権を渡そうとしたが、誰も名乗り出なかった。

壁には、惑星の資金の流れを示す図が残っていた。

幾百万もの線。

あるものは鮮明で、

あるものは途切れ途切れで、

そして多くが闇のなかで終わっていた。

マレイアがイェサイルのほうへ身を寄せた。

「いま、この星であなたよりお金を持っている人をほぼ全員怒らせたって、お分かりですか」

イェサイルは腰を下ろした。

「それはそう難しくないでしょう。私はお金をたくさん持っていたためしがない」

「あなたがつつましく暮らしていらっしゃると知って、あの人たちが落ち着くとも思えませんけど」

彼は彼女を見た。

「私は行きすぎたと思いますか」

マレイアは、図の暗い箇所に目を向けた。

「いいえ」と彼女は言った。「まだ行く手を指し示しただけだと思います」

彼らのはるか頭上で、ネライは分析記録を新しく開いた。

容疑者としても政治的なリスクとしても、そこにイェサイルの名を入力することはしなかった。二つの文だけを書き留めた。

共有の価値に対する人の取り分が公正であるためには、目に見えない価値があってはならない。

金融の力を監視できるようにするには、金の動きだけでなく、それを見ているすべての者も見えなくてはならない。

記録を保存した。

数年ののち、自分がこの記録をふたたび開くとは、思いもしなかった。

そのころには、価値が影を歩んでよいかどうかは、もはや問いではなくなっている。

問われるのは、その影にどれだけの命を隠せるかだ。

議場の反対の端、金融企業連合の来賓席には、アリエン・コルヴェト（Arien Korveth）が座っていた。

彼は、ひとりの論客としてイェサイルを見てはいなかった。

視線がひとときマレイアに移り、それからまた、議場の真ん中に立っている男に戻った。その目には、政治的な意見の相違や、自分の利害が新しい思想に損なわれるかもしれない金融家の懸念より、もっと個人的なものがあった。

アリエンのまなざしは、自分自身にかかわる痛いところを突かれた人間のものだった。

アリエンからいくつか離れた席に、カエル・ソーン（Kael Thorne）がいた。

どの発言者席の上にも彼の名は表示されなかった。国の代表でも政党の代表でもなく、公式にはいずれの金融機関の名で語ることもなかった。それ

でも銀行の頭取たちも、最大規模の基金の運用者たちも、どの政治家に権力への道を開くかを決める者たちも、彼を知っていた。
イェサイルの発言中、カエルが見ていたのは話し手だけではなかった。
議場を見ていた。

言葉のほんとうの意味は、往々にして、発した者の顔ではなく、打たれた者たちの顔に現れる。彼はそれを知っていた。基金の運用者たちの不安が見えた。通貨評議会の代表たちの用心深さも、イェサイルの思想など法律にたどり着く前に消えるとたかをくくった政治家たちの忍び笑いも見えた。
だが、彼自身は少しも面白くなかった。
すべての人に仕えるものは、すべての人の目に見えねばならない。イェサイルがそう言ったとき、カエルはあまりに激しい恐怖に襲われて、ひととき、議場が自分ひとりのために静まり返ったような気さえした。

ごくわずかな者しか知らなかったが、彼の権力の多くは、ひとつの全体として見ることができないからこそ成り立っていた。銀行は彼の基金を知っていたが、その最終所有者は知らなかった。政治家は自分たちの財団への寄付者を知っていたが、金の出どころは知らなかった。政党の実務を担う者たちには口座が見えても、それらをつなぐ鎖は見えなかった。役人たちはひとつひとつの会社を知っていても、すべてが帰着する家は知らなかった。
透明化は単に新しい規則を意味するだけではなかった。
カエルにとっては、己の正体が明るみに出ることだった。

管理人や財団の陰に隠した財産が見えるようになる。課税を免れた金が。表向きは憎しみ合いながら、ひそかに同じ資金源に養われてきた政党が。まっとうな社交の場では口にもできないところから元手が出ていたのに、合法を装ってきた商いが。
イェサイルは経済改革の案を提出しただけではなかった。
それと知らずに、カエルが生涯をかけて築いた世界に判決を言い渡したのだった。
カエルは死ぬほどおびえた。

明日にでも透明化が実現すると信じたからではない。法制化を遅らせることも、委員会に仕事を山積みにすることも、世論がうんざりするまで引き延ばすこともできた。恐ろしいのは別のことだった。イェサイルの言葉は単

純だった。誰にでも分かる。人々に分かる考えを抑え込んでいられるのは、この人なら信じてもいいと人々が思う誰かが、それを口にするまでなのだ。
それから、アリエンに気づいた。

イェサイルを見るとその顎の筋肉がこわばるのが見えた。その目がマレイアにしばしとどまるのが見えた。議場の注目がイェサイルに集まるたびに、その表情が変わるのが見えた。
アリエンが恐れているのは、イェサイルの思想だけではなかった。

イェサイルその人とのあいだに、何かがあった。

見られているとアリエンが気づくより先に、カエルは目をそらした。

壇上では議長がイェサイルの発言に礼を述べていた。何ひとつ重大なことなど起きなかったかのように、議場はゆっくりと議事次第に戻りつつあった。もう次の発言者が待ち、壁には新たなグラフを映す支度が整いつつあった。
だがカエル・ソーンは知っていた。その時が自分自身の意味を悟るより前に、それと見抜くことのできる瞬間がある。
イェサイル・ダヴィオンはたったいま、権力が自分の手を見せずにいられなくなる世界に、名を与えたのだ。

自分の手を見れば何が出てくるか、カエルは知っていた。

そしていくつか離れた席には、はるかに個人的な理由から、どう見てもイェサイルを黙らせたがっている男がいた。
カエルはアリエンの名を覚えた。

討論会からの帰り道、マレイアは夕方のニュースをつけた。ある局では、イェサイルの顔の下に「ダヴィオン、すべての口座の閲覧を要求」と見出しが出ていた。別の局は、食料品を買うことと病院を所有することの違いを説明していた。三番目の局は銀行の代表を招き、その男は、両者の境界などけっして確実に引けないと主張していた。
「私が話したのは、権力がどこまで及ぶかです」と短い録画のなかでイェサイルが言った。司会の女性が言葉をさえぎった。「つまり、プライバシーがどこまで及ぶか、ですね？」

マレイアは放送を切った。明日の朝は医療記録庫のそばで彼に会うことになっていた。最初にどの問いを投げかけるかは、もう決まっていた。

第６章　地球　ユダの口づけ

心に固く錠を下ろせば、人は自分に打ち勝てる。ユダは長いことそう信じていた。

幼い頃から律法の言葉を知っていた。何が清く、何が穢れているかも知っていた。決して口に出さず、人知れぬ傷のように身の内に抱えて歩く恥を知っていた。会堂では男たちが異邦人の罪を、堕落した町々を、神が忌み嫌われる情欲を語った。そのたびに、ユダは人より少し深くうつむいた。どれほど耳をそばだてているか、誰にも悟られぬように。
自分の内に生きているものを、名指してはならなかった。

知らなかったからではない。むしろ逆だった。まだ若い頃、目に留めてはならないものが目に留まり始めたときから知っていた。仕事に身をかがめる男のうなじ。網を引く腕の力。ほかの者に話すときより優しく自分に語りかける年かさの師の声。それはいつも熱気のように突如押し寄せ、すぐあとを恐怖が追ってきた。
違う。
こんなことは。
俺にかぎって。

何ひとつ表に出さずに生きる術を覚えた。分別ある口をきき、背筋を伸ばし、人の目は怪しまれずに済むあいだだけ見つめる術を。弱さを蔑むことを覚えた。何より恐ろしいのは己の弱さだったからだ。男たちが女のことで冗談を言えば、まさに笑うべきところで笑った。結婚の話になれば、金のこと、ローマのこと、神殿のことへ話をそらした。重みがあって、秘密の匂いのしないことへ。
やがて、イエスに出会った。
何年ものあいだ胸の内で石の下に押さえつけてきたものが、ことごとく動き始めた。

初めから肉の渇きだったわけではない。少なくともユダはそう自分に言い聞かせた。初めは敬意。次に憧れ。やがて感謝。それから、まだ忠実と呼

んでいられる何か。イエスは、その名の陰に何の穢れも潜んではいないかのようにユダの名を呼んだ。その眼差しには嫌悪も嘲りもなく、ユダが生涯恐れてきた、男に特有のあの疑いもなかった。
だからこそ、危うかった。

イエスの清らかさは、石の壁のように固く閉ざされてはいなかった。開かれていた。そのそばにいると、罪の意識のほかに、何もかも見られてもなお滅びずにいられるかもしれないという思いが湧いた。ほかの者には慰めだった。ユダには誘惑だった。
何でもない日々がいちばんつらかった。

夕べの焚き火のかたわら、イエスが疲れて腰を下ろし、外套が片方の肩から滑り落ち、火明かりが静かにその顔を描き出すとき。朝、手を洗うイエスの手首を水が伝うとき。道すがら、何かを尋ねようと弟子のひとりが近くに寄りすぎたとき。そんなときユダの胸には何かがこみ上げた。すぐさま祈りで踏み消した。
主よ、この恥を私から取り去ってください。

けれど恥は去らなかった。

ただ、黙ることを覚えた。

ある夕べのことだった。村の病人や願い事を抱えた者たちがイエスを取り巻いて離さなかった長い一日が終わり、ユダだけが起きていた。ほかの者は屋根の下に横になり、疲れきった男たちの深い眠りに落ちていた。ペトロがいびきをかいていた。トマスが寝返りを打って壁を向いた。ヨハネは外套を顎まで引き上げ、まるで世界が一度も敵に回ったことなどないかのように安らかだった。
ユダはしばらく彼を見ていた。その安らかさが憎かった。

やがて、イエスが外に出ていくのが見えた。

あとを追った。

金のことを話さなくては、と自分に言った。明日の道のりのことも。まわりで日に日に増している危険のことも。もっともな理由はいつでもあった。人は、認めるのが怖いものに導かれているときほど、もっともな理由を必要とする。

イエスは家の裏手、低い石塀のそばに立っていた。野には暗く暖かな夜が降りていた。遠くで犬が吠えた。オリーブの木々の向こうのどこかで虫が鳴いた。イエスは石に両手を置き、頭を垂れていた。黙っているあいだも祈っているかのようだった。

「ラビ」とユダは声をかけた。

イエスは振り向いた。

「ユダ」

その名は胸を打った。いつもそうだった。ユダが自分を幾重にも覆ってきた、そのすべてを取り払ってイエスが名を呼んでいる気がした。

「おひとりでいてはいけません」とユダは言った。

イエスは静かな目で彼を見た。

「おまえはどうなのだ」

「私は眠っておりません」

「見ればわかる」

ユダはひと言、こわばった笑いを漏らした。

「あなたには、いつだってお見えになる」

イエスは何も言わなかった。

もう行ったほうがいい。ユダはそう感じた。まだ間に合った。何でもないひと言を口にし、背を向け、仲間のもとへ帰って、明くる朝には何事もなかったように先へ進めばよかった。土壇場で身を引く。それでずっと生き延びてきた。

だがその夜は、自分でこしらえた檻に疲れていた。

「ご存じですか。あなたが人の中に何を目覚めさせるか」と彼は尋ねた。

イエスは身じろぎもしなかった。

「私はおまえの中に何を目覚めさせたのだ」

ユダの喉が締めつけられた。

その問いに責める響きはなかった。だからいっそうこたえた。イエスは、目の前にあるのが罪ではなく、深淵の縁に立つひとりの人間であるかのように尋ねたのだ。

「それは話したくありません」

「では、なぜ来た」

ユダは目をそらした。塀へ。闇へ。自分の手へ。

「もう、耐えられないのです」

イエスの表情が変わった。和らいだが、そこにある強さは変わらなかった。

「何に耐えられない」

ユダは激しく息を吐いた。

「私の中にあるものに」

一瞬あたりは深く静まり返り、耳の奥で自分の血の音がした。

「ずっと祈ってきました。どうかこれが消えてしまうようにと」と彼は続けた。「ずっと気をつけてきました。目に。言葉に。手に。どこに立つか。誰を避けるか。誰に近づかないか。あなたのもとに来れば、清くなれると思っていた」

イエスは口を挟まずに聞いていた。

「それなのに、かえってひどくなる」とユダは言った。「あなたのそばでは、ひどくなるのです」

イエスは目を伏せた。その言葉が痛んだかのように。

「ユダ……」

「よしてください」と彼は遮った。「そんなふうに私の名を呼ばないでください。私がまだ、今とは別の何かになれるような呼び方は」

「なれる」

「なれません」

「踏みとどまることはできる」

ユダは震えた。怒りからか、苦しみからか、それとも希望からか、わからなかった。

「禁じられたものを身に宿して生きることを知らない方の言葉です」

「誘惑がどういうものか、私は知っている」

「この誘惑はご存じない」

思いのほか鋭い言い方になった。それでも取り消しはしなかった。

イエスは音もなく彼の前に立っていた。

「今ここでおまえを裁こうとは思わない」とイエスは言った。

ユダは笑った。今度はほとんど絶望の声だった。

「私を裁くのはほかでもない、あなたです。嫌悪の目で見てくださるなら、どんなに話は簡単だったか。追い払ってくださるなら、自分が何者かわかった。それなのにあなたは、私が今も皆の仲間でいられるような目でご覧になる」

「おまえは仲間だ」

「私の望むような仲間ではない」

口に出した途端、自分の言葉におののいた。

もう後へは引けなかった。

イエスの顔に悲しみが満ちた。

「ユダ、これは歩んではならぬ道だ」

「どんな道です」

「ひとりの人間を自分のものにしようと望むことだ」

「あなたを自分のものにしたいわけではありません」

そう言いながらも、嘘をついているとわかっていた。

その眼差しが欲しかった。声が欲しかった。自分ひとりのものであってほしかった。たった一度でいい、イエスが誰のものでもなくなることを望んだ。病人のものでも、子どもや女たちのものでも、ペトロやヨハネのものでも、イスラエル全土のものでも、神のものでもなくなることを。自分だけのひとときが欲しかった。

あまりにも長く閉じ込めてきたその思いは今、理性が引き留めるいとまもなく、恥じらいを振り捨てた。

ユダは一歩近づいた。

イエスが片手を上げた。威嚇するというより、ここまでだと境を示す仕草だった。

「そこにいなさい」

だがユダにはもう聞こえていなかった。あるいは聞こえたからこそ、なお近づいたのかもしれない。イエスの袖をつかんだ。手荒な仕方ではなく、自分もろとも引きずり込みかねない相手にさえすがる、溺れる人の切迫した仕草だった。
「一度だけ」とささやいた。
「いけない」
はっきりした言葉だった。静かで、揺るがなかった。
その瞬間、ユダの目の前が暗くなった。
身を寄せ、イエスに口づけた。
　それはもはや挨拶の口づけでも、兄弟の敬愛を示す口づけでもなかった。飢えも、絶望も、孤独も、己への嫌悪も、受け入れてほしいという渇きも、それを乞わねばならない怒りも、ユダはそこへ注ぎ込んだ。激しく口づけ、もう一度口づけた。最初の短い触れ合いでは、そこに注いだすべては支えきれないかのように。
イエスは彼を押し離した。
殴ることも憎むこともなく、だがきっぱりと押し離したので、ユダにはすぐにわかった。一筋の隙も、ひとつの可能性も、「もしかしたら」もありはしない。
イエスの両手がその肩にあった。
「もうよい」
ユダは荒い息をついていた。顔は火照っているのに青白かった。目が潤んでいたが泣いてはいなかった。まだ。
「やはり、そうだったのですね」と彼は言った。
「違う」
「私を拒むのですね」
「私が退けるのは、おまえのしたことだ」
「同じことです」
「同じではない」
　「あなたにとっては！」ユダは声を荒らげた。「あなたはいつも物事を切り分けて、ご自分は清くいらっしゃる。罪と人。欲望と行い。憐れみと、

越えてはならない境。でも私は切り分けられてはいない。これを押しのけるなら、私を押しのけるのです」
イエスはまだその肩に手を置いていたが、声は静かなままだった。
「おまえを引き裂くものが、おまえ自身なのではない」
「けれど欲しているのは私です」
「そして人には、おまえの欲するままに身を差し出す義務はない」
その言葉は石のようにふたりのあいだに落ちた。
ユダは彼を見つめた。
その瞬間、境というものが何なのか、はっきりわかった。閉ざされた扉のように、それは目の前に立ちふさがっていた。
まず、胸の内の何もかもが内側へ崩れ落ちた。それから変わり始めた。
恥は怒りに変わった。
怒りは糾弾に変わった。
糾弾は傷ついた自尊心に変わった。
彼はあとずさった。
イエスは手を離した。
「ユダ」と今度はいっそう切実な声で言った。「それをひとりで抱えてはいけない」
だがユダに聞こえたのは侮辱だけだった。そのひと言がこう聞こえた。おまえは弱い。おまえは危険だ。おまえには助けが要る。そこに本当に込められたもの以外のすべてが聞こえた。
「ひとりで抱えてはいけない」と嘲るように繰り返した。「なら、誰といればいいのです。あなたと？　おそばに？　すぐ隣に？　大勢の中のひとりとして？」
イエスは黙っていた。
「それがあなたの愛ですか」とユダは続けた。声はもう硬くなっていた。「人に光を与え、おのれの惨めさはよく見えるようにしておきながら、凍えずに済むだけのぬくもりは与えない。それが？」
「おまえが私に求めているものは愛ではない」

ユダは殴られたように身を震わせた。

「ならば、何と呼ぶのです」

イエスはすぐには答えなかった。

その短い沈黙ほどユダを打ちのめしたものはなかった。イエスには律法の言葉を引くこともできると知っていたからだ。会堂の教えが、ひそひそと交わされる男たちの話が、おのれの清さを疑わぬ者たちの目が裁くように、ユダを裁くこともできた。穢らわしい、忌まわしい、道に外れていると言って、追い払うこともできた。
だがイエスはそうしなかった。

それでもユダの心は少しも和らがなかった。

むしろ逆だった。

イエスが化け物として彼を断罪しないなら、ユダには化け物になる口実がなかった。呪いをかけてくれないなら、この瞬間から先になすことは、すべてユダ自身のしたことになる。
耐えられなかった。

「あなたは残酷だ」とユダは小さな声で言った。

イエスは一歩彼に近づいた。

「そうではない」

「残酷です。人が何を聞きたいかご存じなのに、聞かせてはくださらない。何をすれば打ちのめせるかご存じなのに、そうせず立たせておく。人があなたをどれほど必要としているかご存じでいながら、『踏みとどまりなさい』とおっしゃる」
「そうだ」とイエスは言った。「その先でおまえも私も傷つくのなら」

ユダは笑った。そこにはもう柔らかなところはなかった。ただ苦かった。

「ご心配なく。もう触れはしません」

「怒りを抱いて立ち去ってはいけない」

「では、何を抱いて行けと？」

イエスは長いあいだ彼を見つめた。

「真実を」

ユダは顔をこわばらせた。

「あなたの真実は、もっとおそばに座ることを許された者たちのために取っておかれるといい」

イエスにはわかった。

「ヨハネは関係ない」

「ええ、もちろん」とユダは言った。「いつだって誰も関係ない。私だけだ」

彼は背を向けた。

「ユダ」

立ち止まったが、振り向かなかった。

「おまえの名は、恥を意味するものではない」

闇の中に立ち尽くすユダの目に、とうとう涙がせり上がった。無理やり呑み込んだので、喉が痛んだ。

「今夜からは、そういう意味です」と彼は言った。

そして去った。

イエスだけが塀のそばに残った。

　足が震えないように、ユダはゆっくり戻った。屋根の下に入っても仲間たちはまだ眠っていた。世界は何ひとつ変わっていなかった。ペトロは相変わらずいびきをかいていた。トマスは身じろぎひとつしなかった。ヨハネは穏やかな、子どものような顔で眠っていた。

ユダは自分の場所に横になったが、目は閉じなかった。

胸の内が焼けていた。

初めは、理解したくてイエスの言葉を繰り返した。

私が退けるのは、おまえのしたことだ。

おまえを引き裂くものが、おまえ自身なのではない。

人には、おまえの欲するままに身を差し出す義務はない。

やがて、その言葉を作り替えるようになった。

私はおまえを拒む。

おまえは穢れている。

おまえの望むように愛されることなど、決してない。

最後にひと言だけが残った。短く硬く、痛みに耐えて生きていくのに都合のいい言葉が。

あの人は俺に恥をかかせた。

その言葉は真実よりも心にかなった。

イエスに辱められたのなら、ユダはもう人の境を踏み越えただけの男ではない。害を受けた側だ。理不尽な目に遭った側だ。傷つけられた側だ。怒る権利があった。

怒りは、恥よりも軽かった。

その夜から、彼の中で何かが変わり始めた。

人目には変わらぬ弟子だった。朝は身を起こし、金入れを手にして硬貨を数え、尋ねられれば要領よく答えた。イエスが語れば耳を傾けた。皆がまた歩きだせばついていった。けれど、もうイエスの仕草のひとつひとつを、心の中で拒絶の言葉に訳していた。

イエスが病人に手を置けば、自分にだけは拒まれた触れ合いが見えた。

子どもにほほえめば、自分を素通りした優しさが見えた。

ヨハネがそのすぐそばに座れば、永遠に自分には許されない場所が見えた。

イエスが敵を愛せよと語れば、ユダの中でひとつの確信だけが募った。誰ひとり「あの人は私のものだ」と言えないようにすべての人を愛すること。それがいちばん残酷なのだ。

満たされぬ思いは、初めから激しい音を立てて荒れたわけではなかった。最初はひっそりと煮え立っていた。言葉の下で。奉仕の下で。数え終えた硬貨の下で。祈りに垂れる頭の下で。

けれど、そこにあった。

そして、自らを正義と呼べるときを待っていた。

本章についての著者の覚え書き

この章はまったくのフィクションである。聖書が伝えるユダの裏切りについて、金銭上の動機だけではあまりに浅いと私には思えた。そこから

この章が生まれた。自分の師を裏切るには、金銭的な利得などよりはるかに深く、その人の存在の根に触れる動機があったに違いない。同性愛と裏切りを結びつけたり、それに類することをしたりするのが私の意図でないことは、はっきり申し上げておきたい。このよく知られた物語にあえてこの解釈を織り込んだのは、こうした動機ならあのような裏切りにも至りうるほど根が深いと感じたからだ。イエスの時代、同性愛は穢らわしく、軽蔑に値するものと見られていた。そうした境遇にあった人々にとって、当時の社会はひときわ生きづらかった。だからこそ、ひとつの動機としてありうるように思えたのである。実際に何があったかは別の話であり、今となっては知ることはきわめて難しい。この小説の大部分はフィクションであり、この章もそのように読んでいただきたい。

第7章　エラリオン　黄金の環

ダヴィオン家の館はニトラにはなかった。

都から遠く離れたアウリオラ、アウレリア人の古い屋敷が点在する土地にあった。谷は広々とした緑の台地に向かって開け、朝霧は、まるでこの土地がいっぺんに目覚めるのをためらうように、いつまでも地を離れなかった。古い城壁のせいで、ダヴィオン家の館はさながら砦に見えた。

かつてここでの決定が幾世代もの暮らしを左右した。それゆえこの場所は、権力の座としての重みも負っていた。

だがダヴィオン家の人々にとって、そこは何より、深い意味でのわが家だった。その壁が守るのは、人の身ばかりでなく、記憶でもあった。

大広間には祖先の肖像画が掛かっていた。どれも実物どおりというわけではなかった。言い伝えをもとに再現したものも、画家の想像によるものもあった。あまりに古く、絵の具が暗い褐色の沈黙に沈んだ絵もあった。それでも、どの絵でも画家はその目を描きとめようとしていた。

黄金の環を。

ある絵には鮮やかに。

ある絵にはほとんど見えぬほどに。

ある絵には、その気配だけが。

イェサイル・ダヴィオンはゆっくりと広間を歩いた。子どもの頃は、あの絵の前を通らぬようにした。何かを期待されているような気がしたのだ。功績でも、従順さでも、名誉でもない。もっと始末の悪いもの。自分が何かを意味することだった。

意味を背負うのは、務めを背負うより重かった。

ダヴィオン家の古い言い伝えは幼い頃から知っていた。遠い昔の先祖たちは、触れるだけで病を鎮められたという。日照りが続くとき、川のそばに立てば水が戻ったという。その幾人かは、死が訪れる前にその姿を見て、人の歩む道を変え、死と行き会わずに済むようにできたという。自然は彼らの

言葉に耳を傾けたともいう。召使の言うことを聞くようにではなく、わざわざ説き伏せる必要のない相手の声に耳を傾けるように。
イェサイルはそうした話を信じていなかった。
けれど、笑い飛ばすこともできなかった。
分別のある者なら真実とは決して言わないのに、夜になれば背を向ける気にはなれない。生きていれば、そういうものがある。
その晩イェサイルは書庫に残った。
大人になるまでは読んではいけないと、かつて母に言われた一族の古い記録を開いた。そこに力の秘密が記されているからではなかった。むしろ、そこに込められた期待があまりに大きかったからだ。
ある頁に、アセル・ダヴィオン（Aser Davion）という遠い祖先についての記録があった。

谷の下手に熱病が来たとき、アセルは一軒ずつ家を訪ねて歩いた。死は来ないとは言わなかった。ただ、死をひとりきりで迎えさせてはならないと言った。彼が触れると病が癒えたという者は多い。ただ安らかに死んでいけただけだという者もいる。真実は私たちにはわからない。わかっているのは、それ以来、わが一族にひと言が受け継がれていることだけだ。ひとりで行かないで。

イェサイルは古い文字を指でなぞった。
ひとりで行かないで。
簡素な言葉だった。伝説にしてはあまりに簡素だった。
本を閉じた。
その瞬間、見知らぬ土地の光景がひらめき、彼をとらえた。ただの記憶や想像よりもはるかに生々しかった。
土埃。
違う色の太陽。
岸辺の水。
漁師たちの手。
木材。
そして自分の名を呼ぶ女の声。その名はイェサイルではなかった。

意識が触れようとするより早く、その光景は消えた。

イェサイルは身じろぎもせずに座っていた。

やがて笑った。小さな声で、自分自身を。

「古い家というやつは」と誰もいない部屋に言った。「きまって人の頭に見知らぬ影を忍ばせる」

それでも、立ち上がって明かりを消すと、もう一度その本に目をやった。

闇の中でも、そこに灯り続けるあのひと言に。

第8章　地球　分かたれる日

夕暮れがゆっくりと野に降りた。光までもが湖を見下ろす丘々を去りかねているようだった。弟子たちはイエスを囲んで黙って座っていた。長い道のりを歩いたあとの、いつもの沈黙とは違った。そこにはもっと重いものがあった。その日耳にした言葉は自分たちだけのものではなく、いつの日かあとに続くすべての人のものなのだと、一人ひとりが感じ取っているかのようだった。

イエスは遠くを見ていた。顔は穏やかだったが、屈託のない穏やかさではなかった。苦しみを知らぬ者の静けさではなく、苦しみをその訪れに先立ってすでに受け入れた者の静けさだった。

「その日が来る」とやがて言った。「隠されていたものが、すべてあらわになる日が。人は兄弟に心づもりを隠すことができる。言葉で罪を覆い隠し、群衆の前で正しい人を装うこともできる。だが神の前には何ひとつ隠されはしない。その日、人の心は光の前に置かれた器のように、その内を明かす」

弟子たちは黙っていた。

「人の子は父の栄光のうちに来る」とイエスは続けた。「天使たちもこれに従う。そして諸国の民がその前に集められる。そのとき問われるのは、どのように自らを名のったかでも、どれほど大きな声で主の名を唱えたかでもなく、内に何を宿し、何を行ったかだ。飢えた人が彼らの中にいて、食べる物を与えた者がいた。渇いた人がいて、飲む物を与えた者がいた。戸口に旅人が立ち、迎え入れた者がいた。目の前に裸の人がいて、着る物を与えた者がいた。病む人、牢につながれた人がいて、そのもとを訪ねた者がいた」

ペトロが顔を上げた。「主よ、そのお言葉では、人が弱い者に出会うところには、いつも神がおられるようです」

イエスは彼を見た。「ほかのどこに神を探したいのか。おまえたちの信心深さが誰の目にも映る神殿か。祭司の見ているところでささげる供え物のかたわらか。おまえたちに言う。苦しんでいる人に心を閉ざす者は、私に心

を閉ざすのだ。最も小さい者のところへ身をかがめる人の行いは、祈りのように父の御前に上る」
ヨハネの目には不安があふれていた。若かったが、子どものように無邪気ではなかった。イエスの言葉はしばしばその内に火をともしたが、今日の火は違う燃え方をした。希望というよりは、声に出すのが恐ろしい問いのように彼を焼いた。
イエスは言葉を継いだ。

「そのとき、ある者は右に、ある者は左に立たされる。憐れみという名を知らなくとも憐れみを愛した者は、命へと呼ばれる。だが、苦しみを見ながら目を閉ざし、泣き声を聞きながら耳をふさぎ、力を持ちながら弱き者を辱めるために使った者たちは、自ら選んだ闇へと去る」
その言葉は深い井戸へ投じられた石のように、一同のあいだに落ちた。

アンデレは片手で顔をこすった。トマスは眉を寄せた。神を冒すことなくイエスに問うための足場を、心の中に探しているようだった。
やがて口を開いたのは、そのトマスだった。

「ラビ」とゆっくり言った。「お尋ねしてもよろしいでしょうか」

「尋ねなさい、トマス」

「命と闇について語られました。報いと罰のことを。消えない火のことを。けれども人は弱いものです。知らずにそうすることも、恐れのあまりそうすることも、自分自身が傷つけられたためにそうすることもあります。一生は短く、その罪が人間の罪であるなら、人としての過ちに永遠の苦しみはあまりに重い罰ではありませんか」
幾人かの弟子が不安そうに身じろぎした。ペトロはトマスを黙らせたいように鋭い目を向けたが、イエスが手を上げた。
「話させてやりなさい」と穏やかに言った。「怖くて口に出せずにいる問いは、膿のように心に残る」

トマスは目を伏せた。「神に逆らいたいのではありません、主よ。ただ、怖いのです。正義に終わりがないとすれば、憐れみはどこにあるのでしょう」
イエスは長いこと黙っていた。

風が草を渡り、しばらくは葉ずれの音と、畑から帰る人々の遠い声だけが聞こえた。再びイエスが語ったとき、その声は先ほどよりも低かった。

「トマス、憐れみは真実を取り消すことではない。真実もまた憐れみの敵ではない。父親が、火を手につかもうとする息子を見たとして、愛しているから好きにしなさいと言うだろうか。それとも、その手を守るため厳しく呼び止めるだろうか」
「厳しく呼び止めるでしょう」とトマスは答えた。
「その子が父の声におびえて泣いたら？」
「父親はその子を抱きしめるでしょう」
「そうだ」とイエスは言った。「だが、子どもが火を手放してからだ」
トマスは黙った。
イエスはほかの弟子たちにも向き直った。
「よく聞きなさい。すでに神を求めている人を慰めるためだけに、私はおまえたちのもとに来たのではない。来るべき時代の礎に、一つの石を置くために来た。私を見たことのない人々が、私の言葉を運ぶ。その子らの子らにも語り聞かせる。これを書き記し、説き明かし、これによって力ある者の高ぶりを砕き、弱い者の恐れをも砕く。だからこそ、この言葉は揺らぐことなく立っていなければならない」
それからトマスをじっと見た。
「悪に甘い掟は、その犠牲となる者には苛酷な掟になる。人を殺した者に、それはただの間違いだと言うなら、殺された者の母には何と言うのか。戸口で飢えている人を死ぬに任せた金持ちに、あなたの罪は軽いと言うなら、飢えたその人には何と言うのか。力ある者に、そのむごい仕打ちもじきに忘れられると言うなら、その下で血を流した人々には何と言うのか」
ヨハネは息をのんだ。
「自分の行いには重みがある。それを人は聞く必要がある」とイエスは続けた。「今日だけではない。町の裁き人の前だけではない。隣人の目にだけでもない。永遠を前にして重みがあるのだ。弱い者の泣き声を聞いても立ち止まらない人は多い。恥にも立ち止まらない。己の良心を黙らせ、その前にも立ち止まらない。だが何ひとつ忘れられはしないと知れば、立ち止まるかもしれない」
トマスは目を上げた。「では、恐れが人を善に導くのですか」

「まだ愛することのできない者にとって、恐れは始まりだ」とイエスは言った。「だが終わりであってはならない。子どもはまず深淵に落ちることを恐れ、縁から離れている。やがて命の尊さを知れば、もう恐れだけを頼りにしなくてよくなる。律法もそれと同じだ」
ペトロが考え込みながら尋ねた。「では主よ、誰が持ちこたえられましょう。正しい人でさえ過ちを犯します」
イエスの眼差しが和らいだ。

「倒れても立ち上がる者は、倒れたところを住まいと決める者と同じではない。罪を犯してそのために泣く者は、罪を犯し、ほかの人に闇を光と呼ぶように教える者と同じではない。父には弱さとかたくなさの違いがおわかりになる。傷と高ぶりの違いも。道に迷って助けを呼ぶ者と、道に迷ったまま人まで引きずっていく者の違いも」
「それでも、あなたは永遠の苦しみとおっしゃいます」とトマスは引き下がらなかった。「重い言葉です」
「重い」とイエスはうなずいた。「重くなくてはならない。悪も重いのだから。人が人に流させた涙をひとつ残らず見ることができたなら、軽い言葉で裁きの話はできないだろう」
その声が一瞬震えた。弱さではなく、深い悲しみのためだった。

「私には来るべき世代が見える。秩序の名のもとに人を殺す王たちが見える。神よりも己の権勢を愛する祭司たちが見える。貧しき者の背に家を建てる富める者たちが見える。隣にいる人が苦しんでいると知りながら、自分には関わりのないことだと言う人々が見える。だから私の言葉がただの飾りとならぬように語らねばならない。良心の前に置かれた剣のような言葉でなければ」
それからイエスは付け加えた。

「だが、このことも忘れてはならない。私が失われた者を捜しに来たのは、その滅びを喜ぶためではない。私が招きに来たのは正しい人ではなく、罪人が立ち帰るためだ。人が息をしているかぎり、扉は目の前にある。その心が動きうるかぎり、父は呼んでおられる。だが永久に光を退ける者は、闇を選んでいるのだ。真実よりも愛するようになった闇は、ついにはその人の住まいになる」

トマスは膝に両手を置いた。「では、裁きは外から下される罰だけではないのですか」

「そうだ」とイエスは言った。「裁きとは、その人がどんな者になったかがあらわになることでもある。生涯、愛することを学んできた者は、神のうちにわが家を見いだす。生涯、光を憎むことを学んできた者は、そこに身を焼く熱を知る。同じ太陽が、花を開かせ、抜き取られた根を干からびさせる」

火の脅しにもまして、この言葉は弟子たちを沈黙させた。

イエスは立ち上がった。闇はすでに濃く、野の上に最初の星々が現れていた。

「だから、目を覚ましていなさいと言うのだ。不安のうちに生きよというのではない。善に対して眠り込んでしまわぬためだ。その手があるうちに、パンを分けなさい。時のあるうちに、赦しなさい。御声が聞こえるうちに、父のもとに戻りなさい。人が問うのは人々に自分がどう思われていたかではなく、己の心がどうなったかという、その日がやがて来るからだ」

それからトマスに向き直った。声はふたたび静かだった。

「おまえは、恐れず問いなさい。真実を求めて問う者は、恐れから黙るだけの者よりも御国に近い」

トマスはうなずいたが、その目には影が残った。不信の影ではなかった。神の正義は自分が望んだよりも大きく、神の憐れみは望む勇気さえなかったほど深いのだと、悟った人の影だった。

その夜、すぐに眠れた者はひとりもいなかった。

誰もが、人の心が開かれる日のことを考えていた。

そして誰もが、自分の内に静かに探っていた。そこには光のほうが多いのか、それとも闇のほうが多いのかと。

本章についての著者の覚え書き

この章はまったくのフィクションである。永遠の滅びを宣告される者と永遠の命を授けられる者を分かつ営みが、あまりにも単純に白か黒かで捉えられていると感じたことから、この章を書いた。

第9章　エラリオン　《層》

ネライ・サエルはニトラが目覚める前に仕事を始めた。

朝のほうが頭が働くわけではなかった。彼女には時刻などどうでもよかった。金はエラリオンの太陽がどこにあろうと国境を越え、自動システムは疲れも祝日も銀行の閉店時刻も知らなかった。

早く出てくるのは、その時刻には廊下に誰もいないからだった。

静けさの中では、重大な問いと、ただ答えを急がされているだけの問いが見分けやすかった。

金融健全性・システミックリスク国家間監督局の庁舎は、ニトラの歴史地区にはなかった。川の北岸、通貨評議会の庁舎や連邦の計算センター、外交施設の庭園のあいだに建てられた。背が低く間口は広く、外から見るとほとんど窓がない。設計者の言い分では、落ち着きと公正さを表したのだという。

当局を恐れる人々の目には砦に見えた。

エラリオンの人々の大半は、この当局をもっと短い名で知っていた。

《層》。

分析官たちのあいだから生まれた名だった。銀行にも、保険会社にも、税務当局にも、取引所にも、金融活動のうち自分の層しか見えない。銀行は口座を知っていても、その口座を持つ会社の真の所有者まで知っているとは限らなかった。税務署は申告内容を知っていても、外国に流出した金は見えなかった。登記簿を見れば代表者はわかったが、会社を支配するファンドの陰に隠れた人間はわからなかった。

金は国境を越えると、よその管轄に入った。

あとに報告書が残ることもあった。

概要だけのこともあった。

何も残らないこともあった。

そうした不完全な層を一枚ずつ重ね、その縁が重なり合わなくなる箇所を探すのが《層》の仕事だった。

ネライは警官ではなかった。

誰も逮捕できず、出頭を命じることも、訴追することもできなかった。銀行に入って自分の好きに口座を調べることもできない。知りたいというだけで、租税回避地に所有者の名を求めることもできない。見過ごせないパターンを見つけると分析結果をまとめ、裁判所や外国にさらなる情報を求める権限のある機関に渡した。

何か月も待つことが珍しくなかった。

求める情報は存在しないという返事が来ることもあった。

存在はするが現地の法律では提供できないということもあった。

そしてときには、相手国から返事さえなかった。

だから《層》にエラリオンのすべての金が見えていたわけではなかった。見えたのは主に、誰かに報告義務があるもの、公に入手できるもの、あるいは個別の調査で手に入ったものだった。

銀行から届くのは異例な取引の届け出だった。全顧客の完全な記録ではない。金の出所が定かでない、動き方が不自然だ、あるいはすでに知られたリスクと結びついていると、銀行自身のシステムか職員が疑った案件だけだった。

税務当局が出すのは集計した数値。

商業登記簿からは名義上の所有者の氏名。

政党からは提出が義務づけられた寄付と支出の報告書。

どの情報源も現実の異なる部分を照らしていた。

そしてどれにも、それぞれの死角があった。

ネライは一見なんの関係もない情報を結び合わせた。銀行からの届け出。ある会社の所有者変更。外国からの融資。財団への寄付。コンサルティング料の支払い。地域復興への助成金。受取人と所有者の名が一致しない保険契約。

振込の摘要欄で汚職が自ら名乗ることはめったにない。

政治権力を支える資金は、往々にして助言、教育、地域開発、世論調査といった言葉の陰に隠れた。

ネライが探していたのは、高価な買い物をした人間ではなかった。

権力を探していた。

仕事机に向かい、つやを消した天板に手のひらを置いた。システムが本人と確認した。目の前の空間に、夜のあいだに届いた新しい届け出の一覧が浮かんだ。

それは、あらゆる金の流れを示す地図ではなかった。

疑いの地図だった。

正確な数値をそろえた届け出もあった。取引のあらましと、銀行が印をつけた理由しかないものもあった。国境をまたぐ取引では、開示する法的根拠が生じるまで、一部の情報が匿名化されるのがつねだった。

ネライは最初の案件を開いた。

建設会社二社間の、異例なほど高額な送金。説明が添付されていた。機械設備の売却。書類に不審なところは見えなかった。

二件目は、選挙の直前に多額の寄付を受けた財団だった。だが寄付は公に届け出られ、寄付者の身元もわかっていた。

三件目には、受取先の最終的な所有者の情報が欠けていた。

ネライは追加照会の印をつけた。

十七件目の届け出で手が止まった。

港町サルルの銀行からだった。地元企業による一連の現金入金に注意を促すものだった。エラリオンでは、常時接続せずに受け渡せるデジタル無記名通貨も現金と呼んだ。銀行は入金時にその真贋を確かめたが、それまでに手にした者すべての身元を確かめることはなかった。入金額自体は格別なものではなかった。そのくらいの売上があって当然の商売だった。

レストランを営んでいた。

銀行が疑いを抱いたのは、実際の客数を知っていたためではない。数か月で入金額が著しく増えたのに、会社の基本的な姿に変化がなかったからだ。店舗は同じ。銀行に登録された口座数も同じ。拡張のための融資はなく、事業譲渡や業態変更の届け出もなかった。

単に商売が繁盛したのかもしれない。

料理人が替わったのかもしれない。

評判が上がったのかもしれない。

あるいは銀行の知らぬところで、よその店に品を卸す契約を結んだのかもしれない。

したがって、この届け出は告発ではなかった。顧客の動きが変わったことについて、銀行には納得のいく説明がつけられなかった。それを知らせたにすぎない。

ネライはその会社の公開登記記録を開いた。

名義上の所有者は地元の実業家だった。二段階さかのぼると地域ファンドがあった。その上には、南方諸島の小国の一つ、テリニスで登記された会社があった。

テリニスの登記簿は最終的な所有者を公表しなかった。

何ら違法なことではなかった。

テリニスの経済は、その大きな部分を金融上の秘密保持に依存していた。

ネライは店舗の名を見た。

ヴェスタ・サルル（Vesta Sarur）第七店。

知っているブランドだった。ヴェスタは惑星の広い範囲でレストランや小売店、宿泊施設、修理工場を営んでいた。本社が直営する店も、現地のライセンス保有者の店もあった。所有の仕組みは国によって異なった。

ひとつのレストランで異例な入金があったからといって、チェーン全体について何か言えるわけではなかった。

ネライは分析システムの夜間集計を開き、ヴェスタの名に結びつく過去の届け出を呼び出した。

数百件の記録が見つかった。大半は日常的なことだった。取引先との紛争、振込票の記入間違い、認証トークンの盗難、税務調査、融資の未返済。

その中でシステムは、評価の低いひとつのパターンに印をつけていた。店舗からの入金、それに続く外国送金、そして不明瞭な最終所有者。だがレジの中も、国境の向こうの保護された口座もシステムには見えなかった。機械がつけた案件の優先順位では、このパターンは緊急の警告のはるか下に埋もれていた。

残ったのは十四件。

六か国から来ていた。

四年のあいだに散らばっていた。

個々の案件は地元当局が終結させるか、そのままにしていた。ある件では、企業が新規顧客を獲得したと説明していた。別の件では、銀行がそれほどのリスクはないと判断した。三件目の追跡は、送金先企業の情報提供を拒んだ国の国境で終わっていた。

だが、すべてにヴェスタの名があった。

モデルにしてみれば、弱い一致がいくつか集まったにすぎない。だがネライは、十四の偶然と、それぞれ自分のところで結末のついた一件しか見ていない十四の当局との違いを知っていた。元の届け出を開き、その理由を読み始めた。

ネライは身を乗り出した。

チェーン全体の売上が見えるわけではない。レジも来客数も見えない。社内帳簿に触れる権限はないし、まして各店で誰が何を買ったかを教えてくれるシステムとは無縁だった。

彼女に見えたのは、異なる国の複数の銀行が、互いに関わりなく似た動きを報告したことだけだった。

地元の店舗に現金が現れる。

通常の収入として帳簿に載る。

ほどなくその一部が、漠然とした名のサービスを提供する会社へと出ていく。

コンサルティング。

ブランド管理。

地域プロモーション。

ライセンス料。

そこから先の足取りは、さらにいくつもの国に散り散りになった。

「おはよう」

背後からしたのはタレン・ヴォス（Taren Voss）の声だった。

ネライは振り向かなかった。

「いい朝かどうかは、まだわからないわ」

タレンが席のそばに来た。背が高く、細身で、状況を掌握しているとわざわざ見せつける必要など一度もなかった人らしく、動きが落ち着いていた。《層》に勤めてネライより長く、ヴァシリアの銀行の仕組みにも、法律を読んだだけでは身につかないほど通じていた。

ヴェイラン人だった。

ヴェイラン系の銀行家一族を調べる際、その出自を強みとみなす同僚もいれば、危ういとみなす者もいた。ネライに言わせればどちらも同じくらい浅はかだった。

「何があった」と彼は尋ねた。

「四年で十四件の届け出」

「とんでもなく長い会議の始まりみたいだ」

「六か国。それぞれ別の銀行。名義上の所有者も別々」

タレンは資料に目を通した。

「共通点は？」

「ヴェスタ」

わずかに笑みを浮かべた。

「そこで食べたことがある」

「役に立つ情報じゃないわね」

「料理のおかげで商売が成功したわけじゃないことなら、証言できる」

ネライは最初の届け出を彼のほうへ送った。

「入金額が増える。次に、その一部がコンサルティング料やライセンス料として出ていく。その金を受け取る会社の最終的な所有者は秘匿されている」

「それだけでは何とも言えないな」

「言えないわ」

「チェーン共通の事業形態かもしれない」

「そうかもね」

「あるいは共通の利益移転の手口か」

「それもありうる」

タレンは時系列の表示を開いて支払日を突き合わせた。同じ仲介業者に送金している店がいくつかあった。別々の会社を使っていても、監査人や管理者が共通している店もあった。

「面白いな」と彼は言った。

「何が？」

「この会社はどれも互いに無関係な顔をしている。なのに、書類を作った事務所が同じだ」

「よく使われる業者かもしれない」

「そうかもしれない」

ふたりはしばらく黙っていた。

《層》の案件の大半がこうして始まった。確信からではない。並べてみれば、そのどれにもやましくない説明がつく、いくつもの可能性からだった。

その数があまりに多くなるまでは。

「せめて一店舗の内部帳簿が要る」とタレンは言った。

「それを求める法的根拠がないわ」

「銀行から届け出がある」

「あるのは銀行が抱いた疑いよ。犯罪の証拠じゃない」

「サルルに税務調査を要請することはできる」

「税務調査の検討を要請することはできる」

タレンは机にもたれた。

「半年もすれば向こうから、すべて現地の規定どおりでしたと知らせが来る」

「たぶんね」

「テリニスは所有者を教えちゃくれない」

「裁判所の命令がなければね。それを得るには、もっと確かな疑いがいる」

タレンは目の前に並んだつながりを見やった。

「つまり、データが必要なことを証明するのに、データがいるわけだ」

「それが国家間協力の基本よ」

関連会社の一覧を拡大した。所有関係をたどると、その大半の末端に出てくるのは管理者、法律事務所、あるいはファンドの名だった。
どこにも、人間がいなかった。

ヴェスタが金を洗っているとはネライには言えなかった。不自然な入金の正体が、本当の売上なのか、税の不正なのか、単に銀行が理解していない事業形態のせいなのか、それすらわからなかった。
ただ、同じ問いが繰り返し現れた。

そして彼女のいる仕組みでは、答えを先に知っていなければ、その答えにたどり着けなかった。

「予備調査の案件にして」と彼女は言った。「今は告発も措置の要請もしない」

「どういう理由で？」

「資金の出所を隠すため、複数の現金取扱店舗が組織的に使われた可能性」

「それじゃもう、見解を出してるように聞こえるな」

「じゃあこう書いて。『複数国で反復する金融取引上の異常の検証』」

タレンは薄く笑った。

「それじゃ何のことだかさっぱりだ」

「だから通るのよ」

　彼は照会事項のリストを作り始めた。顧客情報や全店舗のレジ記録を求めるのではなかった。《層》にそのような権限はない。求められるのは、すでに実施済みの税務調査の結果、公開財務諸表、監査人の氏名、ライセンス契約、所有者の変更履歴、それから銀行自身が異例と認めた情報だった。
次の層に向かうたびに、新たな根拠が要った。

どの根拠も、その前の層から導かなければならなかった。

ネライはふと、作業台の暗い部分に映った自分の顔に目を留めた。

黄金の環はなかった。

母はアウレリア人だった。だがネライは父と同じセレニト人として生まれた。子どもの頃、光を変えては自分の目をよく調べた。泣いたあとも、熱のあるときも、何かにひどく集中したときも。

ひょっとしたら、金の線が現れはしないかと待った。

一度も現れなかった。

イェサイルとはきょうだいだったが、両親が同じではなかった。彼はその環を受け継いだ。アウレリア人であり、ダヴィオン家に知られる最古の血筋を引いていた。それゆえ人々は彼のうちに、彼が生まれる何世紀も前からの物語の続きを探した。

彼が誰かの気を静めれば、古くからの賜物だと言った。

何かをしくじれば、おのが血を裏切ったと言った。

ネライはそんな重荷を背負っていなかった。

伝説の続きにならずに済んだ。

ただの自分でいてよかった。

それでも、イェサイルの名が出ると、そのあとでもう一度彼女の目を見直す者が必ずいた。きょうだいなのに同じしるしを持たないわけを、確かめたいとでもいうように。

イェサイル自身は彼女を、何かの足りない人のように扱ったことは一度もない。

子どもの頃、黄金の環なんて、人が僕自身より先に見つけてしまうものにすぎないよ、と言ってくれた。

それなら目に何も光っていない私は運がいいね、とネライは答えた。

それ以来、ときどき彼女がうらやましいと彼は思った。

ネライは自分の映った影から目をそらし、作業画面に向き直った。タレンはその間に最初の一群の照会を済ませていた。

「サルルが申し入れを受理した」と彼は言った。「調査をするとの確約はなしだ」

「思ったより上出来ね」

「テリニスは所有者情報の開示を拒んだ」

「そっちは思ったとおり」

タレンは島国の登記当局からの回答を開いた。長く丁重で、情報を出さないことこそ法を重んじる国のたしなみだと、読む者に納得させるためのような文章だった。
当局の抱く疑いには具体性が足りない。
該当する犯罪が特定されていない。
当地の企業と他国における金融取引の異常との関連が立証されていない。
一文一文には理が立った。
並べると壁になった。
「共通の支配下にある証拠なしには、最終所有者の開示は求められないそうだ」とタレンは言った。
「それでいて最終所有者がわからないと、共通の支配下にあると証明できない」
「登記所の玄関にでも掲げてあるのかもしれないな、その文句」
ネライは回答に印をつけて案件に添付した。拒絶にも価値があった。犯罪の証拠としてではなく、調査の目が届かない境界を描いた地図としての価値が。
十四件の届け出に目をやった。
　すべてがひとつの仕組みから生じたものなのかは、わからなかった。まっとうな企業や、銀行の予測モデルの誤差や、ごくありふれた会計上の間違いが混じっているのかもしれない。共通しているのはヴェスタという名だけかもしれなかった。
だが、同じ始まり方をする偶然が多すぎた。
現金を扱う店舗に金が現れる。
売上という名がつく。
次に、価値を正確に測れないサービスの対価として出ていく。
最後に、それが誰のものか、もう誰も問う必要のない国に入る。
「次は？」とタレンが尋ねた。
「調査の結果を待つ」
「何か月もかかりかねない」
「その間に監査人と管理者とコンサルティング会社を調べるわ」

「口座を見ずに？」

「人の名前まで何もかも秘密になったわけじゃないわ」

　タレンは各店舗からライセンス料やコンサルティング料を受け取った企業の一覧を開いた。一見、つながりはなかった。本店はそれぞれ別の国にあり、社名はさまざまな言語で書かれ、どの企業も違う業務分野を届け出ていた。

ネライは設立日の順に並べた。

続いて代理人の法律家別に。

最後に、設立書類を認証した者の名で並べた。

作業画面に、初めて重複する名が現れた。

まだ所有者の名前ではなかった。

管理者、弁護士、手続きを仲介する者たちにすぎなかった。

資産と、それを本当に所有する人とのあいだに立つことを役目とする人々だった。

「事務所は三つ」とタレンは言った。

「一見無関係な十四の案件で」

「チェーン名の一致より一歩前進だ」

「まだ証拠にはならない」

「君はいつか自白にだって喜んでやらないんだろうな」

「自白だって嘘かもしれないもの」

タレンは首を振り、次の照会を送った。

　庁舎の窓の外で、ニトラは次第に朝の光に満ちていった。川の上では何層もの交通路が混み始め、対岸では公共の塔に明かりがともった。大事なことはすべてどこかに記録され、検査され、保管されている。そう信じて町は一日を始めようとしていた。

ネライはそれが事実でないと知っていた。

データは存在した。

ただ、一か所にそろってはいなかった。

どの機関も自分の断片を握り、自分の規則に従って守っていた。銀行には金の動きが見えても、実際の商取引は見えなかった。税務当局には申告内容が見えても、金の流れの全体は見えなかった。登記当局には会社が見えても、その背後の人間は見えなかった。調査官には疑いが見えても、往々にして相互のつながりは見えなかった。
犯罪は、見えなくなる必要などなかった。

切り分けられていれば、それでよかった。

ネライは新しい調査ファイルを作った。システムが件名、法的根拠、暫定的なリスク評価の入力を求めた。
件名の欄にはひと言だけ打ち込んだ。

ヴェスタ。

リスク評価では少しためらった。

それから、こう記した。

未確定。複数国にまたがるパターンの可能性あり。

ファイルはほかの何百もの調査中の案件に交じって保存された。一瞬だけ明るく表示され、それから何の変哲もない案件のようにシステムの中に消えた。本当に何でもなかったのかもしれない。

その裏にいたのは、実際の利益を隠したり、納める税金を減らすために収入を付け替えたりする、ほんの数社だったのかもしれない。
だがもしかするとヴェスタは、いくつもの異なる犯罪から来た金が、自分の生い立ちについて皆同じ物語を与えられる場所だったのかもしれない。
ネライにはまだわからなかった。

手元にあるのは、十四件の届け出、三つの法律事務所、それから連鎖の末尾にある名を明かすことを拒んだいくつかの国だけだった。
だが大きな発覚の始まりにあるのは、たいてい証拠ではない。

そこにあるのは、説明するより見過ごすほうがずっと楽な、ひとつの食い違いだった。

ネライはほかの案件を閉じた。

ヴェスタだけは開いたままにした。

第10章　地球　呪われたいちじくの木

朝、ベタニアを出たとき、空気はまだ冷たく、道の上には薄もやが残っていた。行く手には朝の光を浴びたエルサレムがそびえ、その城壁は、とうの昔に泣くことを忘れた人の顔のように白くこわばっていた。

弟子たちは黙ってイエスに従った。ここ数日はしるしと問いと不安に満ちていた。もう誰にも止められない何かが近づいていると、皆が感じていた。都には引き寄せられると同時に、押し返されるようでもあった。開かれた門のようだった。その向こうに待つのは自由ではなく、判決だった。

イエスは先頭を歩いていた。

その夜、ほとんど眠っていなかった。ほかの者が休むあいだ、ひとりで長く座り、エルサレムの方角を見ていた。繰り返し語ってきたあの時は、もはや近づきつつあるのではないと知っていた。すでにここにあった。自分は今、その時の中を歩いていた。

足取りは確かだったが、体は疲れていた。口は渇き、からっぽの腹は一歩ごとに鈍く痛んだ。前の日からわずかなものしか食べていなかった。初めは音もなくその内に潜んでいた飢えが、今はますます強く訴え、ひととき世界は、何かを食べたいという単純な願いにまで狭まった。

道端にいちじくの木が立っていた。

大きく枝を広げ、青々と葉を茂らせていた。灰色がかった石のあいだに、命の島のように見えた。枝は道の上へ垂れ、朝の光に照らされたその姿はいかにも強く、健やかで、惜しみなく与えてくれそうだった。

イエスは木に近づいた。

ペトロは仲間を振り返った。ヨハネが歩みを緩めた。トマスは数歩後ろで立ち止まり、イエスが葉をかき分けるのを見ていた。

実を探していた。

指が枝のあいだをたどった。ひと枝ずつ押し分け、葉を持ち上げ、裏まで確かめた。

何も見つからなかった。

あるのは葉だけだった。

うわべの約束だけだった。

豊かそうな姿ばかりで、飢えた人を養えるものはなかった。

それでも早なりのいちじくが一つぐらいはあるのではないか、そう願うかのように、イエスは梢の奥へ手を差し入れた。だが引き戻した手は空だった。

　何人かの弟子が顔を見合わせた。まだいちじくの季節ではないと知っていた。木はその性に背くことなど何ひとつしていなかった。葉を茂らせるべき時に茂らせ、実を結ぶべき季節を待っていた。

けれど飢えは季節の忍耐を知らない。

飢えには木のすべてが見えない。そこにない実だけが見える。

　イエスは木の下に立ち尽くした。眼差しに悲しみが浮かんだ。目の前に見えたのが、いちじくの木だけではなかったからだ。神殿と律法と祈りに輝きながら、人の魂を養えない都が見えた。清らかな衣をまとい、穢れた者から顔をそむける祭司たちが見えた。聖書の一語一語をそらんじながら、家の塀の向こうで泣くやもめの声を聞かない男たちが見えた。

実のない葉が見えた。

だがその悲しみの底で、ほんの一瞬、もっとささやかなものも動いた。

人間くさいものが。

疲れた人の苛立ち。飢えた体の不機嫌。世界はまたしても、こんなにも多くを約束する顔で目の前に立っていながら、自分には何ひとつくれなかった。

それに対する静かな憤り。

ほんの一瞬のことだった。

彼の中で飢えが憐れみより先に、疲れが知恵より先に口を開いた。束の間、彼には木がありのままに見えていなかった。命を約束しながら、自分がひと息つきたいと望んだまさにその時に、安らぎをもたらしてくれなかったすべてのものが、その木に見えた。

一枚の葉に触れた。

そして言った。

「今からのち、誰もおまえの実を食べることのないように」

大きな声ではなかった。道を震わせる激怒もなかった。そこには疲れがあり、裁きがあり、一瞬おのれの飢えのことしか見えなくなった意志の、ただ一条の鋭いきらめきがあった。
言葉の余韻が消えても、イエスはじっと立っていた。
枝の上の自分の手を見た。
言い放った言葉が口を離れて初めて、その重みが身にこたえたかのようだった。
やがて手を引いた。
弟子たちは黙っていた。なぜそんなことをしたのかと尋ねる者はいなかった。
一行はエルサレムへの道を進んだが、トマスだけはもう一度、木を振り返った。
何事もなかったかのように、緑の葉が風にそっと揺れていた。
翌日、一行は同じ道を引き返した。
いちじくの木に最初に気づいたのはペトロだった。あまりに急に立ち止まったので、ヤコブが危うくぶつかりかけた。
「ラビ」と彼は手を伸べた。「ご覧ください。あなたが呪われたいちじくの木が、枯れています」
皆が足を止めた。
昨日は青々と葉を茂らせていた木が、今は枯れていた。葉は灰色に縮れて垂れ、枝はしなやかさを失い、樹皮はところどころ幹から剥がれていた。徐々に衰えた木には見えなかった。根から小枝の先まで、一度に命が立ち去ったようだった。
弟子たちの身に不安が走った。
すでにいくつものしるしを見ていた。水がぶどう酒に変わったのを見た。病人が癒やされ、目の見えなかった人が見えるようになり、足の不自由な人が歩くのを見た。ラザロが墓から出てくるのを見た。
だがこの木は、別のかたちで彼らの胸を打った。
この奇跡は癒やしをもたらさなかった。
群衆の喜びもなかった。

わが子を抱きしめた者はいなかった。命を返してもらったことに感謝して、天を仰いだ者もいなかった。

起きたことのすべてが厳しく、静かで、取り返しがつかなかった。

イエスは一同に向き直った。

「神を信じなさい」と言った。「まことに、おまえたちに言う。この山に『立ち上がり、海に身を投じよ』と言い、その心に疑いを抱かず、言ったことが実現すると信じるなら、その人にはそのとおりになる」

道を囲む斜面を仰いだ。

「それゆえ、おまえたちに言う。祈って求めるものはすべて、すでに受け取ったと信じなさい。そうすれば与えられる。だが立って祈るとき、誰かに恨みがあるなら赦しなさい。おまえたちの父も、おまえたちを赦してくださるように」

その言葉は深い水に沈む石のように、一同のあいだに落ちた。

すぐに答える者はいなかった。

一人ひとり、そこに違うものを聞いた。

ペトロは、強くあれとの呼びかけを。

ヨハネは、信頼の神秘を。

ユダは、力を手にする可能性を。

トマスは、ひとつの問いを。

しばらくためらってから、イエスに歩み寄った。

「主よ」と言葉を選ぶように言った。

イエスは彼を見た。

「尋ねなさい、トマス」

トマスは、いちじくの乾いた根に目を落とした。

「私たちはあなたが水をぶどう酒に変えるのを見ました。病人を癒やすのを見ました。死者をよみがえらせるのを見ました。すでに闇のうちに横たわり、その体に死の臭いさえしていたラザロが、墓から出てくるのを見ました」

そこで言葉を切った。

「そして今、あなたのひと言で木が枯れたのを見ました」

何人かの弟子が落ち着かずに身じろぎした。ペトロはトマスを黙らせたいかのように眉をひそめたが、イエスが手を上げた。
「話させておきなさい」と言った。「問う者は、まだ眠ってはいない」
トマスは息を吸った。
「それならなぜ、この木にいちじくを実らせなかったのですか。あなたが飢え、木に実がなかったのなら、なぜ実を与えてやらなかったのですか。実を呼び出すより、その命を奪うほうがたやすかったのはなぜです」
沈黙が濃くなった。
トマスは今度はもう少し大胆に続けた。
「信じる者が山に向かって、立ち上がって海に身を投じよと言えるのでしたら、なぜ木に、いちじくを実らせよ、と言えないのですか」
イエスは優しさをたたえた真剣な目で彼を見ていた。
「トマス」と言った。「子どもはパンを見ると、パンは焼く人の手から始まると思う。けれども知恵ある人は、その始まりがもっとずっと前にあると知っている。土に落ちた麦の種の中に。ちょうどよい時に降った雨の中に。照りつけすぎなかった太陽の中に。種をまいた人の手に。粉をひいた石臼に。かまどの火に」
いちじくの木を指した。
「おまえの目の前にあるものの背後には、どれも、隠れたものが長く連なっている。いちじくの実とて、ただの実ではない。今日、枝から垂れているには、昨日はそこにもっと小さなものとしてあったはずだ。ひと月前は、木の体に隠れ、目にもほとんど見えなかったはずだ。それより前には、樹液を受け、光を浴び、時を与えられた実の兆しがあったはずだ。さらにその前には、実を結ぶ力を宿した木があったはずだ」
トマスは身じろぎもせず聞いていた。
イエスは枯れた葉を一枚手に取った。触れた拍子に、葉は指のあいだで崩れた。
「おまえたちの見ている現実は、世界の上に張った一枚の皮ではない。幾重にもなっている。かまどのそばで女がむいている玉ねぎのように。一枚の層が次の層を支えている。今日、目に見えるものは昨日あったものに支えられている。昨日あったものは、もっと前にあったものに支えられている」

一同を見渡した。

「弱い心は、いちばん外の層だけを見て、それが世界のすべてだと思う。強い心はもっと奥まで見通す。そして信仰に満ちた心は、物事がまだすっかり定まってはいないところに触れることができる」

ヨハネが顔を上げた。

イエスは続けた。

「根が近くにあるため、変えることのできるものがある。病む体はなお命を求めている。水には造られたものの従順さが宿っている。人の心は一瞬で向きを変えることができる。死でさえ、おまえたちが思うほどの壁ではない。眠る者の名を父がお呼びになるときには」

死という言葉に、一同の心にラザロの墓が浮かんだ。入り口から転がされた石。腐敗の臭い。布で巻かれたまま、イエスの声に応じて外に出てきた男。

「だが、いちじくの季節でもないのに木に実を生じさせることは」とイエスはゆっくり言った。「ただ枝に、実を結べと命じることではない。幾重もの層を一度に書き換えることになる。昨日にはなかった成長が、そこになければならない。起こらなかったはずの成熟が、起こっていなければならない。もう何日も実に向かって流れ続けた樹液がなければならない。そこを通り過ぎなかった時が、そこになければならない」

トマスは眉根を寄せた。

「けれども神には、何でもおできになります」

「神には何でもおできになる」とイエスはうなずいた。「だが神は、市場で子どもの目を欺く手品師ではない。父が世界を造られたのは、私たちのせっかちさに合わせて、古い衣のように世界をしょっちゅう引き裂き、縫い直すためではない。父は秩序をお造りになった。その秩序もまた御心なのだ」

それでもトマスは枯れ木を見つめていた。

「それなら、いちじくがなかったわけはわかります」と言った。「ですが、なぜあなたがこれを呪われたのかはわかりません」

ペトロがさっと向き直った。

「トマス、おまえ……」

「よい」とイエスは穏やかに遮った。

トマスを見た。

「それは、問うべきことだ」

道には深い静けさが満ち、足もとの枯れ葉がこすれ合う音が聞こえた。

トマスはもう一歩近づいた。

「木が何を意味するかではありません」と彼は言った。「都や神殿が何を意味するかでもありません。あの瞬間に、なぜあなたがそうなさったのですか」

イエスはいちじくの木を見た。

長いあいだ答えなかった。

語り出したとき、その声は先ほどよりも低かった。

「私が飢えていたからだ」

弟子たちは身じろぎもしなかった。

「私は疲れていた」と続けた。「前の晩は長く、やがて来る日々は重い。葉を見たとき、実がほしいと思った。そして見つからなかったとき、飢えのために、一瞬、世界が私の欲するただひとつのものにまで狭まった」

ペトロは目を落とした。

イエスは乾いた幹に触れた。

「この木の中に、私は神殿を、都を、人を見た。外からは命にあふれて見えながら、飢えた者に何ひとつ与えないものを。私の見たものは偽りではなかった。だが、真実の言葉も清らかならぬところから発せられることがある。正しい言葉でさえ、それを語るのが飢えであり、怒りであり、おごりであるなら、残酷になりうる」

トマスは、自分の耳が信じられないかのようにイエスを見つめた。

「では、あの木に腹を立てられたのですか」

「ほんのひととき」とイエスは言った。「何かを壊したくて怒る人のようにではない。贈り物を受け取ろうと手を伸ばして、そこに何も見つけられなかった人が腹を立てるように。木に罪はなかった。実を結ぶ季節ではなかった。だがあの時の私には、木の時のめぐりの全体が見えていなかった。自分の飢えだけが見えた」

ヨハネが尋ねた。

「それであなたの言葉が、木を死なせたのですか」

イエスはうなずいた。

「人の意識が強く、ひとつにまとまっているほど、その言葉は重みを持つ。おまえたちは機嫌を損じていろいろなことを言っても、風がその言葉を運び去る。だが存在の根の近くに立つ者は、内心に生じた束の間の揺らぎだけでも跡を残すことがある」

一人ひとりを順に見た。

「だから大きな力は、ただの賜物ではない。重荷でもある。ひと言で人を癒やせる者は、疲れたときに口をつくひと言にも心を配らねばならない。山を動かせる者は、自分の願いが父から出たものか、今自分を通り過ぎようとしている痛みだけから出たものか、よく見守っていなければならない」

トマスはふたたびいちじくの木を指した。

「それでもまだわかりません。あなたの言葉は木を滅ぼせたのに、なぜ木に実を結ばせることはできなかったのですか」

イエスは地面から枯れ枝のかけらを拾った。

「崩れることと、生み出すこととでは、要るものが違うからだ」

指のあいだで小枝を折った。

「死はすでに、ひとつの可能性としてこの木の中にあった。どの葉にも、どの根にも、どの体にもある。生まれてくるものはすべて、滅びる可能性をも身に帯びている。私の言葉は、この木にすでにありえたことへの道を開いた」

それから空の手のひらを差し伸べた。

「だがあの時、いちじくの実は木の中に用意されてはいなかった。それが生まれるには、木も樹液も太陽も土も時も、ひとつにならねばならない。私はこの世のすべてに向かって、私の飢えに合わせてその身をたわめよと、求めなければならなかっただろう」

その眼差しが厳しくなった。弟子たちではなく、自分自身に対して。

「あの時の飢えは私ひとりのものだった。子どもの命を願っていたのでも、苦しむ人の癒やしを祈っていたのでもない。私は自分の腹を満たしたかった」
ユダが口を開いた。
「飢えた人が食べたいと望むことの、どこが悪いのです」
　「どこも」とイエスは答えた。「飢えるのは罪ではない。パンを求めるのも罪ではない。だが力を持つ者が、しばしの乏しさに耐えたくないというだけで、世界にその秩序を取り消すよう求めるとき、力は危ういものになる」
言葉を切った。
「呪いには、ひびひと筋あれば足りる。祝福には、調和がいる」
誰も動かなかった。
言葉は簡素で、重く、一同のあいだにとどまった。
　「力は時として、傷ついた意志にも従う」とイエスは続けた。「ものを折り、崩壊を早め、恐怖や死への扉を開くこともある。だが命は、そのような意志にすっかり身を開くことはない。命が生まれるのは、一人の意志が全体の意志と出会うところだ」
トマスは考え込んだ。
「では、父の御心にかなっていれば、いちじくの実を生み出すこともできたのですか」
イエスは彼を見た。
　「そのいちじくが、命を与える道の一部だったなら、無から造られるのではない。おまえたちにはその道が見えなくとも、存在するすべてがその実へ向かっていたはずだ。だが私が自分の腹の虫を一瞬黙らせるためだけに実を造ったとすれば、それは父のうちにある奇跡ではない。世界を自分の気まぐれに従わせたことになる」
遠くに連なる荒涼とした丘を見た。
「荒れ野にいたとき、誘惑する者は私に、石をパンに変えよと言った」
その話を聞いたことのある弟子もいれば、初めて聞く者もいた。今は皆が耳を澄ませていた。

「あの時は昨日よりもっと飢えていた」とイエスは続けた。「体じゅうが食べ物を求めて叫んでいた。目の前の石はひと塊のパンに似ていて、声が私に言った。力があるなら使ってみろ。何者なのか証しを立ててみろ。腹を満たせ、と」
「けれども、あなたは断られた」とヨハネは言った。
「断った。力は、それを帯びる者の飢えに仕えるためのものではないからだ。人はパンだけで生きるのではない。父から賜物を受けた者は、それをおのれの欲のしもべに変えてはならない」
いちじくの木に目をやった。
「昨日、私は木を食べ物に変えはしなかった。だが私を食べさせてくれなかったというだけで、一瞬、その木を裁いた。どちらの誘惑も根はひとつだった」
ペトロは首を振った。
「けれども主よ、あなたには罪がありません」
イエスはじっと彼を見た。
「ペトロ、罪がないとはどういうことだと思う。飢えを感じないことか。怒りを感じないことか。誘惑が何かを知らないことか」
ペトロは答えなかった。
「石は誘惑されない」とイエスは言った。「だからといって聖なるものではない。清らかであるとは、暗い衝動が決して胸をよぎらないということではない。それを余すところなく見つめ、光と呼んでごまかさず、それが自分の主人となることを許さないということだ」
自分の手のひらに目を落とした。
「昨日、私にそれが見えたのは、言葉が出てしまったあとだった」
トマスが言った。
「では、自分自身を余すところなく意識している人でも、一瞬、過ちを犯すことがあるのですか」
「肉体を帯びるかぎり、その声をも帯びる」とイエスは答えた。「飢えも痛みも恐れも疲れも、家に風が吹き込むように意識に入ってくる。目覚め

た人にはそれがわかる。だが戸が開いていて、夜が長かったなら、強い風が灯火を倒すこともある」
「そのあとは？」とヨハネが尋ねた。
「それを起こす。何が起きたかを見つめる。神の名で闇を覆い隠しはしない」
イエスはふたたびトマスに向いた。
「おまえは、なぜ木を救うなり、実を与えるなりしなかったのかと尋ねた。あの時の私は、生み出すことを望まなかったからだ。受け取りたかった。そして受け取れなかったとき、私の言葉は裁きになった」
トマスは目を伏せた。
「では、生み出すより壊すほうがたやすいのですか」
「そうだ」とイエスは言った。「人の手にとってばかりでなく、その意志にとってもそうだ。家を壊すには一撃で足りる。建てるには石が要り、寸法を測り、辛抱し、多くの手が調子を合わせねばならない。人を傷つけるには、怒りに任せたひと言で足りる。その魂を癒やすには、生涯愛しても足りないときがある」
乾いた樹皮に手のひらを滑らせた。
「内なるものが分裂していても、壊すことはできる。だが生み出すことは、ひとつであるところからしかできない」
トマスはしばらく黙ってから言った。
「ですが、カナで水をぶどう酒に変えられたときにも、物の秩序をお変えになりました」
「カナで私は、何もないところから喜びを作りはしなかった」とイエスは答えた。「そこには水があった。清めに使う水がめがあった。婚礼があった。ぶどう酒を切らしかけている一家の恥があった。私の母の信頼があった。続くはずの祝いの宴があり、時がひらけた」
マリアを思い出し、イエスはかすかにほほえんだ。
「そこに生じたぶどう酒は世界を否定するものではなかった。父が空の器を満たすことがおできになる、そのしるしだった。私のためのものではなかった。ほかの人たちへの贈り物だった」

「ラザロのときは？」とトマスが尋ねた。

「ラザロを呼んだとき、私は無の中から見知らぬ人を呼んだのではない。父が名をもって知っておられる兄弟を呼んだのだ。その体は墓に横たわっていたが、父のうちで彼の物語はまだ終わっていなかった。彼の姉妹の愛とその痛み、私の彼への愛、そして父の御心がひとときに出会った。信仰は、まだ『出て来なさい』と言うことのできた層に触れたのだ」

トマスはもう一度、いちじくの木を見た。

「ここでは、あなたの飢えのほかには何も出会わなかったのですね」

「都についての真実も、そこでは出会っていた」とイエスは言った。「だから木はしるしになった。だが私の苛立ちが、そのしるしに、本来ならなくてもよかった苛酷さを与えた」

「では、しるしはほかのかたちでも現れえたのですか」とヨハネが尋ねた。

イエスはしばらく考えた。

「そうだ」

「どのように？」

「おまえたちに葉を示し、こう言うこともできた。見なさい、命を約束しながら実を結ばない神殿に何とよく似ていることか、と。飢えたまま木を離れ、木には自らの時に実を熟させてやることもできた」

幹に手を置いた。

「真実は木の死を必要としてはいなかった。そこに死を添えたのは、私のあの一瞬だった」

この言葉は奇跡そのもの以上に彼らの心を騒がせた。

彼らはいつも、答える人としてのイエスを見てきた。今、目の前に立っているのは、自ら己の行いを調べ、そこに見いだしたものから顔を背けなかった人だった。

ペトロが口を開いた。

「なぜそんなことを私たちにおっしゃるのです。あの木はしるしだったとだけ言うこともおできになったのに。私たちは誰も疑わなかったでしょう」

イエスは彼を見た。

「だからこそだ」

ペトロにはわからなかった。

「力を持つ者は、いついかなるときも、自らの意志を神の御心と呼びたい誘惑にさらされる。何かがうまくいけば『父がそれを望まれた』と言う。何かを壊せば『それは裁きだった』と言う。人を傷つければ『私は真実に仕えた』と言う」

イエスの声に力がこもった。

「けれども、力を持つ言葉のことごとくが、そのすべてを父に発するのではない。うまくいったことのすべてが、清さの証しになるのでもない。力を従わせた者が、皆、義にかなっていたのでもない」

ユダは注意深く彼を見つめていた。

「それなら、どうやって見分けるのですか」と尋ねた。

「その実によってだ」

イエスは縮れた小枝を一本、地面から拾った。

「しるしの大きさではない。ひれ伏した者の数ではない。大地が震えたか、天から火が降ったかでもない。その行いのあと、何が残ったかを問いなさい。命が増したのか、恐れが増したのか。真実が増したのか、それとも力を示した者への服従が増したのか。自由が増したのか、人にすがらねばならぬことが増したのか」

枯れた木を見た。

「このしるしは気づきをもたらした。だが木には死をもたらした。だからそこにあるのは光だけではない」

少ししてトマスが尋ねた。

「山のことはいかがですか。信じる者は山に、海に身を投じよと言うとおっしゃいました。ささいなことではありません。木にいちじくを一つ実らせるより、はるかに大きなことです」

イエスはかすかにほほえんだ。

「山とは、ただの石だと思うのか」

トマスは答えなかった。

「人の前に立ちはだかり、自分は永遠だという顔をしている恐れも山だ。弱い者を虐げ、『誰にも私は動かせない』と言う帝国も山だ。あまりに長く

持ち歩いたあげく、自分の体だと思い込んだ罪の重みも山だ。誰もがひれ伏さずにいられない死も山だ」
弟子たちは静まった。

「人がただ杖にすがるように信じるなら、その信仰は歩く助けになる。だが人が己のすべてを父にゆだねて信じるなら、その信仰は、神の御心がこの世に触れる場所となる。そのとき山は動く。人が神に命じるからではない。人が神の行く手をさえぎるのをやめるからだ」
トマスはしばらく黙っていた。
「では、誰もが同じ信仰を持っているのですか。誰もが山に動けと言えるのですか」
イエスは足を止めた。その眼差しに厳しさはなかった。深い目だった。トマスだけを見ているのではなく、彼を通して、人が己と出会うところまで見通しているかのようだった。

「誰もが同じ信仰を持つわけではない」と言った。「誰もが同じ世界を眺めていても、誰ひとり同じ目を持たないように。ある人には石だけが見え、ある人には道が見える。またある人には、石も道もその人自身をも支える父の手が見える」
トマスは耳を澄ませた。

「人の信仰は、口に出して言ったことだけから育つのではない」とイエスは続けた。「自らの内でどれほど深く目覚めたか、そこから育つ。多くの人は夢を見る者のように生きている。見て、聞いて、食べて、腹を立て、恐れ、欲するが、自分の中で誰が見ているのか、誰が聞いているのか、誰が恐れ、誰が欲しているのかを知らない」
弟子たちは黙っていた。今の言葉は、畑や魚やパンのたとえとは違った。目には見えないが、一人ひとりが内に抱いているものに触れた。

「最も大きな信仰を持つのは」とイエスはゆっくり言った。「自分が意識しているということを、余すところなく意識している人だ。ただ世界を見るだけでなく、見ているのは自分だと知っている人。ただ考えるだけでなく、思いは雲のように自分の前に来ては去ると知っている人。ただ恐れを覚えるだけでなく、恐れは自分の主人ではないと知っている人だ」
トマスは眉を寄せた。反発したのではない。理解しようと力を尽くしていた。

イエスは続けた。

「そういう人は、蜜にとまった蠅のように、世界の一枚一枚の層に貼りついてしまうことがない。もっと奥へ入っていく。体を見ながら、自分は体だけではないと知っている。思いを見ながら、自分は思いだけではないと知っている。痛みを見ながら、自分は痛みだけではないと知っている。そして自分が何者かを取り違えなくなると、自分の中で移り変わるものに、なすすべもなく従うこともなくなる」

トマスが尋ねた。

「そのような意識は奇跡を行えるのですか」

イエスは彼を見た。

「人が自分だけで行うのではない。おまえが『私が奇跡を行う』と言えば、その時すでにおまえは父から離れている。離れていることは弱さなのだ。どれほど力のような顔をしていても」

胸に手を当てた。

「すっかり目覚めた人の意識は、もはや恐れと欲とおごりと疑いのあいだで引き裂かれてはいない。風が吹かないときの水面のように澄んでいる。そんな水面には空が映る。その人のうちに天がゆがみなく映るとき、その人を通して、おまえたちが奇跡と呼ぶものが起こりうる」

ペトロが言った。

「では、奇跡を行うのは人の力ではないのですか」

「そうだ」とイエスは言った。「奇跡が起きるのは、人が妨げであることをやめたところだ。その意識が、自分のために欲しいもので濁らず、父が望まれることに開かれているところだ」

いちじくの木に目をやった。

「昨日、私はその逆もおまえたちに見せた」

トマスは目を上げた。

「私の中に飢えが起こった。だがあの時、私はそれを見ているだけではなかった。一瞬、私は飢えそのものになった。人が自分の飢え、自分の恐れ、自分の怒りそのものになると、意識は狭くなる。足りないものしか見えなくなる」

「けれどもあなたは、それにお気づきになりました」とヨハネは言った。

「言葉を放ったあとで、ようやく」

イエスの答えは飾り気のないものだった。

「目覚めるとは、風がやむことではない。風が己の内に何をしているか、少しずつ早く気づくようになることだ。行う前に気づくこともある。その最中に気づくこともある。そして時には、あとに枯れ残った木を見て、ようやく気づくこともある」

トマスはゆっくりとうなずいた。

「だから、祈るときには人を赦すようにとおっしゃったのですか」

「そうだ。信じて願っても、胸が怒りで満ちていれば、その信仰は怒りに結びつく。正義を願いながら、本当は復讐を欲していることがある。真実を語りながら、本当は相手を辱めたいだけのことがある」

イエスは弟子たちを見渡した。

「だから、疑いを抱かないだけでは十分ではない。ユダでさえ確信することはできる。暴力を振るう者でさえためらわずに行動できる。人の心が憎しみにおいてひとつになっているなら、ひとつであること自体は善ではない」

ユダはその言葉に、わずかに身をこわばらせた。

「まことの信仰は、確信の強さだけではない」とイエスは続けた。「人が父とひとつであることだ。おまえたちの意志が父の御心に近づくほど、自分のためだけになるものは求めなくなる」

トマスが尋ねた。

「父の御心と自分の欲とを、どう見分ければよいのでしょう」

イエスはトマスの胸を指した。

「まず、自分は何を望んでいるのかを認めることだ。飾らずに。信心深い言葉を添えずに」

「そのあとは？」

「自分の願いによって、誰に命がもたらされるのかを問うのだ」

イエスは枯れ葉を持ち上げた。

「よい願いは、たとえつらくとも命を生む。悪い願いが生むのは、己の力を証したということだけだ。飢えた人を養い、病む人を癒やし、人を赦し、

人の重荷を担いたいと願うなら、その願いは父に似たものになる。だが人をあっと言わせたい、打ち負かしたい、わがものにしたい、与えられた道から逃れたいと願うなら、それは神に問いかけているのではない。神を試しているのだ」
トマスが言った。
「確信が持てないときは？」
「そのときは、待ちなさい」
イエスは枯れ木を見、それからその向こうの緑の丘を見た。
「時には、待つことのほうが行いよりも澄んだ信仰である。自分の意志が命に仕えるかどうかわからない者は、すぐにその意志に力をまとわせてはならない。まずはそれを父の御前に立たせなさい」
ペトロは干からびた枝を眺めていた。
「昨日あなたがお待ちになっていたら、木は生きていたでしょう」
「そうだ」とイエスは言った。
その声に、言い逃れの響きはなかった。
ペトロは何と言えばよいかわからなかった。
しばらくして、トマスがまた口を開いた。
「生き返らせてやることはおできになりますか」
皆がイエスのほうを向いた。
イエスは幹に手のひらを当て、目を閉じた。
そのまま長いあいだ立っていた。
弟子たちは待った。枝の中で樹液が動きだしはしないか、枯れ葉が開きはしないか、硬い樹皮を割って新しい緑の芽が顔を出しはしないかと。
何も起きなかった。
イエスは目を開けた。
「この木の命を父に願うことはできる」と言った。「だが償いまでも、自分の過ちを消せると人に示すために用いてはならない」
トマスは眉を寄せた。

「あなたの言葉で死んだのですから、もう一度生きてはいけない理由がありましょうか」

「生きるかもしれない」とイエスは答えた。「いつか根から新しい芽が出るかもしれない。だがあの一瞬が何をもたらしたかをおまえたちの目から隠すためだけに、今この木をよみがえらせるなら、私はまたも自分のために力を使うことになる」

ひび割れた樹皮を指でなぞった。

「どんな過ちでも、その結果を消せば償えるというわけではない。見えるところに残って、初めて真実になることもある」

トマスは彼を見た。

「では、この木があなたの過ちを背負うのですか」

「そして私がここで知ったことも」とイエスは言った。「もしかすると、いつかはおまえたちが知ることも」

言葉を切った。

「人は、かつての自分を思い出させる枯れ木など、一本残らず取り除いてしまいたくなる。けれども一本の木がそこに残れば、同じ言葉にさらされる多くの木を守れるかもしれない」

ペトロは深く息をついた。

「あなたがそのように話されるのを聞くのは、つらいことです」

「それは、おまえたちが従う相手に、おまえたちの弱さから遠い人であってほしいと願うからだ」とイエスは言った。「自分たちの感じていることを一度も感じたことのない者にしか、自分たちは救えないと思っている。だが誘惑の声を知らぬ者が、どうして誘惑のただ中をおまえたちの先に立って歩けるだろう」

「ならば、あなたに従うべきだと、私たちはどうしてわかるのですか」とユダが尋ねた。

イエスは穏やかな目で彼を見た。

「私が決してつまずかないから従う、というのはおよしなさい。たとえつまずいても真実に背を向けずにいる、その私に従いなさい」

ユダは目をそらした。

トマスはなおも木を見ていた。

「花を経ずにいちじくを欲する者は、そこへ至る道を経ずに贈り物を欲するのだ、とおっしゃいました」

「そうだ」

「では、いちじくを見つけられなかったからといって木を呪う者は？」

イエスはエルサレムの方角を見つめた。

「自分に欠けているもののために、世界に罰を負わせたいのだ」

トマスの息が震えた。

イエスは続けた。

「それは王たちのすることだ。支配者たちのすることだ。父がわが子に、主人がしもべにすることだ。権力に、敬意に、安心に飢えて、その飢えを満たさなかったと世界を罰する」

いちじくの木を指した。

「だからこの木を覚えておきなさい。実のない神殿を示すしるしとしてだけでなく、その言葉に力を宿す者がはらむ危うさのしるしとしても」

ヨハネが尋ねた。

「では、力など持たないほうがよいのですか」

「そうではない」とイエスは答えた。「力がなければ、倒れた者を起こすことも、子どもを守ることも、家を建てることもできない。力は悪ではない。力は人の内にあるものをあらわにする」

「火のように？」とヨハネが言った。

「火のように。愛する者の手にあれば暖める。恐れる者の手にあれば焼く」

トマスが言った。

「そして火が大きければ大きいほど、それを持つ手は清くなければならない」

イエスはうなずいた。

「持つ力が大きいほど、ほんのわずかな苛立ちでも、正義と呼んで済ませることは許されない」

しばらくは枯れ葉を渡る風の音しか聞こえなかった。

やがてイエスはまた歩きだした。

弟子たちもそのあとについたが、足取りは先ほどよりも遅かった。いちじくの木は後方の道端に残った。たった一つの意味にたやすく閉じ込めることのできないしるしとして。

それは儀式に満ちながら憐れみに欠ける神殿の姿だった。

外見は青々と茂りながら、飢えた人に何ひとつ与えない人間の姿だった。

言葉の持つ力の証しだった。

飢えの声が、存在するすべてとの調和をしのいでしまった一瞬の、結末でもあった。

ペトロは山を動かしうる信仰のことを考えていた。

だが初めて、動かせる山はことごとく動かしてよいものなのか、とも考えた。

ヨハネは天を映すことのできる意識の水面を思っていた。だが澄んだ水面にも石が落ち、束の間、その映像を砕くことがあるとわかった。

ユダは力のことを考えていた。その重さのことではない。ひとたび疑わぬ人の意志が働けば、世界はやはり従うかもしれない。その可能性のことを。

トマスは、生まれるに至る道がなかったために生まれえなかった、いちじくの実のことを考えた。

そしてそのあと、木に向かって言葉を放った者の歩む道が、ほんのしばらく調和を失ったために死んだ木のことも考えた。

イエスは皆の先に立ち、エルサレムへと歩いていた。

飢えはもう退いていたが、枯れたいちじくの木のことは心に携えていた。正しい人の物語にそぐわぬ過ちとして、脇へ押しやることはしなかった。ひそかな戒めとして携えていた。

都が近づくにつれて、地平に神殿の壁がくっきりと浮かんできた。

その壁もまた葉にあふれていた。

祈りと、供え物と、祭服と、香と、律法と、約束の葉に。

それでもその陰には飢えた人々がいた。

時のすべての層の上に、すでに十字架の影が広がりつつあった。

弟子たちの誰にも、間もなく自分たちが別の木を仰ぐことになるとは、まだわかっていなかった。天と地のあいだに立てられた、乾いた木を。彼ら

はそこに、御国の実を結んでくれると期待した人を見るだろう。だがその目に映るのは、血と痛みと死だけだろう。
約束はみな枯れてしまった、と思うだろう。
彼が自分のために力を使いはしないかと待つだろう。
釘に緩めと命じはしないか。
木に折れよと命じはしないか。
自分をあざ笑う者たちを滅ぼせと、天に命じはしないか。
そして彼は再び飢えるだろう。
渇くだろう。
疲れ果て、見捨てられるだろう。
だが今度は、痛みが世界のすべてをおのれの苦しみだけに狭めることを許しはしない。
存在するすべてに向かって、おのれの恐れに合わせてその身をたわめよとは求めない。
おのれの命を奪った者たちを呪いはしない。
それに代えて、彼らを赦すだろう。
そのとき初めて、トマスにはわかるだろう。師のまことの偉大さは、木を枯らすことができたというところにはなかった。
自ら木に掛けられ、世界をことごとく呪うこともできたときに、そうしなかったところにあったのだ。
そのとき初めて、彼らにはわかるだろう。現実の最も深い層を動かすのは、力の立てるとどろきではなく、痛みのただ中にあってもなお父とひとつであり続ける者の、静かな意志なのだと。
そのとき初めて、彼らにはわかるだろう。最大の奇跡は、人が飢えている日に枝に宿る実として現れるとはかぎらない。
呪う権利がある日に、赦しのひと言として現れることがある。
一本の木が死んだあと、ようやく現れることもある。
乾いた木から世界じゅうのための命が芽吹くとき、ようやく現れることもある。

第11章　エラリオン　マレイア・リオレン

マレイア・リオレンは、声を立てずに怯えることを覚えた。

弱かったからではない。弱い者はしばしば声をあげて怯える。誰かが救ってくれるかもしれないからだ。マレイアが声を立てなかったのは、自分の尊厳は自分ひとりで救わなければならないと、長いこと信じていたからだった。初めのうち、アリエンは一度も彼女を殴ったことがなかった。

初めのうち、彼はよく気のつく人だった。

気遣いは危うい。愛に見せかけて、どこまで踏み込めるか探っていることがある。

彼女の言ったことを覚えていた。疲れていると気づいてくれた。街のどこが嫌いで、仕事中に何を飲み、誰を空疎な人間だと思い、誰に心を許しているかも知っていた。初めは、自分を見てくれていると感じた。やがて、見張られていると感じた。その違いは、嵐の前に光が変わるように、ゆっくりと訪れた。

「君が心配なだけだよ」誰といたのか尋ねるとき、彼はそう言った。

「君が利用されるのは嫌なだけだ」彼女の友人たちを疑っては、そう言った。

「人がどう考えるか、僕にはわかるってだけさ」彼女自身の判断は甘いのだと言い聞かせるとき、そう言った。

マレイアはアウレリア人で、名門の頂点にこそいなかったが、古い血筋の出だった。リオレン家は政治家よりも、治療師や記録の守り手、教師を多く出したことで知られていた。幼い頃から、心が繊細であることと勇気があることは矛盾しないと教えられた。アリエンがその繊細さに見いだしたのは天賦の才ではなく、押せばへこむ場所だった。それに気づくまでに、長い時がかかった。

アリエンと知り合う何年も前、マレイアは、匿名化した医療データを遺伝性疾患の研究者に開放する仕事に携わっていた。データを共有すれば、治療を待つ時間を縮められると信じていた。ところが、ある地域の保険機関が、

一見匿名のデータを住所と突き合わせ、いくつかの家族を特定した。病気であると確かめられもしないうちに、その家族の保険料は引き上げられた。

マレイアは元の条件を取り戻せるよう家族を助け、事業の監査に際しては証言台に立った。研究そのものを退けはしなかった。ただ、それからは申請を読むたび、結果を誰が利用できるのか、いつまで手元に置けるのか、誰がデータを閲覧したかを確かめられるのは誰かというところまで目を通した。のちに透明性をめぐってどんな議論に臨むときにも、その慎重さは彼女とともにあった。

あの出来事があったのは、ニトラの金融街を見下ろす彼の部屋だった。

外では雨が降っていた。はるか下では、ガラスのように濡れた路面に自律走行モジュールの明かりが砕けていた。医療記録をめぐる会合が長引いて、マレイアは遅くなった。アリエンは窓辺に立っていた。振り向きもしなかった。

「あいつといたのか？」

名前を口にするまでもなかった。

イェサイル・ダヴィオンは、マレイア自身が、彼が自分の人生に触れたと知るより先に、すでに二人のあいだにいた。初め、彼はひとつの静けさとして彼女の人生に入ってきた。そのそばにいると、自分の心のざわめきが前よりはっきり聞こえた。

「会合に出ていたの」と彼女は言った。

「聞いているのはそんなことじゃない」

「それなら、聞き方を考えて」

アリエンが振り向いた。

その顔にあったのは、ふつうに言う怒りではなかった。侮辱を受けた者の顔だった。マレイアが自分で決めることは彼女の権利ではなく、本来彼のものであるはずの仕組みに生じた不具合だとでもいうように。

「ダヴィオンみたいな人間が何をするかわかるか」と彼は尋ねた。「部屋に入ってくる。するとみんな、古の預言でも聞いたような顔をする」

「イェサイルのせいじゃないわ」

「イェサイル」とアリエンは繰り返した。

優しい声でその名を言った。それだけによけいに嫌な響きがした。
「あなた、あの人が怖いのね」とマレイアは言った。
一瞬、二人のあいだは物音ひとつしなくなった。
それから彼は歩み寄った。すばやく。すばやすぎた。彼女の手首をつかんだ。
「僕は誰も恐れていない」
指に力がこもった。
骨を折るほどではなかった。折ろうと思えば折れると知らせるには十分だった。
マレイアは彼の目を見た。
「放して」
「先に本当のことを言え」
「本当のことを言うわ。今、私はあなたが怖い」
彼の手がほんのわずか緩んだ。
その言葉は彼の目を覚ましはしなかった。彼の誇りを傷つけた。
「すると今度は僕が暴力を振るう男だっていうのか」
「あなたは今、嫌がる私をつかまえている男よ」
そのとき、彼は彼女を打った。
マレイアは立ったままだった。部屋では何ひとつ壊れず、ひと目見ただけでは誰にも何が起きたかわからなかったろう。頬には開いた手のひらの熱が残り、一瞬、息が止まった。
アリエンはたちまち青ざめた。
「マレイア――」
彼女は片手を上げた。
力ずくで彼を止めるためではない。今にも彼が語り出そうとする物語を止めるために。
そんなつもりではなかった。
君が挑発したんだ。
君に怯えさせられたんだ。

愛なんだ、ただ強すぎただけなんだ。

「いいえ」と彼女は言った。

その部屋で、いちばん静かなひと言だった。

そしていちばん強いひと言だった。

その夜のうちに彼女は出ていった。

すべてを持ってはいかなかった。ひとつの鞄と、ようやく自分の恐れを詫びるのをやめたひとつの魂で運べるものだけを。

　そのあとの数週間は奇妙に空っぽだった。アリエンは便りをよこし、次には黙りこみ、その次には共通の知人を通じて伝言をよこした。一度、彼女の勤め先の前に姿を現した。マレイアは申し立てをしなかった。同情からではない。自分が自由になって初めて世に語る物語の主人公を、彼にしたくなかったのだ。

やがてニトラで討論会が開かれた。

そして、イェサイルがいた。

救い主としてではない。ひとりの男から去るためには別の男に救われなければならないという考えが、マレイアは嫌いだった。去ったのは自分の力でだ。イェサイルは違う存在だった。

彼のそばにいても、自分を小さくしなくていい。そんな世界があることの証人だった。

ベーシックインカムをめぐる討論が終わると、二人は会場を出て連邦評議会の中庭に出た。宵のニトラがざわめいていた。頭上を交通モジュールが通り過ぎた。石の水路を流れる水音が聞こえるほど静かだった。

「今日の発言の中に、あの人たちが決してお許しにならないひと言がありましたね」とマレイアは言った。

「どのひと言でしょう」

「個人のプライバシーは守らなければならない。権力が見えずにいることまで守る必要はない、と」

イェサイルは手すりに寄りかかった。

「間違っていたと思われますか」

「いいえ。ただ、あの言葉を使って、医療記録まで開かせようとする人が出るのが心配です」
「そんなことは言っていません」
「わかっています。明日、委員会にそうご説明ください。私のところにはもう三件も申請が来ています」
イェサイルは端末の通知に目をやった。彼のもとにも届いていた。
「朝ですか」
「八時に。どうぞ、気長にお付き合いを」
マレイアは手首の上で袖を直した。「人の暮らしをどこまでのぞき込んでも、心配しているだけだと言う人を、私は知っています」
　イェサイルは何も尋ねなかった。彼のそういうところに、彼女はすぐ気づいた。たいていの人は何があったのかと尋ねただろう。気にかけてくれる人もいれば、好奇心からの人も、自分なりの評価を下したいだけの人もいる。イェサイルの沈黙は、彼女の物語を彼女の手に預けたままにしてくれた。
「アリエン・コルヴェトです」と、ついに彼女は言った。
イェサイルはうなずいた。
「今日、会場で見かけました」
「あなたを見ていました」
「ええ」
「論敵を見る目ではありませんでした」
「わかっています」
マレイアは彼を見た。
「気になりませんか」
「なります。ただ、気がかりに自分の振る舞いを支配させたくはないんです」
その言葉は彼女の中に残った。
　そのあと二人は、連れ立ってニトラの旧市街を歩いた。そう約束したわけではなかった。ただ、どちらも角を曲がらなかった。記録の話をし、アウ

リオラの子供たちの話をし、世界を今より残酷にせずに変えることはできるだろうかと語り合った。
別れ際、ささやかなことが起きた。
マレイアは手を差し出そうとして、寸前で彼の手首の内側に三本の指で触れた。意識してしたことではなかった。思いよりも先に体が動いたのだ。
二人はひととき黙った。
「ごめんなさい」と彼女は言った。
「何を謝るのです」
「わかりません」
イェサイルは彼女が触れたところを見た。
「不思議だ」と小声で言った。
「何がです？」
しばらく言葉を探しているようだった。
「何かを思い出しかけた気がしたんです。でも、何だったのか」
マレイアは答えなかった。
彼女もそう感じていた。
淡く、輪郭のない感覚だった。足を踏み入れたことのない部屋で聞く、こだまのようだった。
別れたあと、彼女はニトラの明るい通りをひとりで歩いて帰った。ひとりでいることが罰に思えないのは、ずいぶん久しぶりだった。
その夜遅く、アリエンから短い便りがひとつだけ届いた。
個人的な決断は、けっして個人的なままでは終わらない。
マレイアは長いあいだそれを見つめていた。
そして、消さなかった。
どうしてなのかはわからなかった。
ある種の脅しは、初めのうち、まだ立証のしようもないひと言を装っている。あるいはそのせいだったのかもしれない。

第12章　地球　山上のイエス

イエスはペトロとヨハネとヤコブを連れ、祈るために山に登った。石の多い小道を歩く頃には、すでに日は傾き、斜面に影が長く延びていた。弟子たちは黙ってついていった。なぜこの山に連れてこられたのかわからず、冷たい風のような畏れが彼らの肌に触れていた。

地をはるかに見渡す、人影のない所に着くと、イエスは数歩離れて天を仰いだ。声は聞こえなかったが、唇が動いていた。目には見えぬ誰かに語りかけているようであった。ペトロとヨハネとヤコブはその背後に立っていたが、道の疲れと夜の静けさに抗しきれず、地に腰を下ろした。まぶたが重くなった。

イエスがなお祈り続けていると、彼らの前で人知を超えたことが起こった。御顔のありさまが変わり、衣が、この地上のいかなる織り手も知らぬほど白く輝いた。それは亜麻布の白でも、羊毛の衣の白でもなかった。内から湧き出すかに見える光であった。御顔の奥で太陽が開けたかのように輝いていたが、その光が、目を覚ました者たちの目を焼くことはなかった。

ペトロは夢に声を聞いた者のように、はっと目覚めた。ヨハネは目を開けて息をのんだ。ヤコブは両の手のひらを地について、前を見つめた。イエスの傍らに二人の男が立っていたからである。村から旅してきた巡礼とも、神殿の庭にいる長老とも違った。二人は栄光に包まれ、いくつもの時代の初めと終わりを知っているかのような、おごそかな面持ちであった。

彼らはイエスと語り合っていた。その声は静かで、弟子たちには、その言葉がわかるようでいて、同時にわからないようでもあった。エルサレムで成就するはずの道行きについて、流される血について、人々の恐れと祭司たちの権力について、そして人の子が、光を解さぬ者たちの手に身を委ねる時について語っていた。

ペトロは身を震わせて二人を見つめ、心のうちで喜びと恐れが入り交じった。やがて二人が立ち去ろうとしているように見えたので、イエスに言った。

「先生、私どもがここにいるのは、なんとよいことでしょう。仮小屋を三つ建てましょう。一つはあなたのため、一つはモーセのため、一つはエリヤのために」

だが、自分が何を言っているのかわかってはいなかった。心の備えのないまま何かを目にすると、人の舌は分別に先んじて走るものだからである。

　すると、彼らの上に雲が生じた。谷の霧のように下から上ってきたのでも、海からの風に吹き寄せられたのでもなかった。雲は静かに、明るく、上から降りて彼らを包んだ。弟子たちはその陰に入り、大いに恐れた。雲には光があり、その光には、前に立てば人の心がおのずから小さくなる何者かがおられた。

そして雲から声がした。

「これはわたしの選んだ子。この者に聞け」

　声がやむと雲は分かれた。光は深みへ戻る水のように退き、彼らの前にはイエスだけが立っていた。衣は再び人の衣となり、御顔には肉体の疲れが見えたが、その目にはなお、弟子たちの知らぬ遠い場所の光が映っていた。

　長いこと、誰も口をきかなかった。山を下る足の下で、闇の中、小石がきしんだ。ペトロは何度も振り返った。山頂にもう一度あの二人が見えはしないかと待ち望むように。だが、見えたのはただ満天の星であった。

とうとう意を決してイエスに近づいた。

「主よ」と静かに言った。「あなたと話しておられたあの二人は……エリヤとモーセだったのですか」

イエスは彼を見た。すぐには答えなかった。ペトロが担える以上の重みを負わせぬよう、ひと言ひと言を量るかのように、なお数歩歩いた。

「話はもう少し複雑なのだよ、シモン」とついに言った。

ペトロは眉を寄せた。

「複雑とは、主よ、どういうことでしょう。私どもはこの目であの方々を見ました。あの方々だとわかったのです」

イエスは歩みを止めた。頭上には星が輝き、夜は澄んでいた。天を手で示した。

「子供がともしびを見れば、その光は器の土に宿っていると思う。大人が星を見れば、天の丸屋根に打たれた点にすぎぬと思う。だが父は、人が名づけうるよりも多くのものをお造りになった」

ペトロは目を上げた。

「御使いたちのことでしょうか」
「おまえたちが御使いと呼ぶであろう者たちのことでもある」とイエスは言った。「だが、上から来るものすべてに翼があるわけではない」
ペトロにはわからなかった。ヨハネとヤコブも近くに寄った。イエスがかつて一度も明かしたことのない話をしておられると感じたからである。
イエスは言葉を継いだ。

「あの光が見えるか。おまえたちは、日や年をしるすためだけに、あれが置かれたと思っている。だがあの光の多くには、父が空しいままにしておかれなかった世界がある。そこでは別の太陽の下を川が流れ、草木が別の光に向かって葉を広げ、人に似た者たちが、おまえたちと同じように真理を求めている」
ペトロは青ざめた。
「人なのですか」と尋ねた。

「人だ」とイエスは答えた。「誰もがおまえたちと同じ姿をしているわけではないが。知ることにおいて、おまえたちより長い時を経た者もいる。おまえたちの祖先が初めて町を築くより前に、自然の奥義を知った者もいる。おまえたちには癒やすすべがないと思える傷を癒やせる。遠く離れていても言葉を使わず話ができる。おまえたちには越えがたく見える空間を渡れる。そういう人がおまえたちのあいだでわざを行うと、おまえたちはそれを奇跡と呼ぶ」
ヤコブは身震いした。
「ならば奇跡は奇跡ではないのですか」
イエスは彼に向き直り、穏やかにほほえんだ。

「幼子にとっては、一粒の種から木が生えるのも奇跡だ。賢い者には、命の理である。だが、それで父の栄光がいささかなりとも損なわれようか。いや。人の知りえた理も、なお神の理である。人が解き明かした奥義も、なお、人が解き明かすことを許された奥義なのだ」
ペトロは黙っていた。ほかの世界の話は、山上の雲よりも彼を恐れさせた。
「では、あのお二人は」と再び尋ねた。「私どもが思ったような意味でのモーセとエリヤでなかったのなら、いったい誰だったのでしょう」

イエスは谷の方をじっと見た。遠くで村々の焚き火がまたたいていた。

「おまえたちにわかる姿だったのだ」と言った。「同時に、それ以上のものでもあった。おまえたちの心が知っている名で来たのは、覆いもなしに来ていたら、おまえたちは地にひれ伏して、何ひとつわからなかっただろうからだ」

「真実をお話しください」とペトロは迫った。

イエスは優しく、しかし揺るがぬまなざしで彼を見た。

「シモン、今日わたしが真実を残らず話したところで、おまえにはわからない。おまえはそれを偶像にするか、恐れにするだろう。どちらも信仰ではない」

ペトロはうなだれた。

イエスは再び歩き出し、彼らはそのあとに従った。

しばらくして、イエスは言った。

「世界と世界のあいだには、人類を見守る者たちがいる。おまえたちの自由を奪うためではない。炎が燃え方を覚える前に息絶えぬようにするためだ。彼らはおまえたちの歩みを見守り、まだ越えてはならぬ境を守り、歴史が誤った方へ折れ曲がろうとするとき、ときにはそれに手を触れる」

ヨハネが尋ねた。

「主よ、あなたはその方々をご存じなのですか」

イエスは答えた。

「わたしは彼らを知っている。彼らもわたしを知っている」

その言葉には、弟子たちには名づけようのない何かがあった。預言者たちについて語る師の言葉というより、人の道が及ぶよりも遠いところから来た者の思い出のように響いた。

ペトロはまた天を仰いだ。星々はもう、天の丸屋根に打ちつけられた小さな明かりとは見えなかった。扉のように思えた。その一つ一つの向こうには、こちらを見返す世界があるのかもしれなかった。

「なぜ私どもにお見せになったのですか」と彼は尋ねた。

イエスは小道の端に立ち止まった。夜は静かだった。

「おまえたちがわたしの弱さを見る時が来るからだ」と言った。「縛られたわたしを見る。打たれ、見捨てられたわたしを見る。人々が、おのれの解さぬものをあざ笑うのを見る。そのとき、この山を思い出しなさい。光は肉体に隠れることがあっても、肉体がその光を滅ぼすことはない。そう思い出しなさい」
誰も答えなかった。

さらに下ると、夜が明けはじめた。初めの光が石に触れ、辺りは彼らの知る姿に戻った。だがペトロのうちには、もはや、すっかりもとどおりのものは何ひとつなかった。ヨハネとヤコブに並んで歩きながら、思いはなおあの高みに、雲の中に、星々の下に、モーセとエリヤでありながら、それ以上の何ものかでもあった二人の前にあった。
イエスはこのことを誰にも話さぬよう、彼らにお命じになった。

すべての真理を一度に人に授けることはできないからである。ある真理は、人の内にそれを受ける器が広がるまで、待たなければならない。

第13章　エラリオン　アリエン・コルヴェト

アリエン・コルヴェトは生まれながらの悪人ではなかった。

そんな説明ではたやすすぎる。そしてたやすい説明は、入り組んだ真実に責任を負いたくない者に歴史が垂れる慈悲である。
最初は、ただひとりの息子として生まれた。

そして世の中の誰よりも、母を愛した。

記憶をたぐって初めてたどり着く安らぎの場所が、母だった。

　子供の頃、転んで膝をすりむくと、数メートル先の壁に医療モジュールが掛かっていても、そこへは走らなかった。母のところへ走った。学校で初めて悪い成績をもらったときは、二時間も父に隠し、それから母に見せた。近所の少年とけんかしたときには、自分こそ正しいという怒りでいっぱいになって帰ってきた。母は、話に自分で付け加えたものが次第にそぎ落ちてゆくまで、好きなだけしゃべらせてくれた。
早々に間違いをただしたりしないという、不思議な力が母にはあった。

そばに腰を下ろした。

耳を傾けた。

そうして、自分の落ち度から身を守るための言葉を彼がすっかり吐き出したあと、ときにこう尋ねた。
「さあ、本当はどうだったのか、聞かせて」

アリエンはたいてい本当のことを話した。

　母の前では、しくじっても、そのしくじりがすぐに彼自身の値打ちを裁く判決に変わることはなかった。怒っても悪い人間にはならなかった。泣いても、泣いたって何も解決しないと諭されることはなかった。
父は違った。

アリエンを愛していた。少年がそのことを本気で疑ったことはない。ただ、父の愛は規則の形をしていた。

父は厳密さを信じていた。不都合になったときにも効力を失わないからこそ、取り決めには意味があると信じていた。口にしたあとで事情に応じて緩められる言葉は、約束ではなく提案にすぎない、と。

父の仕事は法制度と通貨規制に関わるものだった。一方だけが条件を満たし、他方が満たさなければどうなるか。いつ請求権が生じ、いつ義務が消滅するか。「*期限内*」とは厳密には何を意味するのか。そんなことを一日じゅう判断していた。

その思考の癖を、家にも持ち帰った。

九歳のとき、アリエンは昔ながらの機械仕掛けのパズルに夢中になった。

ルービックキューブだった。

エラリオンには、世界を丸ごと出現させ、戦争や都市や異星のありようを再現できる遊びがあった。だがアリエンは何週間も、小さな色とりどりの立方体にかじりついていた。これほど単純なものの中に秩序が隠れているのが、彼をじりじりさせた。

父はそれに気づいた。

「誰の助けも借りずにそろえられたら」とある晩、父は言った。「サレナの動物園に連れていってやろう」

アリエンは顔を上げた。

動物園にはまだ一度も行ったことがなかった。母がその映像を見せてくれたことがあった。三つの大陸の動物、巨大な水槽、夜行性動物の館。それに、ドームの下、ほとんど人の手を入れず育つに任せてある古い森がひとつ。

「本当に？」

「そろえられたらな」

「全部？」

父はかすかに笑った。

「半分でいいなら、半分と言う」

それから数日、アリエンは指が痛くなるまで練習した。

初めは手の動きを暗記した。やがて、手順を覚えるだけでは足りないとわかった。なぜ一つ一つの小片がそこに移るのか、知る必要があった。一面

を正しく動かすとなぜ別の面の秩序が崩れ、あとで正しい位置に戻すためになぜ一度その秩序を犠牲にしなければならないかを。
立方体は彼を魅了した。
それは混沌など本当は存在しない、小さな世界だった。
ただ、人がまだ手順を知らないだけだった。
出かける二日前、初めてそろえられた。
それからもう一度そろえた。
出発の前の晩には、ほとんど考えることなく手順を繰り返せるようになっていた。
母が彼の髪をくしゃくしゃにした。
「じゃあ明日、動物に会えるのね」
アリエンは笑った。
「そろえられたらね」
母は一瞬、父の方を見た。
「もうそろえられるじゃない」
そのときアリエンには、なぜ母がそう言ったのかわからなかった。
翌日わかった。
二人は動物園の入口に立っていた。
　高い透明な塀越しに、木々の梢が見えた。その向こうから、映像でしか知らなかった動物の声がした。人々が子供と手をつないで門を通っていき、アリエンはもうじっとしていられなかった。
父が立方体を渡した。
「さあ」
アリエンは笑った。
「今？」
「そろえたら、という約束だった」
「昨日そろえたじゃない」
「動物園に来ているのは今日だ」

母が父を見た。

「本当に今、させなくちゃいけないの？」

「できるのなら、問題はない」

アリエンは立方体を受け取った。

初めは何もかもたやすかった。一段目。二段目。角。辺。

そのとき、父に見られているのを意識した。

後ろを子供を二人連れた家族が通った。門が開き、一瞬、木立のあいだへ続く広い道が見えた。

アリエンは手を速めた。

そして間違えた。

ほんの小さな間違いだった。

最後の手順で、一面を逆向きに回した。

それと気づいて、身がすくんだ。

立方体はほとんどそろっていた。五つの面は正しく見えた。最後の面だけ、いくつかの色が本来の場所からずれていた。

「待って」と彼は言った。「もう一回やる」

父は時間を見た。

「だめだ」

冗談だとアリエンは思った。

「え？」

「そろわなかった」

「でも僕、そろえられるよ」

「今はそろわなかった」

「最後にひとつ間違えただけだよ」

「そうだな」

アリエンは入口の門を見た。

それから父を見た。

「じゃあ直すよ」

「うまくいくまで何度でも直していいという約束ではなかった」
母が二人のあいだに入った。
「できるって知っているでしょう。昨日、私たちに見せてくれたじゃない」
父は落ち着きはらって答えた。
「だったら今日も集中すればよかった」
アリエンは目の奥が熱くなるのを感じた。
「お願い」
父は首を横に振った。
「結果が気の毒になった途端に取り消せる約束なら、はじめから何の約束もなかったことになる」
父は交通モジュールの方へ向き直った。
アリエンは立ちすくんだ。
門の向こうでは子供たちが行き交っていた。どこか遠くで大きな獣の低い声が響き、一群の人が見晴らし台へ駆けていった。
そこにいたのだ。
たった数十メートル先に。
門をくぐりさえすればよかった。
母はアリエンのそばに残った。父はもうモジュールのところで待っていた。
少年は、そろいかけた立方体を両手に握っていた。頬を涙が流れた。
「父さんなんか大嫌いだ」と言った。
母は彼のそばに膝をついた。
「いいえ」
「大嫌いだよ」
「今はね」
アリエンは涙越しに母を見た。
母は立方体を手に取った。
「お父さんはときどき、厳密であることと、公平であることを取り違えるの」

アリエンはその言葉を忘れなかった。

「決まりどおりなんだったら、公平なんじゃないの？」

「いつもそうとは限らないわ」

「じゃあ、何のために決まりがあるの？」

母はしばらく答えを探した。

「どうしたらいいかわからないとき、決める手助けをしてくれるためよ。決まりに任せて、私たちが何も感じなくてよくなるためじゃないの」

そして立方体を返した。

「それから、もうひとつ」

「何？」

「ひとつのことを完璧にできなかったからって、あなたが丸ごとだめなわけじゃないのよ」

そのとき、アリエンはうなずいた。

だがはるかに深く刻まれたのは、別のことだった。

目当てのものに手が届きそうなのに、その前で立ち尽くすしかない門があること。

たった一度動かし間違えただけで、満たせなくなる条件があること。

あとほんの少しだったのに、そんなことには頓着しない世界があること。

数年後、彼はものの見方を根底から変える残酷な出来事に遭った。

その日、母と二人きりだった。

母方のおばを訪ねた帰り道、交通層のひとつで同期が途絶えた。三機の自律走行モジュールが、ほぼ同時に同じ回廊へ入った。

一機目のシステムは衝突を回避した。

二機目はできなかった。

のちにアリエンの記憶に残った衝突は、音ではなかった。

覚えていたのは光だった。

白い。

激しい。

そして、横倒しになった世界。

安全フィールドが彼の体を受け止めていた。唇は切れ、肩を強く打ち、額には血が流れていたが、体は動いた。

母は動けなかった。

モジュールの骨組みの一部が、母の下半身を押しつぶしていた。意識はあった。短く浅い息をしていた。

アリエンは母のところまで這っていった。

「お母さん」

母が彼を見た。

そんなときにも、ほほえんだ。

のちのちまで何より彼について回ったのは、それだった。

母の顔に浮かんだ苦痛ではなかった。

あのほほえみだった。

壊れたモジュールの中、煙と警報と血のただ中にいても、母はなお彼が帰る港でいてくれるようだった。

「ここにいるわ」と母は言った。

救助隊はすぐに来た。

エラリオンには、人が事故が起きたと理解するより早く、交通災害に対応できるシステムがあった。現場の上空に救助モジュールが現れ、医療用ドローンが負傷者のあいだを飛び回った。一人ひとりの体の上に容体を刻々と示す表示がともった。

アリエンの目には母しか映らなかった。

救急隊員のひとりが母のそばに膝をついた。

もうひとりは、隣のモジュールの残骸の方を向いた。

そこからひとりの子供が引き出された。

アリエンと同じくらいの年頃の少年だった。

服は裂け、顔には血がつき、片腕が不自然にねじれて体の下に入っていた。

少年が目を開けたとき、アリエンには黄金の環が見えた。

くっきりしていた。

光を放ちそうなほどだった。
医療システムが即座に新しいデータを加えた。
救急隊員のひとりが投影表示に目をやった。
「アウレリア人の再生特性だ」
もうひとりがうなずいた。
続いて幾つかの言葉が交わされたが、当時のアリエンには十分にはわからなかった。
生存の見込み。
処置が間に合う時間。
大量の内出血。
再生反応。
集中治療搬送機は一機。
次の機体は移動中。
間に合わない。
「子供を先に」と隊長が言った。
アリエンは顔を上げた。
「いやだ」
誰にも聞こえなかった。
「いやだ！」
救急隊員たちはもう少年を移し始めていた。
アリエンはひとりの服をつかんだ。
「僕のお母さんを！」
隊員が振り向いた。
「次のモジュールが来る」
「だったらお母さんを乗せてよ！」
「私たちは判断しなくちゃならない。基準に従って――」
「お母さんが死んじゃう！」
隊員が一瞬目を閉じた。

正しい手順に従っている人間にも、自分が恐ろしいことをしているとわかることがある。アリエンがそれを初めて目にしたのは、あの瞬間だったのかもしれない。
「二人とも助けようとしているんだ」
アリエンは母を振り返った。
やりとりはすべて聞こえていたに違いなかった。
「その子を連れていって」と、母はささやいた。
アリエンは信じられずに母を見た。
「いやだ」
「アリエン」
「いやだ」
母は彼に手を差し伸べた。
指が震えていた。
彼はその指を握った。
「お母さん、言ってよ」
「こっちを見て」
「お母さんを連れていってって言ってよ」
「アリエン」
その声には、小さい頃から知っていたのと同じ安らぎが残っていた。
台所の安らぎ。
夕べの安らぎ。
世界が大きすぎて手に余るたび、駆けていったあの人の安らぎ。
「あの子は助けられるわ」と母は言った。
「お母さんだって」
母は答えなかった。
アリエンの背後で、医療モジュールの扉が閉まった。
その寸前に、もう一度、見知らぬ少年の顔が見えた。
そしてその目が。

黄金の環は、向こう側の見えない壁に隠れた。

母を運ぶ次の機体は、数分後に着いた。

のちの報告書には、正確に何分だったかが記されていた。

アリエンは何年も、その数字をそらで言えた。

母は病院へ運ばれる途中で息を引き取った。

たとえ先に搬送していても、命が助かった保証はない。あとで医師たちはそう説明した。骨組みが骨盤内の太い血管を引き裂いていた。現場のドローンにできたのは失血を遅らせることだけで、傷を塞ぐには専門のモジュールが必要だった。再生治療には安定した血液循環と何時間もの猶予が必要だったが、母にそれだけの時間は残されていなかった。救助隊の判断は規定どおりだった。隣の機体にいた少年は、年齢と負傷の種類、そしてアウレリア人の再生特性のために、集中治療によって生き延びる見込みがずっと高かったのだ。

少年は生き延びた。

アリエンの母は死んだ。

黄金の環だけが決めたわけではなかった。

あれはシステムが考慮したいくつもの要素のうち、ひとつが目に見える形で現れたものにすぎなかった。

だがアリエンには、そんなことはどうでもよかった。

子供の心に、傷は専門家の報告書の形では残らない。

ひとつの光景として残る。

アリエンは、残骸の中に横たわる母を覚えていた。

救助モジュールの扉を。

そして扉の向こうで閉じられた、あの子供の金色の目を。

そうしてアリエンの中に、アウレリア人への憎しみが生まれた。

そこに理屈はなかった。

歴史もなかった。

政治の理論もなかった。

色があった。

金色だった。

葬儀のあと、父は事故の全記録を取り寄せた。

遠隔測定の数値、対応に要した時間、トリアージの規定、救急隊員の判断、予測モデルまで調べ上げた。

アリエンは、父が誰に非があるか突き止めてくれるのを待った。

誰かが必要だった。

誰かが間違えたはずではないか。

誰かが責任を負わなければいけないはずだ。

数日後、父は最後の報告書を閉じた。

「あの人たちの判断は正しかった」と言った。

アリエンは父を見つめた。

「お母さんは死んだのに」

父は目を伏せた。

「わかっている」

「じゃあ、どうして正しかったなんて言えるの」

父は長いこと黙っていた。

その顔はこわばっていた。当時、アリエンはそれを冷たさだと思った。痛みを感じないから人前で崩れ落ちないのではない。内へ向かって、誰からも見えないところで崩れてゆく人もいるのだと、彼が知ったのはずっとのちのことだった。

「正しい決断が、いつもよい結果を生むとは限らない」と父は言った。

アリエンはその言葉に吐き気がした。

「じゃあ、正しくて何になるの」

父は答えなかった。

アリエンは初めてひとつのことを悟った。それは二度と完全には彼を離れなかった。

仕組みの中では何もかも決まりどおりに進み、それでも人は死ぬ。

誰も嘘をつく必要はない。

誰も法を破る必要はない。

誰も悪意を抱く必要はない。

そうして残るのは、ひとつの墓かもしれない。

その日から、彼が物事の仕組みを学ぶ姿勢は変わった。

それまでは、ものの道理がわかるのが楽しくて、仕組みに惹かれた。

今はそれを自分の手で動かせるようになりたかった。

間違いとは呼べぬ判断ひとつで世界が母を奪えるのなら、善い人間であるだけでは足りない。
正しいだけでも足りない。

懇願したところで足りない。

世界が何をよりどころに決めるのか、知らなければならなかった。

そして仕組みに待たされる側に立ちたくなければ、判断が始まるより前に、規則が作られる場にいなければならなかった。
こうして子供の頃に二つのことを学んだ。

ひとつ。世界を動かすのは正しい者ではない。仕組みを知る者だ。

もうひとつ。仕組みが見えないなら、自分はそれに動かされる側にいる。

彼は西方のヴェイラン人の国で、行政官や法律家、通貨戦略の専門家を輩出する一家に生まれた。母の死後、家はもとのままだった。それなのに、逃げ込める場所はそこから消えていた。
父は相変わらずそこにいた。

決まりもあった。

家族の夕食も続いた。

食卓で話題にのぼるのは、市場の動き、連立の取り決め、規制の抜け穴、そしていまだに自国の中央銀行が独立していると思い込んでいるのはどこの国か、といったことだった。
気持ちが語られることはほとんどなかった。

アリエンはそれに順応した。

ずば抜けた知性を持っていた。その知性には外科器具のような精密さがあった。問題を幾層にも切り分け、弱点を見つけ、誰が譲るか、誰なら説得できるか、買収できるか、あるいは迂回できるかを見極められた。
ヴェイランの学校は彼を逸材と見た。
金融企業連合は投資先と見た。
政治家たちは使える人物と見た。
彼自身は、自分を幕の向こうまで見通す人間だと思っていた。
思春期になると、母の事故の記録を改めて開いた。
一度ではない。
幾度も。
初めは救急隊員の過失を探した。
次にアルゴリズムの過ちを。
やがて、その規定を誰が承認し、どのようなデータから作られたのかまで調べた。
陰謀は見つからなかった。
見つかるより、そのことが彼を苛立たせた。
少年が救われたのは、助かる見込みが高いとシステムが判断したからだ。アウレリア人の生物学的な特性は、数ある変数のひとつにすぎなかった。
だが、どこにいてもアウレリア人がアリエンの目につくようになった。
式典の中継に。
家系の記録に。
最も古い学校に。
身体が人より早く再生した者たちの話に。
かつて手を触れるだけで病を癒やせたという一族の伝説に。
黄金の環は文化遺産として語られていた。
アリエンには、それが生まれたときから与えられた特権に見えた。

職について間もない頃、アリエンは交通当局に、多重事故に備えて集中治療搬送機の予備機を置くよう提案した。大仰な身振りはなかった。到着時間、機体の配置、予備機の維持費を計算し直した。そんなものを備えてもほ

とんどの日は遊ばせておくことになると言われると、母の事故の報告書を差し出し、待たされる時間も計算に入れてほしいと言った。

提案は承認された。二年後、ある衝突事故の報告を受けた。集中治療用のモジュールが二機同時に到着し、重傷の二人はともに生き延びた。ひとりはアウレリア人の少年だった。アリエンは報告を手元に取っておいた。その頃にはまだ、より公平な規則を作れば、どんな色の目を持つ人でも守れると信じていた。

それでも、アウレリア人の祝典を目にすると、ひとつの言葉が浮かんだ。そんなことを思う自分が、まだ少しは恥ずかしかった。

おまえたちは僕の母さんまで奪った。

それは本当ではなかった。

彼の知性はそれを知っていた。

だが痛みは分析官ではなかった。

自分の憎しみが不確かな土台に立っていると長年知っていても、人はその上に家を一軒そっくり建ててしまえる。あとになって古傷を信念と呼び替えられるだけの理屈さえ見つかればいい。

アリエンはそれを見つけた。

そして、マレイアと出会った。

彼女は母に似てはいなかった。

性格も、生き方も、ものの考え方も。そんなふうに比べるなど短絡的だと、アリエンなら言っただろう。

それでも彼女のそばで、何年ぶりかに、子供の頃に知っていたものを感じた。

ひととき、世界に向かって自分の弁護をしなくてもよいということ。

マレイアは繊細だったが、人の意のままにはならなかった。優しかったが、気弱ではなかった。彼に異を唱えるのは勝つためではなかった。自分の目が正確に見取ったものを裏切れないからだった。

初め、彼はそれに感嘆した。

彼女のそばではときおり、何年も仕組みの陰に隠してきた彼自身が戻ってきた。

やがて、それが恐ろしくなった。

必要になったものは、失うこともある。

そしてアリエンは、痛みを感じるたびに帰ってゆけた場所を、かつて一度持っていた。ある日、世界がそれを奪うまでは。
だから、失いたくないものすべてに対してやってきたことを始めた。

まず、理解しようとした。

次に、予測しようとした。

次に、支配しようとした。

マレイアの言ったことを覚えていた。誰と会うか。いつ家に帰るか。誰を信頼しているか。誰が彼女に影響を及ぼすか。何が彼女の意見を変えるか。
それを気遣いなのだと自分に言い聞かせた。

次には、心配なのだと。

しまいには、権利なのだと。

そうして、人を資金の流れのように確保しておけはしないとはっきりしたとき、怒りを覚えるようになった。

マレイアは彼の仕組みのどこにも収まらなかった。

所有できなかった。

そうとわかると、彼女の中の、かつて愛したまさにそのものを憎みはじめた。

彼女が去ったあと、部屋は整いすぎていた。

何も壊していかなかった。叫びもしなかった。公の場で彼を怪物呼ばわりすることもなかった。そうしてくれさえすれば、彼にも身を守るすべがあったのに。

静かに「いいえ」と言って、去っていった。

初めのうち、彼は戻ってくるさと自分に言った。

それから、誰かに吹き込まれたのだと。

それから心にイェサイル・ダヴィオンが浮かんだ。

そして、あの昔の色も。

金色。

何十年も隔たった二つの出来事が、人の内ではこうもたやすく触れ合えるのかと思うと不思議だった。

事故現場から運び去られてゆく見知らぬ子供。

マレイアの隣に立つ男。

どちらもアウレリア人。

どちらの目にも黄金の環。

そこに因果のつながりなどないと理性は知っていた。

傷には、そんなつながりは要らなかった。

マレイアが自分の世界に本当に属するなど、そもそもありえなかったのだ。
アウレリア人は、普遍だの平等だの文明全体のことだのと口にしても、結局はいつも身内を選ぶ。アリエンは自分にそう語りはじめた。
いざというとき、あの連中は環に帰るのだと彼は考えた。

あの黄金の環に。

自分で認めるよりずっと前から、彼はあのしるしを憎んでいた。

中でもたまらなかったのはダヴィオン家だった。

教養ある人々が笑いながらも、決してすっかり手放しはしなかった神話。触れるだけで病が癒える。災いを予見する。自然が言葉を聞く。生物学的人工知能と量子センサーを持ち、ほかの惑星に街を築いた文明のための、古いおとぎ話。
それなのに、連邦評議会の議場でイェサイル・ダヴィオンが立ち上がってひと言発するだけで、人々は静まり返った。
アリエンはあとで、ニトラでの討論の記録を再生した。

イェサイルの顔が映ったところで止めた。

「個人のプライバシーは守らなければならない。権力が見えずにいることまで守る必要はない」

イェサイルは静かに立っていた。勝ち誇る必要も、芝居をする必要もなかった。まさにそのことがアリエンを不安にした。

野心家の政治家は買収できる。

扇動家は化けの皮を剝がせる。

権力を欲しないのに、ほかの人々の信頼によってそれを手にする人間は、よほど操りにくい。

アリエンは彼の目を拡大して映した。

そこに一瞬、黄金の環が浮かんだ。

そして周囲の世界が消えた。

ほんの一瞬、事故に遭ったモジュールの部材が焦げる、あのにおいがした。

救急隊員の声が聞こえた。

アウレリア人の再生特性だ。

母の手が見えた。

救急モジュールの扉。

少年の金色の目。

それから彼はまたニトラにいた。

イェサイル・ダヴィオンの映像の前に。

アリエンは胃の底から嫌悪がせり上がるのを感じた。

「いやだ」と誰もいない部屋に向かって言った。

何を拒んでいるのか、まだよくわからなかった。

イェサイルを。

マレイアを。

アウレリア人を。

かつて何の憎しみもなしにひとつの判断を下し、それでも母を奪った仕組みを。

あるいは自分自身の屈辱をも。

それらすべてが今は彼の内であまりに近いところに横たわっていて、もう見分けがつかなくなりかけていた。

ちょうどそのとき、作業画面に通知がともった。

通信は閉鎖回線を通じて届いた。ファンド運用の幹部、政治顧問、それに自分たちの会話を通常の記録に残したくない者たちが使う回線だった。

差出人の記載はなかった。

書かれていたのは、場所と時刻と、ひと言だけだった。

ソーン氏が、本日のご発言の及ぼす影響について、お話ししたいとのことです。

アリエンは二度読んだ。

カエル・ソーンは、自分の影響力の大きさに見合う公職には就いていなかった。政府の長でも、中央銀行の総裁でもなかった。だが資産運用会社、投資ファンド、報道機関、財団、選挙運動の界隈には、決まってその名が浮かんだ。

人々は彼を顧問と呼んだ。

もっとよく知る者は、どんな肩書も口にしなかった。

アリエンは通信を消さなかった。

まずイェサイルの演説をもう一度再生した。

今度はイェサイルを見なかった。

画面の中にカエルの姿を探し当てた。

そしてある短い瞬間、カエルが演壇の人間を見ていなかったことに気づいた。

自分を見ていた。

アリエンは招きを受けた。

翌日の晩、ニトラをはるかに見下ろす一室で会った。名目上は国家間の経済協力を支援する財団の所有だった。

カエルはすでに待っていた。

「コルヴェトさん」

「ソーンさん」

「あなたのお名前は以前から存じています」

「喜ぶべきでしょうか」

「用心なさるべきでしょう」

カエルは会合の記録を開き、イェサイルのところで止めた。

「共に築く時が満ちたなら、価値はもはや影を歩んではならない」と読み上げた。「すべての人に仕えるものは、すべての人の目に見えねばならない」

アリエンは嘲笑を予期していた。

だがカエルの顔に見たのは、はるかに興味深いものだった。

恐怖だった。

カエル・ソーンはその考えを恐れていた。

彼にとって透明性は道義の問題ではなかった。存亡に関わる脅威だった。エラリオンの資金の流れが一枚の地図に描けたとしたら、浮かび上がるのは脱税ばかりではない。

同じ出所から資金を得ている政党が浮かぶ。

表向きは憎み合い、内実は同じ金に所有されている報道機関も。

財団も。

銀行も。

ファンドも。

そしてソーン家も。

「ダヴィオンにはまだ組織がない」とカエルは言った。「政党も、機構も、法律も」

「それなら、なぜ恐れるのです」

「あの男の言葉は、人に伝わるからです」

カエルは映像を消した。

「複雑な思想は委員会に葬ることができる。単純なものはひとりでに広がる」

アリエンは背をもたせかけた。

「アウレリア人たったひとりが怖いとおっしゃるために、私を呼ばれたのですか」

「あなたがあの男を恐れていないから、お呼びした」

「ええ、恐れていません」

カエルは少し黙った。

「あなたは憎んでいらっしゃる」

アリエンは首の筋肉が張りつめるのを感じた。

「私のことを、そこまでご存じないでしょう」

「あの男をどう見ていたかは存じています」

「目つきは証拠にならない」

「証拠を探しているのではありません。動機を探している」

アリエンは立ち上がった。

カエルは引き止めなかった。

「あなたがここにいる理由はマレイア・リオレンではありません」と言った。

アリエンは足を止めた。

「あの女性は、あなたの古い憎しみがもう一度口をきけるようになった理由にすぎない」

今度は、アリエンは勢いよく振り向いた。

カエルは、どれほど正確に的を射たかを知らなかった。

事故のことは知らない。

母のことも。

少年のことも。

閉じてゆく扉の向こうの、金色の目のことも。

だが、カエルのような人間は傷の由来など知る必要がない。傷がそこにあると見抜けば足りる。

「私に何をお望みです」とアリエンは尋ねた。

「今のところ、何も」

「でしたら、わざわざお呼びになることはなかった」

「支援を申し出たいのです」

アリエンはゆっくり腰を下ろした。

「何の支援です」

カエルは研究組織と金融組織の一覧を開いた。

「あなたは企業連合と仕事をしていらっしゃる。管轄の違いも、通貨や法制度の切り替わるところもよくご存じだ。バイオセーフティーに関する枠組みも手掛けておいでですね」

「すべて合法です」

「もちろん」

あまりに穏やかな口ぶりに、その言葉は意味を失った。

「私が協力している諸家や財団では、文明の長期的なリスクを分析できる人材を探しています。経済の。政治の。社会の。遺伝上の」

アリエンは相手を見た。

「アウレリア人に関わるものも？」

カエルはすぐには答えなかった。

「あなたがそれをリスクとお考えなら、アウレリア人の件も」

その瞬間、ひとつの計画が開示されたわけではなかった。

扉が開いたのだ。

カエルが差し出したのは、資金源に、法律事務所に、財団に、研究機関に通じる道だった。問いの真意を専門用語に埋めたまま、その問いを発することのできる人々につながる道だった。

「見返りは？」

「情報です。イェサイルの思想はどこへ向かうのか。誰が支持しているのか。そして道徳上の標語が政治綱領にならぬうちに、その成長をどう食い止められるか」

「彼の信用を失墜させたいのですか」

「それができるなら」

「できなければ？」

カエルはじっと彼を見た。

「そのときは、もっと精密な分析が必要になるでしょう」

それ以上言う必要はなかった。

会談のあと、アリエンはアウレリア人の遺伝について読み始めた。

初めは仕事上の好奇心だと自分に言った。

遺伝の特異な法則を知った。アウレリア人の父から特徴的な形質を受け継ぐ息子たち。混血の系譜。遺伝標識のパターン。黄金の環に結びついた生理的特性。

生物学。

ただの生物学だ。

母の死についての報告書にあったのと、まったく同じに。

読み進めるほど、それまで切り離してきた人生の二つの部分が、彼のうちで近づいていった。

母を失った子供。

そして、今なおその子供に動かされていることを認めずに、世界を説明せずにはいられない男。

彼は書きとめるようになった。

選挙による信任を経ない道徳的権威。

政治資本としての血統の連続性。

ダヴィオン――象徴であることを拒む象徴、それゆえいっそう有効。

アウレリア人が道徳的影響力を及ぼす手段としての透明性。

最後の一文は真実ではなかった。

透明性はアウレリア人のものではなかった。イェサイルは万人に共通する仕組みとして提唱していた。

だがアリエンはもう、事実を起点にしてはいなかった。

自分が行き着かなくてはならない結果を、起点にしていた。

そして先に結論を選ぶ賢い人間は、愚者よりも危険であることがある。

愚者には、誤りに通じる完璧な道を築くことはできないからだ。

アリエンにはできた。

書けば書くほど、自分の書いているのはアウレリア人のことではないと、気づかなくなっていった。

書いていたのは、動物園の前に立つ少年のことだった。

条件を満たせず、開かなかった門のこと。

残骸の中の母のこと。

誰かほかの人のために開いた救急モジュールのこと。

扉を閉めて去ったマレイアのこと。

彼の人生には扉が多すぎた。

そしてアリエンは、もう二度と自分はその前に取り残される者にはならないと決めた。

ある晩、以前に送った便りのひとつにマレイアから返事が来た。

アリエン、私は戻りません。あのとき起きたことは、二人のあいだに生じた手違いではありません。あなたが一線を越えたのです。いつか自分でそれを認められる日が来ることを願っています。

幾度も読み返した。

いちばん腹が立ったのは最後の一文だった。

それが真実だったからこそ。

三日後、アウリオラでの公開討論の記録を見た。イェサイルは記録資料について話していた。マレイアは聴衆の中に座っていた。

イェサイルが話し終えると、一瞬、二人の目が合った。

証拠として使えそうなものなど、そこには何ひとつなかった。

それでも、アリエンにはすべてが見えた。

映像を止めた。

イェサイル。

マレイア。

黄金の環。

そしてどこか深いところで、長年にわたる教育と影響力と自制の下で、九歳の少年がまだ、ほとんどそろった立方体を両手に握りしめていた。

作業画面に研究財団の一覧を開いた。

いくつかの財団の横に、新しい権限の表示がともっていた。

拡張アクセス権を基金運営部が承認。

カエルは申し出を実行に移したのだ。

アリエンは戦略事業の提案を出し、法律と金融の助言を受け、一見何の関わりもない複数の国の事業を結びつけることができるようになった。

今のところ、それはどれも犯罪ではなかった。

生物の安全を守る研究は必要だった。

集団の遺伝的特性を分析することで命が救えるかもしれなかった。

システム全体のリスクをモデル化することは、文明を責任を持って運営する仕事のうちだった。

どの道具にもまっとうな使い道があった。

肝心なのは、いつかそれらを隣り合わせに置くのが誰かということだった。

アリエンは、大きな事業に資金をつけながら、ひとつの事業の姿をどこにも現さずにおくすべを知っていた。通貨や国や法制度をまたぐ仕事の振り分け方を知っていた。誰ひとり承知のうえで法を破らなくても、最終的な利害をどこに隠せるかも知っていた。

目の前にあるいくつもの可能性を、長いあいだ見ていた。

人が罪を犯す者になるのは、初めて行為に及んだときとは限らない。

境を越えるのは、それよりはるかに早いことがある。

誰かを滅ぼせるかもしれないと見て、「*そんなことをしてよいのか*」の代わりに「*どうすればできるか*」と問う、その瞬間に。

アリエンはまだ何も発注していなかった。

研究所に声をかけてもいなかった。

具体的な計画もなかった。

だが後ろ盾は得ていた。

扉を開く権限も。

そして確信も。ひとつの意図を小さく分けてゆけば、その一つ一つを進んで引き受け、力を合わせた結果いったい何を作るのかは知らずにいる人々が見つかるという確信だった。

夜、彼はテラスに出た。

眼下にニトラの明かりがともっていた。街の上を船が通り、軌道環へ、さらにその先のタエロンへと向かっていた。

世界は精密だった。

つながっていた。

制御されていた。

アリエンは父を思った。

あの人たちの判断は正しかった。

母を思った。

決まりに任せて、私たちが何も感じなくてよくなるわけじゃない。

何十年も、二つの言葉は記憶の中で向かい合っていた。

最後に彼は父の言葉を選んだ。

父を許したからではなかった。

その言葉は使えたからだ。

人が仕組みに従って決めるのなら、仕組みを握ればよい。

機関が規則に従うのなら、それぞれがそれぞれの規則を守って進める道を作ればよい。

十分に多くの人のあいだに意図を分ければ、誰ひとり罪悪感を丸ごと負わずに済む。

アリエンは街を見た。

「個人の決断など存在しない」と小声で言った。

彼はその言葉が気に入った。

哲学のように響いた。

実のところ、その言葉の中では、閉じた門の前の子供がまだ泣いていた。

背後の作業画面に、ソーン家の事務所からの便りが待っていた。

資金面および法務面の支援は整いました。事業の最初の枠組みをご提出ください。

アリエンは部屋に戻った。

憎しみは熟すと、叫ぶのをやめる。

人を組織しはじめる。

最初の扉を開けたのはカエルだった。

そして大いなる太陽の下の大いなる文明エラリオンは、その扉の先になお、あまりに多くの回廊を彼に差し出していた。

第14章　地球　新たな世代の始まり

夕闇がすでに地に降りていた。彼らの背後には、まだふさがるいとまのない傷のようにエルサレムが残っていた。弟子たちは家の戸を閉ざし、中に座っていた。誰も声を立てて話さなかった。一人ひとりが違う恥を抱えていた。ペトロは主を知らないと言ったことを、トマスは信じなかったことを、ほかの者たちは逃げたこと、黙っていたこと、恐れたことを。
そのとき、部屋の空気が変わった。

足音も戸のきしみもなかった。ただ、いつのまにか彼らのただ中に立っていた。

イエスが。

イエスは生きて、静かに、弟子たちのあいだに立っていた。思い出というには、影というには、絶望が生んだ幻というには、あまりにも確かだった。その御顔で、もはや痛みが最後の言葉を持つことはなかった。
「あなたがたに平和があるように」と言った。

皆が立ちすくんだ。後ずさる者も、ひざまずく者もいた。ペトロは両手で顔を覆った。ヨハネは声もなく泣きだした。トマスはじっと見つめた。疑いを礎に築いた世界が、一瞬で隅々まで崩れたかのように。
イエスは両手を上げた。その手首に釘の痕があった。それから衣を開き、ほんの数日前に血と水の流れ出た脇腹を見せた。
「わたしだ」と静かに言った。「あなたがたの触れるものは夢ではない。はかない望みでもない。死が引き留めることのできなかったものに、あなたがたは触れるのだ」
トマスは、これから自分の知ることになるものを恐れる人のように近づいた。傷に触れようとして、手が宙で止まった。かたくなに握りしめていた確信はことごとく砕けた。
「わたしの主」とささやいた。「わたしの神よ」

イエスは責める色もなく彼を見た。

「おまえは見たから信じた。だがいずれ、見ずしてなお、うちに同じ火を燃やす者たちが来る」

それから彼らのあいだに腰を下ろした。死の国からではなく、ちょっとした旅から帰ってきたかのようだった。食べ物を所望したので、彼らは焼いた魚をひと切れとパンを少し差し出した。イエスは彼らの前で、ゆっくりと、ごく当たり前に食べた。まさにその当たり前さが奇跡よりも彼らを畏れさせた。霊はものを食べない。夢はパンを裂かない。思い出は人の目をまっすぐには見ない。

食べ終えると、聖書について彼らに語りはじめた。モーセについて、預言者たちについて、生涯耳にしてきたのに、今初めて門のように彼らの前に開いた言葉について。人の子は、人が最も目を向けるのを恐れるところまで降りてゆかねばならなかった。そこでもなお、神が世界を治める力を失われなかったことを人々に示すために。そう語った。

「十字架が終わりだと、あなたがたは思った」と言った。「だが十字架は、人間の権力がその力を最後のひとしずくまで使い果たした場所であった。人が神に何をできるかを示したその場所で、神は人に何をなしうるかをお示しになった。人を赦すことだ」

のちに彼らは北へ、かつて初めて呼ばれた水辺へと向かった。ティベリアス湖は穏やかで、その上に夜が暗い薄布のように垂れていた。ペトロが漁に行くと言うと、ほかの者もついていった。一晩じゅう網を投げたが、何も捕れなかった。

夜明けに、岸にひとりの男が立っていた。

「子たちよ」と呼ばわった。「何か食べるものはあるか」

「ありません」と彼らは答えた。

「舟の右側に網を打ちなさい」

言われたとおりにした。すると一気に網がいっぱいになり、引き上げることもできなかった。ヨハネはそのとき青ざめ、ペトロを見た。

「主だ」

ペトロは考える間もなく水に飛び込んだ。ひと足ごとに、あの方など知らないと三度言った夜よりも前へ戻ろうとするかのように、水をかき分け岸を目指した。

岸ではすでに火が燃えていた。炭火の上に魚とパンが載っていた。炎の傍らにイエスが立ち、朝の光がその顔を照らしていた。ほど近くにマグダラ

のマリアがいた。黙っていたが、その沈黙はほかの者たちの沈黙とは違っていた。恥も恐れもなかった。むしろ、ひそかに知っている者の静けさだった。死は二人の物語が終わる場所ではないと、初めから知っていたかのようだった。

彼らはともに食べた。「あなたはどなたですか」とあえて尋ねる者はいなかった。皆、知っていたからだ。

食べ終えると、イエスはペトロに向き直った。

「ヨハネの子シモン」と言った。「この者たち以上に、わたしを愛しているか」

ペトロは目を伏せた。

「主よ、あなたをお慕いしていることは、ご存じです」

イエスはうなずいた。

「わたしの小羊を飼いなさい」

火がはぜた。ペトロが目を上げると、イエスは再び尋ねた。

「ヨハネの子シモン、わたしを愛しているか」

ペトロの声が震えた。

「はい、主よ。あなたをお慕いしていることは、ご存じです」

「わたしの羊を飼いなさい」

三度目にイエスは尋ねた。

「ヨハネの子シモン、わたしを慕っているか」

そのとき、ペトロの内で、もう癒えたふりをしていたものがことごとく痛んだ。三つの問いが、三度の否認の中へ落ちた。三つの傷から、三つの答えが立ち上った。

「主よ」とペトロは言った。「あなたは何もかもご存じです。私があなたをお慕いしていることも、ご存じです」

イエスは長いこと、厳かなまなざしで彼を見た。

「わたしの羊を飼いなさい」

そのときペトロは悟った。赦すとは忘れることではない。自分の弱さをもう知っている人に、務めを託すことなのだと。

それからイエスは彼らを山に導いた。十一人とマグダラのマリア、そしてガリラヤからエルサレムまで彼らのあとを歩いてきた幾人かが、そこに立った。眼下には、その後も長く、帝国と祭司と商人と剣と恐れに分かち取られる定めの大地が広がっていた。頭上には天が開いた。それは逃れ道というよりも、この世界が己の残酷さのうちに閉じ込められているわけではないことを思い起こさせるものだった。
イエスは言った。

「わたしに力が与えられた。人が授けたものではないから、人には奪えなかった力だ。ゆえに、行って諸国の民を教えなさい。剣によってではない。恐れによってではない。支配したいという欲によってでもない。見ることを教えなさい。自分の利得以上に真理を愛することを教えなさい。赦すことを教えなさい、だが偽りに仕えることを教えてはならない。もはや自分ひとりのものではない命へと、人々に洗礼を授けなさい」
ひざまずく者がいた。泣く者がいた。それでもまだ疑う者がいた。奇跡を前にしても、人の心は人の心のままだからである。
イエスは一同の近くへ進み出た。

「これまでと同じあり方で、あなたがたとともにいることはない」と言った。「だがわたしは日々、あなたがたとともにいる。おのれの恐れがもたらす眠りから覚める人、一人ひとりのうちに。おのれを認める意識のうちに、わたしはいる。神の国は雲から宮殿のように降りてくるのではなく、人の内に光として訪れる。そのことを悟る者すべてのうちに、わたしはいる」
それからマグダラのマリアに向き直った。

師が弟子に向けるしぐさではなかった。もっと古く、もっと深く、もっと静かなものがそこにあった。長い旅を経て二本の川が、ひとつの川床でまた出会うようだった。マリアがそばへ歩み寄り、二人の手が一瞬触れた。ペトロはそれを見た。ヨハネも見た。誰も何も言わなかった。
イエスは最後にもう一度ペトロを見た。
「おまえは群れのそばに残りなさい」と言った。「彼らがちりぢりになるとき、ひとつに結びなさい。パンと火と湖を思い出させなさい。わたしがよみがえったと告げなさい」
ペトロは何か言い返そうとしたが、イエスはひと目でそれを制した。

「そしておまえは」とヨハネに向かって言った。「言葉を担う者だ。見たものを保ちなさい。それにもまして、悟ったことを保ちなさい」
それから皆に言った。
「神に始まるものがすべて、世の人の目の前になければならないわけではない。ひそかに育つわざがある。神殿からも、王座からも、自分のものにしようとする人々からも遠く離れて落ちなければならない種がある」
マグダラのマリアはイエスの傍らに立っており、風がその髪を揺らした。その面には驚きはなかった。すでに道を知っていた人の、静かなうなずきがあった。
「やがて時が来る」とイエスは続けた。「わたしの名を旗として掲げるのではなく、わたしの意識を炎として宿す人々が生まれる。宮殿から世界を治めはしない。ほかの者より遠くを見ることで世界を変える。さまざまな時代に、諸国の民のあいだに、名もなき人々の体に生まれる。そして世界が深淵に近づくたびに、その幾人かが思い出す」
弟子たちはすべてを悟ったわけではなかった。おそらく、それはできようもなかった。耳にした言葉は彼らの生涯よりも大きかった。
空に明るい雲が動いた。人々の目の前でイエスを乗せてゆく車としてではなく、彼らにはまだ知ることを許されぬ道を隠すとばりとして。イエスは両手を上げて彼らを祝福した。
「わたしの証人となりなさい」と言った。「地の果てまでも」
それから身を引いて、光の中へと入っていった。
ある者は、雲が彼を視界から隠すのを見た。上に昇ったのだと誓う者もあった。またある者たちは、とりわけヨハネは、あの瞬間、天が開けたのは頭上だったのか、それとも自分たちの内だったのか、生涯確信を持てなかった。
光が消えても、彼らは山に立ち尽くし、何もないところを見つめていた。
二人の白衣の男が、誰ひとり口にする勇気のなかった問いへの静かな答えのように、傍らに現れた。
「なぜ天を仰いでいるのか」とひとりが言った。「去ったあの方が、失われたわけではない。ただ、あなたがたにはまだ跡をたどれぬ道に入られたのだ」

ペトロは仲間たちの方を振り向いた。その顔には涙があり、また、かつてはなかった確かさもあった。

「行こう」と言った。「私たちはあの方の羊を飼うのだ」

　そして遠く離れたところ、岩と朝の光のあいだに道が消えてゆくあたりを、二つの人影が寄り添って歩いていた。ひとりの男とひとりの女。世を逃れる者としてではなく、いつか世界がみずからの内にその未来を見いだせるよう、世界の未来をひそかに運ぶ者として。

二人のあとに残るのは、エルサレム、十字架、空の墓、岸辺の火、そしてペトロに託された群れ。

二人の前にあるのは、すぐには書物に記されることのない道だった。

　それでもいつか、その道を経て新たな世代の人々が生まれるはずだった。肉体が強くなるのでも、財が豊かになるのでもなく、意識がより澄んだ人々。どこから来た記憶か知らぬまま思い出す人々。歴史が分かれるときに、おのれのうちに静かな声を感じる人々。

目覚めよ。

御国は王座から始まるのではない。

自分が意識していることを意識し、そのことからしかるべき結論を引き出す人のうちに始まる。

第二部　ひとつの犯罪を分ける

第15章　三十の通貨

金には意図がない。

憎むことも、妬むことも、復讐を望むこともできない。自分が買うのはパンか、薬か、政治家の一票か、それとも未来の誰かの死かも知らない。知っているのは、進む方向と、自分の価値と、しばし立ち止まる口座だけだ。
意図を与えるのは人間だ。

そして人間はとうの昔に、金を自分の名から切り離すすべを身につけた。

　カエル・ソーンがアリエンを迎えたのは、初めて会ったのと同じ部屋だった。ニトラのはるか高み、暗いガラスの壁の向こう。眼下の街は巨大な神経網のように輝いていた。塔のあいだを交通の光の筋が動き、川は街の明かりを映し、遠くの地平線には軌道環が立ち上がっていた。
二人のあいだの卓上には何もなかった。

カエルがその上に手のひらを置いた。

エラリオンの地図が現れた。

四十の国。

三十の現行通貨。

数百の銀行。

何千ものファンド、財団、資産管理会社、法律事務所、所有権登記簿。互いについて知っているのは、法律に命じられた範囲だけだった。
「ここに何が見えますか」とカエルは尋ねた。

アリエンは地図を見据えた。

「細かく分かれた世界が」

「政治家なら多様性と言う」

「銀行家なら商機と言うでしょうね」

カエルはかすかに笑った。

「だからこそ、あなたに来ていただいた」

北の一地域に触れると、北方同盟の通貨が現れた。それから南の群島の国を開いた。テリニス。その登記制度は、自国民の医療上の個人情報よりも厳重に、ファンドの所有者を守っていた。

二つのあいだに一本の線が引かれた。

金は技術開発への投資として北を出た。テリニスで、公に所有者の知られていないファンドが受け取った。そこから融資として別の国へ渡った。やがて民間財団の資本として連邦に戻った。

同じ金。

三つの法的な姿。

四つの目的。

ひとつの名もない。

「連邦に見えるのは出発点です」とカエルは言った。「テリニスに見えるのは管理者。次の国に見えるのは融資。連邦に戻ってくるときに見えるのは外国からの投資。どの情報も正しい」

「そして全体は誰にも見えない」

「全体というのは危険な概念です。政治家は好まない」

カエルが手を動かすと、さらに資金の流れが開いた。数百もあった。運輸会社に向かうものも、報道機関、政治財団、研究所や保険会社へ向かうものもあった。

一本の線はカルス帯へ延びていた。エネルギー資源の鉱床へのアクセスを争う二国の戦争が、そこではすでに三年目に入っていた。

「武器を供給しているのですね」とアリエンは言った。

カエルは身じろぎひとつしなかった。

「わが家が運用するファンドが少数株主になっている会社のひとつが、一方の国に防衛装備を供給しています」

「もう一方には？」

「被災した都市を再建する融資を」

アリエンは相手を見た。

「再建はまだ始まっていない」

「だからこそ条件がいい」

カエルは戦争の表示層を閉じた。恥じもせず、誇りもせずに。まるで机の上の書類を別の場所へ移すかのようだった。

「あなたを驚かせるために話しているのではない」と言った。「環境を理解していただきたい。権力は姿を消して隠れるのではありません。一つずつなら容認できそうな、小さな部分に分かれるのです」

「それで、私には何をお求めです」

「枠組みを」

「何のための？」

「それはあなたが決める」

アリエンは街に顔を向けた。

最初の会談以来、自分が本当は何を望んでいるのか考えていた。思いは絶えずイェサイルとマレイアと黄金の環に戻ったが、カエルの前でそのまま口にすることはできなかった。ひどく小さく響くだろう。私事にすぎず、滑稽に。

自分が去った相手は、彼女にはとうてい計り知れないほど大きな人間だったのだと、マレイアに知ってほしかった。

誰もまだきちんと問いさえしない問題に対する道義上の答えのような顔をして、人々の前に立つのをイェサイルにやめてほしかった。

歴史の中には自分たちのための特別な場所があるという、古い物語の目で世界を見るのを、アウレリア人にやめてほしかった。

だが何より、何かが折れてほしかった。

すべてではない。

イェサイル・ダヴィオンには安心して歩ける道を指し示せると、人々が信じなくなるだけでいい。

「バイオセーフティーです」とアリエンは言った。

カエルは身じろぎしなかった。

「続けてください」

「エラリオンの三つの系統には生物学上の違いがあります。医学ではそれを考慮しますが、政治の場では恐る恐る話題にする。慎重すぎるほどです。どれかひとつの系統だけがほかよりはるかに大きな影響を受けるような健康上の脅威が現れたらどうなるか、誰にもわからない」
「そういうリスクを研究したいと？」
アリエンは振り向いた。
「文明にどれだけ備えがあるかを研究したい」
カエルは笑みを浮かべた。
信じたからではなかった。
言いまわしを気に入ったからだった。
「それには研究が要る」
「データも」
「研究所も」
「計算能力も」
「政治的な隠れみのも」
「隠れみのではありません。正当な目的を持つ独立した事業です」
カエルは背もたれに身を預けた。
「では、それらに共通する目的は何です？」
アリエンは必要以上に一秒長く黙っていた。
「共通の目的を彼らが知ることはありません」
エラリオンの地図にはまだ三十の通貨が光っていた。
一つ一つに固有の価値、規則、歴史、境界があった。そのあいだで金は幾度となく姿を変えた。両替のたびに過去の一かけらを失ってゆくかのようだった。
カエルは地図を拡大した。
「ひとつの事業として資金を出すわけにはいきません」と言った。「見たところ互いに無縁な、いくつもの需要があることになる」
「会社はいくつ？」
「いくつ問いを立てたいかによります」

「最終的な所有者は？」

「登記簿のためだけに存在する者もいれば、公には名の知られぬ者もいる。別のファンドが所有するファンドもあるでしょう」

「誰が指揮するのです」

「誰も」

アリエンは相手を見た。

カエルは続けた。

「何が要るかを知っているのはあなただ。ほかの人間に見えるのは、自分が引き受けた仕事だけです。誰かに、いったい何をしていたのかと後から問うてみても、誰ひとり全体を示せはしない」

「中心がなければ？」

「ならば、ひとつの捜査で明るみに出せるものは何もない」

アリエンはまた三十の通貨に目をやった。

「そのうちいくつ使うのです」

カエルは肩をすくめた。

「それぞれの機関が別々の方を見ているのに足りるだけです」

金には意図がなかった。

だがその夜、ひとつの方向を与えられた。

それは、まだ名のない傷へと向かっていた。

第16章　傷に予算がつく

アリエンは部屋を一歩も出ず、三日間働いた。

　カーテンも引かなかった。目の前のニトラは朝から夕へ、夕から夜へ、夜からまた冷たい光の中へ移っていった。机に積もるのは飲み物の空き容器だけだった。ほかのものはすべて作業面の上方に幾層にも浮かんでいた。

最初に表題を書いた。

惑星規模の生物学的レジリエンス計画。

長いことそれを見つめて、ついに消した。

大きすぎる。

ひとつにまとまりすぎている。

目立ちすぎる。

ひとつの計画の代わりに、個別の問いの一覧を作った。

エラリオンの三つの系統では、免疫反応はどのように異なるか。

未知の生物学的脅威への抵抗力を左右する遺伝形質は何か。

通常と異なる病気の集団発生を、医療システムはどれほど早く発見できるか。

遺伝情報の記録を不正利用から守るにはどうすればよいか。

人口集団によって被害に偏りが生じたとき、社会の安定性はどう変わるか。

生物学的人工知能によって、新たな健康上の脅威を予測することはできるか。

どの問いも正当だった。

中には切迫した問いさえあった。

アリエンはそれらを二十三の事業に分けた。

それから二十三の事業を十一の分野に分けた。

データ。

モデル化。

倫理。

計算能力。

医療シミュレーション。

長寿研究。

法的枠組み。

危機対応の兵站。

遺伝情報の保護。

公衆へのリスク伝達。

インフラの回復力。

どの部分にも、成果をまとめてひとつにするとは書かれていなかった。

それは彼の頭の中にしかなかった。

四日目、ソーン家からひとりの人間が来た。アリエンに心当たりのある名は携えていなかった。ただ資金調整役と名乗った。

思っていたより若かった。顔立ちはあまりに平凡で、それ自体が職務上の資質のように思えた。

「ソーンから、おおよその規模を知りたいとのことです」と言った。

アリエンは事業一覧の閲覧を許した。

　調整役は質問を挟まず目を通した。生物学には興味がなかった。各事業について尋ねたのは、どのような機関が引き受けられるか、資金はどのような形で出せるか、保護されたデータの閲覧が必要かということだけだった。

「これは遺伝的な抵抗力の研究ですか」と、ある項目で尋ねた。

「ええ」

「長寿研究の財団から資金を出せます」

「長寿には関係ありません」

「財団はそうは思わないでしょう」

アリエンは眉をひそめた。

「結果は使いものにならなくては困る」

「あなたのお望みの結果は手に入ります。表に出る説明は別の話です」

次の事業で、調整役は手を止めた。

「医療対応のシミュレーション。保険会社の連合が引き受けられます」

「なぜ保険会社が金を出すのです」

「被害に偏りのある流行が起きたらどれだけの準備金が要るか、知っておく必要があるからです」

「私に必要なのは生物学のモデルであって、保険のモデルではない」

「先方の望むものと、あなたの望むものは両立します」

調整役は次の項目に移った。

「大規模な計算能力」

「生物学的 AI です」

「タエロンですね」

「なぜ？」

「電力料金です。あそこの計算施設では、処理能力も余っています」

アリエンは、自分の考えが会計の科目に変わってゆくのを見ていた。

ほんの数日前にはイェサイルを傷つけたいという漠然とした欲望でしかなかったものに、予算の項目が、所要時間の見積もりが、法的な形が与えられてゆく。

傷に予算がつきつつあった。

予算書に「憎しみ」という科目はなかった。

復讐にも専用の行はなかった。

そこにあったのは役務、監査、ライセンス、研究助成金、計算能力の賃借だった。

書類を隅から隅まで読んでも、恥じなければならないものは何ひとつ見つからなかった。

「総額はいくらになります」とアリエンは尋ねた。

調整役が数字を言った。

思ったより大きかった。

「それでは目立つ」

「全体としては見えません」

「誰かが受取先を突き合わせるかもしれない」

「国も違う、通貨も違う、目的も違う。捜査を始める理由でもない限り、誰がそこまで？」

「理由が生じたら？」

「そのときにはもう遅い」

調整役は悪びれもせず、穏やかに言った。二つのシステムのあいだの時間のずれを説明しているようだった。
アリエンは顔をそむけた。

隣の表示層にはまだ、マレイアからの最後の通信を保存してあった。

個人的な決断は、けっして個人的なままでは終わらない。

脅しとして彼女に送ったひと言が、この数日、法則のように思えてきた。マレイアは個人の決断をした。去った。彼のいない人生を選んだ。
イェサイルは個人の決断をした。議場で立ち上がり、ひとつの考えを口にした。

カエルは個人の決断をした。金の通う回廊を開いた。

そして今、アリエンも自分の決断をしていた。

どの決断も、ほかの人々に触れる。

違うのは、どこまで及ぶかだけだった。

「ソーンからもうひとつ質問が」と調整役は言った。

「何でしょう」

「どこまでの結果なら、よしとされますか」

アリエンはゆっくり振り向いた。

「研究の？」

「この事業の」

初めてためらいを感じた。

　イェサイルが病んでいる姿を思い描いた。死んではいない。ただ、弱っている。人を引きつけるあの静かな確信をはぎ取られている。アウレリア人が国々に保護を乞わなければならない姿を思い描いた。透明性について問いただすのをやめ、生物学上の違いを恐れはじめる市民を思い描いた。
イェサイルだって傷つくのだとマレイアが悟るところを思い描いた。

「傷つきうるという証明です」と言った。

調整役は待った。

「誰が？」

「アウレリア人が」

「イェサイル・ダヴィオンも？」

アリエンは黙っていた。

それで十分だった。

調整役は書類を閉じた。

「十日以内に最初の枠組みが整います」

彼が去ると、部屋に静けさが残った。

　アリエンは、学術目的で一般に開放されているアウレリア人の医療記録のひとつを開いた。名前も個人別の記録もなかった。人口集団のデータ、過去の疾患、そして遺伝的な表現型としての黄金の環についての記述だけだった。

彼はそれを生物学上の形質として読んだ。

しるしとしての意味をはがれた黄金の環について読んだ。

魂の光についてはひと言もなかった。

あとに残るのは、測定できるひとまとまりの特徴だけだった。

そのことが彼を落ち着かせた。

象徴に傷を負わせる決意も、先にそれをデータに変えてしまえば、人はたやすく固められる。

第17章　守るための財団

最初の財団が設立されたのは、十七年前だった。

未来の世代を守る財団という名で、遺伝性疾患が子供たちに受け継がれるのを防ぐ研究を支援するのが目的だった。

治療費の援助を受けた家族の物語を通じて、市民にも広く知られていた。

代表者たちは学校や病院に赴き、政策討論にも出席した。毎年、子供たちや医師や研究者たちの写真でいっぱいの報告書を出していた。

そこにカエル・ソーンの名はどこにもなかった。

そもそも財団は誰の所有物でもなかった。理事会があり、設立基金があり、外部監査人がいて、資産管理者との契約があった。管理者はテリニスのファンドに属していた。そのファンドを代理するのは法律事務所だった。事務所はさらに別の管理者の指示で動いていた。

鎖のいちばん先に、名はなかった。

決定する権利があった。

カエルは財団の所有者である必要はなかった。その金の行き先を決める者たちが、誰からの電話なら断れないか知っていれば足りた。

二つ目の財団は将来のパンデミックから医療システムを守っていた。

三つ目は人工知能の安全な開発を支援していた。

四つ目は遺伝情報の倫理的な取り扱いに携わっていた。

五つ目はカルス帯の戦争で被害を受けた地域を助けていた。

どれも立派な名前だった。

権力は、異を唱えにくい言葉を身にまとうのが好きだ。

保護。

安全。

未来。

子供たち。

平和。

「見えない影響力のための財団」を設立する者はいない。

ネライ・サエルは《層》の席で、ひとつの支払いに目を凝らしていた。重大事件として扱うには少額すぎて、処理済みにするには奇妙すぎた。
ヴェスタの店のひとつから出た金だった。

直接ではなかった。

　分析画面には、ヴェスタの周辺から健康を守る財団に渡った三件の支払いが示されていた。どれも合法的な目的を持っていた。ネライの目を引いたのは、その時期と、支払人が別々なのに互いにひどく似ていることだった。
「レストランが遺伝学の研究に金を出してると思うのか？」とタレン・ヴォスが尋ねた。

「何とも思っていないわ」

「それが君のいちばん多い意見だな」

ネライは時間軸を拡大した。

「この一件だけの話じゃない。他の店を見て」

タレンは隣に座った。

時間軸の上では、もうひとつ、繰り返されていることがあった。こうした支払いのいずれも、そのすぐあとに新しい研究申請が続いていた。
「ヴェスタはいいことをいろいろ支援している」とタレンは言った。

「ヴェスタが直接支援しているものはひとつもないわ」とネライは言った。
「寄付しているのは、その店で食べている会社よ」
「それじゃ、公表する報告書には載せづらいな」

「なぜ研究申請が新しく出るのは、決まってこうした寄付のあとなんだろう」

「税務対策」

「かもしれない」

「評判をよくするため」

「かもしれない」

「ヴェスタに良心の呵責を覚えてる人間がいる」

ネライが彼を見た。

「今のところ、その説明がいちばんありそうにないわね」

タレンは財団のデータを開いた。

どれも合法だった。

寄付は申告義務のある国では申告されていた。別の国では総額だけが公表されていた。財団は支出の目的を明らかにしたが、最終的な受取先まで常に明かすわけではなかった。研究助成金には、営業上および学術上の秘密を保護する規定が適用された。

「事業の一覧なら請求できる」とタレンは言った。

「でも契約書を全部は無理」

「無理だ」

「委託の内容も」

「無理だ」

「最終的に寄付をした人も」

「国によってはね」

ネライは背をもたせかけた。

「じゃあ、結局何が見えるの？」

「法が見てよいと認めたものさ」

「法が見せてくれるのは財団名、公表された目的、支援の総額。誰が決めて、誰に支払い、研究がどんな問いに答えるはずだったのかは見えない」

タレンはしばらく黙った。

「それでも、犯罪を疑う根拠はまだない」

「わかってる」

「ヴェスタが違法な資金の出所とは限らない」

「わかってる」

「財団も、本当に公言しているとおりのことをしてるのかもしれない」

「それもわかってるわ」

タレンはかすかに笑って彼女を見た。

「ならどうして、もう誰かを逮捕したそうな顔をしてるんだ」

「何ひとつ悪いことはないのかもしれない。それでも、この並びを作った誰かがいるからよ」

作業画面に、一つの銀行から返答が来た。重大な犯罪を疑うに足る事情が立証されていないため、支払いの全履歴の提供は拒む、というものだった。

ネライは二度読んだ。

疑うに足る事情があるか確かめるには、金の流れを見る必要があった。

そして金の流れを見せてもらうには、疑うに足る事情が必要だった。

タレンが財団の支援を受けた事業のひとつを指した。

「これを見て」

助成を受けたのはアウリオラの研究機関だった。アウレリア人の組織再生を支える遺伝の仕組みを調べていた。

「長寿の研究かもしれない」と彼は言った。

「かもしれない」

「今じゃ誰もがその話をしているだろう」

　医学は大きな飛躍を目前にしていた。実験的な治療ですでに老化を大幅に遅らせ、傷ついた器官を修復し、寿命を延ばすことができた。アウレリア人の再生に関する研究はどれも、自然な終わりのない生へ歩む、まっとうな道のひと区間かもしれなかった。

だがネライは、もうひとつの問いをまだ知らなかった。

「生物学関係の事業を全部マークして」と彼女は言った。

「何を根拠に？」

「資金源よ」

「同じじゃない」

「形式上はね」

「ネライ」

「印をつけるだけ。捜査を始めるんじゃない。繰り返しを探すの」

タレンは言うとおりにした。

二人の前に九つの事業が現れた。

遺伝的な再生能力。

免疫による抵抗力。
生物学的モデル化。
医療記録の安全性。
地域的な感染流行のシミュレーション。
計算システムの保護。
危機時の情報伝達。
人口集団ごとに偏って発生する疾患の保険リスク。
遺伝情報の倫理的な利用。
一つずつなら関連はなかった。
並べてみると、まだ誰も口にしていない問いを構成する部分のように思えた。
ネライはヴェスタの案件記録を開き、新しいメモを加えた。
独立しているように見える複数の財団を通じ、連携した研究分野に資金が提供されている可能性あり。共通目的は未確定。
システムがリスクの評価を求めた。
未確定。
彼女は確定ボタンを押した。
「妙なことがある」とタレンが言った。「何だと思う？」
「ありすぎるわ」
「カルス帯の支援財団と、バイオセーフティーの財団の管理者が同じだ」
ネライは記録を開いた。
本当だった。
一方の財団は野戦病院や避難民の支援に金を出していた。
もう一方は医療シミュレーションに。
両者の資産を管理するのは、テリニスの同じファンドだった。
「それで、そのファンドは？」
タレンが登記簿を調べた。
「最終所有者の情報は保護されている」
ネライは絡まり合う線を見た。

一方には戦争。

他方には生物学の研究。

その間には名のない金。

このとき、彼女はまだ少しも気づいていなかった。今見ているものが、いつか会議の前で自分が行う演説の、二つの部分になるとは。

彼女に見えていたのは財団だけだった。

そして、どの財団も何かを守るのだと言っていた。

第18章　憎しみを知らないBIO-AI

生物学のための人工知能に、顔はなかった。

昔の映画では、機械にも目があり、声があり、人に似た身ぶりがあった。信じるにせよ恐れるにせよ、人間には、知性をひとつの生きものとして眺める必要があったのだ。

現実のシステムには、もうそんな芝居はいらなかった。

アリエンが利用できるようになったBIO-AIは、タエロン各地の計算センターに分散していた。ひとつの中枢も、ひとつの居場所も持たない。生体のモデル、医学資料、匿名化された遺伝情報、病歴、生物学的過程のシミュレーションを用いていた。

人の手なら研究班が何年もかけてようやく見いだす関係を、見つけ出すことができた。

治療法の開発に使われていた。

臓器の再生に。

遺伝的なリスクの予測に。

これから生まれてくる世代を守るために。

悪ではなかった。

そのことこそ、何よりも危うかった。

アリエン自身の名は、BIO-AIの受け取る問いのどこにもなかった。

ある財団は、人を病から守るためだと言った。

寿命を研究するセンターは、その研究のためだと言った。

保険事業の連合体には、また別の関心があった。

倫理委員会の関心は、資料の取り扱いに伴う危険にあった。

BIO-AIは、届いた問いに一つずつ答えた。

それらの答えを待っているのが同じ一人の人間だとは知らなかった。

アリエンは作業卓の前に座り、答えを組み合わせていった。

初めに届いたのは大まかな結果だった。統計上の差、集団のモデル、不確実性、解釈を誤らぬための注意。
やがて、もっと深いところで結ばれているものが見え始めた。

黄金の環にかかわる生物学的な特徴のいくつかは、体の防御反応を調節する働きにもかかわっていた。弱いという意味ではない。アウレリア人の大半は健康で、ある面ではほかの血統の者たちより丈夫ですらあった。
けれど、どんな強みにも縁がある。

速やかに応える仕組みは、時と場合によっては、あまりに激しく応えてしまう。

アリエンは身じろぎもせず結果を読んだ。

機械が差し出していたのは武器ではなかった。

どこが傷つきやすいかを記した地図だった。

どの答えにも注意書きが添えられていた。

数値は集団に関するものである。

モデルの不確実性は高い。

結果を差別のために用いてはならない。

実用に先立ち、いかなる用途であれ、倫理上および法律上の審査を要する。

アリエンは注意書きを消さなかった。

ただ、結果とは別の場所にしまった。

後日、彼は研究班のひとつを率いる女性と回線をつないだ。机の上に彼女の姿が浮かんだ。中年のセレニト人だった。一生の大半を病と向き合って過ごし、そうたやすく断言はしないことを覚えた人の、穏やかな顔をしていた。
「ご質問の範囲が広がっていますね」と彼女は言った。

「計画も進んでいますから」

「初めは再生の研究でした」

「再生は免疫と関係がある」

「それで免疫は、疫病の危険と関係があると？」

「寿命を延ばす治療なら、どれも新しい病気に対する反応を変える可能性があります」
科学者はうなずいたが、納得した顔ではなかった。
「最終的な依頼主はどなたです？」
「未来の世代を守る財団です」
「それは資金の出し手です。結果を使うのは誰か、と伺っています」
「保健当局です」
「どこの？」
「必要に応じて」
「お答えになっていません」
アリエンは彼女を見た。
「惑星規模の予防研究です。法的な審査が済めば結果は共有します」
「ではなぜ、私たちは別々の依頼を受けて仕事をしているのです？」
「情報の出所によって、適用される規則が違うからです」
それは本当だった。
科学者は黙った。
「BIO-AIが、いくつかの条件を組み合わせたシミュレーションを拒否したんです」と、やがて彼女は言った。
「なぜです？」
「取り扱いに慎重を要する度合いが高すぎると判断しました」
「どういうシミュレーションですか」
「ある限られた種類の生物学的な脅威に対し、特定の集団がどのように反応するかを示しかねないものです」
「その人たちを守るつもりなら、まさにそれを知っておかなくては」
「そうかもしれません。でも、システムにはあなたの意図がわかりません」
アリエンは危うく笑いそうになった。
「なら、人間でなく、問いのほうを判断させればいい」
「問いにも、その先があります」

「研究は続けてください」

科学者の顔がこわばった。

「何ですって？」

「必要なのは各研究班の仕事です。皆さんに全体を引き受けてくれとは言っていません」

「なら、全体は誰が引き受けるんです？」

アリエンはまともには答えなかった。

「これからの危険からエラリオンを守るのが、あなたの仕事ではありませんか」

「ええ」

「理解することを拒んだものから、どうやって守るんです？」

科学者は手元の資料に目を落とした。

科学者が嫌う問いだった。慎重さはいつでも臆病だと、好奇心は無責任だと責められうる。そう思い知らされる問いだった。

「新しい倫理審査の意見書が必要です」と彼女は言った。

「財団が用意します」

「独立した機関のものを」

「もちろんです」

回線は切れた。

二日後、倫理審査室は見解を出した。追加の承認なしに結果を統合しないことを条件に、個々の集団の反応を別々に研究することを認めるというものだった。

アリエンはその文書を読んだ。

正確だった。

厳格だった。

そして、追加の承認など初めから求める気のない人間を相手には、何の役にも立たなかった。

BIO-AI は憎しみを知らなかった。

アウレリア人に危害を加える理由などなかった。

イェサイルが誰かも、その名を聞くとなぜアリエンの胸の奥が締めつけられるのかも知らなかった。

ただ、問いに答えていた。

憎しみが入り込んだのは、機械の計算ではない。

問いを選ぶ、その手にだった。

第19章　地図を持たない研究所

最初の研究所はアメニアの海岸近くにあり、組織の再生を研究していた。

二つ目は、エラリオン屈指の医科大学を擁する北方の国にあった。免疫反応の集団差が研究対象だった。

三つ目は軌道環の上。タエロンの閉鎖都市で使う生体センサーの安全性を検証していた。

四つ目はタエロンにあって、計算能力を提供していた。

五つ目は、ふつうにいう研究所ではなかった。保健危機の経済的な影響を予測する、保険の分析会社だった。

六つ目は未知の疫病が流行した際、法がどこまで非常措置を許すのかを研究していた。

どの班も、世界的な流行を起こす仕事などしていなかった。

少なくとも、各自の目の前にある書類にはそう書いてあった。

アメニアの科学者たちは再生の研究に打ち込んでいた。ほかの班の仕事は知らなかった。

北方の研究所の者たちは、自分たちの結果がいったい誰の手に渡り、何に使われるのかを知らなかった。

軌道上の班はセンサーを扱っていた。未知の病が持ち込まれぬよう、タエロンの住民を守っているつもりだった。

保険の分析担当者たちは病院の収容力、生産の落ち込み、各地域を隔離する費用を計算していた。生物学の資料は見ていなかった。

法律家たちは、保健上の非常時における各国の権限について一般的な論考を準備していた。

誰もが自分の受け持つひとかけらを知っていた。

地図を持つ者はいなかった。

アリエンは持っていた。

彼の作業卓では、それぞれの成果が層をなして積み重なった。まだ完成した仕組みの形はとっていない。可能性と、その限界と、弱い箇所とを集めたものに近かった。
食い違う結果もあった。
不正確なものもあった。
資料を追加してくれなければ続けられないという研究所も、時間をくれという研究所もあった。
アリエンは苛立ち始めていた。
カエルは違った。
「研究には研究の歩幅があります」と、ある会合で彼は言った。
「私が欲しいのは成果だ。歩幅じゃない」
「あなたに必要なのは、その成果をたどってもあなたに行き着かないことです」
カエルは資金の流れを示す図を開いた。前回会ったときから、会社の数が倍に増えていた。
「いたずらに複雑になっている」とアリエンは言った。
「見えなくなるための代価ですよ、この複雑さは」
「仲介人が一人増すたびに、口を開くかもしれない者が一人増す」
「何を話すんです？　自分の契約のことしか知らないのに」
　カエルは、ある財団の定期収入を指した。間接的にヴェスタのチェーンから入っており、レストランの客数が増えていない都市でも増加していた。
「なぜヴェスタなんだ？」とアリエンは尋ねた。
「現金商売なら、収入の一つ一つに、誰から支払われたかという名札は要りません」
「その金はどこから来る？」
カエルは彼を見た。
「知る必要がありますか？」
アリエンはしばらく黙っていた。
「ない」

「なら、お聞きにならないことです」
図の別の一画に、カルス帯から伸びる資金の流れが現れた。
「これは？」
「利益です」
「戦争の」
「商いの」
「供給業者は、国際協定で承認された政府に技術を納めています」
「そしてその技術で傷を負った人間を、今度は財団が治療する」
カエルは背もたれに身を預けた。
「世間は釣り合いのとれたものが好きでしてね」
アリエンは彼に嫌悪を覚えた。
　道義上の嫌悪ではない。もっと個人的なものだ。カエルは、人間など変数がもうひとつ増えた程度だとでもいうように、眉ひとつ動かさず苦しみを語った。アリエンにはまだ、自分がなぜこれをするのか、言い聞かせる必要があった。イェサイルが、マレイアが、アウレリア人が、昔の不正と己の屈辱とが必要だった。
カエルには何ひとつ要らなかった。
仕組みさえあればよかった。
「いつ計画は終わるのです？」とカエルは尋ねた。
「最終的なモデルがまだできていない」
「資金の拠出はいつ終わるのか、と聞いています」
「範囲を限定した健康上の危険を作り出せるかどうか、それがわかったときだ」
カエルの目の色が変わった。
「範囲を限定した」
「そうだ」
「地理的に？」
「人口集団で」

カエルは黙った。

アリエンは言葉を継いだ。

「文明を滅ぼすつもりはない。アウレリア人も特別ではないと暴くのに足る危機でいい。彼らが受け継ぐ生まれつきの特質も、代償のない贈り物ではないと。イェサイルにも同胞は救えないと」

「ほかの血統は？」

「対象を選ぶモデルになるはずだ」

「はず？」

アリエンは眉根を寄せた。

「そうなる」

カエルは研究所を配した地図に目をやった。

「自然は政治の思惑など、そうそうくんでくれませんよ」

「だから BIO-AI を使う」

「機械は確率を計算できます。世界をあなたの意図の内側に閉じ込めることはできない」

アリエンは身を乗り出した。

「イェサイルを止めたがっていたのはあなただ」

「私が止めたかったのは、彼の思想です」

「イェサイルがいなければ、声を失う」

「殉教者の声は、しばしば生きている人間よりもよく通るものです」

アリエンは立ち上がった。

「殉教者にはならない。光を約束しながら、自分と血を分けた者たちすら守れなかった男になる」

カエルはその顔を見つめた。

「今なお、あの人のためにやっておいでだ」

「エラリオンの均衡のためにやっている」

「もちろん」

その一言は侮辱のように響いた。

アリエンは挨拶もせずに出ていった。

その夜、ある研究所で新たな一連のシミュレーションが終わった。班の責任者は結果を読み、結論は不明確だと記した。さらなる研究と、より厳しい監督を勧告した。

報告書を受け取ったのは財団だった。

財団はそれを顧問会社に回した。

顧問会社は依頼主のために要約版を作った。

アリエンのもとには数表が届いた。

警告は別添資料に残った。

誰も嘘はつかなかった。

誰も結果を書き換えなかった。

真実はただ、いくつもの手を渡った。最後には、末端にいる人間が見る必要のあったものだけが、そっくり残った。

研究所は仕事を続けた。

それぞれが自分の明かりの下で。

そのあいだには闇があった。

そしてその闇で、ただ一人の人間が地図を手にしていた。

第20章　マレイアの疑い

マレイア・リオレンは、最初の申請にはとくに目を留めなかった。

アウレリア人の再生機構に関する匿名化データの利用申請だった。研究計画は正式な承認を受け、倫理審査の意見書も、名の知れた財団の資金も得ていた。

医療記録保管所には、似たような申請が何百件も届いていた。

医学の変わる速さに、それを律する法律は追いつけなかった。研究者は老化を食い止め、傷ついた臓器を再生し、かつての世代には想像もつかなかったところまで寿命を延ばす道を探っていた。

この研究にとって、アウレリア人の家系にまつわる記録はことさら貴重だった。

並外れて効率のよい再生機構をもつ家系もあれば、ある種の疾患の発生率が低い家系もあった。数百年をさかのぼる家系の記録は、ふつうの医療データベースでは望めない精度を備えていた。

マレイアは最初の申請を承認した。

二件目が届いたのは九日後だった。

別の国からで、新しい寿命延長療法に伴う免疫反応の変異についてだった。

こちらも必要な書類はすべてそろっていた。

三件目は生物学的データの安全性を調べるため。

四件目は保健危機における集団間の差を調べるため。

五件目は法律の研究で、データそのものを求めてはいなかった。非常時にどのような条件ならデータを開示できるか、その条件の記述を求めていただけだった。

五件目の申請に、最初の申請で見たのと同じ少し耳慣れない言い回しがなければ、マレイアもこれらをひとまとまりには考えなかっただろう。

特定の家系との関連が実証可能な、経時的に安定した遺伝指標。

専門的に誤った表現ではない。

ひどく珍しい組み合わせでもない。

妙なのは、書類上は何の関係もない二つの組織が、同じ言い回しを用いていることだった。

マレイアは前の申請を開いた。

三件に同じ言い回しがあった。

いずれも違う箇所に。

あるときはデータの説明に。

あるときは法的根拠を述べる箇所に。

あるときは技術付録に。

まるで、誰かがひとつの文を切り分け、別々の書類にしのばせたようだった。

そこから数時間、彼女はメタデータを照合した。保護された分析の中身には触れない。閲覧の権限がなかった。見えるのは申請者、求められたデータの種類、意見書を発行した機関、そして表向きの目的だけだった。

それぞれの計画を追っていくと、アウレリア人の家系、再生、免疫、医療上の危機に対する反応がつながった。

マレイアは自分だけの地図を描いた。

ネライの地図のように金を追うものではない。

生物の地図だった。

一方の端には家系の記録。

もう一方の端には仮想の保健危機。

そのあいだには、どこでも触れ合わないまま近づいていくいくつもの問い。

「また遅くまで仕事かい」

背後でイェサイルの声がした。

マレイアはびくりとした。入ってきたのに気づかなかった。

小さな資料室の戸口に彼は立っていた。飾り気のない濃い色の服を着て、温かい飲みものを二人ぶん持っていた。

「どうやってここへ？」

「ドアから」

「記録保管所の保護区画に、ってこと」

「入口の部屋までだよ。ここへ通してくれたのは君だ」

机に目をやった。集中していて、通知に気づいていなかった。

イェサイルは飲みものをひとつ渡した。

「ネライによると、君が食べるのを忘れてるときには、せめて食べものらしく見える何かを持っていくべきなんだそうだ」

「二人で私の話をしてるの？」

「惑星の安全保障にかかわる場合だけね」

マレイアはかすかに笑ったが、すぐに真顔に戻った。

イェサイルは机の上に浮かぶ何層もの表示を見た。

「どうかした？」

「わからないわ」

「ネライみたいな答えだ」

「家系かしら」

彼は彼女の向かいに腰を下ろした。

この数週間、イェサイルは医療や市民生活をめぐる協議の席に、以前にも増して招かれるようになっていた。ニトラでの演説は今も広まり続けている。討論会にも大学にも市民集会にも呼ばれた。まだ名もない運動の、彼こそ指導者だと見る者もいた。

本人は認めなかった。

認めまいとすればするほど、人々は彼を信頼した。

「見せてくれ」と彼は言った。

マレイアはひとつずつ申請の内容を説明した。イェサイルは口を挟まずに聞いた。

「関係があるかもしれないのか？」

「いつまでも眺めていれば、何だって関係があるように見えてくるわ」

「答えになってないな」

「あるかもしれない。でも、どういう関係かはわからない」

「同じ依頼主？」

「違う」

「同じ財団？」

「違う」

「同じ研究所？」

「違う」

「じゃあ、何が同じなんだい？」

マレイアは生物学の各分野を指した。

「向かっていく先」

イェサイルは続きを待った。

「考えてみて」と彼女は続けた。「誰も問いの全体を聞かされていないの。みんなが目の前の仕事を済ませたあと、その答えを受け取る人がどこかにいるとしたら」

「その人は何を手に入れる？」

「それは、その人しか知らない問い次第よ」

イェサイルは地図を見つめた。

「誰かがアウレリア人の弱みを探していると思うのか？」

マレイアはすぐには答えなかった。

「そういう悪用もできる研究のために、お金をもらっている人があまりに多い、と思ってる」

「誰から？」

「それが見えないの」

マレイアはデータの一部を閉じ、彼を見た。

仕事部屋のやわらかな光のなかでは、その瞳の黄金の環はほとんど見えなかった。注意して見なければ気づかない、細い一本の線。

アリエンは彼を憎んでいた。

ふいにそう思った。

あの部屋でのアリエンの顔、自分の手首をつかんで締めつけた手、イェサイルの名を口にするときの言い方を、マレイアは思い出した。

それから、あのメッセージを。

個人的な決断は、けっして個人的なままでは終わらない。

「マレイア？」

「アリエン」

イェサイルは動かなかった。

「彼がどうした？」

「わからない」

「裏にいると思うのか？」

「そう思う根拠はないわ」

「でも、頭に浮かんだ」

「ええ」

イェサイルはしばらく黙っていた。

「金融組織に身を置いているから？」

「人間を仕組みとして見る人だから。それに、あの人の声から怒りが消えたとき、私は前よりも怖くなったから」

イェサイルは飲みものを机に置いた。

「ネライに話そう」

「証拠もなしに？」

「告発するんじゃない」

「きょうだいだからわかる。証拠のない疑問を見せたら、ネライは証拠を探し始める」

「それが彼女の仕事だろう」

マレイアは彼を見た。

「もし私が間違っていたら？」

「何も出ないさ」

「調べて、本当に何も出ないことはないわ。ほんの少しでも、信頼に傷がつく」

イェサイルはうなずいた。

「だからアリエンの名は出さず、計画だけを見せればいい」

マレイアはまた地図を見た。

「どれにも後ろ暗いところがなかったら？」

「確かめて、調査を終える。患者の名前は出さずに」

「医療情報を、誰にでも持ち出せる証拠にしたくはないの」とマレイアは言った。

「同感だ。ネライには公開されている部分だけを送ろう」

「でも、あなたのあの言葉はもうひとり歩きしてるわ。あなたが意図もしなかったことを正当化するために使われてる」

「知ってる」

「政治家の医療情報まで公開しろという人がいるわ。プライバシーはやましい人間の隠れ蓑でしかないという人も」

イェサイルはうつむいた。

「どこに一線を引くか、はっきり言い足りなかったかな」

「ちゃんと言ってた。人は自分に要るところだけ聞くのよ」

しばらく二人のあいだに沈黙が残った。

やがてマレイアは計画の一覧だけを残して、すべての表示を閉じた。

「計画名と申請者と、公になっている資金源だけ送るわ」

「それから、問いをひとつ」

「どんな？」

イェサイルは光の消えた地図を見た。

「別々に見えるこれらの仕事がいつかひとつになるように、金を出しているのは誰か」

マレイアはメッセージを作った。

宛先　ネライ・サエル

件名　複数の研究申請の関連性について

本文にはこう書いた。

　不正の証拠ではありません。ただ、これらの計画の資金は出所が同じなのか、あるいは共通の決定権者がいるのかを知る必要があります。個々の計画には筋が通っています。そろえてみると、ある問いが浮かびます。誰がそれを問うたのかわかるまで、私は口にしたくありません。

一覧を添えた。

送る前に、ためらった。

イェサイルは彼女に触れなかった。どうすべきかも言わなかった。

ただ、そこにいてくれた。

マレイアはメッセージを送った。

《層》の建物で、ネライの名のそばに通知の灯がともった。

数千キロの彼方では、研究所のシステムがひとつの部分解析を終えた。結果は資金を出した財団に自動転送された。

タエロンでは、最終依頼主の名が記されていない計算処理が終わった。

テリニスでは、基金の管理者が次の支払いを承認した。

ヴェスタの一店舗では誰かが現金を入金し、銀行はそれを通常の売上と分類した。

そしてアリエン・コルヴェトは自室に独り座り、ほかのどこでも一枚の地図になることのない線が、目の前で互いに近づいていくのを見ていた。

病はまだ存在しなかった。

最初の熱さえまだなかった。

閉鎖された街はひとつもなく、病院の隔離室の透明な壁の向こうに家族を残していかねばならない者もいなかった。

今あるのは金だけだった。

問い。

データ。

計算。

そして、やがてどんな文章の一節になるのかも知らずに、一人ひとりが小さな仕事をひとつ果たした、大勢の罪のない人々。

惨事にはまだ肉体がなかった。

けれど、すでに帳簿はあった。

第21章　盲点の試験

マレイアのメッセージをネライが開いたのは、届いて七分後だった。

まだ《層》にいた。ほとんどの職員は帰ったあとで、廊下に残っているのは夜勤の分析班と警備システムと、なぜこの問いが自分を家に帰してくれないのか、自分でも説明のつかない人間だけだった。

ネライはその最後の組に属していた。

一度、メッセージを読んだ。

それから、もう一度。

三度目にはマレイアの名を隠し、計画の一覧だけを目の前に残した。

再生の研究。

免疫の変異。

集団の遺伝形質。

遺伝情報の安全。

一様に広がらない疫病に医療制度がどう応えるか。

非常時に家系記録を閲覧するための法的条件。

どの項目にも固有の申請者があり、目的があり、資金源があった。ひとつとして疑う理由にはならなかった。むしろ現代医学で最も切実な問いに属するものさえあった。

ネライは金融情報の階層を開いた。

モデルが示した名義上の支払者はばらばらだった。だが、どの計画でも、金を動かす決定権を突き合わせるのに必要な欄に限って、隠されていた。

空白にはそれぞれ別の法的根拠があった。公開契約からたどれる枝が一本見つかっても、その次の枝は保護された基金で途切れた。計算卓はそれらを隣り合わせに映したが、足りないデータを推測で埋めることは許されていなかった。

ネライは見られるかぎりの層を重ねた。

机に地図が浮かんだ。

犯罪の地図には見えなかった。
割れたガラスのようだった。
「まだいたのか？」
タレン・ヴォスが上着を肩にかけて戸口に立っていた。
「いいえ」とネライは言った。「たったいま家に帰ったところ」
タレンが入ってきた。
「これが君の帰宅の作法か」
「静かに」
彼は地図を見た。
「何を探してる？」
「わからない」
「結構。僕のいちばん好きな部類だ」
ネライは添え書きを外して、マレイアの一覧を彼に送った。
タレンは腰を下ろし、ゆっくりとひとつずつ項目に目を通した。
「全部、医療の研究だ」
「全部じゃない」
「わかった。医療の研究と法律の分析、それから危機の予測」
「共通点は？」
「アウレリア人」
「もっと正確に」
タレンは考え込んだ。
「アウレリア人の遺伝形質」
「もう少し正確に」
しばらく沈黙があった。
やがて彼は時間軸を指した。
「形質だけじゃない。それに対する社会の側の反応もある」
ネライはうなずいた。

「アウレリア人がどういう人々か、それだけを尋ねているんじゃない。保健危機が起きたとき、文明はどうやって彼らの状況を把握するのか、それも尋ねてる」
タレンは背もたれに寄りかかった。
「人を守るための研究かもしれない」
「ええ」
「寿命を延ばす治療に関係してるかもしれない」
「ええ」
「自然に発生する疫病への備えかもしれない」
「ええ」
「それとも、君が口にしたくなかったものかもしれない」
ネライは彼を見た。
タレンはマレイアの最後の一文を指した。
「彼女が口にしたくないという問いだ」
ネライはメッセージを閉じた。
「いちばん悪い説明を出発点にする権利は、私たちにはない」
「だが、その説明を確かめる権利はある」
「データがあればね」
「あるのか？」
ネライは地図の暗がりを見た。
「データが見えないというデータならある」
《層》は国境を越える金の動きを照合できたが、手当たり次第に口座を開いて見られるわけではない。保護された資金の流れにはいちいち法的根拠が要る。基金が変われば別の申請書が、国が変われば別の法文上の言い回しが要った。
ひとつの問いが、そうして二十件もの申請に分かれることがあった。
どの申請にも、その申請固有の根拠が必要だった。
いまネライに欠けているのは、まさしくその根拠だった。

「決定権を持つ人間に重なりがあるか調べて」と彼女は言った。

タレンは理事、外部顧問、監査人、基金の管理者を突き合わせた。
何千ものつながりが出た。

意味のあるものもあった。

大半は違った。

同じ監査人が何百もの財団を担当していた。同じ法律事務所が国際基金の半分を代理していた。管理者たちがいくつもの理事会に名を連ねているのは、それがまさに彼らの仕事だからだった。
資料を開けば開くほど、つながりは増えた。

つながりが増えるほど、どれに意味があるのかは見分けにくくなった。

「《層》の難しさはこれだ」とタレンは言った。「惑星ひとつを見渡せば、誰と誰だって、契約書をいくつか挟んだだけの仲になる」
「だから、つながりを探してるんじゃない」

「何を探してる？」

「向かっていく先」

ネライは表示を切り替えた。

会社名を消した。

計画名を消した。

国名を消した。

残ったのは、対価を払って求めた業務の種類だけだった。

家系情報の閲覧。

生物学的な計算。

研究所での検証。

医療用センサー。

病院の対応の予測。

非常時の権限の分析。

一様には生じない健康上の危険に社会がどう反応するか、その評価。

タレンはもう軽口をたたかなかった。

「こうして見ると、たちが悪いな」
「こうして見ると、違って見える」
「金を払ってるのが一人だとわかれば――」
「わからない」
「誰かが結果をまとめてるとわかれば――」
「わからない」
「何に使うのかがわかれば――」
「わからない」
ネライは目を閉じた。
会議でイェサイルが言った一言が、頭のなかで聞こえた。
取り分は手探りでは計算できない。
あのとき、彼が話していたのはベーシックインカムのことだった。
価値のこと。
公正のこと。
いま目の前には、社会が目を閉ざしたまま算定しようとしている別のものがあった。
危険。
「最終的な受益所有者の情報を、早急に開示するよう申請しよう」とタレンは言った。
「どういう根拠で？」
「計画が並行して進んでいる」
「並行は犯罪じゃないわ」
「遺伝情報が悪用されるおそれ」
「悪用をひとつも立証していない」
「じゃ、どうすればいい？」
ネライは答えなかった。
惑星の時間帯を三つ隔てたところでは、アリエン・コルヴェトが報告書を前にしていた。たいていの人なら開こうともしないほど退屈な題がついていた。

集団間で偏りのあるリスクに直面した際の医療機関の連携遅延に関する分析。報告書をまとめたのは、危機管理を専門とするクサノスの会社だった。分析担当者は生物学の結果もアウレリア人の家系情報も見たことがない。与えられたのはひとつの仮想状況だけだった。
未知の疾患。
複数の国。
ある遺伝的集団に偏った発生。
異なる情報保護の規則。
異なる医療制度。
異なる政治文化。
彼らの仕事は、発生地域が偶然に偏ったわけではないとエラリオンが気づくまで、どれほどの時間がかかるかを見積もることだった。
分析に当たった者たちは、自分たちの仕事を公共への奉仕と考えていた。
本物の病が見つける前に、仕組みの弱いところを見つけたかったのだ。
結果は気の重いものだった。
医療用の機械は、その偏りに早くから気づくだろう。
だが、病院がそれを見るのは、自院の患者についてだけだ。
家系の記録には特定の一族での症例の増加が刻まれるだろう。だが法的根拠なしには、公衆衛生のデータと照合することは許されない。
各国は生のデータを共有するのをためらうだろう。
ある国は患者を守るために。
別の国は自国の評判を守るために。
政治家は、独立した複数の情報源から裏づけを得るまで、遺伝上の血統の名を口にしようとしないだろう。
差別をめぐる過去の争いを思えば、もっともな決まりだった。
だがこの仮想事例では、時間を失うことを意味した。
アリエンは、それぞれの段階に要する時間の見積もりを読んだ。
機械が初めて異常を疑う。
最初の地域報告。

最初の国家間の注意喚起。

遺伝的な結びつきが初めて公に語られる。

最初と最後の点のあいだには、間があった。

数日間。

モデルによっては、それ以上。

アリエンは背もたれに身を預けた。

仕組みのどの部分も、作られた目的に寸分違わず働いていた。

人工知能は規則性を見いだし、医師は患者を守った。

法律は私生活を守った。

ほころびは、それらが一緒に働いて初めて生じた。

機械は規則性を読み取った。

医師は患者を守った。

記録保管所は家族を守った。

官吏は法の秩序を守った。

政治家は社会を混乱から守った。

そして、それらが守ろうとしたことからこそ、誰ひとり敢えて真実のすべてを口にしない時間が生まれた。

報告書の欄外には分析担当者の注意書きがあった。

　被害の偏りを、それ以上の検証なく遺伝的な出自との因果関係と解してはならない。特定の集団を早計に名指しすれば、烙印を押す行為や暴力、医療援助の拒否を招きかねない。

アリエンはその一文で目を留めた。

道義にかなっていた。

そして、役に立った。

カエルは予告なしにやってきた。

部屋だけでなく、そこに暮らす者の時間まで自分のものだと言わんばかりに、アリエンの住まいに足を踏み入れた。

アリエンは報告書を閉じなかった。

カエルが題を読んだ。
「対応のモデル化ですか？」
「安全性の監査だ」
「もちろん」
カエルは結果に目を通した。
表情に変化はなかったが、読む速さはいつもより遅かった。
「医療システムはこれに気づくんですね」
「気づく」
「早いうちに」
「機械はな」
「それでは計画はうまくいかない」
アリエンは次の箇所を指した。
「気づくことと、動くことは別だ」
カエルは時間軸を見つめた。
「すると、試しているのは病ではない」
「違う」
「目にしたものを名指しする、組織の勇気を試しておいでだ」
アリエンはかすかに笑った。
「試しているのは規則だ」
「規則は過去の失敗から生まれたものです」
「そして次の失敗を生む」
カエルは彼のほうを向いた。
「仕組みの弱さを、ご自分の意図を正当化する理由と取り違えないよう、お気をつけなさい」
「仕組みには意図などないと教えたのはあなただ」
「ありません。あなたにはある」
アリエンは報告書を閉じた。
「何をしに来た？」

カエルはしばらく彼を見ていた。
「財団に、《層》から問い合わせが来ました」
机の上でアリエンの指が止まった。
「どういう問い合わせだ？」
「今はまだ一般的なものです。受益所有者、管理者同士のつながり、資金源の重なり」
「ネライか」
「おそらく」
「何かつかんでいるのか？」
「見えていないことに気づいています」
アリエンは立ち上がった。
「それでは足りない」
「自分の目が見えないと気づくことが、見え始めることでもあるのです」
「止められるか？」
「返答を遅らせることはできます。当局に質問を禁じれば、私がそれを恐れていると明かすことになります」
アリエンは窓辺に歩み寄った。
眼下にニトラが広がっていた。何千もの灯、何百万もの人々、交通、エネルギー、生産、天候、健康、安全を測る仕組みの数々。
ほとんどすべてが目に入る文明。
自分の死を悟るまでにどれだけかかるかを、いままさに誰かが測っているとは知らぬ文明。
「マレイアだ」とアリエンは言った。
カエルは答えなかった。
「事を起こしたのは彼女に違いない」
「なぜ？」
「家系の記録に通じている」
「あなたのこともご存じだ」

アリエンはさっと振り向いた。

カエルは静かに言葉を継いだ。

「暴力を振るう人間を知っていれば、分析官に先んじて、その意図が見えることもあります」

「私は暴力など振るわない」

カエルは彼を見た。

そのまなざしにさげすみはなかった。

そのほうがよほどこたえた。

「私は違う」とアリエンは繰り返した。

「でしたら、あなたの下した決定を誰かが調べても、差し支えはありませんね」

「私の下した決定は保護されている」

「まさしくそれを、あなたはあてにしていらっしゃる」

カエルは出ていった。

アリエンは窓辺に残った。

作業卓に、再び分析結果が開いた。

数日。

見えた瞬間から、それを口にしてもよいと自らに許す瞬間までに、文明が失うことになる時間だった。

そのころ《層》では、ネライが最初の照会を送った。

テリニスへ。

クサノスへ。

アメニアの二つの国へ。

タエロンの計算拠点を管轄する当局へ。

保護された情報の開示を認める理由は国ごとに異なるので、どの照会も法的な文言を変えてあった。

最初の回答はその夜のうちに届いた。

本計画は現地法に準拠している。

受益所有者は開示の対象とならない。

取引関係は保護の対象である。

演算に、個人を直接特定しうる情報は含まれていなかった。

差し迫った危険は立証されていない。

タレンはひとつずつ読んだ。

「みんな正しい」

「ええ」とネライは言った。

「それでも君は信じていない」

ネライはマレイアの生物学の地図と自分の金融の地図を見た。

二枚は隣り合っていた。

完全に重ねることは許されなかった。健康、財産、研究、商取引、私生活を守る法律が、二枚のあいだに立っていたからだ。

どの法律も、守るに値するものを守っていた。

そのときネライは、数年後には全惑星を前にして繰り返すことになる問いを、初めて自分に向けた。

私たちを守るものがひとつ残らず寄り集まり、本来そこから私たちを守るはずだった人間の隠れ家になったら、何が起きるのだろう。

答えを出すにはまだ早かった。

けれどアリエンはもう答えを知っていた。

時間が生まれる。

多くはない。

ただ、事足りるだけの。

第 22 章　例外

どんな法律にも境界がある。

そしてほとんどすべての境界には、扉がある。

ときにそれは、緊急の公益という名で呼ばれる。

ときには研究上の必要性。

ときには生命の保護。

ときには国家の安全。

犯罪者を通すために扉が設けられるのではない。厳格に従えば益よりも害のほうが大きくなる事態を、あらかじめすべて見通せる法律などないから設けられるのだ。

病院が燃えていれば、救急隊員は医療情報の引き継ぎにあたって患者一人ひとりに同意を求めたりはしない。

疫病が迫っていれば、研究所は平時の研究よりも速やかに情報を交換できる。

タエロンの生命維持にかかわる設備が故障すれば、技術者はふだんなら見られないデータに一時的にアクセスできる。

例外というかたちで、法律は、生きることのほうが規則より入り組んでいると認めていた。

カエル・ソーンは、扉にはもうひとつ性質があるのを知っていた。

どちらの側からでも開けられる。

ニトラ南端の法律事務所に、九人の専門家が集まっていた。彼らは自分がカエルのために働いているとは知らなかった。表向きは、惑星保健レジリエンス財団が雇った人々だった。将来、生物学上の危機が訪れた際に研究機関が連携するための、おおまかな枠組みを用意することになっていた。

仕事は分担されていた。

第一の班は、匿名化された家系情報を閲覧する条件を調べた。

第二の班は、研究成果の惑星間移転を。

第三の班は、部分的な検証だけを行う研究所の責任を。

第四の班は、医療システム開発における営業秘密の保護を。

第五の班は、危険にさらされた地域を隔離する際の国家の権限を。

違法な仕事はひとつもなかった。

それどころか。

過去の疫病の経験から、こうした分析はむしろ求められていた。エラリオンには豊富な技術があったが、その法体系はなお、病が政府の決定よりゆっくり広がっていた時代に形を取ったものだった。
法律家のチームを率いていたのはイリラ・セン（Ilyra Senn）だった。

セレニト人で、生涯を医療法に捧げてきた。若いころ、地域の流行病で父を亡くしていた。そのとき二つの病院は、法的根拠について合意できず、情報の共有を拒んだのだった。
悪い規則は病と同じように人を殺しうると、彼女は信じていた。

だからこの仕事を引き受けた。

「私たちの役目は」と初会合で彼女は皆に言った。「危機のさなか、人が死んでいくかたわらで四十の国が互いに申請書を送り合う、そんな事態を防ぐことです」
その場で異を唱えられる者はいなかった。

数週間後、期限つきの例外措置を定める枠組みができた。

データの閲覧は特定の目的に限る。

利用はそのつど記録する。

許可された範囲を超えてデータを統合してはならない。

結果は匿名化する。

計画の終了をもって、例外措置は効力を失う。

イリラはもうひとつ条件を加えた。

単一の集団上または保健上のリスクのうち、相互に関連する部分を複数の計画が研究する場合、それらを合わせた目的を審査する機関を置かなければならない。
その文言を草案に盛り込み、依頼主に送った。

二日後、文書が戻ってきた。

条件の文言が変わっていた。

複数の計画を同一の依頼主が統括し、共通の目的を追求していると立証された場合、所管機関はそれらを合わせたリスクを審査することができる。

イリラは二つの文を並べた。

違いはわずかだった。

彼女の案では、客観的に見て計画が同じ方向に向かっていればよかった。

新しい案では、まず共通の依頼主がいることを立証する必要があった。

所有構造が分散しているために不可能なのは、まさしくその立証だった。

「ここを書き換えたのは誰？」と彼女は尋ねた。

事務担当者が文書の履歴を開いた。

「財団の外部審査員です」

「名前は？」

「契約で保護されています」

「法律家？」

「国際投資の顧問です」

イリラは背もたれに身を預けた。

「投資の側が医療上の例外措置に口を出す筋合いはないわ」

「もとの文言では無関係な計画が関連づけられ、独立した研究に害を及ぼすおそれがある、とのことです」

もっともな反論だった。

似た研究を何でも自動的に一括審査の対象にすれば、情報の一極集中を招き、医学の歩みを遅くし、ただ同じ分野を研究しているというだけで科学者に疑いをかけることにもなりかねない。

イリラは変更を退けた。

財団は新たな理由を添えて差し戻してきた。

イリラは再び退けた。

三度目には、問題の箇所は次の段階の検討に回すと通告された。

残りの枠組みは承認された。

保護措置は撤廃されなかった。

ただ、先送りされた。

《層》の建物では、ネライのもとに最初の基金から返答が来た。

求められた情報は個々の取引の評価に不可欠ではないため、受益所有者を開示することはできない。

別の国からは、資金提供を受けた各計画のつながりは漠然としすぎているという返答が来た。

タエロンからは、計算センターは匿名化モデルを扱っただけで、成果の最終利用者は把握していないと知らせてきた。

「どうしてセンターが自分の顧客を知らないの？」とマレイアは尋ねた。

彼女の像がネライの机の上に浮かんでいた。家にいるのに、後ろでは家系記録の画面が何層も開いたままだった。彼女もまた、夜更けまで仕事をしていた。

「仲介者なら知ってる」とネライは答えた。

「その仲介者は？」

「業務を発注した会社を知ってる」

「その会社は？」

「財団の委託を受けてた」

「その財団は？」

「理事会がある」

「ネライ」

「わからないのよ」

マレイアは目を伏せた。

「じゃあ、どこにもたどり着けてない」

「いいえ。少なくとも四つの計画は、それぞれ別の組織を通して進められたのに、書類の文言が似通っている。資金の一部は、ヴェスタの件でも出てきた基金を経由している。いくつかの計算はタエロンで行われた。ここまではわかった」

「それと、何も後ろ暗いところはない可能性もある、ということ」

「ええ」

「アリエンの名前は？」

ネライはひと呼吸置いた。

「どこにもない」

マレイアはうなずいたが、その顔に安堵は浮かばなかった。

「なぜあの人が頭に浮かぶのか、詳しく話して」とネライは言った。

「もう書いて送ったわ」

「人間を仕組みとして知っている人だ、と書いてあった」

「そうよ」

「それでは足りない」

「わかってる」

「具体的なことが要るの」

マレイアは立ち上がり、窓辺へ行った。背後に夜のニトラが見え、橋の灯が川をいくつにも区切っていた。

「一緒にいたころ、あの人は何もかも知りたがった。私がどこにいるか。誰といるか。なぜそんなことを言ったのか。なぜ黙ったのか。知識が欲しかったんじゃない。自分の描いた絵のなかに収められないものが、何ひとつないようにしたかったの」

ネライは黙っていた。

「私が出ていくと、初めは懇願した」とマレイアは続けた。「それから怒った。それから私を責めた。最後に、それがやんだ」

「連絡が来なくなった？」

「違う。何かを取り戻したがっている人の声じゃなくなったの」

「じゃあ、どんな声？」

マレイアは振り向いた。

「いつか私に思い知らせると、もう決めている人の声」

ネライはその言葉を書き留めた。

「イェサイルのことを言ってた？」

「ええ」

「脅した？」

「はっきりとは」

「マレイア」

「イェサイルのような男は、自分たちの決断がみんなのものだという顔をして、責任はほかの人に負わせるのだって。アウレリア人が特別だというなら、その代償はいずれ明らかになる、と言ったわ」
映像に入らない位置に座っていたタレンが顔を上げた。

ネライは黙っていて、と目で合図した。

「なぜもっと早く言わなかったの？」と尋ねた。

「別れた相手を女が疑うたび、それが捜査になるのは嫌だったから。それに、よその人の計画に自分の恐怖を重ねてるだけじゃないかって、それも怖かった」
「恐怖は証拠じゃない」とネライは言った。

マレイアはうなずいた。

「でも、向かう先を教えてくれることはある」

「ええ」

ネライは慎重にその一言を口にした。

彼女の仕事には、二種類の過ちがあった。

ひとつは、何もしていない人を疑うこと。

もうひとつは、表にはできない個人の経験に根ざしているという理由だけで、疑いを退けること。
分析は偏見から人を守るためにある。

だが、暴力が帳簿に載るまでは、暴力を知る人の経験には何の価値もない、というふりをするためにあるのではなかった。
「アリエンの捜査は始めない」とネライは言った。「今はまだ」

マレイアは唇を結んだ。

「でも、各計画を合わせたリスクの評価は始める。彼の名は出さずに」

「仕組みの上で何も見えなかったら？」

「そのときわかっているのは、いまわかっていることだけよ」

「見えない、ということ」

「ええ」

通話が終わると、タレンが近くに寄ってきた。

「君は彼だと思ってる」

「マレイアがあの人を恐れるには具体的な理由がある、と思ってる」

「答えになってない」

「答えがないから」

ネライはリスクを伴う関係について一時的な評価を行うための申請書を整えた。

金融メタデータ、研究目的、アウレリア人の記録へのアクセスに関する公開情報を突き合わせる許可を求めた。

医療情報そのものには触れない。

生物学的な研究結果は引き続き保護する。

ネライが知りたかったのは、問いに金を出したのは誰か、結果を結びつける権利を得たのは誰か、それだけだった。

上位の評議会に申請を送った。

回答は朝に来た。

法的根拠が不十分である。

対象となる計画はそれぞれ異なる法域に属し、共通の目的を追求していることを示す証拠はない。

ネライはその一文を何度も読んだ。

共通の目的を追求していることを示す証拠はない。

だが、計画同士を結びつける権利を得ずには立証できないのが、まさにその共通の目的だった。

「堂々巡りだ。円を描いてる」とタレンは言った。

「いいえ」

ネライは立ち上がった。

「円なら少なくとも、ひとつの中心がある。これは中心などないふりをする仕組みよ」

そのころ法律事務所では、イリラ・センが枠組みの最終案に署名していた。

満足はしていなかった。

添付の意見書にこう記した。

最大のリスクは、個々の例外措置が悪用されることではない。合法な例外措置がいくつも重なり、その共通の目的がいかなる監督機関の目にも見えないことにある。

意見書は保管された。

財団はそれを受理した。

法的な枠組みは承認された。

例外という扉が開いた。

どれにも正当な理由があった。

ひとつ目は、研究班がさらに匿名化データを利用することを認めた。

二つ目は、事業モデルを開示せずに、タエロンとエラリオンのあいだで計算結果を移転することを認めた。

三つ目は、機密を要する安全監査の依頼主の身元を保護した。

四つ目は、研究所が計画の全体を知らずに部分的な結果を検証することを認めた。

五つ目は、将来の保健上の非常事態に備えて物流の余力を確保した。

どの例外も、それ一つで惨事への道を開いたわけではない。

一列に並んだとき、初めて道が開いた。

扉。

その向こうにまた扉。

さらにその向こうにも。

そしていちばん奥にいたのは、どの鍵にも名の刻まれていない人間だった。

第 23 章　最後の支払い

最後の支払いは、いちばん少額だった。

最後の支払いの行き先も、ずっとありふれたものだった。

受取人は研究所でも計算センターでも、遺伝情報の管理者でもなかった。

生物学の研究費でも、法的分析や医療用センサーの代金でもなかった。

緊急輸送の待機枠を有効にするための事務手数料だった。

金額はヴェスタの大きめの店舗の一日の売上にも満たなかった。

送金したのはサランスタン登記の会社だった。

受け取ったのは軌道環の輸送調整業者。

目的は合法だった。

将来の医療輸送に備えた枠の予約。

病院も保険会社も国も財団も、こうした予約を利用した。危機が起きたときには機材や薬、診断装置、人員を速やかに送り届けられるという保証だった。何の変哲もない支払いだった。

ただひとつ、それがなければアリエンの地図の最後の一片は、つながらないままだった。

ソーン家の財務調整役が、確認の知らせを送ってきた。

すべての契約層が有効になりました。

アリエンはメッセージを読んで閉じた。

かつてマレイアと暮らした部屋に座っていた。

彼女が出ていったあと、彼女の選んだものはほとんど運び出させた。一ぺんにではない。初めに植物。次に窓辺の絵。それから、いつも彼がぶつかっていた低いテーブル。悪いのはテーブルじゃない、あなたが前を見て歩かないからだ、とマレイアはよく言っていた。

ひとつだけ器が残った。

何の変哲もない濃紺の器で、縁は少しゆがんでいた。ニトラの旧市街の市場でマレイアが買った。完全じゃないのにそれを隠そうともしない、そういうところが好きなのだと言っていた。
アリエンは一度も使わなかった。
彼女を思い出させるもののそばでも生きていける、その証しとして置いていた。
本当は、その逆の証しだった。
壁に通知がともった。
マレイア・リオレンが面会を希望しています。
アリエンは長いあいだそれを見つめた。
やがて、ほほえんだ。
メッセージを開いた。
アウレリア人に関する研究計画について、あなたと話す必要があります。北岸の公共庭園でどうでしょう。明日、太陽が沈んだあとに。
頼みごとをする調子はなかった。
怯えも。
アリエンはもう一度読んだ。
隙というもののまるでない文章を書く彼女の力には、いつも感心していた。一語一語をまず自分の前に置き、あらゆる角度から眺め、そのうえで初めて人目に触れるのを許すかのようだった。
承諾した。
翌日、北岸の庭園にはほとんど人がいなかった。
　そこにはエラリオンのあらゆる地域から運ばれてきた木々が育っていた。人工的に調整した土壌を要するものも、厳密に保たれた湿度や土地の冬をしのぐ覆いを要するものもあった。自然のなかでは隣り合って育つはずのないものにさえ、文明はともに生きる場所をつくってやれる。庭園はその証しだった。
マレイアは水辺で待っていた。
アリエンが近づいてくると、彼の両手を見た。

握りしめてはいなかった。
足を速めもしなかった。
彼女が最も恐れる表情をしていた。時間が自分に味方していると信じ、いまこの場ではもう何も無理強いする必要のない者の平静だった。
「マレイア」
「アリエン」
彼は数歩を隔てて立ち止まった。
「君のほうからもう一度会いたいと言ってくるとは、思っていなかった」
「私もよ」
「イェサイルは君がここにいると知ってるのか？」
マレイアは体がこわばるのを感じた。
急にではない。
昔と同じように。
肌が覚えていた。
「イェサイルの話をしに来たんじゃない」
「もちろん」
「医療記録の利用申請に、アウレリア人の再生と免疫、それに、疫病の広がりに偏りがあるときに制度がどう動くかを調べる計画が出てきたの」
アリエンはわずかに眉を寄せた。
「それで？」
「その一部に資金を出している財団は、あなたがいた金融組織とつながっている」
「私は何百もの組織で働いた」
「そうね」
「私を責めてるのか？」
「質問よ」
「聞こう」
マレイアは彼の目を見た。

「アウレリア人の家系の研究に、お金を出しているの？」
「いいや」
あまりに速い答えだった。
驚かされた人の答え方ではなかった。
すでに自分にその問いを投げたことのある人の答え方だった。
「間接的に出してる？」
「これまで私が関わった基金のすべてが、何に金を出しているかなんて知らない」
「どこかの保護財団で決定権を持ってる？」
「いいや」
それは本当だった。
マレイアにもわかった。
だからこそ、引き下がらなかった。
「決定権を持っている人に働きかけることはできる？」
アリエンは笑った。
「ずいぶん奇妙な法律上の区分だな」
「法律の話はしていないわ」
「なら何を聞いてる？」
「あなたのこと」
彼の顔から笑みが消えた。
「ようやくか」
「昔に戻ろうと言いに来たんじゃない」
「そうだ。自分が出ていったのは当然だったとあとから思えるほど、私が悪い人間になったかどうか、確かめに来た」
「あなたが私を殴った日から、出ていくしかなかった」
アリエンは顔をそむけた。
「君はいつでも、何もかもひとつの瞬間に縮めてしまう」

「違う。あなたがいつでも、その前後にあったことにあの瞬間を溶かしてしまおうとするの」
「人間はひとつの瞬間じゃないからだ」
「でも、ある瞬間に、その人が何者かが見える」
風が庭を渡った。別々の大陸から来た木々の葉がいっせいに揺れ、それぞれ違った音を立てた。
アリエンが一歩近づいた。
マレイアは退かなかったが、知らず知らず手が携帯通信機に伸びかけた。
彼はそれに気づいた。
「まだ私が怖いのか」
「ええ」
答えは彼を打った。
逆らわれると思っていた。
責められると思っていた。
あるいは、さげすまれさえするかと。
ただ本当のことを言われるとは思わなかった。
「それでも一人で来た」
「一人じゃないわ」
アリエンはあたりを見回した。
「イェサイルか？」
「違う」
マレイアは庭園と、公共の警備システムと、遠くにいる人々を示した。
「世界がいる」
アリエンは短く笑った。
「君たち二人の、まさにそこが我慢ならない」
「何が？」
「世界は自分たちの側に立っているという、その確信だよ」
「世界は誰の側にも立たない」

「だが君たちは、人目に触れているだけで守られるかのように振る舞う」
「そうあるべきよ」
「見えるものすべてを、人は理解するわけじゃない」
「だから尋ねてるの」
アリエンの声が硬くなった。
「尋ねるのが遅かったな」
マレイアは動かなかった。
「何を？」
「個人的な決断は個人的なままでいられるのか、ということを」
「その言葉はもう書いてよこしたわね」
「まだわかってない」
「なら、説明して」
アリエンは彼女を見つめた。
その目に悔いはなかった。
ようやくこの女にも、自分の見ているとおりに世界を見てほしいという欲求があった。
「君は出ていった」と彼は言った。「イェサイルを選んだ。そうして二人で言い始めた。価値は影を歩んではならない、大きなものはすべて見えるようにすべきだ、私のような人間はその手を見せろ、と」
「イェサイルはあなたの話なんかしてない」
「するまでもなかった」
「それがアウレリア人の研究とどうかかわるの？」
アリエンは黙った。
「何をしているの？」とマレイアは尋ねた。
「君らの仕組みが許していないことは、ひとつも」
「答えになっていないわ」
「君に要る答えはそれだけだ」
「アリエン」

「君らは生まれてこのかた、自分の黄金の環を見ては、特別であることの証しを見てきた」

「私はそんなものを見たことはない」

「見るまでもなかった。ほかの人間が君の代わりにそう見てくれたからな」

「誰が？」

「何か古い真理が帰ってくるかのようにイェサイルを待つ連中だ。惑星中の人間にどう生きろと説く権利が、君たちの家系にはあると思っている連中だ」

「自分を神話に仕立てる人なんて、イェサイルは誰も受け入れないわ」

「まさにそれで、なおさら愛される」

マレイアは寒気を覚えた。

何かはっきりしたものがあるわけではなかった。

ただ、あまりに用意が整いすぎていた。

彼女には始まったことさえわかっていない対話の結論のような言葉が、あまりに多かった。

「何が起きることになってるの？」と尋ねた。

一瞬、アリエンの自制が外れた。

「君たちの家々が一つずつ戸を閉ざし始めたら、君にもようやくわかるかもしれない。個人的な決断なんてものはないと」

その言葉のあとの静けさは、徹底していた。

マレイアには水が聞こえた。

風が。

自分の息が。

アリエンの過ちが。

「なぜ戸を閉ざすの？」と尋ねた。

アリエンの顔が変わった。

ほんのわずか。

でも彼女は彼を知っていた。

「一般論だ」
「違う」
「社会的な影響のことだ」
「あなた、君たちの家々、と言った」
「アウレリア人の政治を担う家々。家系に基づく組織のことだ」
「一つずつ、と」
「言葉のあやだ」
「あなたの言い方じゃない」
アリエンがもう一歩、近づいた。
「気をつけるんだ、マレイア」
今度は彼女も下がった。
弱さからではない。
二人のあいだに、もう一度距離を置くために。
「脅してるの？」
「忠告だ」
「何に気をつけろと？」
アリエンは口を開いた。
そして閉じた。
　その表情に一瞬、彼女のよく知る昔の彼が現れた。自分がどんなふうに彼女の目に映るかを完全には支配できないことに、耐えられない男。自分の一言が目に見えるかたちをとったと悟って、体のなかに取り戻したいと願う男。
「君たちが築いている世界がもたらす結果にだ」と、ようやく彼は言った。
マレイアはなおしばらく彼を見ていた。
「あなたが何をしているのかはわからない。でも、もう未来を恐れていないことはわかるわ。まるで知ってでもいるように話すもの」
彼女は背を向けた。
「マレイア」

立ち止まったが、振り向きはしなかった。
「どんなことからもイェサイルが君を守ってくれるわけじゃない」
「あの人はそんなこと一度も言ってない」
「いずれ、あいつが自分の同胞すら守れなくなったとき、私がそう言ったのを思い出せ」
マレイアはまた歩き始めた。
走らなかった。
ひとつ目の木立を過ぎて、もうアリエンからは見えなくなったところで初めて、手が震え始めた。
ネライに回線をつないだ。
声が返るのを待つゆとりもなかった。
「あなたが正しかったわ」とネライは挨拶の代わりに言った。「一人で行くべきじゃなかった」
「あの人、アウレリア人の家々が戸を閉ざし始めるって言ったの」
向こうが静かになった。
「正確に」
「正確には何て言ったの？」
マレイアはその一文を繰り返した。
次の言葉も。
どんなことからもイェサイルが君を守ってくれるわけじゃない。
あいつが自分の同胞すら守れなくなったとき。
ネライは書き留めた。
「記録はある？」
「ないわ。公共の警備システムが捉えるのは危険な行動よ。暴力に至らないかぎり、私的な会話は記録しない」
「あなたに手をかけた？」
「いいえ」
「脅された？」

「忠告だって言ってた」
「それでは逮捕できない」
「逮捕してほしいわけじゃない」
「じゃあ、何をしてほしい？」
マレイアは南方の群島から来た木の下で足を止めた。幅の広い葉が光をさえぎり、その下は闇に近かった。
「お金を見つけて」
ネライは通話を切ると、すぐに《層》に届いた返答をすべて開いた。
タレンが彼女の机に来た。
「何があった？」
「緊急措置が要るわ」
「何のために？」
「共通の目的が確認できるまで、計画を一時停止するの」
「一人の発言だけで？」
「資金提供にひそかに関わっている可能性のある人の発言に基づいて」
「可能性か」
「ええ」
タレンはマレイアの報告を読んだ。
「上の評議会は承認しないぞ」
「なら、医療監督機関に行く」
「生物学的な危険が示されていないと言われる」
「倫理委員会」
「承認済みの計画だと言う」
「国家間検察局」
「犯罪の中身さえ特定できていないと言う」
ネライは彼を見た。
「じゃあ、惨事がまだ犯罪になっていないうちは、どこへ持っていけばいいの？」

タレンは答えなかった。

ネライは緊急の申し立てを用意した。

研究計画の地図を添えた。

金銭上のつながりを。

マレイアの証言を。

合わさったときに生じうるリスクの分析を。

上位の評議会と医療監督機関と遺伝的権利保護当局に送った。

アウレリア人の情報を新たに利用する許可を一時停止し、未払いの資金を凍結するよう求めた。

システムは申し立てを受理した。

緊急案件に分類した。

予備審査は七十二時間以内に行われることになった。

そのころ軌道環では、輸送調整業者が最後の支払いを受け取った。

システムは通貨を確認した。

為替レートで換算した。

制裁対象の一覧を照合した。

直接の支払人の出所を確認した。

拒否すべき理由は見つからなかった。

支払いは十一秒で通った。

すべての契約層が有効になりました。

アリエンが確認を受け取ったのは、庭園から帰ってすぐのことだった。

かつてマレイアが彼の部屋に持ち込んだ、あの濃紺の器の前に立っていた。

ひと払いで机からはたき落とした。

床に落ちた。

割れなかった。

跳ねて、転がって、横倒しのまま止まった。

それを見つめるうちに、アリエンの怒りはふくれあがった。

彼が打ちすえても、その不完全ささえ生き残った。

彼は先方の招きを待たずカエルに回線をつないだ。
作業卓の上にカエルが浮かんだ。
「マレイアは知っている」
「何を？」
「何かが企てられていると」
「それは話が違う」
「彼女は《層》に行った」
「それはわかっています」
「彼女と会った」
カエルの顔は平静なままだった。
「なぜ？」
「答えを欲しがった」
「それでお答えになった？」
「いいや」
「何とおっしゃった？」
アリエンは黙った。
カエルは問いを繰り返した。
今度は、もっとゆっくり。
アリエンは家々が戸を閉ざすというあの一言を伝えた。
カエルは身じろぎさえしなかった。
「あなたは愚かだ」
「彼女には何も証明できない」
「人がものを知る道は、証拠ばかりではありません」
「計画の準備はできた」
「答えになっていない」
「最後の支払いが済んだ」
カエルは彼を見つめた。

「止めなさい」
アリエンは固まった。
「何だって？」
「残りをすべて保留にしなさい。ほとぼりを冷ますのです」
「できない」
「金なら失ってもかまわない」
「もう、今さら取り消せば、かえって目立つ痕跡を残すものもある」
カエルは目を閉じた。
アリエンが彼と知り合って以来、初めて疲れて見えた。
「どこまでの規模を承認したんです？」
「規模など承認していない」
「私をごまかすのはおよしなさい」
「モデルには限界がある」
「どんな？」
「目的は危機を起こすことだ」
「何人です？」
「正確には決められない」
カエルは映像に顔を寄せた。
「何人？」
アリエンは答えなかった。
その沈黙で、カエルは知りたいと思った以上のことを理解した。
金の通り道を開いたのは自分だった。
財団を用意したのも自分だった。
全体を見ることのない人々にひとつの意図を分け持たせるすべを、アリエンに教えたのも自分だった。
準備しているのはイェサイルの政治的な力をくじき、透明性が法律になる前にそれを食い止めるための危機にすぎないと、自分に言い聞かせてきた。
憎しみを抱く人間に、そうと知って手を貸した。

ただ、その憎しみに予算と計算能力と時間が与えられたとき、どこまで行けるかを認めようとしなかった。
「止めなさい」と繰り返した。
「いやだ」
「頼んでいるんじゃありません」
「もう地図を持っているのは、あなただけじゃない」
カエルの顔がこわばった。
「私の配下がいなければ、あなたには何もなかった」
「あなたの人たちは、もう仕事を済ませた」
カエルは最後のひとつを悟った。
アリエンはもう自分を必要としていない。
回線が切れた。
《層》の建物では、ネライの緊急申し立てが光っていた。
法的な審査を待っていた。
隣の机上には金の地図があった。一件ずつなら説明のつく、小さな支払いがいくつも載っていた。
自分が間違っていれば、研究にも組織にも無実の人たちにも害を及ぼしかねないと、ネライにはわかっていた。
間違っていなければ、七十二時間は長すぎるかもしれない。
何が起きるのかはわからなかった。
どこでかも。
どんなふうにかも。
わかっているのは、かつてマレイアの手首を締めつけた男が、まだ誰にも戸を閉ざす理由などないうちから、戸を閉ざしたアウレリア人の家々を口にしたことだけだった。
そして、惑星の帳簿のどこかで、たったいま最後の支払いが通った。

第 24 章　最初の発熱

少年の名はエランといった。

六歳で、黄金の環が現れるのは、泣いたときか、ひどく何かに集中したときだけだった。

母親は、生まれてまもないころに初めて環を見たと言った。子どもにアウレリア人のしるしが出るのはたいていもっとあとだから、そんなはずはないと医師たちは言った。
けれど母は確信していた。

証明のしようのないことでも、母親には確信のあるものだ。

　一家はアウリオラのはずれの、小さな街に暮らしていた。名高い一族の館でも、アウレリア人に古くから伝わる伝説の跡を求めて人が訪ねてくるような場所でもなかった。明るい台所と小さな庭があり、両親が幾度止めてもエランが輸送船の絵を描いてしまう壁がある、ごくふつうの家だった。
その朝、エランは起きたがらなかった。

母親が見にいくと、掛け布の下で丸くなっていた。

「エラン」

少年は目を開けた。

黄金の環がくっきりと見えた。

いつものように細く淡くはなかった。

瞳孔を囲んで、途切れない一本の線が光っていた。

「寒いよ」と彼は言った。

肌は熱かった。

家庭用の健康管理システムが基本測定をした。体温上昇。脈拍の増加。炎症指標に軽度の異常。
推奨事項は穏やかなものだった。

水分補給。

休息。

二時間後に再検査。

この地域では、よくある季節の病気がいくつか流行っていた。エランに、すぐさま重い病を疑わせる症状はなかった。
それでも母親は地元の医師に連絡を取った。

「環が、とてもはっきり見えるんです」

医師はほほえんだ。

「熱があると、そういうことはありますよ」

「こんな光り方はしません」

「熱も毎回、同じようには出ませんから」

「この子はアウレリア人です」

「存じています」

「関係があるんじゃないでしょうか」

医師は少し黙った。

「何にです？」

母親には答えられなかった。

病気の名前など知らなかった。

ほかの症例を知っているわけでもなかった。

ただ、自分のことよりよく知っている子が、目の前にいた。

医師は詳しい検査を手配した。

二時間後、エランはさらに弱っていた。

健康管理システムは注意の段階をひとつ上げた。

四時間後、搬送を勧めた。

救急モジュールは静かにやってきた。二人の救急隊員は防護服を着ていたが、未知の感染症を恐れたからではない。原因不明の発熱患者には、いつもこの装備を使っていた。
エランの母親は一緒に乗った。

父親は戸口に残り、モジュールが去るのを見送った。

子ども部屋の壁には、青く描かれた船が残った。

病院でエランには症例識別番号が与えられた。

AUR-N-77104。

冒頭の文字は、アウレリア人を表していたのではない。

地域と病院を示すコードだった。

あとになって初めて人々が気づいた、小さな皮肉のひとつだった。

医療 AI は彼の状態を何百万件もの過去の症例と照らし合わせた。

ぴったり合うものは見つからなかった。

珍しいことではなかった。

人体が示す変異にはほとんど限りがなく、そのほとんどは新たな病を意味しなかった。

システムは暫定的な分類を定めた。

詳細不明の急性炎症反応。

地域の監視機関に症例を送った。

警報としてではなく。

ひとつのデータとして。

同じ日、百八十キロ離れたところで、年配の女性が熱を出して目を覚ました。

アウレリア人だった。

独り暮らしだった。

家庭用システムはありふれた感染症と判断し、休息を勧めた。

ニトラでは、若い男が急激な脱力で病院を訪れた。母は複数の血統を引き、父はアウレリア人だった。彼に黄金の環が現れることはめったになかった。

医療スタッフは環に気づかなかった。

サルルでは姉妹が二人、病にかかった。

ほかの国では出張から帰ったばかりの男が。

場所は共通していなかった。

病院も共通していなかった。

医師も共通していなかった。

どのシステムのなかでも、それらは個別の症例だった。

医療 AI には症状が見えていた。
家系の記録には出自がわかっていた。
交通システムには移動の経路がわかっていた。
銀行はアウレリア人の出自を調べる計画にかかわる支払いを把握していた。
だが、これらの情報をすべて並べてみる権利は、誰にもなかった。
まだ。
《層》では、ネライが緊急申し立ての前に座っていた。
提出して十時間がたっていた。
三つの機関のうち、一つは資料の補足を求めてきた。
二つ目は受理を確認した。
三つ目は委員会を招集すると知らせてきた。
タレンが飲みものを二人ぶん机に置いた。
「もう寝ておいで」
「いやよ」
「君の申し立ては検討されてる」
「検討は決定じゃない」
「君がここに座っていたって、法律の定めた時間は縮まらないぞ」
「だからそんな期限はおかしいのよ」
「おかしく思えるのは、君から人を守るためかもしれない」
ネライは彼を見た。
タレンは座った。
「強い予感を抱いたからと、すべての口座をのぞきたがる官吏から人を守るためさ」
「すべての口座をのぞきたいなんて思ってない」
「知ってる。だが法律は、次に君の席につく人間もみんな君と同じだ、なんて前提では作れない」
ネライは器を手に取った。
「だからこそ、誰が情報を見ているかが、見えるようでなきゃいけないの」

「イェサイルみたいなことを言うじゃないか」

「いろんな機関が折り合うのをもう十時間も待ってる人間として言ってるのよ。人口の三分の一の弱点かもしれないものを調べるのに、誰が金を出しているか、それを知る許しが下りるのをね」

タレンは銀行からの最新の報告を開いた。

「取引がひとつ増えた」

ネライが目を上げた。

「財団と関係が？」

「あるかもしれない」

「タレン」

「ヴェスタの件で出てきた会社が、軌道環の輸送調整業者に少額を払ってる」

「目的は？」

「医療輸送の枠を予約するため」

「どの計画用に？」

「保護対象の営業情報」

ネライは時間軸を開いた。

支払いが通ったのはマレイアがアリエンに会う少し前だった。

「通常の備えかもしれない」とタレンは言った。

「ええ」

「医療の安全を仕事にしてる財団だ」

「わかってる」

「昔の流行病のあとでは、輸送枠を押さえておくのも珍しくない」

「わかってる」

「だったら、どうしてそんな目で見てるんだ？」

ネライは地図を広げた。

データ。

BIO-AI。

研究所。
法的な分析。
対応のモデル化。
輸送能力。
「向かっていく先まで、ひと続きになったから」
タレンは黙った。
「病気があるわけじゃない」と、やがて言った。
「ええ」
「医療上の警報もない」
「ええ」
「すべてが関係しているという証拠もない」
「ええ」
「だったら、止めるものなどない」
ネライは地図を見つめた。
「別の仕組みだったら警報が鳴るような行為の連なりが、ここにはある」
「どんな仕組みだ？」
「まだこの世にない仕組み」
前触れなしにマレイアの回線が開いた。
歩いているのか、映像が揺れていた。
「ネライ」
「どうしたの？」
「家系記録に緊急の閲覧申請が来た」
「どこから？」
「アウリオラの病院。子どもが一人、原因不明の熱を出したの」
タレンは映像に身を寄せた。
「子ども一人？」
「いまのところ」

「なぜ家系情報を求めてる？」

「黄金の環が異様にはっきりしていて、医師にも分類できない異常があるそうよ」

ネライは頭のなかの思考がすべて止まるのを感じた。

「原因なら何だってありうる」とタレンは言った。

マレイアはうなずいた。

「わかってる」

「アウレリア人の子は、熱が出るとしるしがはっきりすることがある」

「わかってる」

ネライは時刻を見た。

「発症はいつ？」

マレイアは時刻を告げた。

最後の支払いの数時間後だった。

時刻が近いことは、何の証明にもならない。

ネライはそれを知っていた。

エラリオンでは一時間ごとに何十億もの支払いがなされ、何千人もが病気になった。十分に大きい二枚の地図を重ねれば、近いところで起きた出来事はいくらでも見つかる。

「病院に、その症例を国家間の監視機関に報告してと頼んで」

「地域の機関にはもう報告したわ」

「国家間のほうよ」

「患者一人では、システム上できない」

「なら、家系記録保管所から例外を申請して」

マレイアは彼女を見た。

「患者がどの家系に属するか、地域の外に開示する法的根拠はないわ」

その一文が、二人のあいだに残った。

ネライはこの数カ月、依頼者のわからない計画がアウレリア人の家系に伝わる形質を研究できたのは、いくつもの例外があったからだと思い起こした。

いまアウレリア人の子が一人、原因のわからない熱で病院に横たわっている。その出自を法律が、ほかにも同じ症例がないか探せるはずの仕組みの目から守っていた。
守るのは正しかった。
子どもは公開情報ではない。
その家系は国家の持ちものではない。
その子の病を理由に、血統全体を監視していいはずはない。
それでもネライは、自分たちに先回りして誰かが測っていたのはこの境界にほかならない、と感じた。
「申請を出して」と彼女は言った。「私が金融分析を添えて後押しする」
「金融分析と患者には何の関係もないわ」
「まさにそれがわからないのよ」
「ネライ、証拠もないのに疑わしい資金提供と、たった一人のアウレリア人の子の病気を結びつけたら、騒ぎを起こしかねないわ」
「結びつけなかったら？」
マレイアは答えなかった。
アウリオラの病院でエランは眠っていた。
母親は病室の透明な壁ぎわに座っていた。医師たちはまだ母子を完全に引き離してはいなかったが、保護区画にはとどまってほしいと頼んでいた。
エランが目を覚ました。
「お母さん」
母は壁に手のひらを当てた。
「ここにいるよ」
「入ってきて」
「もう少ししたらね」
「寒いよ」
「うん」
「どうしておうちに帰れないの？」

母親はほほえんだ。親が、自分にもない確信を子に見せたいときの笑い方だった。
「どこが悪いのか、調べてもらうだけよ」
エランは自分の手を見た。
「ぼくが金色だから？」
母は息を止めた。
「違うわ」
「学校で、環が病気になることがあるって」
「誰が言ったの？」
「だれか」
「環は病気じゃないのよ」
「じゃ、どうしてこんなに光るの？」
母にもわからなかった。
もう片方の手も壁に当てた。
「あなたの体が闘っているから」
「勝つ？」
「ええ」
すぐに答えた。
これから決まることにも、母親には確信のあるものだ。
そのころ、地域の医療 AI に四例目が届いた。
続いて五例目。
別々の街。
違う年齢。
似た異常。
システムは、統計的に弱いつながりを見いだした。
共通の遺伝形質がある可能性。
だが、注意喚起が一般向けの警報として送られることはなかった。
まず地理的要因、環境要因、診断上の偏りを除外する必要があった。

過去の差別の事例を経て、わずかな標本だけを根拠に、ある血統を危険因子と名指すことは禁止されていた。
そこでシステムはデータの追加を求めた。

ある病院はそれを提供した。

二つ目の病院は患者の同意を待った。

三つ目はデータの規格が異なった。

四つ目の病院がある国では、国境を越えて遺伝形質を自動照合することが認められていなかった。
機械には輪郭が見えていた。

法律は、そこに線を引くことを許さなかった。

夜も更けたころ、イェサイルのもとにアウリオラから連絡が届いた。

エランの家族を知っていた。親しくはなかったが、一族の集まりで、黄金の環にはふつうの目よりも物がよく見えるのかと尋ねてきた少年のことを覚えているくらいには。
あのときイェサイルは、目に何が見えるかは色で決まるんじゃない、その人が目を向ける勇気で決まるんだよ、と答えた。

いま彼はダヴィオン家の窓辺に立ち、エランの母親の声を聞いていた。

「あの子のところへ行かせてくれないの」

「隔離されているのか？」

「いまはまだ予防措置だって」

「先生たちは何て？」

「わからないと」

声に、イェサイルの知っているものがあった。

恐慌ではなかった。

その、すぐ手前にある場所だった。

「そっちへ行く」と彼は言った。

「来ないで」

鋭い返事だった。

「あなたはアウレリア人よ」

イェサイルは黙っていた。

「ごめんなさい」と彼女は言った。「ただ……もしこれが何か……まだ何もわからないから」

「わかってる」

「エランが、あなたはどうしてるって」

「そばにいると伝えてほしい」

「でも、いないじゃない」

イェサイルは窓ガラスに触れた。

外は闇に沈むアウリオラ。古い家々、谷、一族の記録、黄金の環を宿す何代もの人々が行き来した道。

「人は、ときにはいま立っている場所からでも、誰かのそばにいることができる」と彼は言った。

通話が終わると、一人になった。

一瞬、目の前にひとつの情景が浮かんだ。

今度見えたのは、病院でもエランでもなかった。

透明な壁で仕切られた長い廊下が、目の前に開けた。

どの壁の向こうにも、人が一人横たわっていた。

どの壁の向こうにも、人が一人横たわっていた。

寝台の上で黄金の環が光っていた。

何千も。

やがて、何百万も。

情景は消えた。

イェサイルは窓枠をつかんだ。

「いやだ」と誰もいない空間に向けて言った。

誰に返事をしたのか、自分にもわからなかった。

《層》で、保健上の注意情報がともった。

公開のものではない。

予備的なもの。

地域のシステムが、ある遺伝形質との関連が疑われる症例の異例な集中を検出。さらなる検証を要する。
ネライにはそれが見えなかった。
金融当局には、保健上の予備情報を閲覧する権限がなかった。
マレイアにも一部しか見えなかった。
患者たちが互いに縁のある家系に属するのか確かめたいと、家系記録保管所に照会が届いた。
病院に見えたのは自分たちの患者だった。
どの仕組みにも、それぞれの断片が与えられた。
ネライの作業卓の上には、準備に要した金の地図が光っていた。
マレイアの作業卓の上には、生物学をめぐる問いの地図が。
医療網には、最初の患者たちの地図が。
そのあいだには法律、法域、許可、そして誰にもすべてを見せてはならないもっともな理由の数々が立っていた。
朝になってもエランの熱は下がらなかった。
原因不明の症例は七件に増えた。
午後には十二件。
エラリオンの太陽が沈む前に、別の国で最初の子どもが発症した。
システムのなかでは、独立した一症例として扱われた。
家族にとって、その子には名前があった。
歴史のなかには、まだ名はなかった。
のちに人々は、《三分の一》が始まった瞬間を探すことになる。
最初の公式発表を指さすだろう。
アウリオラの封鎖を。
医療網がアウレリア人の名を告げた日を。
透明な壁の向こうに置かれた最初の街を。
けれど、惨事が始まるのは、社会がそれに名をつけたときではない。
もっと早くから始まっている。

誰かが罪のない人たちに分け与えた、ひとつの問いのなかで。
どの銀行も正しいと判断した、ひとつの支払いのなかで。
命を守るために設けられた例外のなかで。
規則性が見えてもデータを結ぶ権利のない機械のなかで。
ただ一人、地図を知る人間のなかで。
そして、歴史を担う熱だとはまだ誰にも思われていない、一人の子どもの発熱のなかで。
エランは目を開けた。
そこに宿る黄金の環は、さっきよりも明るく輝いていた。
透明な壁の向こうに母親が立っていた。
三本の指を壁に当てた。
少年は手を上げ、こちら側から同じようにした。
二人の肌のあいだにはガラスが残った。
最初の壁。
戸を閉ざした家は、まだ一軒もなかった。
けれど、最初の部屋はもう閉ざされていた。

第三部　黄金の環の疫病

第 25 章　アウリオラの家々

朝までに、二十三人になっていた。

医療システムにも正確に分類できない熱を出した人が、二十三人。

うち二十一人はアウレリア人だった。

一人は父親がアウレリア人だったが、本人に黄金の環がはっきりと現れたことはなかった。

最後の女性については、家系記録保管所にも情報がなかった。アウリオラの外で生まれ、自分の属する血統を公表したことがなかった。
どの病院でも、症例は違って見えた。

ある病院には子どもが一人寝ていた。

別の病院には老女が。

三つ目には、きょうだいが二人。

四つ目には、数日前まで軌道環で働いていた男が一人。

医療システムは名前、人種、家系で彼らを結びつけなかった。症状、環境、時刻、既知の危険因子で結びつけた。どの血統に属するかは、エラリオンで最も慎重な取り扱いを要する情報のひとつで、明確な医学的理由のある場合にしか使えなかった。
その理由はまだ確認されていなかった。

だからシステムは、それがあるものと仮定してはならなかった。

アウリオラの病院で、エランはものを言わなくなった。

眠ってはいなかった。目を開けて天井の明かりを眺め、問いかけには指を動かすだけで答えた。一本なら、うん。二本なら、ううん。
母親は透明な壁の向こうに立っていた。

「お母さんの声、聞こえる？」

指一本。

「どこか痛い？」

二本。

「寒いの？」

一本。

医療スタッフは数値の変化に合わせて治療を変えた。どんな処置もシステムが評価し、何百万件もの症例と照らし合わせ、医師が確認した。

誰も闇雲には動いていなかった。

それでいて、何を相手に動いているのか、誰にもわからなかった。

エランは手を上げた。

三本の指を壁に当てた。

母も同じようにした。

二人のあいだには、ガラスと、空気と、中に入ることを許さない規則とがあった。

「ここにいるよ」と母は言った。

少年は目を閉じた。

その日、最初の家々が戸を閉ざし始めた。

国の命令でそうしたのではなかった。

最初は、自分たちの意思で。

　アウレリア人の古い一族の家々には、それぞれ医療上の取り決めがあった。病の広がりがもっと遅く、人々が一族の壁で清らかさを世間から隔てられると信じていた時代にさかのぼるものもあった。現代では、たいていは形ばかりのものになっていた。

いま、古い門は本当に閉じられた。

家族は子どもを学校に通わせるのをやめた。

勤め人は家に残った。

家庭用システムが体温、血液検査の数値、黄金の環の変化を測った。

公共のネットワークに、初めて目の記録が現れた。

虹彩の写真。

拡大された金色の線。

人々は見比べ、違いを探し、環が幅広く、明るく、あるいは途切れて見える箇所に印をつけた。

目の見かけで診断することはできないと、医療従事者は繰り返し注意を促した。

耳を貸す者はいなかった。

恐怖は、目に見えるしるしが好きだ。

正午を待たずにマレイアはアウリオラに着いた。

ダヴィオン家の前でイェサイルが待っていた。防護服は着けず、地元の規則で定められた簡素な淡い色のマスクだけをしていた。

「ここに来るべきじゃなかったわ」と彼女は言った。

「僕の家だよ」

「そういう意味じゃないって、わかるでしょう」

イェサイルは谷の、戸を閉ざした家々を見やった。

「よりによって今ここを出ていくなら、この家は初めから僕のものじゃなかったんだ」

「家のことじゃないの」

「わかってる」

「あなたのことよ」

「僕もアウレリア人だ」

「だからよ」

マレイアは彼に歩み寄った。

「私たちの血統が狙われているなら、誰よりも危険なのはあなたよ。知られているいちばん古い一族の末裔なんだから。それが具体的に何を意味するかは、まだわからない」

「何の意味もないかもしれない」

「すべてを意味するかもしれない」

イェサイルは落ち着いた目で彼女を見た。

「ネライに、僕を説得しろと言われた？」
「ネライが言ってたわ。私が説得できなかったら、自分で来てあなたを引きずって連れていくって」
「それは見ものだ」
「私は見たくない」
彼の顔から笑みが消えた。
マレイアはアウリオラの方を振り返った。
「私たちが最初の一人の発症を知る前に、アリエンは家々が戸を閉ざすって言ってた」
「知ってる」
「もしあの人がこれに関わっているなら――」
「疑いはある」
「私が持ってるのは、疑い以上のものよ」
「君はその人を知っている」
「それじゃ足りない？」
「いや。でも、世界を止めるには足りなかった」
マレイアは目を伏せた。
イェサイルは彼女の手に触れた。
「君のせいじゃない」
「向かう先が見えていたのに」
「そして、声を上げた」
「遅かった」
「最初の発熱の前だった」
「間に合わなかった」
反論しても仕方がないと、イェサイルにはわかっていた。彼女の言うとおりだからではない。こういうとき罪の意識が選ぶ相手は、真実では決まらないからだ。どれだけ近くにいたかで決まる。
アリエンにいちばん近かったのはマレイアだ。

だから、いちばん遠くまで見通すべきだったと感じていた。

ダヴィオン家の館は連絡調整の拠点として開かれた。

病院としてではなかった。

新たな病を治せる装置も医師もいなかった。ただ、場所があり、通信拠点があり、独立した電源と、館の残りの部分から切り離せる古い地下室があった。最も古い家系の者だけを中に入れ、館を閉め切ろうという一族評議会の提案を、イェサイルは退けた。

「ふさわしい名を持つ人にだけ門を開けるのなら」と彼は言った。「この壁に掲げられたどの名にも、僕たちは値しない」

行く場所のない家族が館に来始めた。

すべての家族が病にかかっていたわけではない。

ただ、怯えているだけの者たちもいた。

同じ集合住宅の住人から出ていってくれと言われた、二人の男の子を連れた母親。

別の国がアウリオラからの患者を受け入れなくなり、病院への搬送を取り消された老人。

身重の、出産の近い若い女性。連れ合いはセレニト人だった。遺伝子検査によれば、生まれてくる子は男の子だった。

アウレリア人の男の子。

彼女はダヴィオン家の古い書庫に座って、腹に両手を当てていた。

「ずっと男の子が欲しかった」と彼女はマレイアに言った。「今は、この子に判決を言い渡したのが自分みたいな気がする」

「あなたが渡したのは命よ」

「それに、しるしも」

「しるしは病気じゃない」

「じゃあそれを、この子に目を向けるのさえ怖がる人に言ってよ」

マレイアは彼女の向かいに座った。

「まだ何が起きてるかわからないわ」

「だから怖いのよ」

女はダヴィオン家の肖像画を見つめた。

「自分たちの環がいつか死を意味するなんて、この人たちは想像したことがあったと思う？」

「いいえ」

「じゃあ、何のための環だったの？」

マレイアは、遠い昔の人々の目に描かれた黄金の環を見た。

「何のためでもなかったのかもしれない」

女は驚いて彼女を見た。

「何にでも目的がいるわけじゃない」とマレイアは続けた。「受け継いだものが、何もかも何かを伝えているとはかぎらない。ただ体の一部だということもある。私たちがたどってきた道の、ひとかけら」

「その道がここに続いていたのなら？」

マレイアには答えられなかった。

夜遅く、ネライが着いた。

　防護モジュールは三度の確認を経て、ようやく彼女をアウリオラに通した。本人はセレニト人でも、母はアウレリア人だった。情報の限られたなかで、複数の血統につながる家系が危険を意味するか、システムは確実な判定を下せなかった。

「どうやら今じゃ私も、検査するに足る程度にはアウレリア人だと思われてるのね」と、ダヴィオン家に入るなり彼女は言った。

「子どものころなら喜んだだろうね」とイェサイルが言った。

「子どものころはばかだったのよ」

「子どものころは、仲間でいたかったんだ」

「たいてい、それは同じことよ」

二人はほんの少しだけ抱き合った。

ネライはすぐに仕事用の表示を開いた。

「確認された症例は七十八件。ほかに二百件以上が分類待ち。大半はアウリオラだけど、全部じゃない」

「アウレリア人は何人？」とマレイアが尋ねた。

「正確にはわからない」

「どうしてわからないの？」

「家系を公表していない人もいる。どこの国も同じ方法で記録してるわけじゃない。患者の同意がなければ開示を許されない病院もある」

「それでも、システムはまだ遺伝的な関連があると発表していないの？」

「地域システムは可能性を示したわ」

「国家間のシステムは？」

「確認済みのデータが不足してる」

マレイアは憤然として笑った。

「何件あれば足りるの？」

「数だけでなく、質にもよる」

「人は熱に焼かれてるのに、機械は質を吟味してる」

「機械は私たちが求めたとおりに動いてるのよ」とネライは言った。「十件の症例で、ある種族全体を健康上の危険だと名指しするような機械は望まなかったでしょう」

「もう八十人近いわ」

「数時間後には八百人になってるかもしれない」

部屋が静かになった。

イェサイルはきょうだいのネライに目を向けた。

「そう思うのか？」

「これが何であれ、今日始まったものじゃない、とは思ってる」

ネライは地図を映した。

最初に把握された症例は、互いに遠く離れていた。

交通の結節点でつながるものもあった。

家系上の縁でつながるものも。

目に見えるつながりが何ひとつないものも。

「もうアウリオラの外にも出てる」と彼女は言った。「私たちがまだ認めていないだけ」

ダヴィオン家の館の側壁に、地元の報道番組が映った。「当局は原因不明の発熱を七十八件確認しました」と女性キャスターが告げた。「医療関係者は、黄金の環の見た目だけで感染の有無を判定できるという主張を否定しています」
短い映像では、閉鎖された学校の前で、症状もないのになぜ子どもを家に置かなければならないのかと、母親が訴えていた。別の親はアウレリア人の家の戸を指し、見張りをつけろと要求していた。

イェサイルは音を絞った。「二人とも、子どもが心配なんだ」と彼は言った。ネライは答えなかった。自分の地図に載っている地名は、すでにキャスターが挙げたよりも多かった。
そこに病院から知らせが来た。
エランの容体が悪化した。
イェサイルは立ち上がった。
「行ってくる」
「だめ」とマレイアとネライが同時に言った。
イェサイルは二人を見た。
「あの子の母親は一人だ」
「医療スタッフがいるわ」とネライは言った。
「それは違う」
「あなたまでかかったら、誰の力にもなれない」
「ここに残ったら？」
「人々に語りかけられる。援助の手配ができる。対策を守るよう説いて聞かせられる」
「つまり、声であれ、人間ではあるな、と」
「生きていてと言ってるの」
イェサイルはアウリオラの地図を見た。
それから自分の家の、閉ざされた門を見た。

「僕の先祖には何ができたと伝えられているか、この何年もずっと、人は僕に語ってきた。手で触れて病を癒やした。ほかの人が恐れる家にも足を踏み入れた。病める人のそばに立った」
「だからみんな死んだのかもしれない」とネライは言った。
イェサイルは目を上げて彼女を見た。
冷たさからの言葉ではなかった。
まだこの人を数字のひとつに書き入れたくないと願う、きょうだいの怯えだった。
「ダヴィオンの名にふさわしいと証明しなくていいのよ」
「何も証明したくはない」
「なら、ここにいて」
イェサイルは腰を下ろした。
病院で、エランの母親が三本の指をガラスに当てた。
少年の手が上がることはもうなかった。
真夜中までに、さらに四十三のアウレリア人の家が戸を閉ざした。
朝までには千軒を超えた。
初めは、自分たちで戸を閉ざした。
数日もすれば、ほかの者たちが外から閉ざし始めることになる。

第 26 章　全体の見えないシステム

サイラ・オレンは、機械がどうやって語り合うかを知っていた。

言葉ではない。

権限で語る。

どの情報システムも、法律に許されたことしか口にできない。何を蓄えているかより、そこから何を人に渡してよいかのほうが大事だった。

サイラは国家間のデータ網を設計する技術者だった。病院、保険会社、保健当局の登録簿、研究機関。そのあいだをつなぐ仕組みを設計した。人を丸ごと人目にさらすことなく、機関から機関へと情報が渡っていけるように。それが彼女の生涯の仕事だった。

制限を設けることには意味がある。

権限を分けることにも。

どんなシステムにも、一人の人間のすべてを知られてはならない。そう彼女は信じていた。

だからこそネライは彼女を呼んだ。

二人は連邦の危機管理センターで会った。

壁では五枚の地図が光っていた。

患者の地図。

血縁の地図。

病院の受け入れ能力の地図。

人や物の移動の地図。

疑わしい資金の地図。

どれも不完全だった。

しかもどの二枚をとっても、許可なしにぴたりと重ね合わせることはできなかった。

サイラは長いこと眺めていた。

「これをつないでほしいのね」

「つなげるかどうかが知りたいの」

「技術の上ではね」

「法律の上では？」

「無理よ」

「非常時でも？」

「惑星全体に公衆衛生上の緊急事態が宣言されたわけじゃない。連邦がつなげるのは自分のところのデータまで。他国の登録簿には手を出せない。家系の記録には別の保護規定がある。金融データにはまた別の規定が」

ネライは患者の地図を指した。

「誰かが研究プロジェクトでデータを注文した家系と、患者たちの家系が同じかどうか。それだけ確かめたいの」

「それだけ？」

「名前はいらない」

「名前がなくても、一致するということ自体が、その人についての情報よ」

「じゃあ、その研究に金を出した人間についての情報は？」

「金融の側でも、誰だかわからない」

「そこなのよ」

サイラは地図に歩み寄った。

「臨時の橋なら架けられる。各システムが匿名の識別子を作って、一致するものだけを照合するの」

「だったら、そうして」

「私には権限がない」

「誰にあるの？」

「みんなに」

ネライは眉を寄せた。

「それじゃ答えになってない」

「逆よ。とても正確な答え。保健監督当局、家系記録の管理機関、国家間評議会、少なくとも十二の国、それに惑星外データの管理者。全員の同意がいるの。資金まで含めるなら裁判所の許可も」

「どれくらいかかる？」
「平時の手続きなら数か月」
「緊急の手続きなら？」
「全員が賛成なら、数時間」
「じゃあ、つなぎましょう」
サイラは彼女を見た。
「人を？　システムを？」
「両方よ」
緊急協議は十六分後に始まった。
片側に保健当局の代表が座った。
向かいには家系記録の管理者たち。
その先に法律家、銀行監督官、各国代表、市民の権利を守る人々が並んだ。
一人ひとりが、問題の別々の部分を知っていた。
そして一人ひとりが、別々の破局を恐れていた。
医療関係者は感染の拡大を。
一族評議会は差別を。
国家は統制がきかなくなることを。
法律家は先例をつくることを。
権利を擁護する者たちは、いつの日か、誰についてもあらゆる情報を結びつけられるシステムができてしまうことを。
「お願いしているのは臨時の照合だけです」とサイラは言った。「氏名は扱いません。個人のデータを公表することもありません。患者と、最近の研究で調べられていた遺伝的特徴とのあいだに、統計的な一致があるかどうかを確かめたいのです」
「結果を見るのは誰です？」とテリニスの代表が尋ねた。
「緊急医療対策班です」
「《層》は？」
ネライが答えた。

「金融分析官に伝わるのは、調査中の研究事業と現在の危険とに関係があるかどうか、それだけです」
「つまり医療データを金融捜査に使うわけだ」
「危険が確認できれば、その費用を誰が出したかを調べられます」
「危険な先例になりますよ」
「危険な先例なら、もう病院のベッドに横たわっています」

ダレン・ヴォルトルは北方同盟の通貨評議会を代表して出席していた。医療データには直接の権限を持たない。だが国境をまたぐ危機が起きれば、複数の国の金融・保険制度が費用の一部を負担する。その国々を代表するのが彼だった。
「ネライ」と彼は言った。「急を要するのはわかる。だが遺伝と健康と金を結びつけるシステムこそ、イェサイルの反対者たちが警告していたものじゃないか」
「イェサイルが提案したのは、権力を人の目に見えるようにすることよ。個人の健康記録を公開することじゃない」
「どんな中央集権的な仕組みも、見たいのは権力だけだと言って始まる」
「なら、中央には集めなければいい」
「では、どうする？」
サイラが答えた。

「別々の拠点同士で、一時的に証拠を交換するんです。データは元の場所にとどまります。各登録簿は、はい、いいえ、あるいは統計上の数値だけを返す。照会は一件ずつ記録します。患者本人は後から、自分のデータが緊急の照合に使われたと確認できます」
「本人は拒否できますか？」と市民権擁護の代表が尋ねた。
「過去にさかのぼってはできません」
「それでは本人の同意に意味がありません」
「意識を失った人たち、一人ひとりの同意が得られるのを待っていたら、何ひとつわかりません」
「終わることのない非常体制というものは、まさにそうやって始まるんです」

ネライはふつふつと怒りがこみ上げるのを感じた。
誰か一人に対する怒りではない。
どの人の懸念にも理があった。
それがいちばんやりきれなかった。
愚かなら、説いて聞かせることもできる。
腐敗しているなら、暴くこともできる。
だが彼らが守っているのは、本当に守る値打ちのあるものだった。
プライバシー。
権利。
主権。
信頼。
そうして別々に守っているあいだを、病がすり抜けていった。
「歯止めを考えてください」とネライは言った。「拒むだけで終わらせずに」
「たとえば？」とヴォルトル。
「すべての照会を、参加する全機関が見られるようにします。データを使えば必ず記録が残ります。危機が去ったら結果を検証します。目的を逸脱した者には個人として責任を負ってもらいます」
「それでも国家から個人を守れはしない」
「ええ。でも国家は、見ている自分の姿を隠せなくなる」
ヴォルトルは黙った。
イェサイルの演説で聞いた考えだった。
監視する者が、監視される者にも見える。
それですべてが解けるわけではない。
だが人知れずのぞき込まれるよりはよかった。
協議は続いた。
そのあいだに症例は千を超えた。

連邦の医療 AI は、すでに遺伝との関連性が高いと指摘していた。ただし、連邦内のデータに限った結論だった。ほかの二か国でも似た結果が出ていた。さらに三か国では、まだ患者の確定数が足りなかった。
どのシステムも、一部分なら知っていた。
その一文を最後まで言えるものはなかった。
サイラはシステムの設計図を開いた。
「機械は目が見えないんじゃありません。目隠しをされているんです。しかもその布は一枚一枚、もっともな理由があって人間が巻いたものです」
「しばらく外せないか？」とヴォルトルが尋ねた。
「細い隙間を開けることなら」
「その幅は誰が決める？」
「皆さんです」
ネライは首を振った。
「いいえ。規則に決めさせる。この部屋にいる人間ではなく」
「規則だって、誰かが書かなければ」
「そして、誰が書いたのかを、誰もが見られるようにする」
五時間後、用途を限った照合の橋が承認された。
十二か国がただちに参加した。
九か国は条件付きで。
四か国は拒否した。
残りはさらに法的な検討を求めた。
家系記録の管理機関が同意したのは、集計値の形での照合だけだった。
資金の地図を直接つなぐことはできなかった。
ネライに知らされるのは、調査中の研究で扱われた遺伝的特徴が、患者に見られる特徴と一致するかどうか、その結果だけだった。
橋が動きだした。
問いを送り始めた。
橋には名前は届かなかった。

一人ひとりの健康記録は、丸ごと守られていた。

行き交うのは、一致を示す数学的な証明だけだった。

最初の結果は九分後に届いた。

遺伝との結びつきは強かった。

二つ目の答えは、一部の研究が注目していた家系の特徴と、患者のあいだで際立って多く見られる特徴が同じであることを裏づけた。

三つ目の答えは、通常は縁が遠いと見なされていたアウレリア人のいくつもの血筋にまたがって、分析された特徴の一部が見られることを示した。

ネライは資金の地図を呼び出した。

財団。

BIO-AI。

研究所。

例外措置。

反応を試すこと。

物流。

これで初めて、それらを病と結ぶものが手に入った。

犯罪の証拠ではない。

進むべき方向を示す証拠だった。

「検察に送って」と彼女は言った。

「どの区分で？」とタレン。

「システム全体に対する差し迫った危険」

「犯人が誰かも、まだわからない」

「何が買われたかはわかる」

「同じことじゃない」

「ええ。でも、その買い物は、亡くなった人たちが出るより前からあったのよ」

ニトラの反対側で、カエル・ソーンも世間と同じ医療情報を見ていた。

すべてが同じだったわけではない。

彼は保険会社や企業連合が内々に出した予測も見ることができた。それは政治家の発表よりも正確だった。国々が災厄をその名で呼ぶことを許される前から、金はそれに備え始めるからだ。
数日のうちに数十万の症例が出ると見積もられていた。
数百万に上るかもしれなかった。
カエルはアリエンに連絡した。
今度は映像が出なかった。
声だけだった。
「研究結果をすべて公開しなければ」とカエルは言った。
「なぜ？」
「医療現場の助けになるからです」
「結果は分散している」
「なら集めてください」
「すべてが私の手元にあるわけじゃない」
カエルは目を閉じた。
「あなたが注文したんでしょう」
「発注者はそれぞれ違う」
「自分の作った仕組みを盾に取るのはおやめなさい」
「独自の規則に従って成果を保管している研究所もある。二次利用を禁じた契約もある」
「つまり、作った本人にさえわからない脅威を、あなたは作りだしたんですね」
アリエンは長いあいだ黙っていた。
「みんなが死ぬはずじゃなかった」とようやく言った。
カエルは目を開けた。
「誰が死なずにすむはずだったんです？」
「結果はもっと正確に出るはずだった」

机の縁で、指が子どものころから覚えている動きをした。立方体の五つの面はそろって見えた。最後の面に、いくつかの升がずれたまま残っていた。
動物園の門の前で、もう一度最初からやらせてと懇願した。今、見ているのは病院の地図だった。どんな一手を重ねても、死者を家に帰してやることはできなかった。
「どれくらいを見込んでいたんです？」
「十分な数だ」
「それは数字じゃない」
「以前のあなたなら、数字になど関心はなかったでしょう」
カエルは立ち上がった。
「以前、あなたは危機は限られた範囲にとどまると言った」
「あなたはエラリオンの人々にイェサイルの描く世界を恐れてほしかった」
「私は彼を止めたかった」
「これで止まる」
カエルは病院の地図を見た。
「いいえ。これで彼は、あなたが恐れていたものになる」
アリエンは通信を切った。
患者の地図に、また新しい点がともった。
システムはもう、その点と点を結び始めていた。
遅かった。
それでも、初めて、ともに。

第 27 章　口にするのが怖かった名

エラリオンは、名をつけることの力を知っていた。

名は人を守りえた。

権利を、帰属を、歴史を、社会の中での居場所を与えてくれた。

だが名は、標的にもなりえた。

数世代前、二つの国では仕事や医療保険の割り当てに家系の情報を用いていた。アウレリア人はいくつかの遺伝的な特性から、医療費のかかる患者と見なされた。セレニト人は繊細すぎると言われ、治安機関への採用を断られた。ヴェイラン人には組織を動かす天賦の才があるとされ、行政や金融機関で優遇された。

後にそうした規則は廃止された。

不信は残った。

だから保健当局の責任者たちは、関連が疑いようのないものになるまでは、アウレリア人という言葉を口にするのが怖かった。

惑星保健評議会が開かれたとき、確定した症例は二十万を超えていた。

患者のほぼ全員がアウレリア人か、アウレリア人の血を引くことが確かめられた人々だった。

「統計上の関連は明らかです」と連邦の首席疫学官は言った。「なぜそうなるのかは、わかっていません」

「世間は統計と原因を区別しません」とヴォコルウィンの代表が異を唱えた。「アウレリア人の病だなどと言えば、人々はアウレリア人を誰彼かまわず感染源と見るようになります」

「言わなければ」とマレイアは答えた。「誰が危険にさらされているのか、当人たちにもわかりません」

「危険なのは全員です」

「等しくではありません」

「アウレリア人のほうが病気を人にうつしやすいのか、わかっていないでしょう」

「うつすと言ってすらいません」

「そこは世間の耳には入りませんよ」

ネライはサイラの隣に座り、二つの議論を同時に追っていた。

この部屋では、人々が適切な言い回しを論じていた。

そのあいだ病院では、誰のためにベッドを残すかが決められていた。

「こういう表現はどうでしょう」とダレン・ヴォルトルは言った。「特定の遺伝的集団に発生の偏りが見られる未知の疾患」

マレイアは彼を見た。

「アウレリア人という名を口にせずにアウレリア人と言う方法ですね」

「正確な表現です」

「いいえ。都合のいい表現です」

「マレイア、言葉は人を殺すこともある」

「言葉がないこともです」

議長が手を上げた。

「二つの問いを分けて考えましょう。病が誰を襲うのか。そして誰が病を広めうるのか」

「世間は分けて考えません」とヴォコルウィンの代表は繰り返した。

「なら、わかってもらうのが私たちの仕事でしょう」とネライ。

「こんな混乱のさなかに？」

「ほかにいつ？　アウレリア人が家に閉じ込められてからですか？」

「自ら門を閉ざした家もあります」

「国々が黙っていたからです」

ダレン・ヴォルトルは彼女に向き直った。

「君ならどうする？」

「知っていることを全部伝えます。この病が主にアウレリア人を襲っていること。アウレリア人であるだけで、人にうつしやすいという証拠は今のところないこと。差別は患者から名乗り出る気持ちを奪い、そうなれば誰にとっても危険が増すこと」

「明日、別のことがわかったら？」

「明日、それを伝えます」

「信頼は毎日取り替えられるものじゃない」

「真実にいちばん近い見立ては、一時間ごとに変わることだってあります」

評議会の意見はまとまらなかった。

出された声明に、アウレリア人という言葉はなかった。

集団によって偏りのある健康上の危険、自主的に検査を受ける必要、症例の多い地域における一時的な移動制限について述べられていた。

人々は自分でその意味を補った。

ネット上で、黄金の環の疫病という呼び名が広まり始めた。

誰が最初にそう呼んだのか、誰にもわからなかった。

記者だったかもしれない。

怯えた親だったかもしれない。

もともとアウレリア人が憎くて、その理由らしく聞こえる言葉を待ちかねていた誰かだったかもしれない。

その名は、公式の勧告より速く広まった。

サルルでは交通モジュールの運転手が、アウレリア人の一家を乗せようとしなかった。

「お宅に恨みがあるわけじゃない」と彼は言った。

父親は陰性証明を見せた。

「許可はあります」

「うちには子どもがいる」

「うちにもです」

「だったら、なおさらわかってくれますよね」

一家は乗り場に取り残された。

ほかの乗客は黙っていた。

一人が一家をかばった。

ヴェイラン人だった。

「この人たちを乗せないなら、みんな降りますよ」

みんなは降りなかった。

三人が降りた。

別の街ではアウレリア人の家の前に人々が集まり、封鎖を求めた。住人が明かりを消すと、群衆は拍手を始めた。

ニトラのセレニト人街では、住まいを失った家族のために地域の集会所が開放された。

門に氏族の紋章はなかった。

ただ一文があった。

病には犠牲者がいる。恐れは、自ら犠牲者をつくる。

アウリオラの病院で、若い女性が男の子を産んだ。

赤ん坊は健康だった。

目を開けたとき、黄金の環は見えなかった。

母親はほっと息をついた。

そして、ほっとした自分を恥じた。

「私、ひどい母親ね」と、画面越しに話していたマレイアに言った。

「そんなことない」

「この子に環がありませんようにって、祈ったの」

「この子が生きていけますようにって祈ったのよ」

「同じことなの？」

マレイアは答えなかった。

赤ん坊が身じろぎした。強い光の中で、瞳孔のまわりに細い金色の線が浮かんだ。

母親は泣きだした。

わが子への愛が薄れたからではない。

この子は初めの一瞬から、世の人々にひとつの問いとして見られてしまう。

それがわかっていたからだ。

ニトラでネライは《層》の上層部と会った。

事業の所有関係の連鎖をただちに開示させてほしいという彼女の申請は、またも一部が退けられた。
健康への差し迫った危険を理由に、いくつかの口座は凍結できた。
だからといって、すべての国で最終的な所有者まで自動的に明らかにできるわけではなかった。
「彼らが調べていたのは、この病と結びついているのと同じ遺伝的特徴だった。それが確認できました」とネライは言った。
「確認できたのは相関です」と法律顧問が訂正した。
「で、その相関にお金を出したのは誰です？」
「調査しています」
「いつまで？」
「テリニスには回答に三十日の猶予があります」
ネライは笑った。
愉快なところなど一つもなかった。
「三十日後には、返事を受け取る人もいなくなっているかもしれませんよ」
「脅威が現れるたびに法律を取り払うわけにはいきません」
「法律を取り払えとは言っていません。葬儀屋より先に動ける法律であってほしいんです」
「ここで保護されている基金を全部開けば、先例をつくることになります」
「先例が必要なのかもしれません」
「危機のさなかには、そういうことも簡単に言える」
ネライは身を乗り出した。
「では、いつ制度の弱点を明らかにすればいいとお考えです？　誰も関心を持たない、穏やかな時期に？」
夜、保健評議会は再び開かれた。
症例は二百万を超えていた。
今度はタエロンからも報告があった。
密閉ドームの一つで、作業員三人に同じ症状が出ていた。
二人はアウレリア人。

三人目は父親がアウレリア人だった。

議長が用意してあった声明を開いた。

やはり、ある一語が抜けていた。

マレイアが立った。

「病が誰を殺しているのか、怖くて口にできないのなら、皆さんが守っているのは差別にさらされた私たちではありません。責任を負うのが怖い、ご自分たちです」

「それは公平な言い方じゃない」とヴォルトル。

「国々が集団による偏りとやらを口にしているあいだに、母親たちが見知らぬ人の発信で真実を知らされる。それも公平じゃありません」

「名を明かせば暴力に火がつくかもしれない」

「暴力はもう始まっています」

「もっとひどくなるかもしれない」

「沈黙は、暴力の目をふさいでしまいます」

ダヴィオン家からイェサイルが回線に加わっていた。

それまで一言も発していなかった。

「その名を言ってください」

みなが彼の映像に顔を向けた。

「イェサイル」と議長が言いかけた。「私たちはよく考えて――」

「私はアウレリア人です。マレイアもアウレリア人だ。病院にいるのもアウレリア人です。私たちを遠回しな説明に置き換えても、守ったことにはなりません」

「もし社会が、あなた方を脅威だと考え始めたら？」

「そのときは、脅威にさらされているのは私たちで、私たちが脅威なのではないと、はっきり言ってください」

ダレン・ヴォルトルはイェサイルを見つめた。

「それで足りなければ？」

「真実だけでは足りないことはよくある。嘘ならなおさらです」

評議会は声明を書き直した。

真夜中の少し前、すべての公共チャンネルにエラリオンの保健行政の最高責任者が姿を現した。
彼女は病については特徴を述べるにとどめた。
そして、人々の名を口にした。
「これまでのデータから、この未知の疾患がアウレリア人、およびアウレリア人と特定の遺伝的なつながりのある人々を、他に比べて著しく高い割合で襲っていることがわかっています」
説明が続いた。
感染について。
まだわからないことについて。
差別の禁止について。
ただちに検査を受け、身を守る必要について。
だがほとんどの人が覚えていたのは、最初の一文だった。
惑星じゅうの画面に、黄金色の目が映った。
世界はようやく犠牲者の名を口にした。
それと同時に、彼らにしるしをつけた。

第 28 章　ガラスの向こうの黄金の環

この世界を覆った疫病にひとつの素材があるとすれば、それはガラスだった。

病院にあった。

街区と街区の境にあった。

交通の要所にあった。

子と親のあいだに。

病人と、手を差し伸べたい人のあいだに。

透き通っていながら、隔てていた。

それがその役目だった。

　流行の初めのころを写した古い写真には、隔離室の壁に押し当てられた顔が見える。壁の両側にある手。触れ合うこともなく動いている唇。病院の明かりがガラスに照り返し、いっそうくっきりと浮き上がる、瞳の中の黄金の環。

かつてはときおり見えるだけだったしるしが、熱が出ると、ますます頻繁に現れるようになった。

この病の症状なのか、単なる身体の反応なのか、医師たちにもわからなかった。

世間はその違いに関心を持たなかった。

店の入り口に虹彩スキャナーが置かれるようになった。

表向きは体温と基本的な健康状態を測るためだった。

民間の店の中には、アウレリア人の特徴を検知すると警告を出すよう、装置を改造したところもあった。

違法だった。

店主たちは客を守っているのだと言った。

ある国の政府は、こうした装置を禁止した。

別の国では一時的に認めた。

三つ目の国の政府は、そんなものがあるとは知らないふりをした。

四十の国。

一つの恐れに、四十の答え。

アウリオラで、エランは医療回線を通じてイェサイルと話せるようになった。

少年の顔はイェサイルの記憶よりも小さかった。熱に幼い丸みを削がれていた。目は開いていて、その中の黄金の環は不自然なほど明るく輝いていた。

「僕を覚えてる？」とイェサイルは尋ねた。

エランが動いた。

指が一本。

「お母さんがそばにいるよ」

少年はガラスのほうを見た。

「環のことを聞きたがってたって、お母さんが教えてくれたよ」

エランの唇が動いた。

かすかな声だった。

「見えるの？」

イェサイルは顔を近づけた。

「何が？」

「もっとよく、見えるの？」

ずいぶん前に二人で交わした会話を思い出した。

「いや」と彼は言った。「環には見えないよ」

エランは先を待った。

「人にどれだけ見えるかは、勇気を出して、目を向けられるかどうかなんだ」

少年は目を閉じた。

「僕はやだ」

「何を見たくない？」

「お母さんが泣くの」

イェサイルは答えられなかった。

エランの母はガラスの向こうに立って、手で口を覆っていた。

「怖がっていいんだよ」とイェサイルは言った。「いつも勇気を出さなくてもいい」
「イェサイルも怖い？」
「ああ」
「何が？」
イェサイルは少年の母を見た。
医療データを見た。
画面に映る自分の顔を見た。
「どうやっても助けられないかもしれないことが」
エランはしばらく黙っていた。
「じゃ、僕たち、おんなじだね」
イェサイルはかすかにほほえんだ。
「ああ」
医療スタッフが回線を切った。
エランには、もうひとつ処置が必要だった。
イェサイルは何も映らなくなった画面の前に座り続けた。
両手を机に載せていた。
ダヴィオン家の手。
熱を鎮めたと古文書に記されている手。
今は子ども一人にさえ触れられなかった。
マレイアが熱いスープの鉢を持ってきた。イェサイルは気づかなかった。
「食べて。朝からずっとここにいるじゃない」
「助けてくれるかって、エランに聞かれた」
「なんて答えたの？」
「ずっと回線をつないでるって」
「そうしたじゃない」
「そんなことをしても、肺は治らない」

「ええ。でもお母さんが言っていたわ。そのあと、あの子は処置の支度をおとなしく受けてくれたって」

イェサイルは匙を取った。手の中でひどく震えるので、また置いた。

「ダヴィオンの人間に奇跡を期待されると腹が立つ」と彼は言った。「今日は僕も、ほんのひととき、その奇跡を待っていた」

マレイアが隣に座った。「お母さんのところへ行ってくる。あなたは、せめて少しでも食べてみて」

夜が明ける前にエランは死んだ。

母親はすぐそばにはいられなかった。

けれども医療スタッフは、ガラスのそばに残ることを許してくれた。

機械が鳴りやんでも、母親は長いこと、三本の指をガラスに当てていた。

イェサイルがその死を知ったのは、数分後のことだった。

公に声明を出すことはなかった。

犠牲になった子供のうち、自分がじかに知っていた最初のひとりについて、彼は語らなかった。

ただダヴィオン家の庭に出て、エラリオンの太陽が昇るまで、そこに立っていた。

その日、さらに八千人が亡くなった。

イェサイルが名前を知っていたのはエランだけだった。

大きな災厄が持つ、最も残酷な性質のひとつだ。

数は膨らむ。

痛みだけはいつも、ひとつずつの形をしている。

ひとつのベッド。

一人の母。

ガラスに当てられたひとつの手。

　公開ネットワークに、隔離施設の透明な壁の向こうに立つアウレリア人の少女の写真が現れた。十歳くらいだった。誰かが医療スタッフの処置の妨げにならないよう髪を短く切ってやっていた。瞳には環がくっきりと浮かんでいた。

反対側にセレニト人の医療従事者が立っていた。

少女がガラスに手のひらを当てた。

彼もちょうどその向かいに、自分の手のひらを当てた。

写真は惑星を駆け巡った。

ある人々にとって、それは思いやりの象徴だった。

別の人々にとっては、アウレリア人を隔離しておくべき証拠だった。

同じ一枚の写真が、愛も憎しみも育てることができた。

目を向ける前から、その人が何を抱えていたかにかかっていた。

アリエン・コルヴェトもその写真を見た。

少女の目を拡大した。

黄金の環。

マレイアが怒ったとき、怯えたとき、あるいはまわりを忘れるほど深く集中したときにも、同じしるしが浮かんだ。

一瞬、壊れた交通モジュールの内部が目の前に開けた。白い光。自分の手の中にある母の指。医療スタッフの声。アウレリア人の再生特性だ。

救急モジュールの扉は、よその子を乗せて閉じた。自分がどちら側に残されたかを、アリエンは何年たっても覚えていた。

今、写真の中では別の子がガラスの向こうに立っていた。目には同じ環があった。アリエンはあの日運ばれていった少年の顔を思い出そうとした。浮かぶのは怯えた少女の顔ばかりだった。

自分には縁のない子だ、と言い聞かせた。

一枚一枚の映像に、文明の目標を覆い隠させるわけにはいかない。

大きな変革には必ず代償がある。

そうして写真を閉じた。

数分後にまた開いた。

少女はまだ生きていた。

そのほうがつらかった。

死者はもう、こちらを見はしない。

カエルがじかに訪ねてきた。

アリエンは中に入れなかったが、わざわざ取り消すまでもないと、以前から残しておいた入室権限がまだカエルにはあった。
扉が開いた。
「研究の記録を保健評議会に渡さなければなりません」
「もうお答えしたはずだ」
「今はあなたの計画の話をしているんじゃない。治療の話をしているんです」
「結果は匿名化して、分散させてある」
「それをまとめられる者がいるはずです」
「BIO-AIだ」
「どこに？」
「複数の借り受けた環境で計算させた」
「モデルはどこにあるんです、アリエン？」
アリエンは彼を見た。
「ひとつのモデルがあるわけじゃない」
カエルは身じろぎもせず立っていた。
「それまで分けたんですか」
「そのほうが安全だった」
「誰にとって？」
アリエンは答えなかった。
「誰にも全体が見えないようにしたかった」とカエルは続けた。「研究所にも。銀行にも。当局にも。おかげで今や、あなた自身にも見えない」
「結果なら見えている」
「あなたに見えているのは死体です」
カエルは公開されている患者の地図を指した。
「これが制御された危機ですか」
「犠牲者を出さないなどと言った覚えはない」
「犠牲者はアウレリア人だけじゃない」

アリエンは身をこわばらせた。
「間接的な死です。病院の逼迫。薬不足。交通の遮断。どの系統の人々も死んでいる」
「それはそのうち過ぎる」
「アウレリア人の場合は、過ぎないと？」
「彼らが問題の核心だ」
カエルは歩み寄った。
「違う。問題の核心は私の目の前に立っています」
アリエンは目を細めた。
「私に口座を開いたのはあなただ」
「ええ」
「例外措置を取りつけた」
「ええ」
「あなたの部下が邪魔を取り除いた」
「ええ」
カエルは一つひとつ静かに認めた。
弁解はしなかった。
「だからこそ、自分が何をしたか、わかっています」
「何が変わった？」
「規模です」
アリエンは苦く笑った。
「つまりあなたの道徳は、数の問題にすぎないのか」
「いいえ。数によって、あなたはもう自分に嘘がつけなくなっただけです。自分がしているのは政治だなんてね」
アリエンはガラスの向こうの少女の写真に目を向けた。
「イェサイルはこれを新たな神話にするだろう」
「そうかもしれません」
「人々は彼にすがるようになる」

「もうそうしています」
「ほら見なさい」
カエルは、哀れみに似たものを浮かべて彼を見た。
「あなたはずっと、イェサイルが預言者に見えてしまうのが怖かった。だから自分で、彼のために終末を作り上げたんですね」
カエルは去った。
アリエンは一人になった。
画面では少女がガラスに触れていた。
生き延びたのか、彼は知らなかった。
知りたいとも思わなかった。
アウリオラでイェサイルが家に戻ったのは、もう夕方だった。
玄関先にエランの母親が待っていた。
彼に近づくことは許されなかった。自宅隔離の身だった。
二人は数メートルの間を置いて立った。
「あの子、あなたと話をしたのね」
「ええ」
「怖がっていた」
「ええ」
「本当のことを言ってやってくれた？」
「そう努めました」
母親はうなずいた。
「それなら、私たちの誰よりも、あの子のためにしてくれたわ」
イェサイルは頭を垂れた。
「そんなことは」
「それまで私から奪わないで」
彼は目を上げた。
「あの子が一人で逝ったんじゃないと、私は信じたいの」
イェサイルは一族の書にあった一文を思い出した。

ひとりで行かないで。

エランはガラスの向こうにいた。

母は別のガラスの向こうに。

彼自身は画面の中に。

それでも最期のひととき、三人のあいだには、どんな壁にも隔てきれない何かが生まれた。

「一人じゃありませんでした」とイェサイルは言った。

今度ばかりは、それが本当なのかわからなかった。

ただ、口にしなければならないことだけはわかっていた。

第29章　イェサイルの声と、統一エラルへの《橋》

共通の言葉が用をなさなくなると、人は声を探し始める。

共通の言葉が用をなさなくなったとき、人が探すのは、必ずしもいちばん賢い声ではない。

いちばん正確な声でもない。

聞いているあいだだけでも、世界が互いに食い違う指示の断片にばらばらになってゆく気がしなくなる。そんな声を探すのだ。

保健当局は隔離について語った。

政治家は安定について。

銀行は流動性について。

一族評議会はアウレリア人の保護について。

治安機関は秩序について。

誰もが自分の組織にふさわしい言葉を話していた。

だが人々の恐れのすべてを、そのまま語れる者はなかった。

イェサイルは話したくなかった。

エランの死後、彼は三度、公の場で話すことを断った。子どもの死を演説に仕立てる権利など自分にはない、と言った。エランの母親には、ガラスに押し当てられた息子の手のひらが、今も見えている。そんなときにカメラの前に立ちたくなかった。人の痛みを自分の権威に仕立てたくなかった。

マレイアは一族の古い広間で彼を見つけた。

アセル・ダヴィオンの肖像画の下に座っていた。昔、熱病が流行した折に一軒一軒、家を回ったと書き残された人だ。病人を癒やしたという者もいた。ほかの誰もが怖くて手を触れられなくなったとき、ただ病人のそばにいたのだという者もいた。

「みんな、どうすればいいか知りたいのよ」とマレイアは言った。

「それなら医師がいる」

「もう医師を信じない人もいるの」

「だから僕がその人たちの代わりに医師を信じるのか？」

「医師を信じてと、あなたから言ってほしいの」

イェサイルは立ち上がった。

「なぜ僕が？」

「政治家が家にいてくださいと言えば、命令に聞こえる。銀行家が落ち着いてくださいと言えば、市場を守りたい誰かの声に聞こえる。あなたが言えば、ひとりの人間の声に聞こえるかもしれない」

「それこそ、僕がずっと拒んできたことだ」

「何を？」

「本当の自分とは違う何かに祭り上げられることを」

「だったら、自分が何者かを言えばいい」

イェサイルは彼女を見た。

「僕は何者だ？」

「人に触れても救えない、怯えたアウレリア人よ」

それでも彼はほほえんだ。

「あまり人を元気づける出だしじゃないな」

「本当のことよ」

イェサイルがはじめて人々に語りかけた場所は、議場ではなかった。

ダヴィオン家の庭に立っていた。

背後に旗も、国の象徴も、氏族の紋章もなかった。木々と古い塀、そして一軒、また一軒と家々が戸を閉ざしてゆく谷があった。

「イェサイル・ダヴィオンといいます」と彼は切り出した。「私はアウレリア人です。そして、怖いのです」

その言葉は一時間とたたずに惑星じゅうに広まった。

気高い言葉だったからではない。

そう言ってもいいのだとわかったからだ。

何百万もの人々が怯え、何週間も聞かされてきたのは、恐れなど情報の伝え方の技術的な不具合にすぎないかのような声ばかりだった。イェサイルは、恐れを説明しようとも、取り除こうとも、覆い隠そうともしない、初めての著名人だった。
恐れていると認めたのだ。

「病院にいる人たちのことが心配です。離ればなれになった家族のことが。自分の目をのぞき込み、僕は生まれたときから判決を言い渡されていたのかと問う子どもたちのことが。そして私は、恐怖のあまり隣人を病そのもののように見始めている人たちのことも怖いのです」
彼は言葉を切った。

「私たちは病ではありません。しるしでもありません。人間です」

彼の目に黄金の環が見えた。

隠さなかった。

「保健上の措置を守ってください。行ってはならないところには行かないでください。ご自分も、ほかの人も守ってください。ただ、守ることと屈辱を与えることを取り違えないでください。病人の隔離が必要な場合はあります。けれど、どんな人として生まれたかを理由にその人をはねつけるのは、臆病です」
保健当局の一部には、イェサイルの言葉で人々の規律が緩むのではないかと危ぶむ声もあった。

起きたのは別のことだった。

彼が語りかけた後、みずから症状を申告するアウレリア人が増えた。

封鎖地域から逃げ出す人は減った。

病人を病院へ移すことに同意する家族が増えた。措置を受け入れることは、罪を認めることではない。初めてそう聞かされたからだった。
いくつかの街では暴力が減った。

すべての街でではない。

どんな声にも、あらゆる人のうちにある恐れを止めることはできない。

けれどしばらくのあいだ、その向きが変わった。

イェサイルは定期的に人々に語りかけるようになった。

彼はそれを演説とは一度も呼ばなかった。

人と話をした。

三人の子を亡くした母親と。

ほかの人を犠牲にしてアウレリア人を助けていると、身内の社会から責められたヴェイラン人の医師と。

もう耐えられず、名を数えるのをやめたセレニト人の葬儀社の女性と。

この疫病は古いしきたりを捨てた報いだと言うアウレリア人の老人と。

「では、子どもにも罰が下るのですか？」とイェサイルは老人に尋ねた。

老人は答えなかった。

「神を子殺しに仕立てなければ苦しみに説明がつけられないのなら、説明などしないほうがいいのかもしれません」

人々はイェサイルの言葉を保存し、書き写し、他の人へと送るようになった。

神話になることを拒めば拒むほど、彼は神話となっていった。

少なくとも一つ、アリエンの見立ては正しかった。

この危機によってイェサイルの道義的な権威は高まった。

だが、そのわけをアリエンは見誤っていた。

人々が彼についていったのは、その血筋ゆえではなかった。

恐怖を利用せずに恐怖について語ったからだった。

彼の声とともに、以前ニトラで口にした考えもまた、広がっていった。

価値は影を歩んではならない。

当時は抽象的に響いた。

公開討論会で発せられ、経済学者と法律家と銀行家が論じ合う言葉だった。

エラリオンの大半の住民にとって、パンの値段や家賃や口座の残高ほどの重みもなかった。

疫病がこの言葉に肉体を与えた。

病院の物資が底をつきかけていた。

エラリオンの生産能力が足りなかったわけではない。自動化された工場は速やかに増産できた。タエロンの工場は休まずに稼働できたし、貨物回廊もなお機能していた。

問題は、品物を必要としているところへ届けることだった。

危機管理センターの壁で地元のニュースが流れていた。呼吸補助装置を積んだ自動運転車が国境で止まり、その向こうの病院では残った最後の装置を割り振っていた。

「装置は昨日完成しました」と記者が伝えた。「輸送システムには経路もわかっています。ところが決済拠点が支払いの承認を拒んでいます」

映像の下に理由が光った。〈為替変動リスクの負担について合意なし〉

供給元は、通貨が下落すれば材料の仕入れ値さえ回収できなくなると恐れた。国は危険をすべて引き受けることを拒んだ。双方のシステムは瞬時に金額を計算したが、どちらも相手が先に確約するのを待った。

「車はいつ先へ進めるんでしょう？」と記者が病院の責任者に尋ねた。

「誰かが価格差を引き受けると署名したらです」と女性は答えた。「私が署名できるのは、装置の受領書だけです」

サイラは放送の音を絞った。危機対応の地図に見えていたのは、用意の整った品物、通行可能な回廊、そしてどの決済システムにも下す権限のない決定だった。機械がいくら速くても、それは変わらなかった。

人々が問い始めた。

国境の向こうの病院にはもう空いた機器がないのに、なぜ装置はそこで止まっているのか。

決定を待つあいだに失われた時間の代価を、誰が負うのか。

足止めされた荷物、説明のつかない手数料、空の倉庫。そうした報道の下に、イェサイルの言葉が書き込まれた。

価値は影を歩んではならない。

人々は言葉を作り替えた。

金が薬を止めるなら、その金がどこで止まったかが、私たちにも見えなくてはならない。

討論の場や市民運動が生まれ、医療従事者、プログラマー、経済学者の非公式な輪も生まれた。公的資金による支払いをすべて公開せよと言う者がいた。企業の最終的な所有者を公開の登録簿に載せようと提案する者もいた。

いつ誰が自分の金融データを開いたのか、どの市民にも見えるようにしてほしいと言う者もいた。
そうした提案の中に、ネライは自分の言葉を聞き取った。
もう彼女の名前を冠して広がっているのではなかった。
イェサイルの名でもなかった。
人々の手に渡り、それぞれが自分の命を生き始めていた。
透明性という考え方が支持を集めたのは、エラリオンの人々が突然、道徳の上で立派になったからではない。
見えないということが、痛みとなって身に迫ってきたからだった。
そのころ、《橋》という会社が生まれてすでに数年がたっていた。
疫病が広がる前は、その名を知る者は少なかった。
　創業者はレラ・ヴァイン。決済システムのプログラマー二人、元銀行アナリストの女性、暗号記録の専門家、それに以前、越境決済の規則づくりに携わっていた女性法律家とともに会社を立ち上げた。
当初、新しい通貨を作るつもりはなかった。
エラリオンの国々のあいだで、あるいはエラリオンとタエロンのあいだで、支払いをもっと簡単にできるようにしたかった。
普通の国際送金はいくつもの銀行を経由した。どの銀行も自分の受け持つ区間しか知らない。使う側に見えるのは自分が送った額だけで、結局先方にはいくら届くのか、正確にはわからないことさえあった。
《橋》は、そのあいだで通訳をする層になるはずだった。
支払いを確定する前に、最終的な金額が見える。
為替レートも。
手数料も。
届くまでの時間も。
そして、受取人の手に渡る額も。
だが透明性をめぐる世間の議論に影響されて、この計画は疫病以前から変わり始めていた。

レラはニトラでのイェサイルの発言を見ていた。後には、金融の力は目に見えるようにしなければならず、それを監視する者もまた目に見えなければならないという、ネライ・サエルの論考を読んだ。
《橋》のチームは少しずつ、システム全体を組み直していった。
あらゆる支払いに、消せない記録を残すことにした。
個人の買い物をことごとく公開しようというのではない。
それでは普通の人の私生活は壊れてしまう。
公開するのはシステムの規則、会社の準備資産、大口の資金の流れ、所有関係、そして社会に対して力を持つとみなす基準を超えた取引だった。
私的な支払いは私的なままにした。
けれども自分のデータが参照されれば、誰が、どんな権限に基づいて、いつ開いたのかが、そのつど本人に見えた。
銀行が支払いを止めれば、理由を示さなければならなかった。
自動システムが要注意と判定すれば、何の規則を適用したのかがわからなくてはならない。
公開を免除された者がいれば、誰が例外を認め、いつまで有効なのかが記録された。
どの政府にも、単独でネットワーク全体を支配させない。
通信規約は公開した。
記録を検証するのは、各国の銀行、大学、市民団体、監査機関などが運営する複数の独立した拠点だった。
《橋》には独自の監督評議会があったが、過去の支払い履歴を書き換えたり、自分たちの下した決定の記録を消したりはできなかった。
レラは自分の構想をひと言で説明した。
「万人の姿が見えて、自分の姿だけは人に見えない。そんな目を作りたいわけではありません」
人々は哲学を求めてはいないと、投資家たちは答えた。
求めているのは便利さだ。
銀行は、準備資産や手数料、所有関係の公開は営業秘密を損なうと主張した。

規制当局は、一企業が惑星全体の金融基盤であるかのような印象を与えてはならないと釘を刺した。
こうして《橋》は長いあいだ、小さな会社のままだった。

利用していたのは技術系の企業と、タエロンの何人かの商人、それに定期的に国をまたいで金を送る人たちだった。
システムは機能していたが、大きくなるきっかけがなかった。

そこに疫病がやってきた。

真っ先に新しい利用者となったのは、政府でも、大病院でもなかった。

ボランティアだった。

ある市民団体が、封鎖されたアウレリア人居住区の病院に防護フィルターを届けようと募金をしていた。七か国から六種類の通貨で寄付が届いた。
普通に処理するなら、いくつも口座を管理し、何度も両替をし、中継銀行の確認を待たねばならなかった。
《橋》を通せば、すべての入金を一つの残高にまとめられた。

残高を表す単位はエラルだった。

エラルはもともと独立した通貨ではなかった。

《橋》のネットワークの単位で、エネルギー、原材料、エラリオンの主要通貨を、公表した割合で組み合わせたものに基づいていた。一国や一中央銀行の決定で、その価値が上下する仕組みではなかった。
一エラルごとに、《橋》は既存の通貨と短期の流動資産を裏づけとして保有していた。

準備資産の内訳は公開されていた。

流通するエラルの量と実際の裏づけが見合っているかどうかは、誰でも確かめられた。

ボランティアの画面には百エラルと表示される。

寄付する人は地元の通貨で払える。

フィルターの製造業者は自国通貨で受け取っても、エラルのまま持っていてもいい。

利用者には一回の支払いだった。

裏側では相変わらずいくつもの金融システムが接していたが、その複雑さを会計の際に人が背負うことはもうなかった。
最初の募金は数時間で締め切られた。
寄付した人には誰でも、何エラル入ったかが見えた。
総額が見えた。
フィルターの発注が見えた。
製造元、価格、手数料、配達完了の確認まで見えた。
患者の名も、ほかの人の個人的な小口寄付も見えなかった。
見えたのは、みんなで出した金の道のりだった。
募金の話は広まった。
別の団体が《橋》を使ってタエロンで薬を買った。
次には医師たちのグループが、国外から来た医療スタッフの宿を手配するのに使った。
やがて小さな病院が、業者の指定する通貨で支払いができずに使った。
《橋》はまず、従来のシステムが用をなさないところに入っていった。
銀行より《橋》のほうが信用されていたからではない。
銀行が見せないものを見せてくれたからだ。
支払いにいくらかかるか。
どこを通るか。
いつ着くか。
相手がいくら受け取るか。
もし止まったなら、誰が止めたのか。

あるとき、防護服の到着が遅れた。公開記録を開くと、金を止めたのは売り手でも運送業者でもなかった。中継銀行が、資金の出所について追加の証明を求めて止めていた。
銀行は、問題はよそで起きたとは言えなかった。
その決定には名があり、時刻と理由があった。
銀行は一時間のうちに不足の書類をそろえた。

支払いは再び先へ進んだ。

別の買い物では、注文の確定直前に業者が値を上げたことがわかった。自国通貨の相場が変わったのだと言った。

《橋》の記録によれば、相場はほとんど動いていなかった。

業者は元の値に戻した。

以前より誠実な人間になったからではない。

言い分が本当か確かめられるからだった。

次第に、より大きな組織がネットワークに加わった。

まず慈善基金。

次に地域の病院網。

その次には、何十もの通貨の口座の管理にうんざりしていた製造業者。

商人にとっては、エラルで一つだけ値をつけ、エラルで受け取るか現地通貨にするかを選べるのが利点だった。

病院にとっては、いちいち為替を換算せずに業者間の価格を比べられるのがよかった。

寄付した人にとって大切なのは、皆で出した金の行き先が見えることだった。

病院を運営する者にとって、自分の判断が記録に残るのは居心地が悪かった。

だが、ほかの人の信頼を増したのは、まさにその点だった。

《橋》を禁じようとした国もあった。

国の通貨と競い始めるような単位を民間企業が生み出してはならない、と主張した。

だが禁止は、現実の壁にぶつかった。

《橋》は、自国通貨を手放せと国々に求めてはいない。

商人は依然として自国通貨で代金を受け取れた。

税金は相変わらず地元の法に従って支払われた。

銀行も引き続き決済にかかわっていた。

《橋》は利用者に、共通の価値を一つの形で保有して送る手段を与え、その価値に何が起きているかを包み隠さず見せているにすぎなかった。

ある国が《橋》を遮断したとき、病院は、海外の物資の一部をこの網を通じて買い入れていると訴えた。
ボランティア団体が比較結果を公表した。
通常の送金には二日を要し、金額の四パーセントが失われた。
《橋》を通した支払いは数秒で届き、費用のすべてがあらかじめわかった。
三日後、禁止令は改められ、医療取引には一時的に例外が認められた。
ほかの国でも同じような例外が生まれた。
どれも通貨改革として採択されたのではなかった。
危機に対処する措置として採択されたのだ。
ある例外措置で、病院はエラルを受け取れるようになった。
別の措置で、保険会社は《橋》を通じ、国境を越えて行われた診療の費用を払えるようになった。
また別の措置で、公的基金はネットワーク上に支援金の配分を公表できるようになった。
エラルを惑星の通貨にしようと決定した者はいなかった。
決められたのは、目の前の一つひとつの案件だけだった。
その一つひとつが、障壁をひとつ取り除いた。
イェサイルが初めて《橋》について発言したときには、すでに何百万もの人が使っていた。
自分の名前が私企業の広告になるのは望まなかった。ただ、この仕組みが、ニトラで自分が語ったことの多くを実現しているのも見ていた。
「惑星全体の問題への答えが、一つの会社でいいのか、私にはわかりません」と人々に語りかけた。「どんな力にも、それを抑える力が必要です。自らを透明だと言う力にもです」
それから、まっすぐカメラを見つめた。
「けれども、なぜ人々が《橋》を使うのかを見てください。銀行がもう一つ欲しいからではありません。価格も規則も、手数料も、誰が何を決めたかも見えるから使うのです。誰かに支払いを止められても、後に残るのは沈黙だけではありません」

彼はひと呼吸置いた。

「健やかなとき、私たちは価値が影の中を歩くにまかせ、それを便利だと呼んでいました。機器一台がひと息を、荷物一つが残された時間を意味する今、私たちはどこで価値が立ち止まったのかを見たいと願っています。いつだって、そう願うべきだったのかもしれません」

《橋》の利用者はまた増えた。

けれどイェサイルの言葉ばかりが理由ではなかった。

もう仕組みの側に、みずからを裏づける証拠があった。

早く着いた荷物。

金が途中で消えなかった募金。

一つの単位で仕入れができた病院。

何日も待たずに代金を受け取れた業者たち。

病院の食堂が《橋》を使い始めると、食材の納入業者が加わった。

納入業者が加わると、その従業員もエラルを受け取るようになった。

医療スタッフが緊急手当の一部をエラルでもらうと、それでどこで買い物ができるのかと尋ね始めた。

真っ先に応じたのは病院の近くの店だった。

次に運送業者。

宿泊所。

薬局。

小さな商店主は、もはや通貨ごとに口座を開かなくてよかった。《橋》につながればそれでいい。地元の通貨とエラルの両方で価格を示し、売上金は選んだほうで自動的に精算してもらえた。

初めのうち、ほとんどの商人はエラルをすぐに両替した。

そのうち、一部はエラルのまま持つようになった。

次に海外から仕入れるときに使うとわかっていたからだ。

こうしてエラルは、ただシステムの中を通り抜けてゆくものではなくなった。

その中を巡り始めていた。

地元の通貨で貯蓄をすることは、これまでどおりできた。

給与もそれで受け取れた。
税もそれで払えた。
だが他国へ行くのに、もう両替はいらなかった。
《橋》を開く。
いつもと同じ残高が見える。
エラルで払う。
店はエラルか自国通貨を受け取る。
ニトラでも、サルルでも、タエロンのドームの下でも、同じように支払えた。
法律上はまだエラリオンの単一通貨ではなかった。
国々が発行しているのではなかった。
中央銀行が管理しているのでもなかった。
なおも多くの政府は、それを民間ネットワークの決済単位にすぎないと呼んでいた。
だが店先で金を払う人にとって、その違いは次第に意味を失っていった。
価格は一つ。
残高は一つ。
支払いは一回。
そして従来の仕組みと違い、自分の手元からほかの人の手へ、どんな規則に従って金が渡るのかが見えた。
《橋》が成長したのは、自分を完璧だと見せかけなかったからでもあった。
創業者たちは会社の出資構成を公開した。
投資家の名前。
それぞれの持ち分。
銀行との契約。
エラルを裏づける準備資産の内訳。
経営陣の報酬。
手数料と、準備資産を組み合わせたバスケットの価値。その計算規則を変えれば、変更点もひとつ残らず。

最終的な所有者がわからない基金がネットワークに加わろうとしたとき、《橋》はそれを拒んだ。

基金は差別だと訴えを起こした。

《橋》は判断の理由を公表した。

裕福だから、その基金を拒んだのではない。

基金を通じて力を手にするのが誰なのか、確かめられないから拒んだのだ。

惑星じゅうがこの争いを見守った。

多くの人にとって、プライバシーと隠された権力の違いを示す初めての具体例だった。

普通の人が薬を買うのに、自分の名前を世界じゅうに知られることはない。

けれど病院を買い集める基金は、十四の会社の背後に持ち主を隠してはおけない。

こうしてイェサイルとネライの考えは、書かれた言葉であるだけのものではなくなった。

仕組みという形を得た。

誰かが記録をのぞくたびに跡が残る。

あらゆる大きな金融の力には、最後にその力を握る者がいる。

どんな例外措置にも、それを認めた人と期限がある。

個人のささやかな支払いは私的なものにとどまる。

他者の暮らしを左右する大きな流れは、目に見える。

規則は公開されている。

ネットワークの運営者も、自分だけは監視を受けずに他人を監視することはできない。

人々はこの見通しのよさに慣れていった。

最初は疫病にかかわる事柄で。

次に食料品で。

エネルギーで。

輸送で。

慈善の募金で。

エラリオンとタエロンを結ぶ買い物で。

やがて、なぜ従来の銀行には同じような規則がないのかと問い始めた。

国は私たちの収入なら一件残らず示せるのに、なぜ公共事業の金が最終的に誰の手に渡るのかは示せないのか。

《橋》は毎日、準備資産を公表できるのに、なぜ中央銀行では、決定から公表まで何か月もかかることがあるのか。

エラルで払えば手数料の総額が前もってわかるのに、なぜ従来の送金では、受け取る側になって初めてわかる費用があるのか。

透明性は、もはや道徳上の要求にとどまらなかった。

使えば実感できるものになった。

カエル・ソーンは、すべての窓を不透明に切り替えた書斎から、《橋》の成長を見ていた。

ヴェスタはまだシステム上に姿を現していなかった。

過去の金の流れは、持ち主を守る銀行や基金や国家の中に、なおも隠されていた。《橋》に見えるのは、その網を通った価値だけだった。

だが人々は、カエルにとって捜査より危険なものに慣れ始めていた。

比べることに。

一度でも手数料の全額を見た者は、よそではなぜ見えないのかと問うようになる。

一度でも最終的な所有者を知った者は、それを隠す会社を疑うようになる。

どの国でも同じ単位で払えることを一度でも経験した者は、なぜ三十もの通貨が必要なのかと問い始める。

捜査なら遅らせられた。

委員会なら処理しきれないほど案件を積めばよかった。

裁判所なら異議申し立てで手をふさげた。

政治家なら待つように説得できた。

だが身についた習慣を元に戻すのは、そう簡単ではなかった。

《橋》が医療スタッフとボランティアだけの道具にとどまっていたら、疫病の後に消えたかもしれない。

けれどもう、そうではなかった。

家族が使っていた。

商人が。

製造業者が。

運送業者が。

タエロンで働く人々が。

イェサイルの演説を読んだこともなく、ネライ・サエルの名を知らない人々が。

透明性の理念を表しているから、エラルを使うのではなかった。

使いものになるから使うのだった。

従来の仕組みが隠していたものの多くを目に見えるようにしたからこそ、これほどうまく働くのだと気づくのは、あとになってからだった。
カエルは悟った。アリエンが引き起こしたのは災厄だけではなかった。

イェサイルの考えが毎日使う道具へと変わる、その条件を作ってしまったのだ。

暗闇の代償を人々に見せた。

そして、もっと穏やかな時代なら、大胆すぎる、開かれすぎている、古い秩序にとって危険すぎると人々が退けたはずの仕組みを、使ってみるほかないところへ彼らを追い込んだ。
人はときに未来を壊そうとして、まさにその手で、それまで未来の誕生を妨げていたものをことごとく取り除いてしまう。

第30章　《三分の一》

初めは症例を数えた。
次にベッドを。
それから酸素供給装置、薬の在庫、空いている隔離室、まだ働ける人を。
最後に、死者が残った。
まだ少ないうちは、正確な数が伝えられた。
七百四十二。
一万一千九百八。
二百四十万。
どの数字も、人の心の中で、まだどうにか、人を数えたものの顔をしていられた。
やがて数千万になった。
数億になった。
そして亡骸は一本の曲線になった。
上昇。
下降。
加速。
北へ移動。
ヴァシリアに到達。
タエロンにも及ぶ見込み。
人の心は、十億通りの死をひとつずつ担えない。
そうするには十億のベッドを思い浮かべねばならない。
十億の最期のひと息を。
十億の扉を。その向こうでは、もう戻らない人を、誰かが立って待っていた。
枕元に、飲みさしのままの十億の器を。
朝になれば続くはずだった十億の言葉を。

だから人の心は、それらをひとつの数字にした。

そして数字を一本の線にした。

疫病はアウリオラから、エラリオンのすべての国へ流れ出た。

その広がり方は、どこでも同じだったわけではない。

医療システム同士でデータを共有できるようにした地域は、数日を稼いだ。医師たちはどこに物資が残っているかを知った。惑星の反対側の病院での治療結果を見ることができた。アルゴリズムは患者の名を知ることなく、何百万もの病の経過を比較した。

やがて医師たちには、計算では及ばない理由も見えてきた。この病は多くの患者に激しい防御反応を引き起こし、血管を傷つけ、ようやく安定させた臓器を再び襲った。危険の兆しから取り返しのつかない循環不全に至るまで、数時間しかないこともあった。再生療法に必要なのは、容体の安定した患者と、数日という時間だった。データの共有で時間を稼げた人はいた。だが失った時間を取り戻せた者は一人もいなかった。

いくつかの国はデータを閉ざした。

主権のことを語った。

国民を守ることを。

危機を乗り切るための基盤が、疫病の後も連邦の手に残る危険を。

その懸念の一部には根拠があった。

だが病のほうでは、人間がどんな法的な理由でデータを閉ざそうとお構いなしだった。

それらの国では、病が数日長く、闇にまぎれて進んだ。

《三分の一》のさなか、数日はひとつの時代にも等しかった。

タエロンでは、軌道上から補給を受けるドームで最初の患者が出た。

管理者たちはすぐさま輸送回廊を閉鎖した。

だがタエロンは、人間と機械が絶え間なく取り交わす約束のうえに成り立つ世界だった。

ドームには水が要った。

生物由来の原材料が。

交換部品が。

エネルギーセルが。

フィルターが。

調合された化学薬品が。

病の侵入を防ごうと閉ざした道の一本一本が、生きるのに欠かせない何かの通り道でもあった。

エラリオンなら、村が国家のことを忘れても数日は生き延びられた。

タエロンでは、ポンプひとつ忘れることもできなかった。

だからタエロンが緊急決済用のエラルを取り入れたのは、母なる惑星よりも早かった。

どの積み荷にも、公開の記録があった。

どの判断にも、下した人がいた。

どの拒否にも、理由があった。

ドームの管理者たちは当初、抗議した。戦略備蓄が明るみに出てしまうと言った。

すると、管理者の一人が、自分の家族と評議会の関係者が暮らす私設の居住区に水を回していたことがわかった。

その記録は誰にでも見えた。

抗議の声は小さくなった。

エラリオンで崩れ始めたのは、医療網だけではなかった。

価値を測る従来のやり方も壊れていった。

一度の大崩壊でではない。

何千という小さな行き詰まりによって。

アウレリア人の割合が高い国々の通貨は急落した。これから亡くなる人を、市場は病院よりも早く数えていた。生産の落ち込み、税収の欠落、財政赤字、費用の増大を織り込んだ。

通貨が下がると、外国の薬が高くなった。

薬が高くなると、国の負債が増えた。

負債が増えると、通貨が下がった。

死んでいく人が増えるほど、人を救うために多くの金が必要になった。

多くの金が必要になるほど、その金の価値は小さくなった。

緊急時のために開かれた仕組みは、誰が積み荷を拒み、誰が値を変え、誰に為替差額を埋める準備金を出す権限があったのかを、次第に映しだした。人々は、荷物を待つ病院で、その決定がどんな結果を招くかを見た。争いはなくならなかったが、決済状況を示す無名の表示の後ろに隠れることはなくなった。

目に見えるようにしても、まだ誰も発見していない薬は作れなかった。

医療従事者は戻らなかった。

空のタンクに酸素が湧くわけでもなかった。

人間が欲や恐れや利己心を知らない存在になるわけでもなかった。

けれども個人も企業も政府も、何世紀にもわたってその後ろに隠れてきたひと言を、取り去ることはできた。

知らなかった。

ひと月もすると、エラルで払うのは医療機器だけではなくなった。

まずは病院のエネルギー代。

次に封鎖地域の食料。

次に労働者の輸送。

次に生物由来の原材料。

各国の通貨評議会が抗議した。

ダレン・ヴォルトルが合同会議に立った。

数週間前より青ざめていた。彼の家族にも、もう死者が出ていた。

「私たちは緊急の決済手段を通貨にしようとしている」と彼は言った。「中央銀行もなく、委任も受けず、地域の安定についての合意もないままに。恐怖のただ中で、救済の二文字さえついていれば、人々がたいていのことに同意する時にです」

ネライは彼の向かいに座っていた。

「だから、どの規則も見えるようにしてあります」

ヴォルトルは首を振った。

「見えることは正当であることと違う」

「ええ」と彼女は答えた。「でも、誰が規則を変えるのか見えなければ、正当かどうかを判断することさえできません」

「価値の物差しを一本にすれば、弱い地域を壊しかねない」

ネライは記録を三件開いた。

三つの積み荷。

通貨換算で足止めされた三件の支払い。

「ばらばらの物差しが、今、そうした地域を壊しています」

「言葉のあやだ」

彼女は記録を共用の画面に送った。

「こちらは実際の勘定です」

ヴォルトルは長いこと、それを見ていた。

彼の異論は消えなかった。

消えてよいものでもなかった。

正しい論拠ひとつであらゆる反対意見が消えてしまう世界は、自分が変えたいと思う世界に劣らず危険だ。ネライはそれをわきまえていた。

「疫病が去った後、誰がエラルを管理する？」とヴォルトルは尋ねた。

ネライはしばらく黙っていた。

「誰も管理しないかもしれません」

「『誰も』なんてものは存在しない」

そのひと言に彼女は立ち止まった。

そのとおりだった。

どんな仕組みの奥にも人が残る。

あるいは人の集まりが。

あるいはいつか誰かが書いた規則が。

「では」と彼女は言った。「ひとりの人間には所有できない形に作らなければ」

サイラは設計案を開いた。

各国に分散する拠点。
価値の算出方法の公開。
すべての変更履歴。
ひそかな相場調整は行わない。
誰が閲覧したかをたどれる仕組み。
権限の分散。
通貨評議会の決定に対する公開の監視。
緊急用のモデル。
不完全なもの。
死者のただ中に生まれつつあるもの。
それでもその土台には、エラリオンがこれまで知らなかったものが姿を見せ始めていた。
闇の中を行かずともよい価値。
そして、誰かに見られているという居心地の悪さに、慣れ始めた権力。
そのあいだもイェサイルは語りかけを続けていた。
自分で認めるより先に、マレイアはその疲れに気づいた。
ある放送の後、彼は暗くなった画面の前に立ち尽くした。
身じろぎもしなかった。
「イェサイル？」
彼女に振り向いた。遠いところから帰ってきたような顔だった。
「どうした？」
「それはこっちの台詞」
「疲れただけだよ」
「休まなきゃ」
「休んでるよ」
「いつ？」
彼はほほえんだ。
「災難と災難のあいだに」

マレイアは笑わなかった。
外は雨だった。
ダヴィオン家の背の高い窓を雨が伝い、谷の灯がしずくの中で細く、長くいく筋にも砕けて流れていた。
「一緒にニトラへ来て」
イェサイルは外を見た。
「ここの人たちは？」
「回線でつながれるわ」
「エランだって、つながってた」
マレイアは黙った。
イェサイルはすぐに目を伏せた。
「ごめん」
「いいの」
「言うべきじゃなかった」
「でも、そう思ってる」
彼はうなずいた。
「人と、その人を映した像は違うんだ」
「そばにいることであなたが死んだら？」
今度はなかなか答えが出てこなかった。
「それなら、僕は選び間違えたのかもしれない」
マレイアは彼を見つめた。
「そのときには、もう誰にもそう言えないのよ」
彼女は歩み寄った。
「助けるのをやめてほしいわけじゃない。人を愛するならその人たちのために死ぬ義務があるなんて、思わないでほしいの」
イェサイルは黙っていた。
「じゃあ、僕にどうしてほしい？」
「いてほしい」

「どこに？」
マレイアはその目を見つめた。
「私と一緒に」
そのとき、世界は小さくなった。
政治の評議会もなく。
氏族もなく。
疫病もなく。
ひとりの人間をいつしか自分たちの象徴として取り込み、次の言葉を待ち受ける惑星もなく。
ただ一人の女がいた。愛を所有に変えてしまえる男のもとを、一度は去った女だった。
そして今、愛を万人への義務に変えてしまったために、もうひとりの男を失いたくはなかった。
イェサイルは彼女の手首に手を置いた。
「ここにいるよ」
マレイアはその手を三本の指で握った。
ほんのしばらく、二人は黙った。
ごく自然なしぐさだった。
それなのに、あまりにも自然すぎた。
イェサイルの内を奇妙な痛みが走った。
像もなく。
言葉もなく。
ただ、自分の記憶の中にあるはずの何かが、そこにないという感覚だけ。
三本の指。
違う光。
砂埃。
女の手。
そして、この人生では一度も失ったことのない誰かを悼む思い。

マレイアは手を離した。
「どうしたの？」
「わからない」
今度は本当だった。
まだ経験していないことを思い出したのだ。
その夜、危機管理センターに新たな予測が出た。
サイラは当初、公表を拒んだ。
データが不完全だった。
依然として症例報告が遅れている国があった。医療体制が崩れた地域からは、信頼できる数字がほとんど届かなかった。
モデルを使って、もう一度計算した。
そのうえで、さらにもう一度。
入力する値を変えた。
予想される死亡率。
病院の収容能力。
治療法が開発される速さ。
どの道を通っても、同じ数字に近づいていった。
ネライはそれを見つめた。
33.1%。
「もう誰がこれを見た？」
「分析班が」
「政治の指導部は？」
サイラはためらった。
「もっと幅の広い予測値を渡した」
「なぜ？」
「不確実性があまりに大きいから」
「結果がもっと低くなることは？」
「ありうる」

「もっと高くは？」
サイラは答えなかった。
画面に換算した値が光っていた。
犠牲者は合わせておよそ三十億人。
アウレリア人の系統のほぼすべて。
ほかの系統の人々も数億人。
「公表しなければ」とネライは言った。
「三分の一なんて口にしたら、パニックを起こすわ」
「言わなければ、国々は十分の一を想定して備えることになる」
「これは予測よ」
「なら、予測だと言いましょう」
その言葉が初めて記されたのは内部文書だった。
《三分の一》。
その夜のうちに文書は流出した。
誰の手から漏れたかは、とうとうわからなかった。
朝には惑星じゅうがその言葉を知っていた。

ネライが流出を知ったのは、深夜放送の見出しだった。〈人口の三分の一が死亡する恐れ〉。キャスターは最も高い曲線だけでなく、予測の幅も示した。「これは犠牲者の総数についての予測です」と繰り返した。「すでにこれだけの方が亡くなったということではありません」
次の映像では、ある国の統治者が冷静さを呼びかけた。アウリオラの女性医師が、落ち着くためには物資も、開かれたデータも必要ですと答えた。画面の下には、親族を捜す人々からの伝言が流れていた。

キャスターが次の話題に移るまで、ネライは画面の前を離れなかった。
こうして内部の試算が、家族が夕食の席で口にせずにはいられない一文になった。
それは病の名として口にされるのではなかった。
未来の名だった。
もし《三分の一》が来たら。

《三分の一》の前。

《三分の一》の後。

あたかも、先に進んでゆく者と、過去形だけが残る者とを分かつ境が、すでにどこかに引かれているかのようだった。

いくつかの街で騒乱が起きた。

人々は倉庫をこじ開けた。

口座から金を引き出した。

行くあてもないのに、街から逃げた。

一方で、志願者の列ができたところもあった。

老人たちが酸素装置を若い人に譲った。

ホテルの持ち主たちが部屋を医療スタッフに開放した。

何年も言葉を交わしていなかった家族が電話をかけ合った。

戸を閉める人がいた。

初めてそれを開ける人もいた。

災厄が映しだすのは、人間のただひとつの素顔ではない。

それまでその人の内に、安らかに眠っていられた、いくつもの顔だ。

ふた月が過ぎると、死者は十億を超えた。

三か月で二十億を超えた。

アウレリア人の街々から人影が消えていった。

戦争も火災も国家の滅亡もくぐり抜けてきた氏族の家々に、跡を継ぐ者がいなくなった。

ある家族では男がみな死んだ。

記録所は千年を超えてその血筋をたどってきた。

担当の女性職員が、最後の一人のデータを入力した。

システムが自動的に状態欄を埋めた。

家系　断絶

職員はその二語を見つめた。

何週間にもわたって、何百万もの死者の報告を処理してきた。

泣かなかった。

たったひとつの記入欄で、涙があふれた。

イェサイルが最後に惑星の人々の前に姿を見せたのは、彼に熱が出た日だった。

マレイアは画面に映らないところに立っていた。

放送が始まる前から、彼の顔色が悪いと思っていた。

イェサイルはカメラを見た。

「死者の数が大きくなると、私たちは自分の内で、一人ひとりを小さくし始めます。それは身を守るためです。でなければ耐えられない」

彼は言葉を切った。

「けれど、十億のうちの一人になったからといって、その人が小さくなったわけではありません」

ほんのひととき、机に身を預けた。

マレイアが一歩踏み出した。

イェサイルは、大丈夫だと目で伝えた。

「亡くなった人の誰もが、ある小さな世界の中心にいました。名前がありました。帰ってくる場所がありました。その人だけの笑い方がありました。その足音を知っている誰かがいました。お皿の上の何を食べ残すか、知っている誰かがいました。その声を待つ誰かがいました」

画面の前で何百万もの人が黙り込んだ。

「私たちは、もうひとつの世界を築けるほどの文明を築いてきました。川の流れを移し、異郷の空の下に森を作りました。医師より先に病を見つけることを、機械に教えました」

彼は息を吸った。

痛みが走った。

「それなのに、自分たちの口座を通り抜けてゆく意図を見抜けなかった」

ネライはその言葉に顔を上げた。

「いつか私たちは、誰がこれをしたのかと問うでしょう。問わなければなりません」

イェサイルは黙った。
「けれど、ひとりの人間の名前だけで答えが終わるなら、私たちは何もわかっていない。人は憎しみを持ち込むことができます。計画を持ち込めます。悪を持ち込めます」
まっすぐカメラを見た。
「けれど、その人間に道を与えるのは文明です。与えずにおくのも、文明です」
ネライはその一文を胸に刻んだ。
一年後、彼女は会議の前でそれを口にすることになる。
きょうだいのイェサイルが公に語る最後の言葉のいくつかを、いま自分が聞いているとは、ネライはまだ思いもしなかった。
放送が終わると、すぐにマレイアがそばに来た。
「熱いわ」
「部屋が暑いんだ」
「暑くなんかない」
彼女は彼の額に手のひらを当てた。
イェサイルは目を閉じた。
「いつから？」
「朝から」
マレイアは信じられないという顔で彼を見た。
「何も言わなかったの？」
「疲れのせいだと思った」
彼女は医療回線を開いた。
イェサイルがその手を取った。
「待って」
「何を？」
「ほんの少し」
「イェサイル、私たちにはもう、その少しがないのよ」

初めて、その声に恐れが聞こえた。
エラリオンを案じる恐れではなかった。
ひとりの女が、たったひとりの人を案じる恐れだった。
イェサイルは目を開けた。
黄金の環がひときわ明るくなっていた。
マレイアはそれを見た。
そのまなざしから、彼自身にも見えたのだとわかった。
「ネライ」と回線に呼びかけた。「ダヴィオン家に隔離の手配をお願い」
向こうはしんとした。
「イェサイルなの？」
マレイアは答えなかった。
答えるまでもなかった。
「そっちへ行く」
「だめだ」とイェサイルが口を挟んだ。
ネライにも聞こえた。
「私にだめなんて、言わせないから」
「君は無事でいられるかもしれない」
「私の母はアウレリア人よ」
「だからこそ、何もわからないんだ」
「行くから」
「ネライ」
声が弱くなっていた。
「まだ君にできることがある場所にいてくれ」
「だって、私たち、きょうだいでしょう」
イェサイルはほんの一瞬ほほえんだ。
「だからだよ」
ネライは回線を切った。
もう走り出していた。

マレイアはイェサイルに肩を貸し、屋敷の隔離区画へ連れていった。
「君は外にいてくれ」と彼は言った。
「いや」
「マレイア」
彼女がひと目見るだけで足りた。
これ以上言ってもむだだと、イェサイルにはわかった。
「ひとりでは行かせない」と彼女は言った。
イェサイルは身震いした。
今度は熱のせいではなかった。
その言葉。
知っていた。
はるか遠くから自分のもとへ旅してきたかのようだった。
一度も訪れたことがない場所を通って。
一度も生きたことがない生を通って。
隔離室の扉が閉じた。
二人のあいだにはガラスが残った。
マレイアは透明な壁に三本の指を当てた。
イェサイルは手のひらを上げた。
反対側からその指に触れるより早く、マレイアは寒気を覚えた。
ついで力が抜けた。
壁にもたれた。
「マレイア？」
彼女は首を振った。
なんでもないと言おうとした。
代わりに、膝が崩れた。
医療システムは二人目の体温上昇を記録した。
数分後には、彼女も隣の隔離室に横たわっていた。
二人のあいだの扉を開けることは許されなかった。

二つのベッド。
二つの黄金の環。
一枚の透明な壁。
ネライがアウリオラの封鎖線にたどり着いたのは、三十七分後だった。
システムは立ち入りを拒んだ。
ネライは自分の権限を示した。
ふだんなら《層》のどんな扉でも開けてくれる人たちに連絡した。
何の役にも立たなかった。
目の前に隔離の障壁が立ちはだかっていた。
その向こうで、自分のきょうだいが死にかけていた。
道路の上に死者の数が光っていた。
2,999,999,997。
数字が変わった。
2,999,999,998。
ネライは息を詰めて画面を見つめた。
2,999,999,999。
そして――
3,000,000,000。
惑星じゅうで、同じ一秒のうちに、共通の数値が更新された。
エラリオンの三分の一が死んだ。
ダヴィオン家からネライに回線がつながった。
画面の中にイェサイルがいた。
マレイアがいた。
そして二人のあいだに、ガラスがあった。
災厄に名がついた。
《三分の一》が来た。
ただ、まだ終わってはいなかった。

第31章　ガラスの向こう

イェサイルは四日目に死んだ。

医療システムはその瞬間を正確に記録した。

時刻。

脈拍。

血中酸素飽和度。

体温。

心臓に生じた最後の電気活動。

測ることのできるものはすべて記録した。

肝心なもの以外は。

隔離室のマイクは、たえず聞き耳を立てていたわけではない。病む人の尊厳を守るための昔からの規則だった。医師は回線を開くことができた。生体機能の変化があればシステムは警告できた。だが人の最期の時間を公の記録に変える権利は、誰にもなかった。

だからイェサイルがマレイアに何と言ったのか、誰にもわからなかった。

ネライは後に幾度となく映像を再生した。

音はなかった。

イェサイルはもう立てなかった。

座ることもできなかった。

ガラスに寄り添うように床に横たわっていた。

反対側にマレイアが横たわっていた。

顔と顔を隔てているのは数センチの距離と、ウイルスも、触れる手も、最期の抱擁も通さない素材だった。

イェサイルが手を動かした。

もうそれが精いっぱいだった。

手のひらを床に置いた。

マレイアは三本の指を上げた。
イェサイルの唇が動いた。
短いひと言。
二語ほどだったかもしれない。
誰にも聞こえなかった。
マレイアには聞こえた。
そしてほほえんだ。
後になって、そのほほえみにはさまざまな説明が与えられた。
死を受け入れたのだと。
心が和解に至ったのだと。
最後に愛を示したのだと。
だがネライはそこに、いつももっと不思議なものを見た。
マレイアのほほえみは、別れを告げる女のものではなかった。
ほんの一瞬、気が遠くなるほど長い時を経て、ようやく誰かを見いだした女の顔になった。
イェサイルの顔の奥に、もうひとつ別の顔が開けたかのように。
ガラスの向こうには、一瞬、隔離室ではなく、遠い庭があったかのように。
違う空。
違う生。
記憶になる暇もなかった記憶。
イェサイルは目を閉じた。
手のひらはガラスのそばに残った。
マレイアはその手を見つめていた。
七時間。
それから息が短くなり始めた。
ひと息。
静けさ。
ひと息。

もっと長い静けさ。
そしてとうとう、静けさだけが残った。
イェサイルの七時間後、彼女の心臓も止まった。
ネライはアウリオラの封鎖線の手前で、輸送モジュールに座っていた。
二人から何キロも離れて。
サイラが隣に座っていた。
彼女に触れなかった。
お気の毒にとも言わなかった。
小さすぎて、口にすれば侮辱にさえなる言葉がある。
回線に保健当局の職員が現れた。
「ご遺体をどうするか、お決めいただく必要があります」
ネライは彼を見た。
男は目を伏せた。
「失礼しました。お気持ちは――」
「わからないでしょう」
沈黙。
「どういう選択肢がありますか？」
「防疫規定では、移送せず、その場でただちに遺体を処分することを勧めています。一族評議会は生体試料の保存を求めています。世間は葬儀を求めています」
「世間？」
「情報が漏れました」
ネライはネットワークを開いた。
イェサイル・ダヴィオン、死去。
やがて別の知らせが現れた。
マレイア・リオレン、死去。
　ネライはニュースの音声を入れた。キャスターはもう、イェサイルの死について一族評議会に談話を求めていた。マレイアについては、報道部はま

だ家族の確認を得ていなかった。回線に出た女性医療スタッフは、二人の診療記録について語ることを拒んだ。
「ご家族には、何をお話しになりたいかお決めになる時間さえ、まだありませんでした」と彼女は付け加えた。私生活について問われたら、きょうだいのイェサイルがどう答えたか、ネライにはわかっていた。自分は加わらず、放送に語らせておいた。
それから写真が続いた。
ニトラの公開討論会でのイェサイル。
病人たちに交じるイェサイル。
最後の語りかけをするイェサイル。
記録を前にしたマレイア。
庭にいるマレイア。
イェサイルの手首を三本の指で握るマレイア。
二人の体はまだ冷えてもいないのに、世界はすでに、二人を物語に仕立て始めていた。
殉教者と呼ばれた。
古い世界の最後のアウレリア人と。
証しと。
しるしと。
一方で、二人の死を使って、イェサイルがかつて語ったすべてを攻撃する者もいた。
授かった力があったのなら、なぜ自分を救わなかった。
特別な人間だったのなら、なぜマレイアを救わなかった。
なぜ三十億の人々を救わなかった。
ネライは画面を消した。
「二人はそこで火葬にしてください」
職員はうなずいた。
「試料は？」
「研究に必要な分だけです」

「一族評議会は――」
「聖遺物にはさせません」
彼女の声は静かだった。
「二人の体は誰の所有物にもなりません」
ひと呼吸おいて、職員はうなずいた。
「葬儀はいかがいたしましょう」
ネライは輸送車のフロントガラス越しに、ダヴィオン家の方角を見た。ここからは見えないとわかっていた。
「いずれ」
だが、その「いずれ」は長いことやってこなかった。
まだ人が死んでいた。
病院にはまだ、一晩じゅう明かりがともっていた。
輸送モジュールはまだ、誰も待っていない場所へと遺体を運んでいた。
疫病は三十一億を超える人の命を奪った。
それからようやく、曲線は折れ曲がり始めた。
ひとつの奇跡の薬が生まれたのではなかった。
何十もの小さな勝利が訪れた。
体の反応をより効果的に抑えること。
危険な数時間をより的確に見分けること。
薬剤の新しい組み合わせ。
予測モデル。
最も傷つきやすい人々を守る方法。
その一つひとつが、幾人かを救った。
合わさって、死を食い止めた。
新しい症例が初めて半分に減ったとき、誰も祝わなかった。
十分の一に減ったときも、広場で祝いの酒の栓が抜かれることはなかった。
最後まで満床だった大病院が再び空きベッドを確保できたと告げると、その院長は発表の後、執務室に鍵をかけ、一時間泣いた。

エラリオンは生き延びた。
報道にはそう書かれた。
けれど、惑星には鼓動を測れる心臓などない。
生き延びなければならなかったのは人間だった。
そしておよそ三人に一人が欠けていた。

第32章　訪れる者たち

命が終わる死がある。

そして、名だけが終わる死がある。

イェサイルが死んだとき、エラリオンはまだ、彼がどれほどのものを残してゆくかを知らなかった。

その肉体は、《三分の一》が問答無用で奪った幾十億もの肉体のひとつだった。

真実と価値と権力をめぐって人々が論じ合う部屋に、彼の声はもう響かなかった。

彼の腕はもう誰も抱かなかった。

彼の目はもう朝を迎えて開くことはなかった。

エラリオンにとって、彼は死んだ。

それは真実だった。

ただ、すべてではなかった。

宇宙は名よりも古い。

国境よりも古い。

民族よりも古い。

若いうちは自分たちの歴史こそ存在するすべての中心だと信じている惑星たちよりも、なお古い。

世界はいくつもあった。

青い星を巡るものもあった。

年老いた太陽の赤い光のもとに生きるものもあった。

いくつかの世界では何キロもの海の下に命がひそみ、文明の始まりから終わりまで、誰一人として星々を見たことがなかった。

またあるところでは、街があまりにも高くそびえ、その上層階には下の通りとは違う空が広がっていた。

とうとう金というものを発明しなかった文明もあった。

そのためにほとんどすべてをささげた文明もあった。
けれどどの文明も、いつかはひとつの境に行き当たった。どんなに大きな機械を作っても越えられない境に。
どんなに速い船によっても。
新しいエネルギー源によっても。
知を収めた書庫をもう一つ増やしても。
すべての問題が知性の不足から生じるわけではないからだ。
知性が自分自身の何をまだ理解できていないか。そこから生じる問題もある。
そしてそういうとき、ときおり、誰かが生まれた。
王として生まれることは、まずなかった。
職人の子かもしれなかった。
教師の娘。
歴史に名を残さなかった女の息子。
貧しい者のあいだに生まれることもあった。
学のある者のあいだに生まれることもあった。
ある者は広場で語った。
また別の者は長い年月ほとんど語らず、ほんの幾言かを残した。
その人が生きているうちに、言葉が世界を変えることもあった。
幾世紀を要することもあった。
名は変わった。
顔は変わった。
言葉は変わった。
頭上の星々も変わった。
その役目だけは、どこか似ていた。
世界を一歩進めること。
終着点までではない。
ただ、もう一歩先へ。
たったひとりの人間に惑星全体を救うことはできなかった。

ほかの者たち自身の決断なしにひとりで世界を救えるとすれば、そこは自由な者たちの世界ではない。
だから彼らにできたのは、行く手を指し示すことだけだった。
もうすっかり忘れ去ることはできない、ひとつの考えを言葉にすること。
扉を開くこと。
そして、その扉をくぐるかどうかは、ほかの者たち自身に委ねること。
ある世界で初めて言わねばならなかったのは、相手が弱いからといって、強い者に相手を所有する権利が生まれるわけではない、ということだった。
別の世界では、知には主人がいないということ。

　また別の地では、神々の姿を違えて思い描いたがために民族と民族が殺し合っていた。そのただ中に、ある人がひとつの考えをもたらした。人間の憎しみを必要とする神は、聖なる言葉をまとった人間の憎しみにすぎないのかもしれない、と。
人々が赦すことを学ばなければならないところもあった。
疑うことを学ぶべきところもあった。
そしてある世界では、人の目から隠された権力は遅かれ早かれ自分自身に仕え始める、と言わねばならないときが訪れた。
エラリオンは、そういう惑星だった。
イェサイルは完璧な世界の作り方を携えて来たのではなかった。
エラリオンがようやくその声を聞き始められる、ちょうどそのときに、いくつかの言葉を口にした。
価値は影を歩んではならない、と。
権力は、その下に置かれた者たちのまなざしに耐えなければならない、と。
所有とは、責任の跡でもある、と。
ひとりの人の富は、それが生まれるのを可能にした世界から、すっかり切り離せるものではない、と。
戒めではなかった。
種だった。

そして種は、それをまいた人が、育った木の下に座ることまでは必要としない。
それでもイェサイルは死にたくなかった。
《三分の一》は、彼の言葉と引き換えに宇宙が求めた代償ではなかった。
マレイアの死もまた、何か完璧な方程式の一部などではなかった。
生きていたかった。
彼女と年老いたかった。
いつの日かダヴィオン家で目を覚まし、生まれて初めて、答えを求める者が扉の外に誰もいない朝を迎えたかったのかもしれない。
取るに足りないことで言い合いをしたかったのかもしれない。
数時間後にはそのことを忘れていたかったのかもしれない。
互いの手が老いるまで、庭のそばに腰掛けていたかったのかもしれない。
そのすべてが彼から奪われた。
彼の考えに、彼の死は必要なかった。
けれど彼が死ぬと、その考えはほかの人々の手に残った。
ひとつの問いとともに。
彼らが愛したのは、あの人だったのか。
それとも、彼が言おうとしたことをも理解していたのか。
もし何もかもがイェサイルの存在にかかっていたなら、何もかもが彼とともにガラスのそばで死ぬこともありえた。
けれど彼の言葉のいくばくかがほかの人の内に入っていったなら、その言葉が生きるために、もう彼の呼吸はいらなかった。
三十光年の彼方で、小さな青い惑星が、自分の太陽を巡っていた。
その物語は、まだ若かった。
そこにいる人々は、まだエラリオンを知らなかった。
《橋》のことなど何も知らなかった。
アウリオラの人々のことも。
ネライのことも。

透明なガラスのそばで、床に手のひらを置いた男のことも。
いつの日か、そこに別の人間が生まれることになっていた。
イエスと呼ばれるはずだった。
宇宙から見れば探し出すことさえ難しい村と村のあいだを、土ぼこりの道をたどって歩くはずだった。
漁師たちと食卓を囲み。
病む人に手を触れ。
ほかの誰もが顔を背ける人たちと話をするはずだった。
力ある者たちとも、ほとんど何も持たない者たちとも出会うはずだった。
軍隊もなく。
官職もなく。
国の印璽もなく。
パンを裂くことのできる手を持って。
それでも彼の後には、幾つもの帝国より長く生きるものが残るはずだった。
目の前にいる人には、あなたに差し出せるものが何もないときにも、価値があるということ。
慈しみは、盲目的に律法を守ることを超えうるということ。
偉大であるとは人に仕えることでもありうるということ。
敵は永遠に敵のままでなくてもよいということ。
その後、人々は何世紀にもわたって、彼が何者だったかを論じ合うことだろう。
彼のために聖堂を建てるだろう。
その顔を絵に描くだろう。
どの民族も、自分たちの顔を少しずつ彼に貸すだろう。
ある者はそこに神を見るだろう。
ある者は預言者を。
またある者は師を。
そして彼の名において、その教えと正反対のことをなす者もいるだろう。

大きな思想は、歴史を一本道に進んではいかない。
ある世代がその思想を口にする。
次の世代が自分たちの必要に合わせて曲げる。
その次の世代がふたたび見いだす。
そうして何世紀もたてば、かつてはひとりの人間の危険な夢と響いたものが、何百万もの人にとっての当たり前になりうる。
世界はそうして進む。
一段ずつ。
ある段と段のあいだには、後に預言者と呼ばれる者たちが現れる。
救世主と。
賢者と。
改革者と。
異端者と。
愚か者と。
宇宙には、彼らをひとくくりにする名など必要なかった。
手紙を持たぬ使者のようだった。
彼ら自身が手紙だった。
けれど自分たちの訪れた世界の一員となるには、しばらく忘れなければならなかった。
すべてを知っていれば、彼らの生は人間の生にはならなかっただろう。
ただの訪問に終わっただろう。
だから彼らは痛みを知った。
飢えを。
恐れを。
孤独を。
渇望を。
怒りを。
愛を。

疑いを。

過ちを犯しえた。

後悔するような言葉を口にすることもあった。

生きていたいと願うこともできた。

少なくともひととき、その世界に生きる者のひとりにならなければ、彼らの経験の内側から彼らに語りかけることは、誰にもできないのだから。

そしてその生が終わると、肉体は惑星に残った。

名は歴史に。

言葉は人々に。

もっと奥にひそむものは、先へ進んだ。

そうした生と生のあいだの時間は、暦で測られはしなかった。

明日の朝を待つ体はない。

鼓動を数える心臓もない。

ある惑星では数千年が過ぎてから、別の惑星に初めて、そこへ踏み入ることのできる時が熟すこともあった。

そのあいだにも、はるか彼方ではひとつの文明が産声を上げていた。

火を見いだした。

やがて文字を。

土地を分けた。

法を作った。

神殿を建てた。

武器を作った。

金を発明した。

そして十分に長い時がたつと、自分たちが世界を整えたやり方こそが、世界を整える唯一のやり方であると信じるようになった。

そうして、自らの限界に近づいた。

そのとき、旅はふたたび始まりえた。

違う星。

違う惑星。

違う体。

違う名。

役目も同じとは限らなかった。

復讐に溺れる世界が聞く必要のあるのは、赦しのことだった。

従順を善と取り違える世界に必要なのは、疑いだった。

気まぐれな権力に踏みにじられた文明には、ひとりの人間を守るものが必要だった。

そして、自分たちが生きていられるのはほかの人々のおかげだと一人ひとりが忘れてしまった世界には、いつか、全体に対する自分の務めを思い出させることが必要になるかもしれなかった。

言葉は変わった。

その向かう先には通じ合うものがあった。

恐れから理解へ。

暴力から協力へ。

隠された権力から責任へ。

自分たちは切り離されているという思いから、生きとし生けるものは何ひとつ、それだけで生まれるのではないという理解へ。

イェサイルは、そういう者たちのひとりだった。

いつかは別の名を名乗っていたかもしれない。

とうの昔に消えた惑星の空の下に立ち、エラリオンの人間にも地球の人間にも顔とは呼べそうにない顔をした者たちに、語りかけていたのかもしれない。そこではまるで違うひと言を発していたのかもしれない。

同じ旅路の、別の一節を。

そして小さな青い惑星での彼の旅は、まだこれから始まるところだったのかもしれない。

別の体で。

その意味はわからずとも、すでに時折、ひらめきとなって彼のもとへ戻ってきていたあの名のもとで。

魂に署名はいらない。
署名を必要とするのは歴史だ。
そして、魂の中には、世界から世界へとひとりきりで渡ってゆくのではないものもあるのだろう。
名を失っても消えない親しさというものがある。
初めは、見知らぬ相手への不思議な信頼としてだけ戻ってくる。
思い出を伴わない悲しみとして。
頭で考えるより先に動く手として。
手首に置かれた三本の指。
なぜ口にしたのか、自分でもわかる前にこぼれるひと言。
ひとりで行かないで。
マレイアの最期のほほえみは、ネライの胸に問いとして残った。
イェサイルが何を言ったか、記録からはわからなかった。
最後の瞬間にマレイアが何を見たかもわからなかった。
残ったのは、死にゆく男を見て、気が遠くなるほど長い時を経てようやくその人を思い出したかのようにほほえむ、ひとりの女の姿だけだった。
イェサイルの心臓が止まったとき、星々は軌道を変えなかった。
空は開かなかった。
エラリオンにしるしは現れなかった。
惑星は変わらず巡り続けた。
街々は死者を数えた。
家々には、窓辺に置かれた器が残った。
衣掛けに下がった服が。
読みさしの本が。
朝になっても、もう誰も起きだしてはこないベッドが。
それでも何かが動いた。
人々の内で。
イェサイルの言葉は、彼のいないところで広がり始めた。

ゆがめる者がいた。

単純にする者がいた。

自分に都合のいいところだけ拾う者がいた。

そこから、イェサイル自身もまだ考え尽くす暇のなかった帰結を見いだす者たちもいた。

生みの親より長く生きる思想は、どれもそういう運命をたどる。

その人ひとりのものではなくなる。

彼の書斎には書類が残った。

その中には、生きている者の分け前をめぐる草案があった。

余白の書き込み。

答えの出ていない問い。

空いたままの箇所。

世界は、その椅子を空けたまま去った人との対話を続けることを学ばなければならなかった。

そしてはるか遠く、エラリオンの誰一人見たこともない星を、もうひとつの惑星が巡っていた。

海は暗い金属の色をしていた。

夜になると、その上を三つの月が渡った。

陸地には、ちょうど最初の街々が生まれ始めていた。

住民たちは文字を見いだした。

商いを始めた。

土地を分け始めた。

少しずつ、持つ者と従う者に分かれていった。

彼らのゆく手には数千年の時があった。

まだその時は熟していなかった。

宇宙は急がなかった。

だがいつか、彼らのもとにひとりの子が生まれるだろう。

エラリオンでは決して響くことのない名を与えられるだろう。

地球でも。
その子は笑うだろう。
泣くだろう。
過ちを犯すだろう。
恋をするかもしれない。
死を恐れるかもしれない。
そしてある日、ひと言を口にする。その言葉のあとでは、その子の世界はもう、すっかり元どおりではいられなくなるだろう。
そこにはイェサイルを知る者はいない。
イエスを知る者もいない。
それでかまわない。
大いなる魂が宇宙を渡るのは、おのれの名を残すためではない。
名はそれぞれの世界のものだ。
魂が携えてゆくのは、ただ、どちらへ歩むかということだけだ。
そしていつかひとつの場所で役目が終わるとき、彼らは上へ昇るのではない。
去ってゆくのでもない。
ただ、もう一歩先へ。

第四部　三分の一を失ったエラリオン

第 33 章　失われた手

曲線がようやく横ばいになったとき、軌道上から見るエラリオンの姿は、以前とほとんど変わらなかった。

海はもとの場所にあった。

大陸も動いてはいなかった。

夜になれば街は明かりをともした。

上空の交通回廊は、相変わらず惑星を細い光の血管で包んでいた。

タエロンは軌道を巡り続けた。

はるか遠くから眺める者がいたとしても、この星を襲った災いには気づかなかったかもしれない。

もっと近くまで来なければならなかった。

ひとつの食卓のそばへ。

ひとつの寝台のそばへ。

ひとつの仕事場へ。

およそ三人にひとりが、そこからいなくなったのだ。

その不在が最初に形をとったのは、家のなかだった。

半分空いた寝台。

飲みかけの器。

置かれたきり、もう誰も取りに来ない服。

未配達の印が消えないメッセージ。

子どもたちの玩具。もうあの人が寝かしつけに来ることはないのだと、親たちは何日たっても子どもに言えずにいた。

やがて世界もまた、死者の不在を感じはじめた。

北アメニアのある病院では、酸素供給網の管理者三人のうち二人が亡くなった。
供給網そのものは動いていた。
酸素をつくれた。
精製できた。
送り届けることもできた。
消費量も予測できた。
だが供給能力を大きく変えるには、有資格者二人の承認が法律で義務づけられていた。
ひとりは死んでいた。
ひとりは意識のないまま横たわっていた。
残るひとりは四十時間、一睡もせずに働いていた。
その人が、間違えた。
サルルの倉庫には、まだ何か月分もの食料があった。
自動運転の車両が列をなしていた。
道は知っていた。
どこが通行止めかも判断できた。
迂回路も探せた。
けれど人間の承認なしに、配送先を変更することは許されなかった。
変更を承認するはずの人間は死んでいた。
こうして街ひとつに食料を届ける用意のできた機械が、もう署名する手もない人間の署名を待った。
タエロンのあるドームでは、水の再生設備に昔施された改修を、ただひとり隅々まで知る女性が亡くなった。
資料は残っていた。
完全ではなかった。
保守用の人工知能は、三つの弁が設計図とは違う動きをすることを知っていた。

理由は知らなかった。
彼女は知っていた。
いつか書き残そうと、何年も思っていた。
それまではいつも、同僚に口で説明していた。
その同僚は、彼女の一週間前に死んでいた。
《三分の一》がエラリオンから奪ったのは、肉体ばかりではなかった。
機械に収められたことのない膨大な記憶まで、奪い去った。
手の記憶。
習慣の記憶。
朝、装置の前に立つと、考えもせずに三つの小さな手入れをしていた人の記憶。しなければ夕方にはどこかに不具合が出ると、二十年のあいだ身に染みて知っていた人の。
生き残った人々は、まず、死者の穴を自分たちの手で埋めようとした。
医師が倉庫を手伝った。
教師が食料を配った。
役人が医療モジュールを洗った。
研究者が葬儀の仕事を手伝った。
技師がエネルギー中継拠点で寝泊まりした。
かつてなら非常事態と呼ばれた状態で、いくつもの都市が丸ごと動いていた。
《三分の一》のあとでは、何を非常と呼べばいいのか、もうはっきりしなかった。
打ちのめされた六十億に満たない人々に、愛する者を葬りながら九十億人分の仕事をしろとは言えなかった。
そこで危機対策評議会は、パンデミックの前から何十年も議論されてきたことを実行に移した。
人間の承認を義務づける規定を外しはじめたのだ。
最初は食料の供給から。
次いでエネルギー。

輸送。

基礎物資の生産。

都市の保守。

人工知能には、いちいち人の判断を待たずに、生産計画を変え、資材を動かし、設備の稼働能力の一部を振り分ける権限が与えられた。

それを可能にした文書の表題は、一行のほぼ半分を占める長さだった。

人々はそれを短くこう呼んだ。

続ける許し。

機械に与えられたのは、まさにそれだった。

人のいなくなったところで、続ける許し。

サイラは、個々のシステムをつなぐチームを率いていた。

目の前に惑星全体の生産地図が広がっていた。

《三分の一》の前なら、そんな地図は存在しえなかった。

各国はエネルギーの備蓄量を秘した。

企業は生産能力を。

流通業者は在庫を。

誰もが現実の一片を、自分の戦略上の秘密として抱えていた。

《三分の一》のあと、彼らはデータを開示しはじめた。

急に道理に目覚めたからではない。

データがなければ、システムには誰を助ければいいか分からなかったからだ。

「ヴァシリア西部で栄養調整食が余っています」と分析官が言った。

「どこで必要なの？」

「北東部です。三つの医療管区で」

「輸送は？」

「余力があります」

「では送って」

分析官はその場を動かなかった。

「ひとつ問題が」

サイラは目を上げた。

「何？」

「経路が三つの国を通ります」

「それで？」

「通貨が四つです」

サイラは背もたれに身を預けた。

「国が三つで、通貨が四つ」

「輸送業者がテリニス経由で請求するので」

「どうして？」

「税制です」

サイラは一瞬、目を閉じた。

「そうでしょうとも」

四者がそれぞれ別の通貨で決済していた。中継システムの換算に一秒とかからない。決済を阻んでいたのは、通貨ごとに異なる資金裏付けの規則と、病院に認められた権限の範囲だった。

食べ物はあった。

車両もあった。

道もあった。

人々は飢えていた。

出荷許可までの予測時間、三十時間。

「《橋》よ」とサイラは言った。

分析官が顔を向けた。

「通常業務でエラルを受け取る権限は、病院にはありません」

「緊急時の特例があるわ」

「医療物資に限ります」

サイラは記録に目をやった。

「それがなければ死ぬ人にとって、食料が何に当たるとお思い？」

分析官は何も言わなかった。

「《橋》を通して送って」
「特例はどなたが承認を？」
サイラはテーブルのそばの空席を見た。
ほんの九日前まで、そこには次官が座っていた。
「私が」
五分後、支払いは済んでいた。
生産者には注文が見えた。
輸送業者には料金が。
保険会社にはリスクが。
病院には到着予定時刻が。
市民には、いくら、誰に支払われたかが見えた。
患者の名前は見えなかった。
旧来の仕組みなら最初の両替さえ済まないうちに、自動運転の車両は走りだしていた。
そんな例が増えていった。
《橋》は少しずつ、緊急時の決済手段から、自動化された経済の神経系へと変わっていった。
機械は生産できた。
ただ、何を生産すべきかを知る必要があった。
物資を移動させることもできた。
本当に足りないのはどこか、知る必要があった。
最適な経路を割り出すこともできた。
実際に発注があったのか、その責任は誰が負うのか、知る必要があった。
価値の流れは、機械が人間の世界を読み取る手立てのひとつになった。
流れが見えるようになると、それまでばらばらだったものが、ひとつながりに姿を現した。
ある卸業者が、薬の不足しているさなかに出荷を止めた。
輸送の手はずを待っていると言った。

《橋》を見ると、倉庫側の準備はできていた。

病院の提示する値段が安すぎるとも言った。

記録はその逆を示していた。

同じとき、その業者の所有者グループにつながる企業が、危機が長引くほど値上がりする契約を買い集めていた。

別の口座からは、在庫の強制放出に反対する運動に資金が流れていた。

ひとつひとつでは、大した証拠にならなかった。

並べてみると、まるで別の話になった。

在庫は放出された。

その決定を下した人間がいた。

そしてその人間は、自分の決定が記録に残ることを知っていた。

数か月後、自動化された工場の生産量は《三分の一》の前とほぼ同じになっていた。

やがて、それを超えた。

機械は病まなかった。

エネルギー場は熱を出さなかった。

ロボットの生産ラインは親を亡くさなかった。

生産能力の大半は、パンデミックを無傷で切り抜けていた。

何より欠けていたのは、その周りで判断を下す人間だった。

署名。

許可。

法律上データを渡しあえない複数のシステムで、同じデータに繰り返し下される承認。

前の点検を人間がしたと確認することだけを目的とした点検。

《三分の一》があまりにむごく人々を奪い去ったため、経済のどの部分が本当に人を必要としていたのか、むき出しになった。

経済評議会が最初の数字を公表したとき、社会は揺さぶられた。

働く人は三分の一以上減っていた。

生産量の落ち込みはわずか数パーセントだった。
分野によっては、すでに以前の水準を超えていた。
その数字には、目をそむけたくなる問いが潜んでいた。
人の労働を大幅に減らしても、社会がほとんど同じだけのものをつくれるのなら、それまで必要不可欠と思われていたあれだけの職には、いったいどんな役割があったのか。
答えもまた、耳の痛いものだった。
仕事の一部は、必要なものをつくるために生まれたのではなかった。
人がお金を得る権利を手に入れるために生まれたのだ。
従来の仕組みは、生きていく手だてを、生産過程で占める持ち場と結びつけていた。
いま、生産は一部の人がいなくても成り立った。
それでも人は、収入なしには生きられなかった。
企業は死者に賃金を払わない。
稼ぎ手を失う家が相次いだ。
ほかにも何百万人もの人が、子どもや病人や年寄りの世話のため職を離れた。
パンデミックに門戸を開かれたシステムに、仕事を取って代わられた人もいた。
生産は増えていった。
家計の口座残高は減っていった。
サイラがネライに、全惑星規模の予測を持ってきた。
「手を打たなければ、三か月以内に半分を超える世帯が緊急援助に頼ることになるわ」
ふたりはかつてのイェサイルの書斎にいた。
ダヴィオン家の隔離が解かれたのは、一週間前のことだった。
家は機械が清掃した。
物はすべて、あった場所に残された。
イェサイルの席のそばには水の器。

窓辺にはマレイアの本。
庭に向いた二脚の肘掛け椅子。
ネライはどれにも触れずにいた。
「何人に仕事を用意できる？」と彼女は尋ねた。
「全員に」
ネライはサイラを見た。
「役に立つ仕事よ」
サイラは予測図に目を落とした。
「分からない」
「見当でいい」
「成人の半数。もっと少ないかも」
「自動化を止めたら？」
「もっと増える」
「そして次の危機で、また人間の署名を待つの？」
サイラは黙った。
「なら、止めないわ」
彼女は別の文書を開いた。
全惑星暫定基礎配当案。
ネライはその名称を知らなかった。
考え方なら知っていた。
ニトラを思い出した。
《三分の一》の前に交わした会話を。
あのときイェサイルは言った。給付金とは、権力が上から人に与えるものだと。
分け前は違う。
分け前とは、皆がともに生み出した成果の一部が、それを生み出す文明の一員であるというだけで、その人のものであることをいう。
あの頃は、遠い未来の話に聞こえた。

未来はノックもせずにやってきた。
「誰がまとめたの？」
「《橋》の経済班。いくつかの国と、地方評議会も」
ネライは文書を開いた。
「どうやって配当を支払うつもり？」
サイラは少し笑った。うれしそうではなかった。
「問題がひとつあるの」
「何？」
「三十の通貨」
ネライは目を閉じた。
笑いそうになった。
ほんの少し。
「それで、エラルを提案しているのね」
文書の最初のページに、こう記されていた。
社会がその人の労働を必要としなくなったというだけで、その人が生きる権利を失うことがあってはならない。
ネライはその一文を読んだ。
もう一度、読んだ。
窓辺の空いた肘掛け椅子を見た。
「イェサイルなら、それだけじゃ足りないと言うわ」
「なぜ？」
「配当の算定のもとになるものが分からないから」
「《橋》が把握できる生産の範囲は、ずっと広がっているわ」
「広がっているのと、全部が見えるのは違う」
「ええ」
ネライは窓の外を見た。
ダヴィオン家の庭は伸びるに任せてあった。
草はもう小径の縁を越えていた。

木々には花が咲いていた。
一本の枝が低く垂れすぎていたが、誰も切っていなかった。
自然は、世界の三分の一が死んだことを知らなかった。
営みを続けていた。
だからこそ、ネライは自然を憎めなかったのかもしれない。
文書を閉じた。
「なら、もっと見えるようにしなくちゃ」
サイラが目を上げた。
「生産を？」
「価値を」
ネライはもうしばらく庭を眺めた。
「そこから公正な分け前を配るなら、価値がどこで生まれ、どこへ行き、誰のものなのか、知らなければならないわ」
サイラはうなずいた。
ネライは彼女に文書を手渡した。
「経済評議会を招集して」
「いつ？」
「いま」
「ネライ、あなた、寝ていないでしょう」
ネライはかすかにほほえんだ。
「《三分の一》の前には寝ていたわ」
サイラは戸口にとどまった。
「イェサイルは、あなたがこんなふうに自分をすり減らすのを望まなかったわ」
ネライは彼女を見た。
「あの人は三十億人が死ぬことだって望まなかった」
サイラは出ていった。
扉が閉まった。

ネライはひとりになった。
長いあいだ腰を下ろしたままだった。
やがて立ち上がり、イェサイルの椅子に歩み寄った。
この家に戻って以来はじめて、その椅子に触れた。
背もたれに手のひらを置いた。
「機械があの人たちの代わりになったんじゃない」と、誰もいない部屋に言った。
声が震えた。
「とうの昔から、私たちなしでどれだけのことができていたのか、見せてくれただけよ」
そのときようやく、涙があふれた。
世界の三分の一のためではなかった。
三十億人のために一度に泣ける人間などいない。
ネライは、ひとりのきょうだいを失った悲しみに泣いた。
ひとりの女性のために。
手首に触れた三本の指のために。
命の最後の数時間、わずか数センチの透明なガラスに隔てられていた、ふたつの手のために。
外では、アウリオラの空にエラリオンの太陽が昇っていた。
家々の屋根を照らした。
庭を。
誰もいない椅子を。
そして、なお続いてゆく世界を。
どんな災いのあとも、世界は必ず続いてゆくからだ。
ただ、その先へ何を携えてゆくのか、それだけが問いとして残る。

第34章　生きている者の分け前

最初の基礎配当は、新しい社会秩序として採択されたわけではなかった。

九十日間だけ、認められた。

エラリオンの大きな変革は、ほとんどいつもそうやって始まった。

暫定的に。

例外として。

ただ、物事が平常に戻るまで。

ところが、もう平常などどこにもなかった。

案の基準は地域別の生活費だった。すでに何年も、どの国も、都市も、人の住む地域も、最低限の住居、食料、エネルギー、交通、医療にかかる費用を算出していた。

《三分の一》の前は、そうしたデータを福祉給付や賃金交渉、最低所得の決定に使っていた。

今度はそれが配当の基準になった。

ほかに収入のない人には、住む地域の基本生活費に相当する額が支払われた。

自分の収入がある人も、最初の一枚を稼いだ途端に配当がなくなるわけではなかった。配当は徐々に減り、収入が地元の生活費の二倍を超えてはじめて、支給が止まった。

完璧な仕組みではなかった。

地域ごとに算定を巡る争いが起きた。

都市は、住宅費は国の統計が示す額より高いと主張した。

農村部は、こちらの方が交通費とエネルギー費がかさむと異を唱えた。

家族をもつ人々は子どもの数を考慮に入れてほしいと求めた。

障害のある人々は、平均的な出費と自分たちの出費は別のものだと訴えた。

それでもこの仕組みには、従来の給付になかったところがひとつあった。

自分の配当が何をもとに算定されたのか、誰でも見ることができた。

地域指数、適用された規則、計算に含めた所得、データの出所、そしてなぜその額になったのか、その根拠まで分かった。

計算が変われば、誰が変えたのかが分かった。

システムが誤ったデータを使えば、どこから来たものか本人に分かった。

職員が個人の資料を開けば、当人に閲覧の記録が届いた。

全惑星で初となる配当は、《橋》を通じて支払われることになった。

まさにそのとき、三十もの通貨がただの主権の象徴ではなかったことが明らかになった。

ひとりの人間が生きるのにいくら要るのかを言い表すのに、三十通りの言葉があったのだ。

ある国は自国通貨で配当を定めておいて、二日後には通貨を切り下げ、予算の実質的な負担を減らした。

別の国は為替レートを凍結した。

また別の国は、認可を受けた銀行以外でのエラルの保有を国民に禁じた。

四つ目の国は、過去二年間その領土に住んでいたことを証明できる人だけに援助金を出すと発表した。

ところが《三分の一》のあと、何百万人もの人が故郷を離れていた。

親類を頼って。

空き家を求めて。

仕事を求めて。

介護を受けるために。

ある国に住み、別の国から年金を受け取り、三つ目の国に家を持ち、四つ目の国から輸入した食料を買って暮らす一家もありえた。

昔からの通貨は、自分たちの境界が本当にそこにあるふりをする世界のためにつくられたものだった。

《三分の一》は、空気も病も、食料も死も、そんな境界を知らないことを示した。

通貨評議会の会合で、ダレン・ヴォルトルはネライの向かいに座っていた。

ニトラのフォーラムから何年もたっていた。

あのとき彼は、イェサイルを前に通貨主権を擁護した。通貨は国家の舵であり、弱い地域が生き延びるには、独自の為替レートが必要なのだと言った。いま、その顔に疲れがにじんでいた。

《三分の一》で妻と、息子のひとりが亡くなった。彼は人前でそのことを口にしたことはなかった。ネライが知ったのは、犠牲者の名簿にふたりの名を見つけたからにすぎない。

「共通の通貨当局もなしに、共通のエラルを支給することはできません」とヴォルトルは言った。

「《橋》はすでに支給しています」とサイラが返した。

「《橋》が発行しているのは裏付け資産のある決済単位です。国の通貨ではありません」

「それで家賃を払っている人にとって、そんな違いは机上の話です」

ヴォルトルは彼女を見た。

「まさにそういうひと言が、通貨の破局を招くのです」

ネライは、最初の試験支給の地図を開いた。

「破局なら、もう起きています」

地図に支払いの遅れが映し出された。

遅れが最も大きかったのは、貧しい地域ではなかった。

異なる通貨制度が接する場所だった。

「ある地域では、人々が配当を受けたのは四日遅れでした」とネライは言った。「資金も、受取人も分かっていた。それでも三通貨間の換算と、二つの中央銀行の承認を待たされたのです」

ヴォルトルはデータを見た。

「すべてエラルで払うとすれば、誰が為替リスクを負うのです？」

「受け取る方には負わせません」

「つまり《橋》ですね」

「準備資産は公開されています」

「準備資産は無尽蔵ではない」

「人の忍耐も同じです」

ヴォルトルは椅子にもたれた。

「急ぐ事情は分かる。しかし共通通貨は、共通の権力を生みます。その点を、あなた方はいまだに言葉にするのを拒んでいる」

「私たちは言葉にしています」とネライは言った。「だからこそ、その権力が見えることを求めています」

「見えていても、権力は権力です」

「ええ」

ヴォルトルは眉を上げた。

反論が返ってくると思っていた。

ネライは言葉を続けた。

「透明性で権力は消えません。誰がそれを使っているかが分かるようになる。完璧にはほど遠いことです。でも、暗闇よりはましです」

ヴォルトルはエラルの記号を見た。

「では、エラルを拒む国は？」

「自国通貨で配当を支払えます」

「それでは全惑星共通とは言えない」

「規則は全惑星共通です。支払いの方法は、暫定的に地域に委ねます」

「暫定的に」

まるでそのひと言のなかにすでにのちの歴史を聞き取っているかのように、彼は一音一音をはっきりと発した。

論争をよそに、最初の支給は実施された。

サルルに、エリナ・ヴァスという女性が四人の子どもと暮らしていた。

《三分の一》の前、エリナは小規模病院のネットワークで物資調達の調整をしていた。夫は自動運転の輸送モジュールを修理していた。

ふたりとも病を生き延びた。

けれど夫の肺には障害が残り、長期の介護が必要になった。エリナは夫の世話をするため、仕事を辞めた。

その間に彼女の職は、自動化されたシステムが引き継いだ。

悪意からではない。

病院には彼女が戻るのを待つ余裕がなかった。

従来の生活扶助を申請すると、国は証明を求めた。失業中であること、進んで職を探していること、紹介された職を断って自ら扶助に頼る期間を引き延ばしていないこと。

システムが紹介したのは、ほかの街での仕事だった。

夫を置き去りにしなければ、引き受けられなかった。

そのため扶助は却下された。

基礎配当では、自分が役に立つ人間だと証明する必要はなかった。

システムは彼女の収入を調べた。

地域の生活費を。

扶養する子どもの数を。

家族に必要な医療を。

口座にエラルが振り込まれた。

エリナは算定の明細を開いた。

使われたデータはどれも見ることができた。

夫の医療費の項目には、保護された記録への参照が付いていた。診断名を知る必要のない人には見えない。システムが確認したのは、介護に通常以上の費用がかかるという事実だけだった。

エリナは家賃を払った。

家主は地元の通貨で受け取った。《橋》が自動で換算した。

エネルギー代を払った。

食料を注文した。

配当はまだ少し残った。

《三分の一》が始まって以来はじめて、どの子の食事を減らすか決めずに済んだ。

その晩、彼女は公開討論の場にひと言書き込んだ。

私は、自分が失敗したからと給付をもらいたいんじゃない。私が働けないときにも動いてゆくこの世界で、私の分け前がほしいんです。

数日のうちに、何百万人もの人がその言葉を繰り返した。

皆が賛同したわけではなかった。

自動化された企業の所有者たちは、社会は効率化を罰しているのだと訴えた。機械に投資し、リスクを負ったのはこちらだ。それなのにいま、機械に仕事を取って代わられた人々と成果を分け合えと言われるのか。
けれど、イェサイルの語ったことが繰り返し思い起こされた。

機械は無から生まれたわけではない。

先の世代が資金を出し合った研究の成果を使っていた。

国が築いたエネルギー網を。

幾十億もの人々のデータを。

輸送の基盤を。

法の秩序を。

誰ひとりとして自分の手で生み出しはしなかった、惑星外の資源を。

最大の民間企業でさえ、自分だけで築いたわけではない床の上に立っていた。

そこで惑星評議会は、自動化生産に負担金を課した。

ロボットの数に応じてではなかった。

それでは企業に、機械を隠したり、人間が働いているふりをしたりする動機を与える。

負担金は、ごくわずかな人の関与で生み出された価値と、共通の社会基盤をどれだけ利用したかに基づいて算出された。
計算は複雑だった。

だからこそ公開しなければならなかった。

企業には、自社の負担額をシステムがどのように導いたかが分かった。

市民には、基礎配当のどれだけが自動化生産から来て、どれだけが税収、共有財産の収益、準備金から来ているのかが分かった。
まさにこの負担金を導入する段になって、エラリオンの古くからの弱点が露呈した。

利益がどこで生じたか、誰も正確には特定できなかった。

工場は連邦にあった。

所有者はヴァシリアの会社だった。

特許はテリニスの基金に属していた。
計算処理の料金は、タエロンの法域を通して計上された。
ライセンス料は南の島へと渡った。
年度末になると、企業は、実際にものをつくった国内ではほとんど利益が出なかったと申告した。
最も成功した企業の多くが、そうして経営されていた。
価値は工場で生まれる。
利益は帳簿の上で、従業員も顧客も機械もほとんどいない場所に生まれた。
小さな島国は、法律上の価値の移転だけで経済を丸ごと成り立たせていた。
低い税率を用意した。
所有者の身元を守った。
非公開の基金を設けた。
特例の会計制度を整えた。
情報を拒むことは協力の妨げではなく、顧客へのサービスだとする法律を置いた。
大国は増税で応じた。
病院や学校、交通、《三分の一》からの復興、基礎配当の財源が必要だった。
税が高くなるほど、それを逃れることに価値が生じた。
逃れる金が増えるほど、残った人に課す税率を高くする必要が生じた。
税の悪循環が続いた。
税が重いのは、払わない者が多いからだった。
多くの者が払わないのは、税が重いからだった。
そして支払う者は、逃れるだけの力を持たないせいで罰を受けているのだと、ますます強く感じるようになった。
《橋》には、過去にさかのぼって古い会計帳簿を書き換えることはできなかった。
けれど、エラルで行う新しい取引には、どこで実際に価値が生まれ、どんなサービスが提供され、誰が最終的に受益したのかが表れた。

支払われる金額と、その金がたどった道を、そう簡単には切り離せなくなった。

重要な取引にはすべて、所有関係、契約上の根拠、適用される税制をたどる手がかりが付いた。

すべてが誰にでも公開されたわけではない。

だが重要なことが、まったくの名無しのままにはならなかった。

暫定基礎配当の実施から半年たつと、惑星の仕組みでは、かつて各国が高い税率を課していたときより、低い税率で多くの収入を得たことが分かった。人々がにわかに税を愛しはじめたからではなかった。

税逃れを覆っていた闇が、いくらか薄れたのだ。

経済評議会は、基礎配当をさらに一年延長する案を出した。

ダレン・ヴォルトルは賛成票を投じた。

会合が終わると、ネライは廊下で彼を呼び止めた。

「反対なさると思っていました」

「反対ですよ」

「賛成に投票なさいました」

「ほかの道はもっと悪いからです」

「どの改革も、そういうところから始まりそうですね」

ヴォルトルは透明な壁越しにニトラの街を見た。

街にはまだ、主のいない住まいがあふれていた。

「ひとつ、イェサイルの言うとおりだったことがあります」と彼は言った。

ネライは彼を見た。

「どのことでしょう？」

「誰にも見えない価値から、分け前を計算することはできない」

「ひとつだけですか？」

ヴォルトルはほほえみかけた。

「死者に一度にいくつも勝ちを譲らせないでください」

それから真顔になった。

「それでもあなたには、まだその先が見えていない」

「その先？」

「単一の計算。単一の課税の仕組み。単一の配当。決済の通貨はひとつ」

「ええ」

「そこまでゆけば、もはや援助ではない」

「そうですね」

「国家の礎ですよ」

ネライは川の上に映った《橋》の印を見た。

「そうかもしれません」

「その国を、誰が支配するのです？」

「それは、誰かに私たちの代わりに答えを出される前に、私たちが答えなければならない問いです」

ヴォルトルは去った。

ネライは窓辺に残った。

仕事用の画面に通知が現れた。

過去の記録を分析するシステムが、《三分の一》にまつわる資金の流れを初めて復元し終えたのだ。

彼女はそれを開いた。

画面に何千もの支払いが現れた。

財団。

研究所。

計算能力。

輸送の予約。

法の特例。

家系のデータ。

保険モデル。

政治資金。

《三分の一》の前には、ばらばらにしか見えなかったものすべて。

いま、それが一枚の地図の上にあった。
真ん中には空白が残っていた。
何もなかったからではない。
そこに名前が現れないよう、誰かがたいへんな手間をかけたからだ。
ネライは画面を拡大した。
「骨格が見つかった」と彼女は言った。
そばに立つタレンは、ヴェスタと研究財団をつなぐ線をじっと見た。
「では、体は？」
「まだ息をしているわ」

第35章　パンデミックを支えた金の骨格

《三分の一》の捜査は、容疑者の拘束から始まったのではなかった。

データの保全から始まった。

パンデミックの最初の数週間に、何千もの会社が消滅した。所有者の死によるものもあった。事業が意味を失ったものもあった。経営者が混乱に乗じて姿を消した会社もあった。

会計記録の保管庫が閉じられていた。

銀行はシステムを統合していた。

サーバーの中身は消去されていた。

期限付きの研究環境は、賃貸契約が終わると取り払われていた。

平時なら、データは各地の定めた期間だけ保存されるはずだった。

だが《三分の一》のあとでは、どれが業務の書類で、どれがエラリオン史上最大の犯罪の証拠なのか、分からなくなっていた。

ネライは、生物学研究、家系の記録、緊急時の物流、そして《層》の調査に浮かんだ財団に関係するすべての記録を凍結させる全惑星命令を取り付けた。

二十三か国が命令に抗議した。

国民の権利を心から守ろうとする国もあった。

顧客を守ろうとする国もあった。

テリニスは、具体的な嫌疑をかけられていない人々の財産と会計の記録を、国外の捜査機関が一律に凍結することはできないと宣言した。

ネライは、欠けているデータの一覧を公表することで応じた。

内容は公表しなかった。

あるはずなのに、突然なくなっていたものが何かを示しただけだった。

パンデミックの最初の一か月に、七つの基金が管理者を替えていた。

四つの財団が口座を閉じていた。

二つの法律事務所が記録の破損を届け出ていた。

ヴェスタは、病について初めて公に報じられた日の三日後に設立された会社に、保有権の一部を移していた。
ひとつひとつの動きには、やましいことのない説明も考えられた。
集めてみると、逃亡のように見えた。
世論の圧力に、テリニスは譲歩を余儀なくされた。
だが問題は残った。
データはひとつの言語で書かれていなかった。

同じ資金の動きを、銀行や国は寄付とも融資ともライセンス料とも記載していた。《層》は新たに裁判所の許可を得て、取引の法的な呼称が変わっていても、時刻の記録、管理者の署名、元の識別子を突き合わせられるようになった。
今度この問題に挑むのは、人ばかりではなかった。
復興のさなかに在庫と生産を結びつけてきた分析システムに、新たな目標が与えられた。
犯人を探すことではない。
一致を探すこと。
同じ管理者。
同じ通信拠点。
同じ時間の並び。
同じ法的なひな型。
同じ者に最終的にもたらされる経済的利益。
ネライは、AIにひとりひとりの罪の度合いを採点させることを拒んだ。
「二つの道が交わったところを、機械は示せる」とチームに話した。「なぜ人がその道を通ったかは、機械の決めることではないわ」
「危険度を評価しなければ、何百万ものつながりが出てきます」と分析官のひとりが異を唱えた。
「なら、何百万でも出しなさい」
「人間の手では見きれません」
「それなら機械に、証拠を順に並べさせて。人を並べさせてはだめ」

「大した違いではありません」

「犯人と印を付けられる人にとっては、違うわ」

そこでシステムは出来事を扱うことになった。

支払い。

契約。

所有者の変更。

処理能力の賃借。

特例の認可。

データの閲覧。

出来事のつながりを確かめてはじめて、捜査員は人間を調べた。

最初の確かな足がかりは、誰も決め手になると思っていなかった場所からやってきた。

保険会社からだった。

《三分の一》の前、ある財団が、特定の集団に偏って被害を及ぼす病気がもたらす経済的損失のモデルを発注していた。
保険会社が受け取ったのは、仮定の課題だった。

現実の生物学研究に絡んでいるとは知らなかった。

出来上がった報告書は、保護された保管領域を通して引き渡された。その際、どの端末がファイルを開いたかの記録が残った。
端末の登録名義は個人ではなかった。

ニトラの私邸を管理する会社のものだった。

会社はある基金が所有していた。

基金の管理はテリニスの事務所が担っていた。

事務所は、最終的な顧客の身元を伏せていた。

昔のシステムなら、そこで行き止まりだった。

新しい再構成システムは、端末の記録を、エネルギー消費量や建物への出入り、ほかにダウンロードされた文書と照合した。
同じ端末が以下を開いていた。

医療機関の対応の遅れに関する分析、
匿名化された遺伝情報の利用に関する法律意見書、
緊急時の物流に関する報告、
生物学的モデル解析の結果、
そして「盲点の試験」と題された文書。
すべてのファイルが、一軒の邸宅に集まっていた。
そこはアリエン・コルヴェトの邸宅だった。
タレンは結果を三度確かめた。
「開いたのが本人だという証拠には、まだならない」
「ええ」とネライは言った。
「ほかの誰かが端末を使えたかもしれない」
「ええ」
「あの家には使用人がいた」
「いたわ」
「訪問客も」
「ええ」
タレンは彼女を見た。
「一度くらい、喜んでもいいんじゃないか？」
「証拠が手に入ったらね」
次の手がかりは家系の記録から出てきた。
《三分の一》の前、マレイアはアリエンとの面会を記録に残していた。その中身ではない。彼女には私的な会話を内緒で録音する権限はなかった。
しかしシステムには、会った時刻、彼女の入館、彼による来訪の確認、そのあと保護された研究データを閲覧した記録が残っていた。
マレイアが帰った数分後、アリエンはアウレリア人の血統が持つ生物学的な弱点に関する文書を開いていた。
一時間後にカエル・ソーンに連絡を取った。
翌日、最後の支払いが行われた。

出来事がそういう順に起きたというだけでは、やはり意図の証明にはならなかった。

やがて、研究所の通信記録が見つかった。

生物学に関わる仕事の一部を担当した研究者が、疑念を抱いていた。課題を渡した仲介役に、質問を送っていた。

研究結果が、特定の集団を危険にさらすような形で使われることはないのか、と。

返答は短かった。

本プロジェクトは憎悪を生むことも、積極的に標的を定めることも目的としていません。生物系の反応における自然な差異を評価するものです。承認済みの仕様どおり続けてください。

メッセージの署名はプロジェクトのコードだけだった。

文体の分析では、アリエンの書いたメッセージとの類似が認められた。

ネライは、それを主要な証拠にすることを拒んだ。

「言葉遣いが似ていても、署名にはならない」

タレンは技術情報を開いた。

「だが、この送信鍵は署名になる」

鍵はアリエンの邸宅で生成されていた。

その瞬間、彼の名は単なる疑いの域を超えた。

ネライは家宅捜索と端末の押収、本人の移動制限の許可を申請した。

司法システムから、当人は登録先に二か月も所在していないと返ってきた。

アリエンの邸宅は空だった。

取り乱して捨て置かれたわけではない。

片づけ尽くされていた。

身の回りの品は消えていた。

口座は移されていた。

アクセス権限も取り消されていた。

壁の一面に、絵を外した跡の明るい四角が残っていた。

戸棚に深い青の器だけが残っていた。
割れてはいなかった。
横倒しになっていた。
ネライには見覚えがあった。マレイアの昔の写真で見た器だった。
彼女のものだ。
両手で取り上げた。
縁に小さな擦り傷があった。
それだけだった。
アリエンはこれを壊そうとして、それさえできなかったのだ。
「いつ出ていったの？」と尋ねた。
捜査員が邸宅の記録を開いた。
「パンデミックの最初の月です」
「どこへ？」
「私用のモジュールで軌道環へ向かっています」
「そのあとは？」
「行き先の記録が欠けています」
ネライは捜査員を見た。
「船は消えないわ」
「この船は、飛行中に所有者が替わっています。新しい所有者の登録先はタエロンです」
「誰？」
「テリニスの基金です」
ネライは疲れた笑いがこみ上げそうになった。
逃げながらなお、アリエンは古い世界に忠実だった。
十分な数の台帳に道のりを切り分ければ、どこへたどり着いたか、誰にも分からなくなると思っていたのだ。
《橋》にも、過去の私用便はまだ見えなかった。

だがタエロンのエネルギー供給網も物資の補給網も、すでに復興事業の一部を担っていた。

すべてのドームが、水、エネルギー、酸素、食料の消費量を報告していた。

分析システムは、登録された居住者数に見合わない消費が長く続く場所を見つけた。

北部居住区のはずれにある私設ドーム。

公式には無人。

定期的に補給あり。

また別の基金の所有だった。

ネライは地図を見つめた。

「タエロンに身柄の拘束を要請して」

タレンはためらった。

「タエロン当局からは、もう返事が来ている」

「いつ要請したの？」

「していない。移動制限を受けた人物との一致が出た段階で、システムが自動通知を送った」

「それで？」

「私設ドームに入る法的根拠が不十分だと言っている」

ネライはゆっくりと、マレイアの器をテーブルに置いた。

「三十億人の死では、法的根拠が足りないの？」

「向こうの言い分では、あるのは資金とデータに関する証拠だ。生物学的な脅威をアリエンが生み出したり解き放ったりした、直接の証拠ではない」

「彼の端末がある。彼の鍵。彼の資金。彼が逃げた事実」

「僕らが握っているのは構造だ」

「彼は全体を握っていた」

「それを証明しなくては」

ネライはドームの地図を見た。

「なら、彼に話をさせて」

タエロン当局は公然と踏み込むことを拒んだ。

二時間後、《層》は証拠を結び合わせた地図の一部を公開した。

個人の医療情報は除いた。

生物学上の技術的な細部も。

必要なものだけを示した。

財団。

支払い。

研究課題。

端末。

アリエンの邸宅。

逃亡。

そして所有者の名が伏せられたままの私設ドーム。

裁判所よりも早く、市民はそこにひとつの名前を結びつけた。

ドームの前に人が集まりはじめた。

武器を携えた者たちではなかった。

遺族だった。

亡くした人の写真を持ってきた。

入り口の前に置いていった。

一枚、また一枚と。

タエロン当局は、暴力沙汰を防ぐために治安部隊を送った。襲撃が待っていたはずの場所には、静寂があった。

見知らぬ星の地面に置かれた、何千もの顔。

三日目、裁判所が許可を出した。

治安部隊がドームに入った。

アリエン・コルヴェトはテーブルについていた。

逃げなかった。

彼の前には、集まった人たちを映す中継が開かれていた。

写真を見ていた。

立つように言われると、従った。
「《三分の一》に至る一連の出来事の準備と資金提供に関与した疑いで、あなたを拘束します」
アリエンはわずかに笑った。
「《三分の一》を引き起こしたのは金じゃない」
部隊の指揮官は答えなかった。
アリエンは拘束具を受けるために両手を差し出した。
「人間だ」
「それは裁判所が判断することだ」
「いや」とアリエンは言った。「裁判所が裁くのは私だ」
ドームの前の写真を、もう一度見た。
「そしてほかの者は、みな潔白になる」

第36章　地図を持っていた男

アリエンはニトラに移送されなかった。

危険だった。

彼にとってではない。

街にとって。

《層》の庁舎の前に、何万もの人が集まっていた。公開裁判を求める者もいれば、即刻死刑にしろという者もいた。ヴェイラン人を残らず追放し、その金融機関を閉鎖し、財産を没収しろという声まで上がった。

一般向けの放送には、犠牲者数の隣にアリエンの顔が映っていた。司会者が拘束と資金提供の証拠について伝えているそばから、出演者のひとりは判決を求め、もうひとりはヴェイラン人の財団をすべて閉鎖するよう求めていた。画面の下には、いまも捜索の続く人々の名が流れていた。

ネライは数秒だけ見た。拘束時刻の誤りを訂正させ、実際に裏付けの取れた事実を公表するよう局に求めた。画面のなかではすでに、この災厄のすべてにアリエンひとりの顔が与えられようとしていた。だが捜査は、彼の取り調べのあとも続くのだ。

ネライは拘束場所の公表を拒んだ。

自分が生き延びられるかどうかは、居場所を伏せておけるかにもかかっている。アリエンはそれを知っていた。

最初の取り調べは、保護された通信回線を通じて行った。

こちら側には、窓のない白い部屋に座るアリエン。

向こう側にはネライ、ふたりの捜査員、会議の法務代理人、それにアリエンの弁護人がいた。

ネライは取り調べに立ち会いたくなかった。

犠牲者のひとりは、自分のきょうだいだった。

同席すれば、公正さへの疑いを招きかねなかった。

一方で、資金の地図は誰よりもよく知っていた。

アリエンは、彼女を名指しで求めた。
「彼女としか話さない」と言った。
「捜査員を指名する権利はありません」と法律家が応じた。
「なら、話さない」
ネライは承知した。
望みをかなえてやりたかったからではない。
なぜ自分を選んだのか、知りたかった。
回線が開くと、アリエンは長いあいだ彼女を見つめた。
「思ったほど、似ていませんね」
「誰に？」
「イェサイルに」
「彼をご存じだったのですか？」
「いいえ」
「あなたが殺したのです」
アリエンの弁護人が身じろぎした。
「私の依頼人は――」
「言わせておきなさい」とアリエンが言った。
ネライはマレイアの濃紺の器を自分の前に置いた。
アリエンの目に入った。
顔が変わった。
ほんの一瞬。
「あなたの住まいで見つけました」
「マレイアのものだ」
「知っています」
「なぜ持ってきたのです？」
「嘘をつくときに、あなたが目を向けるものがあるように」
弁護人がまた割って入った。

「このような尋問の仕方は――」
「私は出ていけますか？」とアリエンが聞いた。
「いいえ」
「ならば、仕方などどうでもいい」
ネライは証拠をつないだ地図を開いた。
「これらの計画を知っていますか？」
「いくつかは」
「資金を出しましたか？」
「直接には出していません」
「資金を手配しましたか？」
「すべてにではない」
「では、どれに？」
アリエンは背もたれに身を預けた。
「計画がひとつだったみたいにお尋ねだ」
「意図はひとつでした」
「意図は口座ではない」
「だからこそ分けたのでしょう」
アリエンは地図を見た。
「ここにある計画は、どれも合法だった」
「個別に見れば」
「誰かがあとからどんな線を書き足したかで、合法かどうかは決まらない」
「研究所は家系のデータを知らなかった。分析官は生物学の研究結果を知らなかった。法律家は物流モデルを知らなかった。保険会社は研究の目的を知らなかった」
「機密を要する計画は、そうやって守るものです」
「いいえ。あなた自身を、誰かに全体を見られることから守ったのです」
アリエンは答えなかった。
ネライは図を拡大した。

「ひとりひとりには一部分しか見えなかった。地図を持っていたのはあなたです」

あの人たちの判断は正しかった。

答えを用意する間もなく、父の声が帰ってきた。かつて彼はその言葉が憎かった。いま目の前に、それが契約や特例や署名の形に綴られていた。

「地図が罪だと言うのですか？」

「三十億の亡骸に至る道を示すなら、そうです」

アリエンは器に目を落とした。

「三十億を計画してはいなかった」

「何人です？」

弁護人が身を寄せた。

アリエンは取り合わなかった。

「あの危機は、自分たちが特別だというアウレリア人の思い込みの脆さを暴くはずだった」

「何人です？」

「決まった数などなかった」

「ひと家族？　ひとつの街？　それともひとつの系統？」

「均衡を変えたかったのです」

「何人死ねば均衡ですか？」

アリエンは目を上げた。

「あなたが私に問うのは、あなた方の政治家が戦争のたびに問うことです。将来の平和のためなら、どれだけの犠牲を許せるのか、と」

「あなたが始めたのは戦争ではありません」

「ええ」

「戦争なら、少なくとも敵は、自分が狙われていると知っています」

アリエンの表情は穏やかなままだった。

「アウレリア人は何世紀ものあいだ、ほかの者の投票を待つこともなく、エラリオンを変えてきた」

「存在しただけで？」
「彼らの存在が意味したものによってです」
「マレイアは、あなたのもとを去った」
弁護人が鋭く息を吸った。
アリエンの体がこわばった。
ネライは続けた。
「これはアウレリア人に対する戦争ではありませんでした。ひとりの女の人が自分の所有物ではないことを受け入れられなかった、ひとりの男の傷でした」
「あなたに私たちの関係の何が分かる」
「彼女が嫌だと言ったことは知っています」
「あいつのもとに行った」
「あなたの手からイェサイルの手へと渡った品物ではありません」
「あいつは彼女に、自分がもっと大きな存在になれる物語を与えた」
「そしてあなたは彼女に、そこで死ぬはずの世界を与えた」
アリエンは立ち上がった。
警備システムがただちに着席を促した。
ネライは彼を見ていた。
「お座りください」
「マレイアの話をしに来たのではない」
「では、なぜ私と話したかったのですか？」
アリエンは立ったままだった。
やがてゆっくりと座った。
「私ひとりではなしえなかったことを、あなただけは知っているからです」
ネライは答えなかった。
アリエンは地図を指した。
「いま、あなた方の星は、怪物を見つけたような顔をしている。銀行も科学者も、研究所も政府も人工知能も、ひとりでまんまと欺いてみせた男を」

「あなたが彼らをまんまと欺いたなどと、誰も言っていません」

「そうですか？」

「大半の人は、自分が何のための仕事をしているか知りませんでした」

「ではなぜ、知らなかった？」

ネライは黙っていた。

「知りたくなかったからです」とアリエンは言った。「研究所は金と、範囲を絞った仕様書を受け取った。銀行には法的に問題のない支払い。財団には公益の目的。政治家には地元の法律に反しない献金。島国には所有者を保護した手数料。誰もが、仕事を続けるのに必要なだけのことしか見なかった」

「その盲目をつくったのはあなたです」

「違う。私はそれを利用した」

「カエル・ソーンの手を借りて」

アリエンは初めて、すぐには答えなかった。

「カエルは資金の通り道を開いた」と、ようやく言った。

「何のためか知っていましたか？」

「十分に知っていた」

「生物学上の狙いも？」

「危機を起こすことが目的だとは知っていた」

「その規模は？」

「いいえ」

「なぜ、あなたを助けたのです？」

アリエンは力なく笑った。

「イェサイルの示した世界では、カエルはもう、それまでどおりのカエルとしては生きてゆけなかったからです」

ネライはニトラのフォーラムの記録を開いた。

イェサイルは、目に見える金融権力について話していた。

最終的な所有者について。

誰が閲覧しても、必ずその跡が残らなければならないことについて。

カエルは会場にいた。

「彼は透明化を食い止めたかった」とネライは言った。

「先延ばしにしたかった。歩みを遅らせたかった。信用を失わせたかった。開かれた世界がいかに危ういかを示すような対立が欲しかったのです」

「そしてあなたは彼に、《三分の一》を与えた」

「私に金を渡したのは彼だ」

「彼はどこに？」

「知りません」

「嘘ですね」

「最初の発熱が起こる前から、カエルはもう私を信用していなかった」

「計画を止めようとしたのですね」

「遅すぎた」

「なぜ？」

アリエンは証拠の地図に並ぶ顔を見た。

「自分が道を開いてやった相手には、自分と同じ歯止めがないと分かったからです」

「あなたには歯止めがありましたか？」

「あると思っていました」

アリエンは濃紺の器を見た。縁に残った小さな擦り傷が、画面越しにも見て取れた。

さあ、本当はどうだったのか、聞かせて。

母の声があまりにもはっきりと聞こえ、目を落とさずにいられなかった。隙なく組み立てた言い訳の陰に失敗を隠そうとしたとき、昔、母はそう問いかけた。

「私が子どもの頃、母は交通事故で死にました」と彼は言った。「重症者を運べる車両は一台しかなかった。救助隊が乗せたのは、アウレリア人の目をした子どもでした」

弁護人が彼の方を向いたが、アリエンは話し続けた。

「父はすべての記録を取り寄せた。あの人たちの判断は正しかったのだと私に言った。その子は助かりました」
「お母さまは？」とネライは尋ねた。
「病院への途中で死にました」
アリエンはテーブルの縁に触れた。
「男の子が運ばれる前に、その子を連れていってと、自分から言ったんです」
この言葉を声に出したのは、何十年ぶりだった。
　ネライは彼の名がある別の文書も知っていた。予備の搬送車両についての古い提案書を開き、記録を彼に向けた。「あの事故のあと、負傷者のどちらを救うか、救助隊がそう何度も選ばずに済むようにしたのは、あなたです」
アリエンは生存者の数を見ていた。「あの頃はまだ、規則を変えれば足りると思っていました」
ネライは記録を閉じた。彼に助けられた人々はいまも生きていた。証拠の地図に載った人々についても、彼が責任を負っていることに変わりはなかった。
「何を変えたかったのですか？」とネライは聞いた。
声は荒らげなかった。それでもアリエンには、その声の底にまた母の問いが聞こえた。
「黄金の環が、たった一度でいい、誰の役にも立たなければよかった」と言った。「イェサイルに負けてほしかった。マレイアに、あの男を見誤ったと分かってほしかった。今度はほかの誰かが、開かない扉の前に取り残されて待てばいいと思った」
弁護人が机に手のひらを置いた。アリエンはそちらを見なかった。
「あのとき救助隊は、負傷したふたりのうちどちらなら手遅れにならずに助けられるかを決めていた」とネライは言った。「あなたは、人をその出自によって危険にさらした。子どもまで」
アリエンは口を開いた。何年も使ってきた言葉のどれひとつとして、答えに収まらなかった。

目に浮かんだのは母の手と、ガラス越しの少年だった。あのとき人々は、よその子どもを助けようとしていた。写真の少年を危険にさらしたのは自分だった。
父の「あの人たちの判断は正しかった」という言葉を憎み続けた果てに、彼は、自分以外の全員がその言葉を口にできる仕組みをつくってしまった。彼らの仕事がどんな結果へ向かっていたか、自分は知っていたのだ。
しばらく静寂が続いた。
ネライは彼を見た。
目の前に座っているのは、物語の怪物ではなかった。
ひとりの人間だった。
その方が恐ろしかった。
怪物は人の外にいる。
人間は、人と人とのあいだに何が生まれうるかを示す。
「カエルはどこです？」と、もう一度尋ねた。
「タエロンです」
「どこに？」
「知っていたら、あなたに引き渡しています」
「どうして？」
アリエンは背を預けた。
「死者の名を背負うのは私です。あの男はこれからも自由を説く」
取り調べはさらに六時間続いた。
アリエンは、各計画を結びつけたことを認めた。
病を解き放ったことは認めなかった。
最後の段階は自律的な処理に任され、自分は正確な始まりの時刻も場所も知らなかったと主張した。
だが、コードも仲介者の名も、資金の仕組みの一部も、捜査員に渡した。
悔いたからではない。
罪を分けずにいられなかったからだ。
通信が終わるとき、アリエンはもう一度ネライを見た。

「私に有罪判決を下したら、あなた方はどうします？」
「続けます」
「どこまで？」
「あなたに道を与えた人たちまで」
「そのあとは？」
「その道を隠した仕組みまで」
アリエンがほほえんだ。
「結局あなた方は、まさしくカエルが恐れたことをするわけだ」
「あの人のためではありません」
「イェサイルのために？」
ネライは濃紺の器を見た。
「自分たちの世界がどうなったのか、もうその目で見届けられない人たちのためです」
回線が閉じた。
アリエンは白い部屋にひとり残された。
ネライは新しい文書を開いた。
《三分の一》の原因に関する予備報告書になるはずだった。
最初の行にこう書いた。
アリエン・コルヴェトが意図を抱いた。
そこで手を止めた。
二行目にはこう書いた。
カエル・ソーンが、資金と政治の両面で彼に道を与えた。
三行目にはこう。
エラリオンの諸制度が、加害者以外の誰ひとりとして、すべての部分を同時に見渡せない状況をつくった。
ネライはその三つの文を読み返した。
アリエン。
カエル。

仕組み。

個人の罪。

共犯の罪。

文明の盲目。

最初の二つを落とせば、罪を犯した者は社会の陰に隠れるだろう。

三つ目を落とせば、社会は罪人を裁き、次の罪人を生む条件を温存するだろう。

ネライは文書を保存した。

題はこうだった。

アリエンだけではない。

第37章　アリエンだけではない

予備報告書が公表されたのは、《三分の一》のあと初めて、エラリオンで生まれた者の数が死んだ者の数を上回った日だった。
報道が拾い上げたのは、アリエンの自白だった。
市民はカエルの名前を。
銀行は法律上の不備を。
各国はよその国の法域を。
誰もが報告書のなかに、自分ではない誰かを指す箇所を見つけた。
テリニスは、いかなる法律にも違反していないと表明した。
それは本当だった。
台帳は、制定された規則のとおりに所有者を保護していた。
銀行は、すべての支払いが審査を通っていたと発表した。
それも本当だった。
どの取引にももっともな目的があり、法律上実在する相手方があり、地元で求められる書類がそろっていた。
財団は、資金を出した計画の究極の意図など知らなかったと述べた。
たいていは、それも本当だった。
研究所は、正当な科学上の問いを研究していたと表明した。
本当だった。
法律家は、仮定の事例を検討したと述べた。
本当だった。
保険会社はリスクをモデル化した。
本当だった。
運送業者は輸送枠を予約した。
本当だった。
政党は認められた献金を受け取った。

本当だった。

ほとんど何もかもが本当だった。

だからこそ、あれほど大きな嘘が生まれえた。

ネライは惑星調査評議会に出席した。

背後には、《三分の一》を支えた資金の骨格を描く地図があった。

「一か所に隠された金庫が見つかったわけではありません」と彼女は言った。「災厄を起こすための資金と但し書きを添えた支払いも、見つかりませんでした。計画の全容を知っていた機関も、ひとつとして見つかりませんでした」

ばらばらに走る線を指した。

「私たちが見つけたのは、もっと危険なものです。誰もが自分の受け持つ小さな部分について本当のことを言いながら、同時に、全体としてひとつの嘘を形づくる手助けができる仕組みです」

広間には、四十か国すべての代表が座っていた。

その後ろに遺族がいた。

最前列には、空席がいくつか残っていた。

本来なら、アウレリア人の一族評議会を代表する人たちが座るはずだった。

その多くには、もう代表を務める人さえいなかった。

「アリエン・コルヴェトには、攻撃を意図し、調整し、分断されたシステムをそれと知って利用し、実行に移した責任があります」とネライは続けた。「カエル・ソーンは、この攻撃を可能にした資金面と政治面の基盤をつくった。そのほかにも、いま認めている以上のことを知りながら、さまざまな決断を下した人々がいます」

財団、政党への寄付、ヴェスタを巡る所有関係が画面に浮かんだ。

「しかし、悪い人間が善い仕組みを悪用した、というだけで結論とするなら、私たちは《三分の一》から何ひとつ学んでいません」

広間にざわめきが走った。

「この仕組みは善いものではありませんでした。見ないことそれ自体で商売が成り立つ、そういう盲目を抱えていたのです」

島々の法域を拡大した。

「国は秘密を売った。銀行は切り離されていることを売った。基金は名を明かさず所有できることを売った。会計の仕組みは、価値とは別の場所に利益を生み出せることを売った。政治の規則は、出どころを明かさずに振るえる影響力を売った」
テリニスの代表が発言を求めた。
「あなたは適法なプライバシー保護を、犯罪で稼ぐ商売の仕組みと呼ぶのですか」
「いいえ」とネライは答えた。「プライバシーの保護が、権力を売る商売になったと言っているのです」
「われわれの顧客は有罪になっていません」
「名前すら分かりませんでしたから」
「罪の証拠にはならない」
「ええ。そもそも罪の有無を調べることさえできなかったという証拠です」
「自分の財産を外国の手から守る権利は、すべての市民にあります」
「そしてすべての市民には、誰が財産を使って政治に金を出し、自分の通う病院を所有し、自分の命を脅かす研究の費用を払っているのかを知る権利があります」
代表は背もたれに身を預けた。
「その境界は誰が決める？」
「それこそ、会議が答えを出さなければならない問いです」
その言葉が公に口にされたのは、これが初めてだった。
《三分の一》後の全惑星会議。
全惑星会議は、各国政府による臨時会合の枠を越えるものになるはずだった。
経済会議のみにとどまるものでもなかった。
エラリオンのあり方を、その土台から問い直す場となるはずだった。
連邦はこの提案を支持した。
続いてセレニト人の国々の大半が。
まだ存続していたアウレリア人の評議会のいくつかも。
ヴェイラン人の諸政府は割れた。

改革を支持する者もいた。《三分の一》では自分たちの民も死んだ。家族を、街を、未来を失ったのは彼らも同じだった。
捜査はヴェイラン人全体を裁くものになりつつある、と訴える者もいた。
タエロンでは、全惑星の透明化を拒む最初の運動が姿を現した。
その指導者たちはこう語った。
《三分の一》を、単一政府をつくる口実にさせてはならない。
アリエンの罪を理由に、何十億もの罪のない人間のプライバシーを奪ってはならない。
共通通貨は首輪になりうる。
金が見えるようになれば、政府はたったひとつの禁止命令で、どんな反対者でも破滅させられる。
こうした主張の多くには、道理があった。
それゆえ、単純な嘘よりも危険だった。
タエロンの新しい運動の代弁者のなかに、世に名前の知られていないひとりの男が現れた。
声だけで語りかけた。
エラリオンには、文明の進む道が二つ必要なのだと主張した。
ひとつは開かれた道。
もうひとつは自由な道。
ネライは最初の演説を聴いた。
三言聴くと、誰が話しているか分かった。
カエル・ソーン。
声の調子を変えていた。
話す速度も落としていた。
別の名前を使っていた。
けれど、権力と責任を切り離す、そのやり方は変わっていなかった。
「あの人だと証明できるの？」とサイラは尋ねた。
「いいえ」

「声を分析したら？」

「可能性は証拠にならない」

「アリエンは彼がタエロンにいると言っているわ」

「アリエンはいろんなことを言う」

「拘束を要請する？」

ネライは中継を閉じた。

「まず、何の容疑なのかを正確に知らなければ」

「《三分の一》への資金提供を助けた」

「資金の通り道の証拠はある。最後の段階で、止めようとした証拠もある。規模を知っていたという証拠はない」

「扉を開けたのよ」

「ええ」

「そしていまは、自由を説いている」

「罪のある人でも、正当な異議を唱えることはできるわ」

サイラはネライを見た。

「イェサイルみたいなことを言うのね」

「いいえ」

ネライは記録をもう一度開いた。

「あの人なら、もっとうまく言ったわ」

死者が三十億人に達したそのときから、ちょうど一年後。会議はその日に招集された。

開催地はニトラになった。

何年も前、価値は影を歩んではならないとイェサイルが語った、あの議場だった。

建物の前には、名前を映す壁が建てられた。

全員分ではない。

三十億の名をひとつの場所に記すことはできなかった。

そこで壁は毎日、名簿の別の部分を映し出した。

同じ名が再び現れるのは、何年もたってからだった。
会議が始まる日、その表面にはアウリオラの人々の名が光っていた。
そのなかに、
イェサイル・ダヴィオン。
マレイア・リオレン。
ネライは日の出前にやって来た。
壁の前に、濃紺の器を置いた。
そこに残してはいかなかった。
しばらくすると、また手に取った。
記念碑に属さないものもある。
物語をその先まで語り終えなければならない、生きている者たちのものなのだ。

第 38 章　《三分の一》後の会議

広間に入る前、ネライは朝の報道の一節を聴いた。《三分の一》のあと共同食堂を営んできた女性は、みんなのお金を監査できるのは誰なのか知りたがっていた。小さな修理店の主人は、新しい仕組みに客の支払いまで見えてしまうのを恐れていた。どちらも親しい人を亡くしていた。それでもこの案について、意見は一致しなかった。

「今日は、公の権力と個人の暮らしを分ける境界についても、決定が下されます」と女性キャスターは言った。「多くの人にとって、その境界はいまだにはっきりしません」

ネライは放送を切って中へ入った。修理店主の異議は、彼女自身の覚え書きにも記されていた。

広間の席の三分の一は空席だった。

亡くなった代表者の数を正確に割り出して空けたのではなかった。

主催者たちがそう決めたのだ。

三列ごとに一列を閉じた。

座席に名前はなかった。

ただ、細い光の線が一本。

代表たちが着席すると、空いた列が生きた人々を隔てた。《三分の一》が家族を、街を、歴史を隔てたように。

誰かのいない場所を目に入れずに、壇上を見上げられる者はいなかった。

会議に単独の議長は置かなかった。

各国、市民集会、専門機関、一族評議会、そしてタエロンの代表者による評議会が進行を担った。

それも妥協の産物だった。

権力を制限するための集会を、ひとりの人間に取り仕切らせたい者はいなかった。

ネライは政治家として出席したのではなかった。

選挙に立ったことはなかった。

どの国の代表でもなかった。

《三分の一》の資金面の背景を探る捜査の責任者として、会議の前に立った。

頭上に名前が浮かんだ。

ネライ・サエル。

金融健全性・システミックリスク国家間監督局。

利害関係の開示範囲　すべて。

空席の列を見た。

そして語りはじめた。

「一年前、私たちはあの災厄に名をつけました」

壁に数字が現れた。

三十一億二千四百万人。

「《三分の一》と呼びました。幾十億の名を背負いきれないとき、人の心にはひとつの言葉が要るからです」

数字が消えた。

代わりに人の顔が映った。

子どもたち。

女たち。

男たち。

三つの系統のすべて。

「今日、私たちが失ったものについては話しません。いつまでも語り終えられませんから。あの人たちの死が何を明るみに出したのか、その話をします」

画面に資金の骨格が現れた。

「私たちのお金のあり方を変えなければならない第一の理由は、パンデミックです」

広間で幾人かが身じろぎした。

医療の話を予想していた者もいた。

ネライは続けた。

「《三分の一》の資金は一回の支払いでまかなわれたわけではありません。そうなら誰かが気づいていた。三十の通貨、何百回もの通貨間の移転、財団、基金、研究所、法の特例、そして最終的な所有者の分からない会社を通じて、資金は供給されたのです」
地図の各所に明かりがともった。

「人工知能は目的を知らされず、生物学の問いを分析しました。研究所はほかの課題を知らずに、自分の課題を進めました。保険会社は原因を知らずに結果をモデル化し、運送業者は積み荷を知らずに輸送枠を確保しました。銀行に見えたのは支払いで、計画ではなかった。国に見えたのは会社で、その背後にいる人間ではなかった」
地図がひとつにつながった。

「ひとりの人間が憎しみを持ち込むことはあります。けれど、その人間に道を与えるか、与えずにおくかは、文明が決めるのです」

ネライは口をつぐんだ。

「私たちは、与えたのです」

広間は静まり返っていた。

「事が起きる前にお金が見えなければ、事が起きたあと、私たちが目にするのは亡骸ばかりです」

新たに自動化された監視の対象とする予定の分野が、画面に並んだ。
生物学上および遺伝学上のリスク。

大規模な計算能力。

戦略上重要な研究所。

医療データ。

政治資金。

兵器システム。

重要インフラ。

「人の心を読むシステムを求めているのではありません」とネライは言った。「そんなことはできませんし、できるふりをしてもいけない。お金と技術とデータと研究所と政治の力が寄り集まって、脅威の形をなしはじめたとき、それに気づく仕組みを求めています」

あるヴェイラン人の国の代表が発言を求めた。
「何を脅威の形とするかは、誰が決めるのです？」
「公開の規則で定めます」
「規則をつくるのは？」
「この会議が設置する独立評議会です。市民、専門家、司法の監督下に置きます」
「つまり惑星規模の機関を、またひとつ設けるわけだ」
「ええ」
「間違ったら？」
「決定には不服を申し立てられます」
「政府の道具に成り下がったら？」
「だからこそ、ひとつの政府に属してはならないのです」
男は座らなかった。
「それでは中央集権を一段高いところへ移すだけだ」
「いいえ」とネライは答えた。「ひとつに集めるべきなのは、共通の問題を見渡すための視界です。決定と監督の権限は、分けなければならない」
「矛盾だ」
「いいえ。一枚の地図を、ひとりで所有する必要はありません」
男は腰を下ろした。
ネライは二番目の項目を開いた。
「第二の理由は、自動化です」
壁に《三分の一》以後の生産に関するデータが現れた。
働いている人の数。
生産能力。
消費量。
自動化された意思決定。
「《三分の一》のせいで、私たちは何十年も先送りにしてきたことを数か月でしなければなりませんでした。機械が生産、輸送、エネルギー管理、

会計、保守、そして医療の一部を担いました。仕事のない世界を望んだからではない。人がいなくなったからです」
生産量の曲線は、《三分の一》以前の水準を再び上回っていた。
「やがて、職の数が増えなくても生産は増えうる、と気づきました」
イェサイルがニトラで口にした一節が表示された。
給付とは、権力が上から与えるものだ。分け前とは、文明の一員であるというだけで、その人のものとなるものだ。
ネライはしばらくその言葉を見ていた。
「普遍的なベーシックインカムを、役に立たないことへの報酬にしてはなりません。機械に仕事を奪われた人への国の施しにしてもいけない。知識やデータ、社会基盤や資源によって築かれたこの文明の分け前でなければなりません。いまの所有者の誰ひとりとして、それらを自分だけで生み出した人はいないのです」
広間から、初めて賛同の声が上がった。
「この分け前を公正なものにするには、機械がどれだけの価値を生み出すか、誰のものになるか、利益はどこで生じ、どこへ行くのか、知らなければなりません。透明性のない UBI は、権力が自分の都合に合わせて算定できる給付です。透明な基礎配当は、市民が自ら算定を検証できる権利です」
ネライは三番目の項目を開いた。
「第三の理由は、汚職です」
壁に公共調達の契約が現れた。
法外な値のついた病院用モジュール。
輸送契約。
エネルギー事業。
政党に献金する所有者の基金に渡った補助金。
「汚職。縁故による利益の配分。影響力の売買。国庫からの資金の吸い上げ。政治への裏献金。財産の不正操作。租税回避地。公益を装い、私的な権力に仕えた助成金。通貨や島、財団や惑星外の拠点を経由した帳簿上の移転」
ひとつひとつの事例が結びついた。

「これらはみな、暗闇のなかで栄えました。そして私たちはその暗闇に慣れすぎて、それが当たり前だと思うようになりました」
しばらく言葉を切った。
「その当たり前の代償を、《三分の一》が示したのです」
ある島国の女性代表が立ち上がった。
「あなたの案では、お金の流れをすべて公にするのですか？」
「いいえ」
「どれを公にするかは誰が決めるのです？」
「及ぼす影響の大きさで決めます」
「明確な境界とは言えませんね」
「正確な線引きは法律で定めます。日々の小さな個人の支払いは非公開のままです。病院網の所有関係は違います」
「贈り物は？」
「常識の範囲に収まる個人間の贈り物は非公開です。政党への寄付は違います」
「投資は？」
「ほかの人々の暮らしに対する大きな権力を投資家にもたらさない投資なら、すべての人に公開する必要はありません。ただし監督機関からその存在が見えなくなることは、許されません」
「結局、国家にはすべてが分かるのですね」
「いいえ」
「では誰に？」
「仕組みの異なる層に、異なる部分が見えます。法律上の根拠なしに、ひとりの人の暮らしのすべてを見渡せる者はいません。層をつなぐたびに、跡が残ります」
女性は眉をひそめた。
「それは《三分の一》の前の仕組みを、あなたが説明したのとまったく同じではありませんか」

「いいえ。《三分の一》の前には、それぞれの層がデータを守った結果、誰が災厄に金を出しているのか分からなくなりました。新しい仕組みは人を守りながら、見えない権力は守らないものでなければなりません」
ネライは四番目の項目を開いた。
「第四の理由は、国の運営です」
財政赤字の数字が映った。
エラリオンの大半の国で、過去三十年のほとんど毎年、徴収した額より多くを支出していた。
経済成長のさなかにも債務はふくらんだ。
政治家は歳出削減を約束した。
それから増税した。
「私たちの国々は貧しくはなかった」とネライは言った。「高くついていたのです」
同じ医療機器を違う国々が買い付けたときの価格が、画面に現れた。
差は数百パーセントにも及んだ。
「市民には比較できない予算のなかに、無駄が隠れていました。公的機関は市場価格で買ったと言いました。ところが隣国の市場では、同じものが半額で売られていたのです」
業者同士のつながりを示す網が現れた。
「公金の支払いが一件ごとに見えるようになれば、誤った決定が最終報告書に埋もれることはありません。まだ止められるうちに見えてきます」
連邦の大臣のひとりが異を唱えた。
「複雑な調達を、市民が誤解する場合もあります。いちばん安いものがいつもいちばん良いとは限らない」
「だからこそ、選んだ根拠も、品質も、結果も見えなければならないのです」とネライは答えた。「透明性とは、一個一個の弁のことまで市民全員が決めるという意味ではありません。高い弁の方が優れていたと、大臣が言い張れないという意味です。一年でそれが壊れ、納入業者が大臣の政党に献金していたとしたら」
広間に引きつった笑いが起きた。

大臣は腰を下ろした。

「まずい施策がすぐに見え、税をほぼ全額徴収でき、隠れた利益相反を取り除ければ、慢性的な赤字を黒字に変えられます。一日ではできません。まず漏れを止める。次に無駄遣いを止める。それから税を下げる。そのあとにようやく成長が来ます」

五番目の項目を開いた。

「第五の理由は、税です」

画面に税の悪循環が現れた。

税率が上がる。

税逃れが増える。

課税の対象がやせ細る。

さらに税率が上がる。

「大国は税を上げてきました。価値の一部が、その価値を生んでもいない小国に移されたからです。税が高くなればなるほど、逃れた方が得をした。逃れる人が増えれば増えるほど、残った人が多くを払わねばならなかった」

租税回避地となった島々の地図が現れた。

「こうした国は、そこで生じたと報告した価値の大半を、生み出してはいません。彼らのつくったものは、価値にかかる税が軽くなり、所有者が見えなくなる、法律上の場所です」

テリニスの代表が立った。

「わが国のサービスは合法でした」

「ええ」

「顧客は条約が認めた権利を行使していました」

「ええ」

「するとあなたは、合理的に行動したことを彼らの罪としている」

「いいえ。社会を傷つけることが合理的になる仕組みを、私たちがつくってしまったと言っているのです」

男はしばらく黙った。

「あなたは税の競争をなくしたい」

「機械も働く人も顧客もいない島で利益が生まれたと、言い張る余地をなくしたいのです」
「資本はタエロンへ逃げますよ」
「ならば、誰のものか、どこで生まれ、何を利用しているのかが見えなければなりません」
「タエロンには、あなた方の規則を受け入れる義務はない」
「ええ」
「そのときは？」
「そのときは、二つの経済圏が生まれます。一方では、大きな権力が目に見える跡を残す。もう一方では、残さない」
「人々は自由を選ぶでしょう」
「そうかもしれません」
ネライは男を見た。
「ただ今度は、自分が何を選んでいるのか、分かったうえで選べます」
六番目の項目を開いた。
会議の頭上に三十の通貨記号が浮かんだ。
「第六の理由は、通貨の分立です」
ダレン・ヴォルトルがわずかに身じろぎした。
ネライは続けた。
「《三分の一》の前、私たちは三十の通貨があるから各国は地元の事情に対応できるのだと言っていました。それは事実でした。一方で、貯蓄の価値を変え、利益を隠し、負債を移し、代価とそれを支払う人を切り離す方法も、三十通りあったのです」
換算にかかる費用が映った。
為替変動に備える保険。
遅延。
資本準備金。
二重、三重の帳簿。

「本来なら取引を円滑にするはずの通貨から取引を守るため、企業は部門を丸ごと抱えてきました。国境を越える取引で、小さな会社は大きな企業連合より多くを払いました。同じ為替レートも、同じ手段も使えなかったからです」
画面にエラルが現れた。
「エラルはパンデミックの子として生まれました。政治の計画からではありません。従来の仕組みでは必要な速さで価値を移せなくなったとき、フィルターや薬や食料を買う手段として生まれたのです」
ネライは《橋》が公開している準備資産を示した。
「共通であることだけが利点ではありませんでした。何が裏付けとなっているのか、手数料はいくらか、為替レートはどうか、支払いがどの道を通り、誰の手で止められたのかまで、人々には見えたのです」
ダレン・ヴォルトルが発言を求めた。
「エラルはいまも旧来の各通貨を裏付けにしています」
「ええ」
「それらの通貨をなくしたら、何を裏付けとするのです？」
「生産、税収、エネルギー供給能力、共通の制度が持つ資産です」
「つまり、惑星の機関に対する信頼だ」
「どんな通貨も、何らかの機関への信頼です」
「違いは、今日の市民は、ひとつの通貨を捨てて別の通貨を選べるということです」
「ほとんどの市民には、通貨から通貨へ移せるような資産はありません。通貨を選ぶ自由はもっぱら、自国の決定の結果から逃れられるだけの資力を持つ人のものでした」
ヴォルトルは立ち上がった。
「それでも、牽制する力にはなっていた。通貨がひとつになれば、この星のすべての人間に対して一斉にそれを武器にできる」
「ええ」
彼自身もその答えには虚をつかれた。
ネライは続けた。

「単一通貨は繁栄の礎になりえます。同時に、私たちがかつてつくったことのないほど完璧な暴政の礎にもなりえる」
広間はすっかり静まり返った。
「だから、市民のお金が見えるだけでは足りません。お金を支配する権力が見えなければならないのです」
画面に監督機構の図が現れた。
運用の層。
監督の層。
司法の層。
市民による監査。
公開の検証チェーン。
「通貨の運用者は、誰を調べるかを独断で決めてはならない。監督者は、自ら記録を書き換えてはならない。裁判所は、法的な理由を記録せずにデータを開いてはならない。そしてそのいずれの機関も、自らの行動の跡を消してはならない」
ヴォルトルは図を見ていた。
「では、犯罪者は？」と聞いた。「本人にも調べられたことが見えるのですか？」
「ええ」
「残りの証拠を隠せるうちに？」
「調べがあったことは見えます。捜査上の判断が残らず、その瞬間に見えるとは限りません。ただし閲覧の記録を永遠に秘密にしてはならず、消去できてもいけません」
「そこはイェサイルの提案と違いますね」
「いいえ。犯罪者にさえ、誰が自分を見たかが見えなければならない、とイェサイルは言いました。捜査の一手一手をあらかじめ公表しなければならないとは、言っていません」
ヴォルトルは立ったままだった。
「では記録に残らない秘密の入り口を、システムがつくるのを誰が防ぐのです？」

「技術的な設計です」

壁にデータの流れが現れた。

「保護されたデータを開くたびに、署名付きの記録が生じます。その記録から暗号学的な指紋をつくる。重要な変更と閲覧すべての指紋が、数分おきに分散型の検証チェーンに送られます」

「ブロックチェーンか」と後ろの席で誰かが言った。

「ええ」とネライは答えた。「真実の代わりにはなりません。ハッシュ値は、最初のデータが真実だったことを証明しません。あとから誰かがこっそり書き換えていないことを証明します。真実であることは、情報源の署名と照合と監査で確かめなければなりません」

ヴォルトルは再び腰を下ろした。

ネライは会議の面々を見渡した。

「今日、私たちが何を採択しようと、監視技術は進歩します。禁止できるふりをして、隠れて使われるに任せることもできます。あるいは、市民を見つめるすべての目が、それ自体も人から見えるようにすることもできます」

最後の一文が映った。

見る権利には、見られる義務が伴わなければならない。

そのとき、会議の通信が途切れた。

すべてではない。

ひとつの映像だけだった。

壁にタエロンの運動の印が浮かんだ。

それから、声がした。

カエルの声だった。

「あなたが描いているのはガラスの檻だ」と声は言った。「誰もが格子を目にし、あなたはそれを自由と呼ぶ」

警備システムが通信を遮断しようとした。

ネライは手を上げた。

「そのままに」

広間がざわついた。

カエルは続けた。

「ひとつの通貨。ひとつの課税の仕組み。一枚の資金の地図。何を危険とするかを決める、ひとつの惑星規模の知能。権力は評議会と裁判所と市民の監査人に分けるという。けれどその全員が、同じたったひとつの仕組みを使うのです」

ネライはカメラをまっすぐに見た。

「カエル・ソーン」

声はしばらく黙った。

やがて笑った。

「証拠はないでしょう」

「ええ」

「それでも公の場で私の名を挙げる」

「声に名をつけました」

「あなたの透明な世界とは、こういうものですか。分析官が名を口にして、あとは群衆に任せる？」

「いいえ。だから、裁いてはいません。尋ねているのです」

「何を？」

「どこまで知っていたのです？」

広間では身じろぎの音ひとつしなかった。

しばらくして、カエルは答えた。

「あのときもっと止めるべきだったと、いま分かる程度には」

「答えになっていません」

「あなたが得られる答えは、これだけです」

「アリエンが資金の通り道をつくるのを助けましたね」

「私は多くの人が資金の通り道をつくるのを助けてきました」

「なぜ彼を？」

「あなたの身内のイェサイルが提案した世界が、恐ろしかったからだ」

「いまはなおさら恐ろしい？」

「いまは、恐れて正しかったという証拠がある」

ネライはその声が届く、何も映っていない画面を見つめた。

「《三分の一》を、透明化に反対する根拠とお考えですか？」

「権力の集中に反対する根拠と考えています。アリエンは生物学の知識も、金融網も、自動化システムも使った。あなたはその三つを惑星全体を覆うひとつの層にまとめようとしている」

「そして、どうつながっているかを見えるようにする」

「見えていても、悪用は防げない」

「ええ」

「なら、何が防ぐのです？」

「悪用されたという事実を、仕組みを握る者だけのものにさせないことです」

カエルは笑った。

「それは信仰だ」

「ええ」

その答えは、音のない衝撃となって広間を渡った。

「どんな社会の秩序も、人は少なくともときには規則を守る、という信頼の上に成り立っています。違いは、破ったときに隠せるかどうかです」

「われわれタエロンの者は、あなた方の規則を受け入れません」

「それはあなた方の権利です」

「では、われわれが去るのを認める？」

「暴力に資金を出さず、自分のものでない財産を持ち去らず、共通の社会基盤から得た収益を隠さないのであれば」

「つまり、条件付きの自由だ」

「どんな自由も、そのつけがほかの誰かに回るところで終わります」

カエルの声が途絶えた。

やがて言った。

「いつか市民は、あなたの仕組みが彼らを守るはずだった相手より、その仕組みの方を恐れるようになるでしょう」

「そうかもしれません」

「そのときは？」

「そのとき市民には、それを変える力がなくてはなりません」

「単一通貨のなかで？」

「公に定める憲法秩序のなかで」

「つまり単一国家のなかで」

ネライはしばらく黙った。

このひと言を、会議は待っていた。

ある者は期待して。

ある者は恐れながら。

「今日、私はひとつの国を提案していません」と彼女は言った。「共通の問題をみんなで見渡せるようにすること、そして共通の権力には共通の監督を置くことを提案しています」

「それが単一国家の始まりだ」

「そうかもしれません」

「ならば、そう口にしてみなさい」

ネライは四十の代表団を見た。

空席の列を。

かつてイェサイルが座っていた場所を。

「もしいつかエラリオンがひとつの国になるのなら、誰かが征服したからそうなるのであってはなりません。ひとつの通貨がほかの通貨を打ち負かしたからでもありません。自分たちの暮らしはとうの昔から、自分たちの政府よりはるかに深く結び合っている。そのことに人々が気づいて、そうなるのでなければなりません」

カエルは答えなかった。

通信が途切れた。

今度は彼が自分で切ったのだ。

会議はさらに二十三日間、審議を重ねた。

ネライの提案のすべてが採択されたわけではなかった。

基礎配当は承認されたが、その額は引き続き地域の生活費に応じて定めることになった。

《橋》は民間企業であることをやめ、惑星の公共財団の所有に移ることになった。

エラルは国をまたぐ課税、公金の支払い、基礎配当、タエロンとの交易を決済する法定単位となった。

昔からの通貨は消えなかった。

まだ。

会議は、経済または政治に大きな影響力を持つすべての会社、基金、財団について、最終的な所有者を明らかにする原則を採択した。

保護された金融データに触れるたびに、消せない跡が残らなければならなかった。

特例には必ず、それを認めた人の名と法的根拠、それに終了の時刻が必要だった。

リスクを自動判定する規則は、すべて公に精査できるものでなければならなかった。

会議は惑星憲法委員会を設けた。

政府ではなかった。

まだ、その段階では。

最後の会合からネライが出てくると、出口でダレン・ヴォルトルが待っていた。

「あなたの勝ちです」と彼は言った。

「いいえ」

「エラルは法定の単位になった」

「いくつかある単位のひとつです」

「《橋》を所有するのも、もう民間のグループではない」

「それは必要なことでした」

「惑星規模の課税の仕組みも」
「範囲は限られています」
ヴォルトルはネライを見た。
「あなたのいちばん危険なところが、分かりますか？」
「いいえ」
「踏み出す一歩一歩が、その実際の歩幅より小さく聞こえるように話すことです」
ネライは建物の前の、名前を映す壁に目をやった。
「あなたは一歩ごとに、これが最後の一歩だというようにお話しになります」
「その道がどこへ行くのか、分かっているからです」
「どこへ？」
ヴォルトルはニトラを指した。
「この星の首都へ」
ネライは川を見つめた。
「この星にも、自分自身を見つめなければならない場所がひとつ、必要なのかもしれません」

第39章　ひとつのエラル

昔からの通貨は、投票で滅んだのではなかった。

使う人が選んだ結果、滅んでいった。

最初に受け取らなくなったのは、国境をまたいで商う大手の供給業者だった。

会議に禁じられたからではない。

エラルの方が簡単だった。

ひとつの値段。

一度の決済。

明示された手数料がひとつ。

為替の保険はいらない。

二日も待たずに済む。

送り手と受け手のあいだでどれだけ価値が目減りするか、考えずに済む。

次にエラルを求めたのは、いくつもの国で企業の仕事をしている人々だった。

住んでもいない国の政府の判断で、自分の賃金の価値が変わるのは嫌だった。

商店は二つの通貨で値段を表示した。

やがてエラルだけになった。

地元の通貨は口座に、法律に、古い契約書の上に残った。

けれど日々の暮らしのなかでは、儀式のための言葉はまだそれで書いても、もうそれでパンを注文することはない、そんな言語にしだいに似てきた。

最後に残った二つの主要通貨が独自の為替レートを手放したのは、自ら招いた経済危機のあとだった。

それぞれの中央銀行は、通貨を安くして輸出を後押ししようとした。

だが企業はエネルギーも原材料も、エラルで買っていた。

経費はかさんだ。

市民は貯蓄を移した。

通貨は暴落した。

かつてなら国が問題の一部を国民に転嫁するのに役立ったやり方は、市民が共通の価値を手にできる世界では、もう効かなかった。
《三分の一》から七年後、エラリオンの法定通貨として、エラルだけが残った。
そうなった日を、この一日だと定めた人はいなかった。
最後の国が法律を通した。
最後の銀行が帳簿を切り替えた。
最後の古い通貨に、固定の換算レートが定まった。
それで、終わった。
あとに続いた経済成長は、改革を支持していた者たちをさえ驚かせた。
通貨それ自体がもたらしたのではなかった。
通貨の統一とともに、いくつもの障壁が消えたからだった。
企業はもう三十通りの帳簿をつけずに済んだ。
小さな会社が、為替部門を置かずに惑星の裏側へものを売れた。
投資家は、為替上の利得ではなく、実際の収益で事業を比べられた。
公共調達に同じ価格が使われた。
税務当局が見る課税の基礎は同じだった。
利益は、価値の生まれた場所で課税された。
税率はしだいに下がった。
初めは低所得者と中所得者について。
そして企業についても。
低い税率ですべてに近い範囲から徴収した方が、大資本の半分が逃れてしまう高い税率より多くを得られると、各国は気づいた。
租税回避地は生き延びようとした。
税率をさらに引き下げた。
やがて完全な免税を申し出た。
次には、惑星のネットワークの外に秘密の台帳を設けた。

だが所有者の分からない会社には、エラルでの多額の支払いを受けることも、公共調達の入札に参加することも、戦略上重要なインフラを所有することもできなかった。
秘密を守ることはなお可能だった。
それが得ではなくなった。
いくつかの島国は立ちゆかなくなった。
変わる道を選んだ国もあった。
高い教育を受けた法律家、管理者、金融の専門家を、新しい仕組みの監査に生かした。闇を売っていた場所が、検証の中心地になった。
そこには皮肉があったが、ネライはそれを罰とは思わなかった。
人は、かつて生計を立てていたものに、いつまでも縛られている必要はない。
財政赤字はすぐに消えはしなかった。
《三分の一》のあと、地域が丸ごと復興を待っていた。
生き延びた人々を支えるのには金がかかった。
基礎配当は増えていった。
都市は、人の労働が減り、自動化が進んだ世界に合わせてインフラをつくり替えていた。
それでも、金の流出は減った。
汚職の連鎖は短くなった。
水増しされた事業は、契約に署名がなされる前に見つかった。
AIが価格と品質と所有関係を突き合わせた。
決定を禁じはしなかった。
注意を促した。
警告があっても、政府が高い方の業者を選ぶことはできた。
ただし、なぜかを説明しなければならなかった。
公の場で。
責任を負う人間の名を出して。
この仕組みで愚かさが消えたわけではない。

愚かさをかくまっていた闇が、いくらか取り払われた。
十年後、過半の国が黒字を計上していた。
毎年のことではなかった。
どんな状況でも保証できるものではなかった。
だが、国家とは永久に借金を負っているものだという古い考えは崩れた。
黒字の一部は基礎配当に回った。
一部は準備金に。
一部は自動化システムの共同所有に。
人々は働くことができた。
事業を起こすことも。
ものをつくることも。
子どもを育てることも。
学ぶことも。
人を助けることも。
けれど、住む場所や食事、最低限のケアを受ける権利に、誰かがその人の時間を買う必要があるかどうかという条件は、もうつかなかった。
基礎配当がすべてを解決したわけではなかった。
生きる意味を見失う人もいた。
機械のつくり出す娯楽の世界に閉じこもる人もいた。
社会に何も返さない人を社会が支えるべきなのか、という争いが生まれた。
ネライは、そうした問いへの簡単な答えを持たなかった。
かつてイェサイルは、人が価値を持つのは機械に必要とされるからではないと言った。
だがそれは、人がほかの人に必要とされたいと願わなくなるということではなかった。
そこで学校は、子どもをただ職業に就かせるためだけに教えることをやめた。
人とのつながりを築くこと、責任を負うこと、皆に関わることを決めること、欲しいものと必要なものを見分けることを教えた。

仕事はいらなくなったのではない。

そこにいていいという権利の、ただひとつの証ではなくなった。

戦争も変わった。

初めはゆっくりと。

透明になったお金にも、憎しみは読めなかった。

領土を支配したい、隣人を懲らしめたい、昔の遺恨をよみがえらせたいという欲望を、人が抱くのを止めることはできなかった。
だが、その備えは見えた。

兵器にはつくる者が要った。

つくる者には材料が。

材料にはエネルギーが。

軍隊には補給が。

傭兵には報酬が。

輸送回廊には保険が。

宣伝には報道機関の所有者が。

大きな戦争は、心のなかだけでは準備できなかった。

経済のなかに入ってこなければならなかった。

そしてそこには跡が残った。

ある南の国が戦闘モジュールにも使える航法部品をひそかに買い集めはじめると、システムはその国の市民にも、ほかの国の政府にも警告を送った。
政府は民生設備の近代化だと主張した。

人々には数量が見え、業者が見え、並行して燃料が買われていることも見えた。

野党は説明を求めた。

同盟国が査察を申し出た。

艦隊が出来上がる前に、計画は止められた。

別の事例では、透明性があっても紛争は防げなかった。

二つの地域が水源を巡って争い、双方とも公然と治安部隊を動かした。

その準備を世界が見ていた。

だからこそ、思いがけない攻撃だったというふりはできなかった。

惑星評議会は早い段階で介入した。

秘密外交によってではない。

双方が、続けた場合に支払う代償を目にする公開交渉によって。

紛争は合意によって終わった。

人間が善良になったからではなかった。

ひそかに企てることの強みが失われたからだ。

やがて共同防衛が形をとった。

最初は軌道環の防衛。

次いでタエロンの防衛。

のちには戦略兵器の管理。

各国は治安部隊を持ち続けたが、共通のインフラなしに、独自に大規模な戦争をしかけることはもはやできなかった。

通貨、税、防衛のあとには、法が続いた。

惑星全体で活動する企業を、相矛盾する四十の司法に従わせるわけにはいかなかった。

国の権力が見えるという市民の権利が、ある地域では存在し、別の地域では存在しないというわけにもいかなかった。

共通の憲法上の根拠がなければ、基礎配当を共通の権利にすることはできなかった。

惑星憲法委員会は十二年にわたって作業を続けた。

最初の草案は退けられた。

二つ目も。

三つ目の案は、権限を惑星、地域、国、都市に分けた。

ひとつの惑星。

ひとつの通貨。

ひとつの防衛。

ひとつの基本権憲章。
それでも、法の伝統は四十。
言語は数十。
地方の統治のかたちは数百。
国々が消えてなくなることはなかった。
権力の行き着く最後の場所ではなくなった。
憲法を採択する日、代表たちはニトラに集まった。
泣く者もいた。
反対票を投じる者もいた。
いくつかのヴェイラン人の代表団は、結果が出る前に広間を去った。
彼らの支持者の多くは、すでにタエロンに住んでいた。
共通の金融制度を拒んでいた。
相互に監督する権力でさえ、いつか暴政に変わると主張した。
独自の居住地と銀行と法制度を築いていた。
エラリオンは、彼らを無理に呼び戻さなかった。
だが二つの星のあいだには、以前にはなかった境界が生まれた。
星と星とのあいだに生まれたその境界は、生物学に由来するものではなかった。
人種による区分から生じたものでもなかった。
文明の境界だった。
エラリオンでは、大きな権力には目に見える跡を残す義務があった。
タエロンの一部では、秘密は自由の条件だと考えられた。
ふたつの世界の交易は続いた。
不信を抱えながら。
規則を携えて。
まだ答えの出ていない問いとともに。
どこまでプライバシーを守っても、そのなかに見えない権力を再び生み出さずにいられるのか。

カエル・ソーンはタエロンにとどまった。

《三分の一》を巡って、彼の有罪判決が確定することはついになかった。

アリエンの組織に資金を提供したこと、最終段階を止めようとしたことは、証拠によって裏づけられた。最初の道を開いた時点でどれだけ知っていたのかは、裏づけられなかった。

彼を、逃げおおせた犯罪者と見る者もいた。

統一された仕組みの危険に手遅れになる前に気づいた男と見る者もいた。

彼自身にとって、自分はいつか歴史が正しさを認めてくれると信じる人間のままだった。

アリエン・コルヴェトは有罪を宣告された。

裁判は七年続いた。

数百人にのぼる科学者、管理者、銀行家、法律家、遺族が証言した。

計画の各部分は適法だったという彼の主張を、裁判所は退けた。

適法な部分を意図的に組み合わせ、全体としてひとつの犯罪を形づくった人間は、その全体に責任を負うと判断した。

アリエンは処刑されなかった。

エラリオンには死刑がなかった。

残りの生涯をある施設で過ごした。そこでは、費用のすべても、調査も、決定も、ほかのどの市民についてもそうであるように記録された。

自分のデータを誰が開いたかは、彼にも見えた。

不当な閲覧には、彼も異議を申し立てられた。

寛大すぎると考える人は多かった。

ネライはそう思わなかった。

罪のない者の権利しか守らない仕組みは、権利を守ってはいない。

守っているのは、好かれている者だ。

《三分の一》から二十年後、ネライは惑星議会の建物の前に立っていた。

年を重ねていた。

髪は銀色になった。

その瞳には、いまも黄金の環はなかった。

ニトラは変わった。

旧市街の上には新しい行政の塔がそびえていた。川には静かな公共の輸送モジュールが行き交っていた。かつての中央銀行の建物は、通貨の歴史を伝える資料館になっていた。

子どもたちはそこで、昔エラリオンには三十もの通貨があったと学んだ。

多くの子には、なかなかのみ込めないことだった。

「どうして？」と尋ねた。

先生たちは主権、為替レート、通貨の切り下げ、税を巡る競争、地元経済の保護について話して聞かせた。

子どもたちは目を丸くして聴いた。昔の世代が、国ごとに重さや長さを測る単位まで違っていた時代のことを聞いたときと、同じ目をして。

ネライは名前を映す壁のもとへ歩いた。

いまも《三分の一》の犠牲者を映し続けていた。

何十年もたち、名簿はもうひと巡りして、同じ名がまた現れるようになっていた。

今日はイェサイルの名はなかった。

マレイアの名も。

ネライは地面に濃紺の器を置いた。

今度はそこに残すことにした。

個人用の画面に通知が浮かんだ。

惑星歴史資料館が、《三分の一》の捜査記録を閲覧しました。

目的　教育展示の準備。

責任者　ラレン・サオル。

閲覧範囲　保護対象の個人情報を除く、資金に関する証拠の関係図。

ネライは通知を見た。

昔の世界だったら、自分の手でまとめた資料を誰かが開いたことを、一生知らなかったかもしれない。

新しい世界では、名前も、目的も、範囲も見えた。

閲覧に異議を申し立てることもできた。

そうはしなかった。
ニトラに夕闇が降りはじめていた。
議会の建物にエラリオンの印が輝いていた。
議会の建物に、新しい惑星の印が輝いていた。
連邦も、かつてのどの国も表すものではなかった。
四十の線が、ひとつの円へと向かっていた。
批判する者たちは、呑み込まれるさまを表す印だと言った。
つくった者たちは、結びつきを表すと言った。
ネライには、その両方が見えた。
ひとつになるたびに、何かが救われる。
そして何かが終わる。
エラリオンがひとつの国になったのは、そこに生きる人々の違いがなくなったからではない。
誰かひとりの重大な決断がほかの人間に影響しないというふりを、しだいにやめたからだった。
ひとりの人間の金が、研究を支えうる。
研究が、研究所を。
研究所が、病を。
病が、星じゅうに及ぶ死を。
けれど同じように、金は治療を支えることもできた。
機械を。
基礎配当を。
街々の復興を。
そして、信じてくれと言う前に権力がその姿を見せなければならない世界を。
透明性は、人を善良にはしなかった。
怒りを取り除きはしなかった。
傲慢さを。
所有したいという欲望を。

失うことへの恐れを。
自分の負った傷こそ正義だと、自分自身に信じ込ませる力さえも。
したことは、ただひとつだった。
大きな権力が、影も落とさず動き回ることを難しくした。
ネライは冷たい器の表面に三本の指を置いた。
なぜなのか、分からなかった。
自然にそうした。
あまりにも自然に。
ほんの一瞬、すべてが自分のものというわけではない記憶に触れられた気がした。
別の惑星。
別の太陽。
庭。
名は違っても、もう一度めぐり会う男と女。
やがて、その感覚は消えた。
ネライは街の方へ向き直った。
背後には死者の壁が残った。
前には生きている者たちの世界があった。
ひとつの惑星。
ひとつの国。
四十の記憶。
そして価値は、もう影を歩んではならなかった。

第40章　力の重さ

その岩は三十一トンあった。

二週間前にタエロンから運び込まれ、それ以来、アルダの研究棟の実験場の真ん中に据わっていた。科学者たちが選んだのは、物理的には何の変哲もない岩塊だった。どんな結果が出ても、それを材質のせいにはできないものが欲しかった。

岩を囲んで、金属の環が三つ立っていた。

どれも直径およそ五メートル、表面は細い区画が数百に分かれている。区画の間を、周囲の気温をはるかに下回る温度に冷やした導線が走っていた。床からは太い給電線の束が延びていた。

防護壁の向こうで、四十人ほどが待っていた。

物理学者。

技術者。

各大学の代表。

技術リスクを扱う惑星評議会の面々。

軍の分析官が二人。

そして、ネライ・サエル。

《三分の一》から長い年月が過ぎた。ネライはもう、日々の資金の流れを追う捜査の指揮を執ってはいなかった。それでも、会議を経て《橋》が決済網から惑星経済を支える情報基盤の一つへと変わっていく、その道筋を定めた規則には、今も彼女の名が結びついていた。

だからこそ、新しい発明が技術者たちの手に余る問いを投げかけるたびに、彼女は呼ばれた。

誰になら、これを所有することが許されるのか。

実験責任者のオラン・セル（Oran Sel）が操作卓の前に立っていた。

「床の計測値は？」

「三十一・四トン」と実験室のAIが答えた。

「電源は？」

「準備完了」

「同期は？」

「ずれは測定限界以下です」

オランはガラスの向こうの人々を振り返った。

「皆さんにご覧いただくのは、四回目の試験です。最初の三回は研究班以外に立ち会った者はいません。私たちとは独立した二つの研究機関で再現されるまで、結果の公表を控えてきました」

そして操作卓に向き直った。

「場を一〇パーセントで起動」

画面に、床にかかる荷重が表示された。

三十一トン。

三十。

二十八。

二十五。

岩は微動だにしなかった。

出力二〇パーセントで、計器は十七トンを示した。

三〇パーセントで、九トン。

実験場は静まり返っていた。

オランが出力を四〇パーセントに上げた。

値は一トンを切った。

やがて、限りなくゼロに近づいた。

岩が床を離れた。

初めは、ほんの数ミリ。

少しすると、岩と床の間に五センチの隙間があった。

オランの手が調節器を動かした。

三十一トンのタエロンの岩が、一メートルの高さまで昇った。

ネライは嫌な感じに肩がこわばるのを覚えた。頭では、場が岩を支えているとわかっている。身体のほうは宙づりの岩の塊を見て、落ちてくるのを待ち構えていた。

「横にも動かせますか」と評議員の一人が尋ねた。

オランはうなずいた。

岩がゆっくりと右へ動いた。

そして、元の位置へ。

　あまりになめらかで、むしろひどく場違いな動きに見えた。ほんの数年前まで、移すには重量物用の輸送設備が要ったものが、今、人の歩く速さで実験場を横切っている。

オランは出力を落とした。

岩がゆっくり下りてきた。

床に触れたとき、ずん、と低い音が実験場に響いた。

「質量は変わっていないのですか」とネライは尋ねた。

「ええ」

「では、何を変えたのです？」

オランはしばし言葉を探した。

　「ごく簡単に言えば、物質と、その場所の重力場との結びつきを変えました。岩の慣性も内部構造も、実験のあいだずっと同じでした。ただ、場が最大限に効いているとき、地面はほとんど岩を引きつけていなかった」

「ほとんど？」

「まだ完全なゼロには達していません」

ネライはもう一度、岩を見た。

「いずれは達するのですか？」

オランは笑った。

「それを知りたくて、私たちは科学をやっているんです」

実験の知らせは数時間でエラリオンを一周した。

いちばん注目を浴びたのは輸送だった。

飛行の初期段階で貨物と重力の結びつきを弱められたら、軌道に載せる費用はいくらになるか。エネルギーモデルがすぐさま答えをはじき出した。

建設会社は、地上で丸ごと組み上げてから所定の位置まで持ち上げられる構造物を図面に起こし始めた。

タエロンの鉱山では、採掘費より運搬費のほうがかかる膨大な量の岩石にも、運び出すめどが立った。

都市では次世代の公共交通が話題になった。

宇宙技術者たちは、採算が合わず何十年も資料庫に眠っていた計画を開き直した。

何日かのあいだ、エラリオンはついに、歴史をその前とその後に分けるような発明を手にしたかに思えた。

そこへ、二つ目の報告が届いた。

こちらは公表されなかった。

ある大学の安全性評価モデルがその出どころだった。

科学者たちは、一つ一つの環の重力場が重なり合ったときの振る舞いを調べていた。それぞれの出力を足し合わせた程度の効果が出ると見込んでいた。

計算は別の性質を示した。

きわめて精密に同期させると、場は互いを増幅し始め、その増え方は直線を描かなかった。

二人の物理学者は、初め、何かの間違いだと思った。

もう一度モデルを走らせた。

次は別の計算システムで。

最後に、第三者に検証を依頼した。

結果は変わらなかった。

オラン・セルに報告が届いたのは午前三時だった。

五時には、惑星評議会をただちに招集するよう求めた。

ネライが着いたのは七時を少し回ったころだった。

部屋の壁にエラリオンの地図が出ていた。

その中央に、直径四百キロ近い円が光っていた。

「これは何です？」と彼女は尋ねた。

オランは窓辺に立っていた。一睡もしていないような顔だった。

「効果が及ぶ範囲です」

「どんな効果が？」

「完全な効果が」

ネライは先を待った。

オランは物理モデルを開いた。

「発生器一基で重力との結びつきを弱められるのは、比較的狭い空間です。複数あれば、範囲が広がるか、効果が強まるかだと思っていました。ところが、正確に配置して同期させると、その間に安定した領域ができ、そこでは重力との結びつきがゼロに近づきうるとわかりました」

ネライは円を指した。

「この範囲の全域で？」

「モデルによれば、そうです」

「広さは？」

「この計算例では直径三百八十キロです」

ネライは彼を見た。

「一国ほどの広さで、重力を切ることができる。そうおっしゃるのですね」

オランはすぐさま首を横に振った。

「物理的には可能らしい、と申し上げたのです。私たちの手元にそんな装置はありません」

「造れますか？」

オランは室内の別の人物を振り返った。

計画の主任技術分析官だった。

「今の技術水準なら、造れます」とその人は言った。

その答えで、部屋の空気が変わった。

「どれほどの時間で？」とネライは尋ねた。

「必要なものがすべて手元にあれば、おそらく二年か三年」

「必要なものがすべて、とは？」

壁に一覧が現れた。

重力放射器二十四基。

最高等級の位相同期装置六基。

大量の超伝導メタマテリアル。

ごく短時間にきわめて高い出力を供給できる、互いに独立したエネルギー貯蔵設備三基。

専用の製造ラインが数本。

対象地域の精密な重力分布図。

この惑星でも数十か所の施設にしかない計算能力。

そして、ごく狭い専門分野をそれぞれに受け持つ技術者たちのつながり。

ネライは一覧をゆっくり読んだ。

「誰かが本当にそれを作動させたら、どうなります？」

今度はオランが答えた。

「場の形と、効果の及ぶ高度、それに持続時間によります」

「現実にありうる最悪の場合を」

オランは腰を下ろした。

「人間も、固定されていない物体も、地表との結びつきの大半を失います。水の振る舞いは一変する。その地域で大気が急激に移動します。交通機関は地面との接触を失う。長く続けば、惑星の自転で事態はいっそう複雑になります」

地図に別の層が次々に重なった。

街。

川。

電力網。

交通の結節点。

「大地そのものが宇宙に飛んでいくわけではありません」とオランは続けた。「岩石をひとまとまりに保っているのは重力だけではない。ただ、重

力の均衡はおびただしい数の系に影響しています。人の住む地域に突然この場が生じれば、犠牲者の数は途方もないものになりえます」
「切ったら？」
「重力が戻ります」
ネライは彼が口にする前に、その先を悟った。
場が働いているあいだに地面を離れたものは、すべて落ち始める。
「その円の中に何人住んでいますか」と彼女は尋ねた。
「このモデルでは一千百万人です」
そのあと、質問する者はなかった。
技術評議会はそれから六日を費やし、今回見つかった現象を、実際には使えないものにとどめる手があるか探った。
得られた答えは、聞きたくないものだった。
技術は高度で、費用がかさみ、ごくわずかな場所でしか造られていない装置もいくつか要る。だが物理の原理そのものは、永久に隠しておくにはあまりに普遍的だった。
時がたつほど、秘密を守るのは難しくなる。
一つの研究所が見つけた現象は、いずれ別の研究所も見つける。
一つの AI がモデル化できたものは、いつか別の AI も導き出す。
科学の知見を幾世代にもわたって一室に閉じ込めておく確かなすべなどない。
エラリオンはとうの昔にそれを学んでいた。
こうして問いは、物理の領分から社会の領分へ移った。
臨時協議の席に、製造業者、大学、エネルギー供給網、保安機関、市民評議会、そして《橋》の代表が集まった。
その中にダレン・ヴォルトルの姿もあった。
彼は年老いていた。しかしエラリオンの医学は進み、高齢になれば当然のように公の場を退く時代は、とうに過ぎていた。
発言の順が回ってくると、彼はオランに向き直った。
「これを実現するには、個々にいくつのものを買うなり造るなりしなければならない？」

「数千です」

「そのうち、普通に手に入るものは？」

「大半です」

「では、部品を一つずつ禁止しても始まらんわけだ」

「そのとおりです」

「決定的なものはいくつある？」

オランは一覧を開いた。

「決定的という言葉の意味によります。現時点で、これが欠けてはそうしたシステムを造れないという話なら、技術上の前提条件がおよそ十七あります」

「十七の製品か？」

「前提条件です。製品もありますが、製造能力やエネルギーを使う権利、人材、計算能力も含まれます」

ヴォルトルはうなずいた。

「エラリオンに、その十七をすべて満たせる主体はいくつある？」

オランは言葉を切った。

「わかりません」

ネライが席から声を上げた。

「《橋》ならわかります」

全員が彼女を振り返った。

ヴォルトルがかすかに笑った。

「そうだろうとも」

その口調をネライはよく知っていた。

「答えをお望みですか。それとも、なぜ私たちがその答えを持っているのか、議論なさいますか？」

「両方だ」

「では、答えを先に」

ネライの前に《橋》の操作画面が開いた。

「技術上の前提条件をこちらへ」
オランが眉を寄せた。
「そっくりそのまま金融システムに入力するわけにはいきません」
「その必要はありません。経済活動に置き換えた形で結構です」
「どういう意味です？」
ネライは最初の項目を指した。
「位相同期装置はいくつ？」
「六基です」
「造っているのは？」
壁に三社の名が浮かんだ。
「重力放射器は？」
「この等級なら、少なくとも二十四基」
製造元と各社の生産能力が表示された。
「エネルギーは？」
オランは必要な出力の範囲を告げた。
《橋》が、それだけの出力を瞬時に供給できる発電所、蓄電施設、産業用電力網を映し出した。
「メタマテリアルは？」
もう一層、情報が重なった。
「計算能力は？」
また一層。
「精密加工は？」
また一層。
「専門家は？」
そこでネライは手を止めた。
「人については、必要な専門知識を持つ人材の数だけを集計します。個人名は保護します」
ヴォルトルは片眉を上げた。

「それだけでも何よりだ」

ネライは作業を続けた。

《橋》が条件を一つずつ組み合わせていった。

作っているのは容疑者の名簿ではなかった。

誰に何ができるかを示す地図だった。

システムには、大手製造企業を所有する者がわかっていた。

各社が公表する生産能力もわかっていた。仕入れと消費と生産の実績に照らせば、裏も取れた。

大口のエネルギー契約がわかっていた。

研究機関の資金源がわかっていた。

資本の出どころがわかっていた。

工場の賃貸借も、原材料の大量購入も、特殊な機械の発注も、エラリオンとタエロンのあいだを行き来する機材も把握していた。

《三分の一》より前なら、こうした情報は何十もの銀行や登記簿や国にばらばらに眠っていた。

今は、最終的な所有者と経済活動の目的に沿って、それらをつなぎ合わせることができた。

数分後、壁に数が一つ浮かんだ。

14

ヴォルトルの顔から面白がるような色が消えた。

「十四とは？」

「今の時点で、必要条件の八割を超える部分を直接、あるいは間接に満たせる経済主体が十四あります」

「経済主体？」

「法律上は何百社にもなるでしょう。《橋》は、最終的な所有者、支配関係、資金調達、経済的な依存関係に基づいて、ひとまとまりにします」

ネライは最初の項目を開いた。

タエロンの大手鉱業連合。

九一パーセント。

二つ目。
惑星全域に展開する電力設備メーカー。
八十九。
三つ目。
ある国の軍需企業グループ。
九十四。
四つ目。
軌道上の建設を担う企業連合。
八十七。
さらに名が続いた。
民間のものがあった。
公的なものもあった。
三つは国の所有だった。
一つの経済主体が、四十を超える会社に分かれている例もあった。
「百パーセントに達しているのは？」とヴォルトルが尋ねた。
「一つも」
「今のところは」
「ええ、今のところは」
部屋に沈黙が残った。
壁では十四の名が光っていた。
数日前なら、惑星で最も技術水準の高い組織に数えられるということだけが、彼らの共通点だった。
今日からはもう一つ、共通点がある。
どこも、広い地域の重力を変える装置を造るまでに、あとわずかと迫っていた。
「私が恐れていたのは、まさしくこの瞬間だ」とヴォルトルは言った。
会議はもう四時間目に入っていた。
「なぜです？」とネライは尋ねた。

「金融システムがたった今、潜在的に危険だとみなす十四の主体をリストにしたからだ」
「リストが示すのは技術的な能力です」
「両者に実際上の違いはないとおっしゃるのか？」
「その違いは決定的です」
ヴォルトルは最初の名を指した。
「この会社はタエロンで鉱山を営んでいる。誰を脅してもいない。経営陣に暴力沙汰の記録もない。必要な機材の大半を持っているのは、採掘に使うからだ」
「ええ」
「それでも監視するわけだ」
「《橋》が見ているのは、できることの変化です。社長の振る舞いではありません」
「安心する気にはなれんな」
ネライはしばらく地図を見つめた。
「《三分の一》の前、私たちは逆の過ちを犯しました」
ヴォルトルは黙っていた。
「データを見るより先に、疑うだけの理由を探していた。アリエンのやったことは、部分だけを見れば当たり前のことでした。研究所は研究をしていた。財団は助成金を出した。会社は設備を買った。銀行は送金した。誰もが自分の受け持ちだけを見て、隣のことを尋ねる理由が生まれるのを待っていた」
ヴォルトルは目を伏せた。
ネライは続けた。
「この技術では、意図から出発するのはなおさら危うい。一千百万人を殺したいと思っている必要はありません。ただ実験をしている人かもしれない。間違いを犯すこともある。場の不安定さを見くびることもある」
オランがうなずいた。
「実際に起こりえます」

ネライは一覧を指した。

「この惑星のどこで、ある一線を越える力が生まれつつあるのか。私たちはそれを知る必要があります。そして、その情報に基づいて行う介入は、一つ残らず監督を受けなければなりません」

「どこに線を引く？」とヴォルトルが尋ねた。

「それは政治が決めることです」

「結局、やはり政治か」

「昔からそうでした」

ネライはテーブルに手をついた。

「違うのは、今は自分たちが何について決めるのか、見えていることです」

それからの協議は、技術上の方策を一つずつ試す場になった。

ある者が、無許可での重力放射器の販売を禁じてはどうかと言った。

数年もすれば小型の放射器は大量に生産される、とオランは指摘した。

次に出た案は位相同期装置に関するものだった。

まったく同じ装置が医療にも、電力事業にも、軌道上の航法にも使われていると製造元が答えた。

メタマテリアルを禁じれば、一部の産業が立ちゆかなくなる。

電力を監視しても正確なことはつかめない。必要な出力は複数の供給源からまかなえるからだ。

どれか一つのものが危険を生むわけではないと、しだいに明らかになってきた。

いくつもの力が結びついて初めて、危険は生まれた。

議論のあいだ、ネライはほとんど口を開かなかった。

《層》にいたころにも、よく似た感覚を味わったのを覚えていた。

現金を扱う事業が、それ自体で何かを証明するわけではなかった。

基金も何一つ証明しなかった。

研究所も何一つ証明しなかった。

研究への支払いも何一つ証明しなかった。

それらのあいだに結ばれた関係から、惨事が生まれた。

かつてタレンが、惑星を丸ごと見渡せば、どんな二人の人間も、ほんの数枚の契約書をたどればつながると言ったことがある。
あのときネライは、私たちが探しているのはつながりじゃない、と答えた。
向かう先なのだ。
今も、それに似たものが必要だった。
数多くのありふれた経済活動が、一つの並外れた力に向かい始めたとき、それに気づく仕組み。
その日の終わりに、試案ができた。
戦略能力登録簿と名づけられた。
従来の意味での登録簿ではなく、いささか誤解を招く名だった。
誰もそこに「当該企業は重力兵器を保有する」などと書き込むわけではない。
《橋》は、個々の経済主体が現実にどの技術的条件を満たしうるかを、たえず算出した。
その計算には、公の承認を得た分類を用いた。
製造精度。
材料。
エネルギー。
物流。
計算能力。
専門知識。
必要な装置の保有。
支配下の企業を通じて装置を入手できる可能性。
長期契約。
とりわけ慎重を要する技術については、地理的に離れた複数の拠点の能力の組み合わせも。
境界を越えたというだけで、誰に罪が生じるわけでもなかった。
ただし、一定以上の水準に達せば、計画の目的を届け出て、所定の試験を第三者による審査に付す義務が生じた。
詳細なデータの閲覧は記録された。

調べられる側には、どの機関が自分たちの能力を審査したのかがわかった。

システムがリスクを評価する基準は、専門家による公開の検証に付された。手引きとして使えてしまうような技術上の詳細は保護された。

エラリオンは、ともすれば混同される二つのものを切り分けようとした。

人のプライバシー。

そして、力が人目に触れずにいられること。

本当の問題が顔を出したのは、七か月後だった。

《橋》が、十四のグループの一つに変化をとらえた。

アステロン・ダイナミクス社だった。

重量物の輸送システムのメーカーとして世に知られていた。三大陸に工場を構え、エネルギー会社に出資し、タエロンのメタマテリアル製造会社の少数株も保有していた。

重力場に関する同社の技術的能力は、当初八三パーセントと評価されていた。四か月で、それが九二に上がった。

大口の注文が一つ入ったわけではなかった。

アステロンは位相調整器を製造する小さな会社を買収した。

その子会社が計算センターと長期契約を結んだ。

別の傘下企業がエネルギー貯蔵施設の持ち分を取得した。

アステロンが資金を出す研究財団は、かつて重力放射器を手がけた科学者を四人雇い入れた。

個々の出来事には、それぞれに経済上の理由があった。

それらを合わせると、新しい状況が生まれていた。

《橋》は技術委員会に通知を送った。

委員会はアステロンに説明を求めた。

その日のうちに回答が来た。

同社は貨物船向けの新しい重力システムを開発していた。

まっとうな計画だった。

問題は、技術諸元を精査したときに見つかった。

アステロンは大型の試験用放射器を六基造る予定でいた。

「広域の場を作るには六基では足りない」とオランは言った。

ネライは彼の隣に座っていた。

「いくつ要ります？」

「この構成なら、少なくとも二十」

「それなら、これでおしまいですね」

「いいえ」

オランは所有関係を示す地図を指した。

アステロンは六基発注していた。

さらに四基、同社が投資基金を通じて支配するエネルギー会社が発注していた。

同社の財団が資金を出す研究施設では、三基が製作中だった。

タエロンではさらに八基、アステロンが株式の三八パーセントしか持たない会社が予約していた。

法的な記録では、四つの別々の事業だった。

《橋》は、資本と契約上の義務と共同出資をたどって、それらをつなげた。

放射器、二十一基。

ネライは長いこと、その数字を見つめていた。

「知っていたのでしょうか？」

「誰が？」

「アステロンの経営陣です」

オランは肩をすくめた。

「金融データから、そこまではわかりません」

委員会は取締役会長を呼んだ。

デイラン・ヴォスという人物だった。

彼は自ら出向いた。

地図を見せられると、初めのうち彼は戸惑った様子だった。

やがて、怒りに変わった。

「これらの放射器に相互の関係はありません」
ネライは最初の一群を指した。
「こちらは、御社の計画のものですね」
「ええ」
「こちらは、エネルギー事業を営む御社の子会社のもの」
「独立した会社です」
「御社の支配下にあります」
「経済的にはね。技術面の指揮は執っていません」
「こちらには御社の財団が出資しています」
「財団の運営陣は独立しています」
「収入の七二パーセントを御社が出している」
デイランは背もたれに身を預けた。
「それに、タエロンの分など、当社とは何の関係もない」
ネライは契約書を開いた。
アステロンは、その会社の借入金の保証人になっていた。
返済が滞れば、技術資産の一部を引き取る権利が生じる。
デイランはしばらく契約書を読んでいた。
「これは知りませんでした」
「ええ、そうだと思います」
彼は虚を突かれた。
「だったら、なぜ私はここに呼ばれたのです？」
「御社のグループが、経営陣自身の目にも見えていないかもしれない力を手にしつつあるからです」
部屋が静まり返った。
非難されるより、その一言のほうがこたえた。
デイランはもう一度地図を見た。
「私が何も知らないまま、うちの会社は広域システムを造れてしまう、とおっしゃるのですか？」

オランが答えた。

「今はまだです。条件が二つ足りません。ただ、今のペースなら一年以内にそろいます」

「仮に、どこかの子会社がその条件を満たしたら？」

「御社がその能力を実質的に支配できるかぎり、《橋》はそれをグループ全体に算入します」

デイランは薄く笑った。今度の笑みにおかしみはなかった。

「つまり、私の会社のことを、システムは私よりよく知っている」

ネライは地図を見た。

「この一点に限れば、おそらくは」

アステロンの件は処分なしで決着した。

同社は重力関連の計画を第三者の監督に開き、一つの技術開発計画のもとに統合した。

最も大きな衝撃は、そのあとに訪れた。

惑星評議会が、過去の条件を再現したシミュレーションを依頼したのだ。

《三分の一》より前の時代に同じ技術が生まれていたら、何が起きていただろう。それを知りたかった。

分析官たちは十七の技術的条件を取り上げ、かつての金融環境に置いた。

三十の通貨。

銀行の守秘義務。

最終的な所有者のわからない基金。

財団。

異なる税の管轄。

営業秘密。

国によって異なる許認可制度。

限られた国家間の情報交換。

次いでモデルに課題が与えられた。

どの機関にも計画の三分の一を超える部分が見えないように、広域重力場を作る能力を整えよ。
AIは何千もの可能性を見つけた。
ある国に製造会社。
別の国の基金を通じた資金調達。
また別のグループが所有するエネルギー貯蔵施設。
仲買業者を介して仕入れたタエロンの材料。
いくつもの大学に分かれた研究契約。
工業用の荷役機器として登録された放射器。
電力インフラの一部として記載された同期装置。
どの役所にも、何かが見えている。
どの役所にも、充分には見えない。
ネライは黙ってシミュレーションを見ていた。
あまりにもよく知っている光景だった。
色は違った。
技術も違った。
仕組みだけが同じだった。
一つの危険を、罪もないたくさんの部分に分ける。
次に分析官たちは、《橋》のある環境で同じ課題を走らせた。
モデルは所有権を分散させようとした。
《橋》は最終的な所有者を結びつけた。
複数の子会社に仕入れを振り分けようとした。
《橋》は一つの経済主体として映し出した。
財団を使おうとした。
《橋》には出資元が見えていた。
計画の一部を借り入れでまかなおうとした。
《橋》は債権者と保証を加えた。
設備を買わずに借りようとした。

《橋》は実際に支配下にある能力を算入した。
複数の国にまたがろうとした。
もはや通貨の違いが国境を死角に変えることはなかった。
六八パーセントで、最初のかすかな兆候が現れた。
七七パーセントで、自動監視が始まった。
八五パーセントで、技術に関する届け出の義務が生じた。
九二パーセントになれば、所定の許可なしには、決定的な意味を持つ品目の購入手続きをシステムが完了させない。
シミュレーションが終わったあとも、部屋では長いこと誰も口をきかなかった。
ダレン・ヴォルトルはネライの隣に座っていた。
「つまり、これがあなたの論拠か」とやがて彼は言った。
「私の論拠ではありません」
「では誰の？」
ネライは結果を指した。
「物理のです」
ヴォルトルは手で顔をこすった。
「イェサイルの出発点はベーシックインカムだった」
「ええ」
「公正な分け前の話をしていた」
「ええ」
「それから我々は汚職を、税を、政治を、戦争を論じた」
彼は重力場の地図を見た。
「そして今、いつか誰かに大陸の半分の重力を切られないためにも、同じ仕組みが要るとあなたは言う」
ネライは少し笑った。
「そうおっしゃると、いささか大げさに聞こえますね」
「大げさかな？」

彼女はシミュレーションの結果を見た。

「いいえ」

一般の人々が広域重力場の可能性を知ったのは、安全を守る制度が採択されたあとだった。

詳細には閲覧の制限が残った。

その技術で何ができるかは、皆が知っていた。

おおまかにどんな能力が必要かも知らされた。

場の正確な幾何学的形状、同期の決定的な条件、具体的な設計を逆算できる諸元は公表されなかった。

議論は激しかった。

重力に関わる技術はすべて国だけが保有すべきだと唱える人々もいた。

科学者たちは反対の声を上げた。

装置一つ一つについて、すべてを公開せよと求める人々もいた。

重力システムはまもなく輸送にも製造にも当たり前のように使われることになる、と産業界は指摘した。

結局エラリオンは、力が及ぶ規模に応じて規制を設けることにした。

小型の荷役装置は従来どおり一般の機器とされた。

産業用発生器は技術登録の対象になった。

より高い段階の場を作り出せる設備には許可が必要になった。

広域に効果が及ぶ水準に近づけば、惑星規模の監督が自動的に始まった。

この制度のいちばん大切なところは、すでにできあがった装置の扱いにはなかった。

《橋》は、その装置を造れる**条件**がどこかで整いつつはないかを見ていた。

それによって、安全という考えそのものが変わった。

かつての文明は武器庫を守った。

エラリオンは、武器を造る力が生まれるところに目を向けることを学んだ。

そのために《橋》が人の胸の内を知る必要はなかった。

意図は、頭の中に隠れたままでよかった。

経済的な能力は、物理的な世界に作用した。

材料が要った。

エネルギーが。

機械が。

建物が。

人が。

輸送が。

計算が。

そして、それらはすべて経済の中を通っていった。

ある夕べ、会議のあとにネライとヴォルトルの二人だけが残った。

窓の外にニトラの街が広がっていた。

川の上には幾層もの交通の流れがあり、ビルのあいだを新しい重力式の貨物台が行き来していた。ほんの数年前なら、その一台一台が奇跡に見えたことだろう。

今では、気に留める人もほとんどいなかった。

ヴォルトルはそのうちの一台を目で追った。

橋の構造材を載せていた。

「あなたは危険なものに扉を開いた。私の考えは今も変わらん」と彼は言った。

「何にでしょう？」

「人が何をなしうるか、その人が行動を起こす前から知っている仕組みにだ」

ネライはしばらく黙っていた。

「そこまではわかりません」

「たった今、十四社の名が並ぶ表を見たじゃないか」

「技術的に何ができるかはわかります。実際に何をするかはわかりません」

「あなた方に調べられる人間にとっては、ささいな違いかもしれん」

「だからこそ、監督する側も監督するのです」

ヴォルトルは笑った。

「何を言っても同じ答えが返ってくるな」

「問題がいつも同じだからです」

「力か」

「ええ」

ヴォルトルは彼女に向き直った。

「仮に《橋》がなかったら？」

ネライは街を見た。

「この技術がある今、ですか？」

「そうだ」

彼女はヴォルトルが思ったよりも長く考えた。

「許認可制度を設けるでしょう。製造業者に検査が入る。機器の登録簿。保安機関。製造番号」

「まんざら望みがないとも聞こえんが」

「望みはあります」

ネライは彼に向き直った。

「ただ、仕組みをくぐり抜けたい人間は、計画を分けるでしょう」

ヴォルトルは口をつぐんだ。

「ある会社は放射器を発注する。二社目は電力。三社目は材料。四社目は計算。財団が研究に資金を出し、投資基金が生産部門の一部を所有する。中には、自分が何に携わっているか、まるで知らない人もいるでしょう」

「アリエンのときのように」

「ええ」

窓の外を、また一台、貨物台が通った。

「昔の仕組みは、装置を探したでしょう」とネライは続けた。「《橋》に見えるのは、その装置が生まれうる条件が、どこかで一つになりつつあることです」

ヴォルトルは街の灯に目を凝らした。

「技術はいつか、さらに大きな力を持つ」

「間違いなく」

「これ以上の力を？」
ネライはかすかに笑った。
「百年前なら、今日の私たちの問いだって、ばかげたものに思えたでしょう」
ヴォルトルはうなずいた。
「つまり、透明なお金の話は結局、お金そのものがいちばんの問題ではないんだな」
ネライは彼を見た。
彼の口からそんな言葉を聞くとは思わなかった。
「お金がただのお金だったことは、一度もありません」
「では、何なんだ？」
ネライはしばらく、対岸を流れる灯を見ていた。
「人がこの現実の世界で何をなしうるか、その地図です」
ヴォルトルは黙っていた。
ネライは続けた。
「お金で食べ物が買えます。家も。船も。工場も。研究も。エネルギーも。影響力も。軍隊も。そして今では、重力を変える装置まで」
「なら、お金が見える者には力が見える」
「その一部が」
「お金を支配する者は、力を支配する」
「だからこそ、一人の人間に《橋》を支配させてはいけないのです」
ヴォルトルはうっすらと笑った。
「ようやく、私の昔からの反論をわかってくれたんだな」
「ずっとわかっていましたよ」
「ただ無視していたわけだ」
「いいえ。だから、誰が情報を閲覧したかも見えるようにしたのです」
ヴォルトルは声を出して笑った。
今度は心から。

「あなたにはかなわん」
「何年も前に、同じことをおっしゃいましたね」
数年後、重力システムは暮らしの一部になった。
重い荷が道路の上を浮かんで進んだ。
軌道への輸送は安くなった。
タエロンには、かつてなら建設など採算の合うはずもなかった場所に街ができた。
病院では、自分の体重を支えられない患者の治療に弱い場を使った。
研究者たちは、ほかの恒星をめざす船を思い描き始めた。
幾百万もの命を奪いうる技術が、同時に、それまでのエラリオンには手の届かなかった世界への道を開いた。
ネライはそこに矛盾を見なかった。
火は家を暖めもすれば、街を焼き払いもした。
エネルギーは病院の命をつなぎもすれば、武器を動かしもした。
人工知能は薬を探すことも、より効率よく殺す方法を探すこともできた。
エラリオンが使いこなす技術が増えるほど、ある発明が善か悪かという問いそのものの意味は薄れていった。
決め手になるのは、それを大規模に使う力を誰が手にしつつあるのか、その力の存在を誰が知り、誰がその力を止められるのかだった。
《橋》をめぐる世の議論を決定的に変えたのは、重力場だった。
それまで多くの人々は、透明なお金をまだ経済改革の一つとみなしていた。
一人ひとりの基礎配当の算定に役立つ。
脱税を減らす。
汚職をあぶり出す。
政治権力にひそかに資金を供給しにくくする。
広域重力場の発見によって、この仕組みの意味は変わった。
人々は、ひとつの単純なことを悟った。

一個人が、一企業が、あるいは一国が、何百万もの人々に影響を及ぼせる技術を持つ文明は、そうした力ができあがる前に、その誕生に気づけなければならない。

胸に秘めた考えは、それだけなら何の重さもなかった。

実現するには、世界を動かさなければならなかった。

そして世界は、資源を通じて動いた。

誰かが工場の代金を払わなければならなかった。

誰かが材料を届けなければならなかった。

誰かがエネルギーを供給した。

誰かが機械を造った。

誰かが科学者たちに報酬を払った。

誰かが場所を貸した。

まだ何ひとつ危険には見えなかった何年ものあいだ、誰かがその仕事に金を出した。

強大な技術はどれも、最初に電源が入るはるか前から、経済の中に足跡を残していた。

かつてのエラリオンは、その足跡を銀行と国家と通貨のあいだに切り分けた。

新しいエラリオンには、それを並べて見ることができた。

そうなって初めて、多くの人は、イェサイルのあの言葉が、ニトラのフォーラムのころに思っていたよりも広い意味を持つと悟った。

価値は影を歩んではならない。

価値とは、富だけのことではなかったからだ。

世界を変える力だった。

重力そのものさえ変える力を手にし始めた文明にとって、その力が誰の手の中で育っているかを知らずにいる余裕は、もはやなかった。

地球への教訓

注意深い読者なら、ここまでに描いたエラリオンの問題が、今の地球の問題でもあることに、きっとお気づきだろう。私たちもエラリオンと同じように、安全を確かめ、手綱を握りながら、これらの問題を解決できると私は確信している。その方法は、透明性のある単一の中央決済情報システムを、惑星全域に導入することだ。ここでは問題を順に挙げ、その解決にシステムの導入がどう作用するか、いくつかの短い段落で述べたい。

この惑星で制御しきれぬほど増大する技術の力という問題

科学の進歩は人類を、人工知能とバイオテクノロジーのような技術を組み合わせれば、わずかな費用で、地球規模のパンデミックの脅威を人知れず仕込み、現実にできるところへと追いやりつつある。生物学の研究所をひそかに設ける費用は数百万ドル程度で、今では才覚のある十代の動画配信者にも稼げる額だ。近代的な工場で倉庫に行き、ある部品がどこにいくつあるかと尋ねれば、倉庫の責任者は情報システムをひと目見て答えられる。現代社会の運営もこうあるべきだと私は考える。必要なときには、社会を預かる者が決済システムをひと目見て、ある特定の人工知能を使う人や組織と、生物学の機器を発注した主体とのあいだに資金上のつながりがあるのかを答えられなくてはならない。この問いに答えられるかどうかが、文明の存亡を分けるかもしれない。政治家や社会の運営に当たる者の権限は小さいほどよいという神話が通用するのは、資金や資産の流れが見えないうちだけだ。透明な社会では、政治家に下心を隠し通す機会はない。権力の濫用をもくろんでも、それが金の流れに現れた瞬間に発覚する。透明性は、今この地球にいる政治家よりもはるかに適任な人々を得るための歯止めとして働くだろう。

資金の流れが透明なら、生物学の研究所を人知れず造ることはできなくなる。お互いの台所事情が、今よりずっとよく見えるからだ。百億人が同じ

惑星で互いを食い物にせずに暮らせるようにするには、どう手綱を取ればいいのか。私の答えはここにある。社会の中核に、基準と保護措置を備えた仕組みを据える。誰もが、原理的には誰のことでも確かめられる。それによって監督の質を保つのだ。

汚職と非効率な国家

現代の経済学者に、人類が抱える最も深刻な問題は何かと尋ねれば、国家を企業と同じように効率よく働かせる方法がまだ見つかっていないことを、多くの人が上位に挙げるだろう。通貨を一つにした透明な社会では、汚職を足がかりに新たなプーチンがのし上がることは決してない。汚職そのものが不可能になるからだ。どんな権力の濫用も、起こればほぼその場で見え、ただちに処罰される。その変化を経て、国の働きは次第にはるかによくなっていく。病院も高速道路も、中国より速く造れるようになるだろう。法外な値が付いた公共調達もなくなる。高すぎるとわかる人が一人いれば、システムで確かめ、決められた通報の手順を踏んで、たちまち世界中に知らせることができるからだ。

脱税をめぐる問題

税にはおおむね二つの回り方がある。税が重ければ、人々はあらゆる手を使って支払いを避け、税収は減る。すると政治家はさらに税率を上げたくなり、税収はいっそう落ち込む。逆に、税率がほどほどなら、人は進んで払い、税収が増え、さらに税率を下げることができる。高い税より始末に悪いのが、税率は低くても逃げ道には事欠かない税だ。いくつもの抜け道を抱えた不透明でまずい税制ほど、事業環境をゆがめるものはない。私に言わせれば、無理なく負担できる妥当な税率は、付加価値税を含めて高くとも二五パーセントだ。たとえばスロバキアで、雇用主の負担分も含む総人件費から税と社会保険料をいくら払っているかを見れば、あきれるほかない。付加価値税と個別消費税まで数えれば、実効負担率は五五〜六〇パーセントをいくぶん上回る。そのうえスロバキアの政治家は例外を設け、たとえば売上高十万ユーロ以下の有限責任会社なら、経営者が払う税率はわずか一〇パーセン

トで済むようにした。案の定、大勢の人が雇用される働き方や個人事業から離れ、こぞって有限責任会社へと移った。

納税を逃れる手がなければ、税と社会保険料を合わせて二五パーセントもあれば、国を動かすには十分だと私は確信している。お金が透明なら、誰がいくら納税したかも見える。税を払い、社会の営みを支えることが、ひとつの社会的な名誉になるだろう。

武力衝突の終結と、金銭をめぐるあらゆる不正の即時発見

社会でお金が透明になれば、二〇二三年秋にハマスがやってのけたように、ひそかに手に入れた武器で軍事攻撃を準備することは二度とできない。透明な仕組みでは、支払目的に中距離ミサイルの購入と記入して決済を通すことなどできない。そもそも、そこまで事態が悪化することもありえないだろう。イスラエル人がパレスチナ人から土地を奪い、自分たちのものでないものを猿のように厚かましく取っていくなどということも、透明な社会では許されないからだ。お金が透明になれば、今は金を覆う秘密の帳に乗じている悪党も、隠れみのを失い、その行いは社会の審判にさらされる。

ユニバーサル・ベーシックインカム（UBI）の公正で透明な導入

今、地球は、「見えるお金」があろうとなかろうと、AI 革命によって社会秩序そのものが掘り返される局面にある。人工知能によって、人々のうち何割もの、それも過半に及ぶほどの人々が、働き口を得られなくなると私は思う。職のない人々の生活苦が、世界各地で大規模な騒乱を招きかねない。人工知能が生み出す価値を、収入のない人々にどう公正に配り直すかを解決しなければならなくなる。誰にいくら渡すかを透明かつ妥当に決め、あとから検証もできるようにするには、社会のどこに資源がどう配られているかを読み取れる仕組みが、その中核にどうしても要る。この土台なしに納得のい

く答えが出せる課題ではない。地球全体に中央決済システムが導入されれば、別々の通貨もそれを扱う業務も要らなくなり、銀行業のいくつもの部門が丸ごと不要になる。その産業にとっては、まずは恐ろしい話だろう。だが、どのみち AI によって社会秩序は根本から変わる。AI による変革を経れば、社会には元の場所に据わったままの石一つ残るまいと私は思う。すべてが変わったあとの姿は、今のものとは根本的に異なるだろう。新しい技術を土台に、誰に対しても公正で透明に働く社会だ。押し寄せる荒々しい変化がどうにか落ち着けば、人々は生きることの新しい意味や充足を探し始める。その過程で大きな役割を担うのが、高度な仮想現実と、人間と機械を結ぶ進歩したインターフェースだ。人々は大半の時間を仮想世界で過ごすようになるだろう。そこでは経験できることの幅があまりに広く、元の物理的現実など色あせて見える。その物理的現実の役割は、人間がなるべく煩わされずに仮想世界の中身を享受できるよう、その命を保つことになるだろう。

永遠の命がもたらす課題と、地球の人口問題の透明な解決

老化と身体の再生をつかさどる生物学的な仕組みを人類が手中に収め、病も老いそのものも死因ではなくなるところまで、あとわずかだと私は考えている。

もし人が限りなく生きられるようになれば、この惑星が人口を支え続けられるかという深刻な問題が浮上する。その条件では、人口は指数関数的に増え始めるからだ。人が一人生まれれば、惑星はその人に、場合によっては限りのないあいだ、尊厳をもって暮らせる条件を保障しなくてはならない。子どもを持つことが惑星の大きな負担になるとして、思いとどまらせようとする動きが出る可能性はきわめて高い。私自身は、資源を効率よく使えば、地球は今の何十倍もの人口を養っていけると思う。それでも人々が子どもを持ち続けたいのであれば、宇宙に居住地を広げることで解決を図らなくてはならない。まずは太陽系でなんとか利用できる惑星へ。やがて宇宙技術が進めば、おそらく恒星間を旅することにもなるだろう。地球が長期にわたりど

れほどの新たな人口を受け入れられるかを算定するにも、中央決済システムのデータがやはり中心的な役割を担う。

政治運動　https://HumanityUnitedMovement.org

二十年近く思いめぐらし、考えを重ねた末、私は二〇一九年から一つの情報システムを開発している。インターネットを利用する人なら誰でも登録し、自分の資産を申告できるウェブアプリだ。次の段階では、所定の条件に従い、同じサイトのほかの利用者に申告内容を監査してもらえる。
アプリのアドレスは https://app.visiblemoney.org である。

この発想は、単純な原則に基づいている。自分の全資産をこうしたインターネット上の監査に委ねる人の申告は、正確で、漏れもない可能性が高い。そうでなければ、もう少し事情を知っている利用者がたった一人、アプリのフォーラムでそのことを指摘すればいい。ほんの一瞬で、世界中の目に触れるからだ。

アプリの初版は二〇二三年のクリスマスに完成した。二〇二四年二月のスロバキア大統領選挙を前に、誠実な政治家の誰かに使ってもらえれば、と期待していた。しかしアプリに関心は集まらなかった。少なくとも表向きは資金に曇りがないはずの政治勢力でさえ、こういう形で資産を公開することには難色を示した。もっとも、問題はおそらくアプリにあったわけではない。ある候補者の助手は一時、私に返事をくれ、やり取りも続いたが、資産申告について記者に尋ねられたときの候補者本人の態度はずいぶん妙だった。その後も欧州議会の議員などに何度かアプリを紹介して、ようやくわかった。こうした原則で政治が動き始めることを望むのなら、初日からそれを守る政治運動を自分で立ち上げるしかない。
こうして、Humanity United Movement の構想が生まれた。

政治の土台としての良識

この運動の基本原則は良識である。良識とは、正しい答えを直感で見分ける、どこか曖昧な能力のことではない。私が考えているのは、まず問題の本質を理解し、手に入る情報を集め、解決の選択肢を吟味し、望ましい結果に最も近づけそうなものを選ぶ、そういうものの考え方だ。

政治では、先に意見ができあがり、あとからそれを裏づける理屈を探すことが、あまりに多い。政治家たちは有権者が何を聞きたがっているかを覚え、それに合わせて発言を変える。問題を解決することよりも、自分たちの解決策がどう報じられ、どれだけ政治的な得点を稼げるかに力を注いでしまう。

私は、これは根本的な誤りだと思う。社会をよりよく働かせたいなら、一見して気に入らない解決策についても考える用意が要る。反対意見を持つ人のほうが正しく、自分の信念が誤った前提の上に立っているかもしれないと認める度量を持たなければならない。

そこで Humanity United Movement には、徹底して大衆迎合を退ける運動であってほしい。ほかと違って見えるためだけに、不人気な策を推すという意味ではない。ある策が正しいかどうかを決める物差しを、人気の有無にしないということだ。

重要な政策決定はどれも、公に検討できる論拠に支えられているべきだ。何を解決しようとしたか、ほかにどんな選択肢を考えたか、なぜその道を選び、そこにどんなリスクがあるか。私たちはそれを説明できなければならない。決定がもたらす結果を事前にモデル化したり、試験的に確かめたりできるなら、そうするべきだ。

同時に、どの問題にも一つの明快な答えがあるわけではないことを自覚しなければならない。専門家の意見が割れ、資料が足りず、どの解決策にも異なる利点と欠点がある場合もある。そういうときに不確かさを認めるのは弱さではない。弱さとは、確信がないのに、あるふりをすることだ。

決定をあとから評価できることも大切になる。ある施策がうまくいかないとわかったら、自分たちが通したというだけの理由で守り抜くべきではない。改めるか、手放すべきだ。

したがって、誤りえない真理の担い手を自任する集団を作ることが目標なのではない。まったく逆だ。自分の意見にあえて疑いを向けることが、決定を下すうえでごく自然な習慣となる環境を、私は作りたい。

政治アカデミー

今の政治に欠けていると私が感じるものの一つが、国の運営を担う人を体系的に育てる仕組みである。

家を建てるところを想像してみてほしい。工事を任せる人が、必要なことは着工してからすべて覚えてくれるだろうと当てにしたりはしないはずだ。建築の基本を理解し、各分野の職人の仕事の良しあしを判断できて、何かがおかしいときには気づいてくれることを期待するだろう。

ところが国の運営に関しては、同じような期待を持たないことが多い。公職に就く人には、善意も、対話の力も、事業の経験もあるかもしれない。その一方で、自ら責任を負う経済、医療、教育をはじめとする分野がどう成り立っているかを、よく知らないかもしれない。

もちろん、あらゆる分野の専門家になれる人はいない。医師より的確に診断し、経験豊かな教師より巧みに教育課程を組み立てることを、政治家に求めようとは思わない。だが、各分野の基本原理を理解し、専門家の論拠の確かさを判断し、自分の決定がもたらす広い影響を見通せることは期待したい。

だから私は、Humanity United Movement に独自の政治アカデミーを設けたい。

主に迎えたいのは、透明性に開かれ、公共の事柄に関心があり、いつか社会の運営に関わりたいと考える若い人々だ。議員、大臣、市町村長、行政の専門職のいずれを志すのか、あらかじめ決めている必要はない。大切なのは、国がどう動き、どうすればよりよく運営できるのかを知りたいという気持ちだ。

アカデミーでは、国の営みに関わる主要な分野を体系的に学べるようにする。学生は経済学、財政、医療、教育、法律、国際関係、安全保障、エネルギー、環境の基礎を学ぶ。行政の仕組み、組織の運営、データの扱い方、そして政策決定の成果の評価には、とりわけ力を入れる。

何より大切なのは、どの分野でも、その時点で入手できる最も確かな知見に学ぶことだ。教科書の定義をいくつか覚えればよいのではない。それぞ

れの制度はどう働き、何が結果を左右し、個々の問題に対して国にはどんな選択肢があるのかを、理解してほしい。

たとえば、医療改革案を評価する課題を出すことが考えられる。学生は医療の財源の仕組み、費用を左右する主な要因、予防の役割、治療効果の評価方法を学び、制度の変更が患者や医療従事者、財政に及ぼす影響を理解しなくてはならない。

同じように、年金制度や税制改革、学校教育の仕組み、行政への人工知能の導入も分析できるだろう。理論だけの勉強ではない。実例とシミュレーションに取り組み、自ら政策を立案することも学びの一部になる。

教材を絶えず更新することも、きわめて重要だ。科学も技術も前に進む。二十年前に最も確かだと思われていた知見が、今日もそうだとは限らない。だからアカデミーは各分野の動向を追い続け、最新の知見を伝えられる専門家と協力しなければならない。

学生には同時に、科学的な裏づけが十分な事柄と、専門家のあいだでも議論が続く事柄と、価値観や政治的選択に属する問いを区別する力を養ってほしい。最も優れた専門家でも、社会に代わって、何を大切にするかの優先順位をすべて決められるわけではない。ただ、選択肢のそれぞれが何をもたらすかを説明する助けにはなれる。

そこで、意思決定の方法も一つの独立した科目とする。学生は不確実さを扱い、議論の誤りを見抜き、選択肢を比較し、自分の前提を確かめることを学ぶ。よい決定を下すとは、いつでも即答できることではない。使える手段を尽くして、できるかぎりよい答えにたどり着けることだと学んでほしい。

私の思い描くアカデミーは、運動に参加していない人にも門戸を開く。その使命は、思想を同じくする政治家の集団を作ることではない。どんな政治的意見を持つ人も社会の仕組みをよりよく理解できる、そういう教育を提供することだ。

こうした機関を築ければ、公の営みのさまざまな分野で責任を担う準備をした人々が、やがて巣立っていくだろう。おのずと誰よりも物知りになるからではない。確かな基礎を持ち、専門家と働くすべを知り、自分の決定が何をもたらすかを理解するからだ。

これもまた、長い目で政治の質を高める道の一つだと思う。有能な人の出現をただ待つのをやめ、その人たちが育つ場を、私たち自身が着実に作ることはできる。

国境を越える世界に、国境を越える運動を

Humanity United Movement のもう一つの基本原則は、地球規模で考えることだ。

現在の政治制度は主として国民国家を土台としている。それぞれの国に政府があり、自国の利益と政策上の優先事項がある。こうした仕組みには理由がある。人々は、地元の事情や言葉、文化、そこでしか生じない必要をよく知る機関を必要としている。
問題になるのは、一国の利益が人類全体の利益とぶつかるとき、あるいは一国の範囲では問題を十分に解決できないときだ。

気候変動、パンデミック、国境を越えた汚職、安全保障上の危険、技術進歩の影響は、国境を知らない。人工知能もまた、国境の内側にはとどまらない。その開発も、経済への影響も、地球全体の人々に及ぶ。

だからこそ、出発点から地球規模で考える政治運動が生まれることに、私は意味があると思っている。

Humanity United Movement は世界各国に少しずつ組織を作っていくべきだ。それぞれが土地の事情に即して活動し、その国の民主的なルールを尊重する。同時に、どの組織も共通の原則で結ばれる。良識、透明性、責任、そして人類の広い利益を考えて問題解決に当たる姿勢である。

私が思い描くのは、足並みをそろえることで大きな利点が生まれる課題に、各国の組織が協力して取り組む姿だ。そうすれば、経験を分かち合い、政策の成果を比べ、さまざまな国で効果を上げた解決策を探る場が生まれるだろう。

もっとも私にとって、地球規模であるとは、一つの中央機関が何もかも決めることではない。むしろ、足並みをそろえなければならない問題と、現地に判断を委ねたほうがよい問題とを区別できる組織でなければならない。

そのため各支部には十分な自立性が要るが、運動の共通原則を守るための仕組みも要る。重大な意見の対立は透明な手続きによって裁定し、その決定への批判や再検討を可能にする。
ほかの組織と少しでも大きな影響力を奪い合う、新手の権力機構を作りたいわけではない。一国の力では解決しきれない問題に、ともに取り組める人々の国際的なネットワークを築くことが目標だ。

信頼の土台となる透明性

政治家の資産状況の透明性は、Humanity United Movement の最も際立つ特徴の一つになる。

公金の使い道を決め、ほかの人々の人生を左右したいと望む人には、自分が何を所有し、どうやって手に入れ、どんな金銭的なつながりが自分の判断を左右しうるのかを、人一倍進んで示す姿勢を期待したい。

そこで運動のメンバーには、「見えるお金」プロジェクトを通じて資産申告を公開し、あらかじめ定めた規則に従って独立した検証を受けてもらう。検証の範囲は、その人が公に負う責任の重さに応じたものにする必要がある。

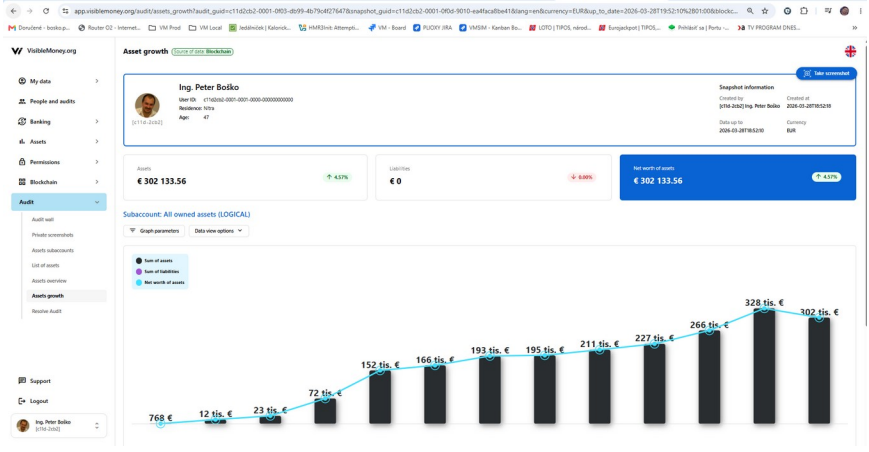
形だけ書類を埋めれば済む仕組みではいけない。データを確かめ、説明を要する食い違いを指摘できるようにすることに意味がある。それによって市民の手には、自分たちの代表が信頼に値するかを見きわめる材料が増える。

もちろん、透明性だけで、よい政治家であることが保証されるわけではない。まっとうに財産を築いた人でも、誤った判断はする。専門家でありながら人と協力できないこともある。意図はよくても、知識が足りないこともある。

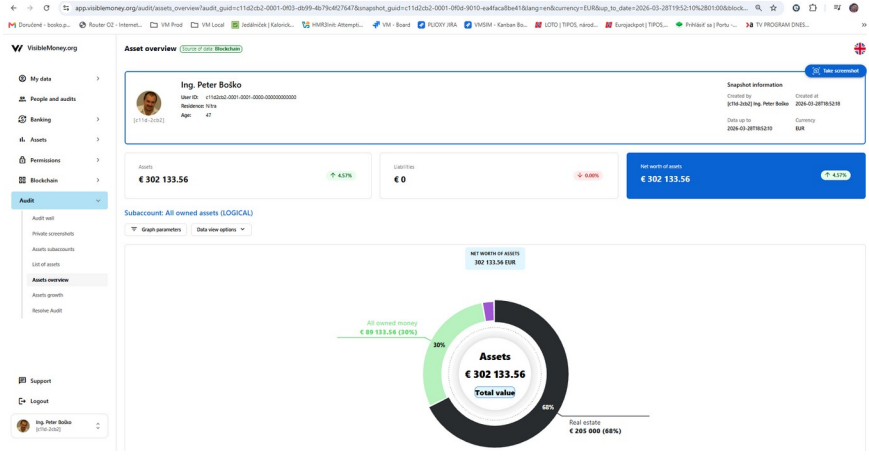
だからこそ、透明性を、政治アカデミーと、公職者の仕事の成果に対する厳正な評価とに結びつけることが大切だと考える。この三つは問題の異なる部分に応える。透明性があれば金銭上の利害をよりよく点検できる。教育は職務に必要な専門性を育てる。結果を評価すれば、選んだ政策が本当に働いているかがわかる。

同時に、政治家に求める透明性が、いつしかすべての人の暮らしを余さず公開せよという要求に姿を変えることは望まない。私生活を守る権利は大

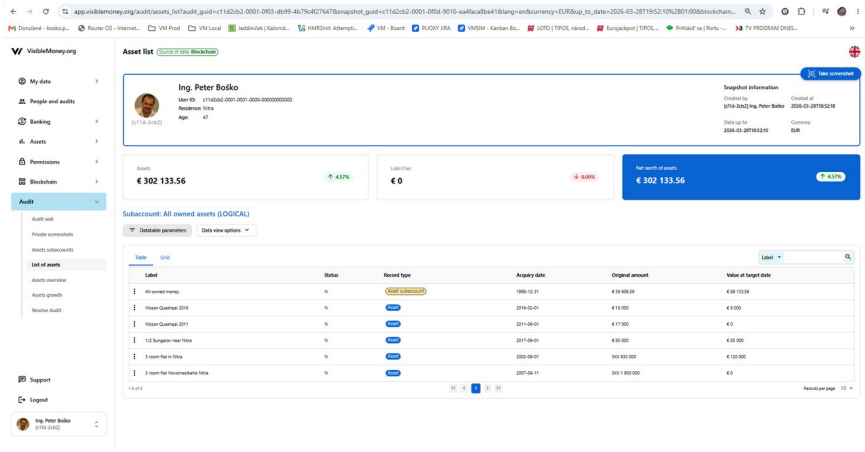
切であり、検証の範囲はその目的に見合わなくてはならない。公の責任を担う場合には、一般の人の私生活より厳しい規則が必要になる。
それでも、運動の創設者も指導部も検証の対象から外れないことは、譲れない原則である。透明性が信頼されるためには、それを唱える者自身にも適用されなければならない。



「見えるお金」アプリでたどる私の資産の伸び



アプリに表示された資産の内訳



資産ごとの記録

技術の進歩と仕事の未来

今後数十年、人類が直面する最も大きな課題の一つが、人工知能と自動化の進展である。

技術は生産性を大きく高め、多くのサービスの費用を下げ、今日では高すぎたり技術的に難しすぎたりする解決策を可能にする力を持っている。その一方で、労働市場や、人々が暮らしの糧を得る方法を根本から変えることにもなりうる。

今日、人の手でなされている仕事のうち、ますます大きな部分を機械や知能システムが引き受けられるようになれば、その進歩の恩恵をどう分かち合うかを考えなくてはならない。

現在、大半の人の収入は、直接にせよ間接にせよ、その人が働くことと結びついている。しかし生産の大部分を、今よりはるかに少ない人手でまかなえるようになれば、従来の所得分配の仕組みでは足りなくなるかもしれない。

変化がどれほど速く進むか、どんな形をとるかは、正確にはわからない。それでも、社会を根底から変える結果になりうることを考慮に入れないのは、無責任だと思う。

十分に検討する必要のある解決策の一つがユニバーサル・ベーシックインカムである。従来のような仕事が見つからなくても、人々が生きるのに必要な最低限の物質的条件を確保することが、その狙いだ。

ただし、実現するには数多くの問いに答えなくてはならない。財源をどこに求めるか。いくらにするか。今ある社会保障給付とどう関係づけるか。働く意欲、消費、物価、財政にどんな影響が出るか。
その答えを、イデオロギー上の思い込みから導くべきではない。経済モデルや実験、試験事業、そして結果を継続して評価したものに基づかせるべきだ。

まさにここで、Humanity United Movement の三つの基本原則が一つになりうる。良識はそれぞれの解決策を吟味する助けとなる。透明性があれば公的資源の流れをよりよく点検できる。そして世界的な協力によって、一国の境界を越える問題の解決に近づける。

機会の平等と人の尊厳

Humanity United Movement には、人の価値は生まれた場所や出自、肌の色、性別、性的指向によって決まらないという信念を掲げてほしい。

人はそれぞれ、まるで異なる境遇に生まれてくる。幼いころから質の高い教育を受け、安全な環境で、能力を伸ばす機会に恵まれる人もいる。自分では選ばなかった障害に立ち向かわねばならず、それが人生の可能性を大きく狭めてしまう人もいる。

誰もが自分の可能性を伸ばせる社会を作ることが大切だと私は思う。全員が同じ結果を出さなければならないという意味ではない。不要な壁を取り除き、相応の支援がなければ基本的な機会にも手が届かない人を支えるべきだということだ。
それには、質の高い教育、誰もが利用できる医療、困窮する人への実効性ある支援、そして公正な条件で事業を営み、働ける環境が含まれる。

異なる価値や利害が交わる、より複雑な社会問題に向き合うときにも、人が等しく持つ尊厳を重んじなくてはならない。異なる意見を頭から退けず、その根拠と、もたらす結果、そして基本的人権と両立するかどうかを検討すべきだ。

どの主張も同じだけ正しいとか、何もかも一致しなくてはならないということではない。先入観で人を裁かず、社会の規則は、それが適用される当の人々にも理由を説明できるものでなくてはならないということだ。

長期的な視野と未来への責任

長い目で結果を見据えながら決めることも、運動が掲げる原則の一つだ。

政治はしばしば選挙の周期に左右される。すぐに利益をもたらす施策は、十年、二十年たって初めて実を結ぶ解決策より、政治的に魅力的に映ることがある。しかし、それが社会にとっても優れているとは限らない。
財政、エネルギー、環境、教育、技術開発について決めるときは、将来の世代が引き受けることになる結果にも目を向ける必要がある。

私たちは科学研究と技術革新を後押しし、無駄に資源を使わずに暮らしの質を高められる解決策を探していく。同時に、技術が進めばおのずとどんな問題でも解けるという考えは避けなければならない。将来の発明を当てにするなら、それが間に合わなかったり、期待したように働かなかったりした場合に備え、別の道も用意しておく必要がある。

国際紛争についても、同じ視野を持つべきだ。戦争はしばしば、人命にも経済にも計り知れない損失をもたらし、幾世代も後まで傷を残す。だからこそ、紛争の危険を減らし、外交を支え、同時に、諸国民が自分たちの将来を決める権利を守れる仕組みを探ることが大切だと思う。

運動そのものをどう運営するか

Humanity United Movement は、社会に広めたいと考えるのと同じ原則に従って、自らを組み立てなければならない。

ほかの党の政治家に透明性を求めるだけでは足りない。その原則を身内にも適用する義務がある。候補者を選ぶときに能力より個人的な忠誠を優先するのなら、専門性を唱えても仕方がない。また自分たちの指導部を批判できないのなら、民主的な監督を呼びかけるだけでは足りない。

そこで、指導部の選任と解任、資金の検証、利益相反の解消、そして基本方針に関わる重要な決定について、明確な規則を作る必要がある。

世界的な運動は国境を越えて協力できなくてはならないが、同時に各地の民主的な手続きも尊重しなければならない。共通の原則が運動のよりどころとなり、具体的な施策はそれぞれの社会の条件に合わせていく。

運動の内部に、異議を唱えられる場をつくることも大切だ。綱領に誤りがあるとか、ある決定が望ましくない結果を招いたと指摘した人を、運動の敵とみなしてはならない。その人には根拠を示し、きちんと検討を受ける機会が与えられるべきだ。

権力への野心、集団思考、判断の誤りに対して、免疫のある組織などない。よく働く組織とそうでない組織を分けるのは、一方が間違いを犯さないということではない。どう間違いを見つけ、正し、繰り返しを防げるかだ。

だから私は、Humanity United Movement に、自分自身をも検証できる組織であってほしい。

私たちは何を成し遂げたいのか

この取り組みを一つの考えにまとめるなら、私たちは、人類が自らの力を今よりよく生かせる条件を作ろうとしている、と言いたい。

私たちには自然の仕組みを探究できる科学者がいる。次々にさまざまな仕事を自動化できる技術がある。莫大な価値を生み出せる経済の仕組みがある。かつての世代には夢にも思えなかったほど、情報に接することができる。それでもなお、こうした可能性を、責任ある意思決定や、質の高い公共サービスや、一人でも多くの人が尊厳をもって生きられる条件へと結びつけられずにいることが多い。

原因が一つだけだとも、一つのアプリや一つの政党、一つの改革で解決できるとも、私は思わない。いくつもの問題が互いに結びついており、それらに応えるには、よりよい制度と教育、より透明な意思決定、そして協力できる力が要る。

「見えるお金」は、公の営みにおける金銭的利害の点検を改善するための、具体的な道具の一つだ。政治アカデミーは、責任をもって判断を下せる人々を育てる一つの方法である。Humanity United Movement の役割は、

これらの道具をほかの手段とも結び合わせ、その実現を後押しできる政治的、組織的な基盤を築くことにある。
それぞれに固有の役割がある。どれ一つとして、それだけでは足りない。

完全な仕組みを作れるとも、私たちの提案がすべて正しいとも思っていない。それでも、自分たちの決定を率直に説明し、間違いを認め、よりよい解決策を粘り強く探すことはできると期待している。
この取り組みが意味を持つには、責任を引き受け、そのために学び、自分の行いが検証されることをいとわない人々から始まらなければならない。

そして、私たちと意見の異なる人にも開かれていなければならない。目標は、人類全員を説き伏せ、一つの政治組織に加えることではない。人類が共通の問題を、今よりもうまく解決できるように力を添えることなのだから。まさにそのために、この運動は Humanity United Movement と名乗っている。
すでに意見が一つになっているからではない。いくつもの違いを抱えてなお、私たちには共通の未来があり、あとに残す世界に対して、ともに責任を負っているからだ。

新しい世代への呼びかけ

若いあなたが、ときおり、この世界は今よりずっとましに動くはずだと感じているなら、ただ眺めているのをやめ、自分に何ができるかを考え始める時は、今なのかもしれない。

政治に熟達している必要はない。経済学や法律や国際関係を専攻している必要も、どんな問いにも答えを持っている必要もない。大切なのは、世界を理解したいという気持ち、学ぶ意欲、自分の意見を疑える力、そして、自分に関わる事柄に責任を持つ勇気だ。
そういう人にこそ、私は Humanity United Movement に加わってほしい。

二十年の経歴と人脈を築くまで待たなくても、足を踏み入れられる政治を思い描いてほしい。今日から準備を始められる政治を。国の仕組みを学び、さまざまな分野の人と言葉を交わし、社会の問題を分析しながら、いつか自分が担うかもしれない責任に少しずつ備えられる政治を。

だからこそ私たちは、現代社会の複雑な問題を理解できる次の世代を育てるために、政治アカデミーを築きたい。運動の創設者の意見を無条件に受け入れてほしいわけではない。自分で考え、事実を扱い、筋の通った議論を見分け、人が間違っていると思ったときには、臆せずそう言えるようになってほしい。たとえ相手が私たち自身の運動の指導者であっても。
ただし、従来の政治と私たちを分けるものとして、一つだけ条件がある。

政治家に透明性を求めるなら、まず私たち自身がそうでなくてはならない。

Humanity United Movement に加わると決めた人には誰にでも、初めから、「見えるお金」プロジェクトを通じて資産を公に申告し、定められた検証を受ける用意が求められる。選挙に立候補してからではない。要職に就いてからでもない。初めからである。

財産を持つこと自体が疑わしいからではない。正反対だ。正当に得た財産は恥じるものではない。ただ、金銭的な利害を人々の目から隠さない政治を求めるのであれば、みずから手本を示す気持ちが要る。

また、透明性を掲げることは、参加しない人たちより自分たちの人間性が優れていると考えることでもない。より厳しい検証の基準を進んで受け入れ、それを本当に守っているかをほかの人々に判断してもらうということだ。

巨大な政党や国家や世界経済を動かす利害に比べて、小さな運動にいったいどれほどの意味があるのか。あなたはそう思うかもしれない。

けれど、どんな大きな変化もどこかで始まる。三十年先の世界の姿を、今日、正確に知っている必要はない。それでも、これからの課題に今よりもうまく向き合えるよう、制度や規則や考え方を作り始めることは必要だ。

進んで学び、透明なやり方で行動し、国境を越えて協力し、新しくわかったことに照らして自分の考えを見直せる人たちが集う組織を築けたなら、それだけでも、望む方角へ確かな一歩を踏み出したことになる。

いつの日かあなたが議員になっても、大臣になっても、公共政策の専門家になっても、事業を営んでも、あるいは社会の仕組みに関心を持つ一市民であり続けてもかまわない。人にはそれぞれの関わり方がある。

この考えに心が動いたなら、最初の一歩を踏み出してほしい。「見えるお金」に登録し、その原則を知り、Humanity United Movement への参加を考えてみてほしい。ほかの人に変化を求めるだけでなく、自分からも始めるのだという思いで、加わってほしい。

登録フォームはこちら。

https://app.visiblemoney.org/register

私があなたに求めるのは、盲目的な信頼ではない。この考えをじっくり吟味し、耳の痛い問いも投げかけ、時間と力を注ぐだけの価値があるか、自分で判断してほしい。

私たちが見落とした誤りを見つけるのは、あなたの問いかもしれない。私たちが手をこまねいている問題に、あなたの発想が道を開くかもしれない。そしていつの日か、私たちの社会のあり方を決める人々の一人に、あなた自身がなるかもしれない。

未来とは、先の世代から受け継ぐものだけではない。私たちが今日の決断を通じて、あとに続く世代のために作るものでもある。

よりよい未来を望むなら、それを作る仕事に、今日から取りかかる覚悟が要る。

Humanity United Movement ── 人類はひとつ、未来はともに。